

# **The Far Eastern**

## **Crisis**

Recollections and Observations

BY

Henry L. Stimson

# **極東の危機**

ヘンリー・スティムソン著

訳 清沢洌

本PDF版は、

"THE FAR EASTERN CRISIS  
Recollections and Observations

BY

Henry L. Stimson

Published for the

COUNCIL ON FOREIGN RELATIONS

by

HARPER & BROTHERS PUBLISHERS

New York 1936 London"

を清沢冽が彼の責任において訳し『中央公論』別冊として刊行されたものを底本としているが、いくつかの改変を加えている。

旧漢字・旧仮名遣いを、新漢字・現代仮名遣いに、「洲」は「州」に換えた。国際聯盟のみ「聯」を使う。

さらに、国名・地域名を現代表記に、「支那」・「亜米利加」・「露西亞」・「白耳義」・「和蘭」・「独逸」・「亜細亜」・「歐羅巴」を「中国」・「アメリカ」・「ロシア」・「ベルギー」・「オランダ」・「ドイツ」・「アジア」・「ヨーロッパ」に換えた。都市名も同様に換えた。

一人称単数形は「余」・「予」・「私」があつたが、総て「私」に、複数形は「吾々」・「われわれ」・「われ」・「余等」・「我等」等が使われていたが、総て、「我々」に換えた。

また、「其れ」・「其の」・「此の」・「此れ」・「此」などは、平仮名に統一した。

その他にも細かい表記上の差異を統一した。また送り仮名の統一、読点の追加をした。底本にあった伏字はそのままにして、対応する英文又は拙訳を添えた。

附録の条約などは、カタカタ表記であったものは平仮名に換え、適宜句読点を追加した。

底本では、「訳者のことば」は目次の後に入れられていたが、冒頭に変更した。

底本の目次は、本文中の標題とは異なる訳になつてゐるが、全て本文の表示に揃えた。

原著で斜体字である文字で、訳書では何も付せられていない文字には白丸圈点を付した。

脚注（省かれてゐるものが多い）は、章末におかれていたが直後の文節末に入れた。

【「#」による注記、ページ末の脚注も、総て作成者が挿入したものである。

なお、【原注】は、訳書では省略された、原著にある注の拙訳である。【「」】は訳書では省略された、原著にある語の拙訳である。

巻末の年表は作成者が挿入したもので、この著で述べられてゐる時代を、簡単に念頭にいれる便のために付した。原著の写真は省いたが、地図は原著から複写する。

## 著者紹介

Henry L. Stimson 1867-1950、アメリカ合衆国の共和党の政治家、1911-13陸軍長官、1927-29 フィリピン総督、1929-33 国務長官。フーバー第31代大統領の下で国務長官としてアジア政策を担った経験を語ったのが本書である。この後も、彼は、続く第32代大統領ルーズベルトの要請で、ヨーロッパ大戦が始まって、1940年から陸軍長官に就任し、戦争の指揮にあたる。原爆投下の責任者の一人。

## 訳者の言葉

一、ステイムソン氏の著書を紹介することは、その議論に共鳴することでも、裏書きすることでもないのは、改めて云うを要しないであろう。これに対する批判は自ずから異なる角度からなされねばならぬ。

二、この著を手にした時から訳了するまでの時日は、嘘のように短かった。故に翻訳には数氏の協力を得た。責任は無論私が負うけれども、文体の不一致というようなことはその辺の事情があることを諒とせられたい。

# 極東の危機

Henry Lewis Stimson 著

清沢冽訳

## 序言

一九三一年九月に日本軍が満州における中国政府を攻撃したことは、世界大戦によつて惨禍を蒙つた諸国が樹立した戦争制限と防止の新組織の上に加えられた最初の重大なる打撃であつた。それは日を経るに従つて益々、世界歴史の批判的対象の事件として認められつつある。

当時、侵略国が軍事的に成功したことは、既に他の不満なる独裁政府をして、該組織に対し更に以上の襲撃をなさしむることを奨励するに結果した。しかも他方において、国際的紛争の解決のために、平和的方法を以てすべく協力努力した人々の経験については、記録さるるところもなく、また研究もされて居らない状態である。

私は時間もなく、また歴史家の才能も持たない。ただこれ等の解決のために参加した諸政府の

一つの要部に居つて、その努力を實現し、また目的を諒解するために無比の立場にいた。私はこの書において從來發表されないところの事實を發表しようとは思わない。しかし、原因と結果の聯関及び事實の底に横たわる政府の目的については、未だ充分に記録せられて居らぬと信ずるが故に、この点を明らかにしようとしたのである。

我々は今新しい、そして相互依存の世界に住んで居る。そこには常に平和と戦争の問題が去來している。國際聯盟規約、パリ条約及び極東に関する九ヶ国条約は、これ等の問題の解決に資せんために、世界大戰以來、なされたる三つの大きな努力を代表するものであらう。

この条約の二つに対しては合衆國は有力なる會員である。聯盟規約については、その提案者ではあるけれどもその一員ではない。併しながら聯盟は今や、世界の最多数の政府が、以て一般戦争を制限し回避せんための機關としてゐるものだ。従つてそれに対する彼我の關係は相互的に極めて重大である。聯盟と我々との間の協力に関する效果的方法の發展こそ、現代世界における最も緊要なる國際問題でなくてはならぬ。一九三一年の満州問題に關してそれが我々の上に押し加つた問題であつたし、一九三五年のエチオピア問題<sup>i</sup>についてまた然りである。

<sup>i</sup> イタリアによるエチオピア侵略、毒ガスまで用いたもので、國際聯盟は經濟制裁をするも、ナチス・ドイツが支援し、エチオピアは併合された。

私がこの著を書くに至ったのは、この問題が焦眉の緊急事なりとするが故である。しからざれば私は黙することを以て賢なりとしたであらう。

## 内容目次

### 第一編 アメリカ極東政策の背景

### 第二編 満州事変における和協工作

衝突——わが当初の政策の理由——聯盟の行動に影響されたアメリカの方針——九月十九日より九月三十日に至る事変当初の日中両国関係——一九三一年秋日本軍の攻勢的行動は依然繼續す——外交関係に及す漸増的影響——聯盟十月会期の終了迄の経過アメリカ代表ギルバート氏理事会列席——十月の聯盟総会閉会より十一月十六日理事会再開までの出来事——北満州における軍事行動——日本国内における国家主義の擡頭——米国における激昂——聯盟の十一月会議——第一期の結論

### 第三編 中国は聯盟総会に提訴す

今や我々が直面せる変化せる状態と問題——第一段の処置——**一月七日の通牒**【ステイムソンドクトリン】——上海の軍事行動——中国のボイコット——上海の共同租界——戦争の起源——一月二十八日より三月三日までの戦闘概況——上海事変に関する問題と政策——予備交渉——ハワイに於けるアメリカ艦隊——共同租界の防禦——南京の砲撃——日本政府我國の居中調停を要望す——九ヶ国条約と**上院議員ボラー氏への書翰**——総会による行動

#### 第四編 責任の審判

判決の性質とアメリカ政府への重要性——日本政府の取つた行動はその裁決を無効ならしめた——「満州国」の成立及び日本の満州国承認——満州国に対する判決を阻止せんため手段——私のジュネーヴへの旅——アメリカの欧州に対する協力——リットン報告——報告書の到着と公開——報告書の性質——報告書の内容——リットン報告に対する国際聯盟内の行動——聯盟の事務及びそれに附随する外部的要因の一般的性質——総会における討論

#### 第五編 結論

#### 附録



- 一、国際聯盟規約
- 二、ワシントン九ヶ国条約
- 三、パリ条約（ケロッグ・ブリアン不戦条約）
- 四、一九三三年二月二十四日の国際聯盟に対するリットン報告書【所見と勧告】

「# 追加附録五

- 1、一九三一年九月十八日、満州事変勃発至急電 六本
  - 2、一九三一年九月三十日、国際聯盟理事会決議
  - 3、一九三一年十二月十日、国際聯盟理事会決議
  - 4、一九三二年二月十六日、国際聯盟十二理事国要請
  - 5、一九三二年二月二十三日、十二理事国要請への日本政府の回答
  - 6、満州地図
  - 7、上海戦域
  - 8、上海市街地図
  - 9、関連事件年表
- 後記

## 第一編 アメリカ極東政策の背景

一九三二年九月十七日――

国務省では定例の外交団引見の日、ワシントン駐劄<sup>ちゆうとう</sup>日本大使出淵勝次<sup>い</sup>氏は、三年毎の賜暇帰国を前に私を訪問してくれた。その際、出淵大使は、翌年二月再びワシントンに帰任する予定であるが、その間、日米両国間には、同氏の不在により不便を来たすが如き重要問題のないことを信ずる旨述べられた。

更に、我々は、日米両国の関係につき懇談したが、幸い両国関係の極めて円満である点につき我々二人の意見は一致した。そして出淵大使は、過般<sup>かはん</sup>来長期にわたつてアメリカ各地を視察したが、一般アメリカ国民の対日感情が、氏の来任以来、今の如く友好的であることはない事実を親しく目撃したと語った。

これに対して、私は、アメリカの対日世論の著しく好転した結果、私の在職中、十年前の移民法により惹き起された永い間の<sup>きんしやう</sup>**愾衝**【**腫れ物**】を円満に解決し、更に同移民法をわが米国の要求にも合致し、同時に日本国民の感情をも害しないような一定の基礎に置くべく努力し得られると

i 1888-1947、外交官、政治家、幣原外相の下で外務次官、1928年から駐米大使。

秘かに氣をよくしている旨を披瀝した。出淵大使も亦、こうした私の希望に共鳴してくれて、いづれ次週には帰国の挨拶を正式に述べるつもりであると、その日は、情勢の円満なるに同慶の意を表し合つて別れた。

出淵氏は、非常な努力家で、才幹ある大使だ、私の國務長官就職以来二年有半、私は、大使と共に困難な問題を取扱つた場合があつたが、氏は、常に極東問題に関する相互の理解増進のために真摯であり、且つ効果的であつた。氏の令息たちは、二人ともプリンストン大学に在学中であり、氏は、二人の令息について『御覽の通り息子たちは、貴国における親善のために人質におあげしたようなものですよ。』とまで云われた。私は、暫<sup>しば</sup>しの別れとはいえ、大使の帰国を惜しんだのだつた。

その大使との会談後わずか四十八時間経つたために、驚くべき不吉な満州の情報をのせた電報が、極東から國務省へ次から次へ流れ込んだのである。この緊急問題の突発に鑑み、私は出淵大使の来訪を求め、氏の休暇をしばらく取り止め、ワシントンにとどまるよう要請した。大使も亦、その時既に帰国の船室を取消された旨を語つた。

当時、國務省としては、極東における新たな國際的危機の重荷を背負うべき場合ではないと考えていた。實際、國務省は、極東の新情勢なくとも、既に他の困難な諸問題に忙殺されていたの

である。一九三一年の春、欧州は永い間の経済的不況から今正に恐るべき破局に到達していた。オーストリア国立銀行クレヂット・アンシュタルトの破産は、忽ちドイツの財界を震駭させ、延いて中欧諸国の経済的安定を脅かした結果、フーバー大統領【Herbert Hoover, 1874-1964 在任 1929-33】は、遂に全世界にわたる金融恐慌を未然に阻止すべき工作として、戦債支払の一ヶ年間のモラトリアムを提案した。

私はその年の夏、ロンドンにおける七ヶ国財政会議に列席し、更に同様の目的のためパリ及びベルリンを訪問した。その間、私はロンドン滞在中、初めて英蘭銀行の取付騒ぎを目撃していた。そして九月十八日、ワシントン駐劄英国代理大使より英国政府の金本位停止の報を受けている真最中——殆ど同時刻に——満州事変が突発したのである。宛然、西洋から東洋へかけて、世界は、政治的にも経済的にも、根柢から震盪して【激しくゆれて】いるかに見えた。

欧州の金融恐慌の衝撃は、既にアメリカ自国内の銀行組織の安定を揺がしていた。凡そ二十億ドルに上る膨大な投資が、米国各地から中欧諸国に注ぎ込まれていたが、これらの投資は、二年間にわたる地方的恐慌や経済的不況に禍され、その結果、米国内の銀行にも悪影響を及ぼした。国内到る所、銀行の破産するもの続出し、やがては国家の信用制度全体を脅かすに至った。しかもその当時の悪化した状態は、現在生存せる人々の体験した既往の恐慌に比して遙に悪く、これ

までかかる危機に際して国家が常に手頼りにしていた民間銀行界や産業界の指導者等も、この危機に対してどうすることも出来ず、その重責は落下了した。そしてフーバー大統領は、その秋にあつて、国家復興の諸法の工作に没頭したのである。

こうした状態の下にあつて、大統領が、およそ正反対の世界に突発した新しい危機に善処し得べき時間とイニシアチブは、必然的に最小限度に制約されていた。故に、もし何んかが仮りに世界の干渉なくして満州事変を計画していたのなら、それは実に絶好の機会を選んだと云えるのだ。

かかる状態の下において、その当時、アメリカ政府が、極東の歴史と政策に通曉せる人々を、その要所に配っていたのは幸いであつた。フーバー大統領自身は、曾て数ヶ年を極東に過し、義和団事件に際して、天津に籠城したことがあつた。私も亦、日本と中国に数回旅行し、更にフィリピン総督として、極東の政策を公人としての立場から目撃し研究した。現に一九三二年九月、日本政府の総理大臣だった人【若槻礼次郎】は、一九三〇年のロンドン海軍會議において私と同役であつた。

国務省は、本省及び海外において、非常に老練な人々により固められていた。駐日大使フォーブス氏は、フィリピンにおいて在職八年間の長きにわたり、その間、四年間は総督として在職し

た人である。東京の大使館には長い経験のある館員を配置してあつた。駐中国公使ネルスン・T・ジョンソン氏は純然たる外交官畑の人にて殊に中国問題の専門家であつた。しかしてワシントンの本省詰のキャッスル次官は、前駐日大使であり、極東部長スタンリ・K・ホーンベック博士は、永い間の極東における個人的経験を持ち東洋問題と東洋史に精通していた。更に中国の枢要地点においては、ハルビン総領事ハンソン氏、上海総領事カニンガム氏、南京総領事ペック氏の如きいづれも錚々たる極東通により代表されていた。

私がここにかかる問題を繰述する理由は、要するにただ米国の外交官が諸外国の在米外交官に比して、職務上未熟にて、外交関係においては米国を常に不利な立場に置くものであると一般に認める風があるからである。自国の外交官を卑下するアメリカ国民は、過去三十年間に、米国外交官が政党を超越して修身外交官の基礎の上に置かれたことを認識しないようである。實際、今ここに述べる満州事変を通じて、わが外交官は、政府のために非常によく役立ったと同時に、現地にあるアメリカ通信員のイニシアチブと精力により、我々は常に諸外国に比して、遙に迅速且つ正確なる情報入手することが出来た。そしてこのことはやがて国際聯盟の会合においても認められ、延いては聯盟役員は、当時次から次へ発生する紛糾せる事件に關して、不正確なる情報の正誤の判断を我々に依頼した位であつた。

極東における時勢を分析研究したり、或は事実の歴史を詳細にすることは、本書の範囲ではない。これらの問題に関して私はワシントンにおける我々の目的を説明し、更にわが行動の背景を明らかにするだけに止める。

アメリカ政府にとって、日本は、友好的にして強力、かつ敏感なる隣邦である。それは僅々五十年の短日月に封建的武断政治の孤立から近代の産業国家に擡頭した隣邦である。非常に先見の明ある元老の一団の下に、日本は迅速に、西洋文明の物質的要素に同化した。日本の精力的かつ賢明な人民は、工業に、製造業に、商業に長足の進歩をした。この産業の発展は、また一方において次第に社会的、政治的觀念のうちに自由主義をもたらしした。日本は立憲政治を採用し、選挙権を拡大するに至った。然しながら、一八五〇年以前、七世紀間にわたり日本の政治家と特権階級は武士であり、それと同時に、衣食を得るものや商人は劣等なる役割を持つものとして蔑視された。

日本人の如く烈しき愛国的な国民の場合において、こうした永年の遺伝は、近代の民権理論により容易に排除し得られない結果を招来させた。内閣制度の創成以来、その首班は常に軍人であった。全国民の代表としての文官政府は陸海軍の忠誠を命令すべきであるととする理論は、大体にお

i “a single human lifetime”を差すようだ、ちなみに改造版は「七〇年たらず」と。

いて日本国民により容れられなかった。陸海軍の長官は、内閣に従属せずして、国家の主権者たる天皇により直接に統帥されている。西洋のデモクラチック思想は、日本国内にて発達しつつあったが、その進歩は遅く、大多數の国民の与るところでなかった。一九三〇年の日英米三ヶ国間に締結された海軍条約の批准は、軍令部長加藤大将により反対された。しかして海軍の反対を差し置いて、総理大臣浜口雄幸<sup>おき</sup>氏が同条約の御批准を奏上した時、その手段が非常な憤激をもたらし、その後に起った猛烈なる反動的結果を惹起するに至ったのである。浜口氏は、幾ばくもなく暗殺され、更に日本の運命の行手に傷ましき影響を及ぼす秘密団体<sup>ii</sup>が形成された。

ところで一九三二年九月、当時政局を担当していた政治家は、穩健派に属し、西洋思想に傾く運動の指導者たちであった。浜口内閣の後継内閣の首班には、曾てロンドン海軍會議に首席全権だった若槻礼次郎氏が据わった。外務省は、特に中国に対する自由主義的政策で知られた幣原喜重郎男【1872-1951、男爵、外交官、政治家、敗戦直後の首相】が牛耳<sup>iii</sup>っていた。大蔵大臣井上氏は、日本の信用と財政を健全なる状態に立て直して、財界にその名を認められた。衆議院議員の選挙には一九二八年二月（註一）初めて普通選挙が採用された。

i 1930.11.14 東京駅で狙撃され、幾年8月死去。

ii 血盟団を指すのであろう。

iii 井上準之助、1869-1932、五一五事件に先駆け、血盟団により射殺される。



(註一) 私が東京に於て、首相男爵田中義一将軍【1864-1929】の客として、個人的に招かれて居った時は、丁度総選挙当時であつて、私は、田中氏とその幕僚との談話に於て、日本の貧農労働者階級の保守主義に対して、大部分の富有階級が、リベラリズムであるという興味ある印象を受けた。

之を要するに、北太平洋上の隣邦日本は、たとえ最近の移民法により侮辱を痛感したとは云え、米国に対して昔ながらの親善の伝統を持った、自尊心の強い、敏感且つ野心満々として、愛国心に燃ゆる国民として、わが国務省の窓に映った。日本国民の昔から継襲【inheritance】した軍国主義の功罪は、産業革命とそれに伴う西洋デモクラシーの経済的社会的状態の発達により、幾分修正されたが、しかし依然としてこれら二個の要素が日本の政治に反映し、しかも両要素が未だ完全に合致せず、相互にその支配権を争っているのである。

加之、日本の近代陸軍はドイツ参謀本部の觀念と理論のもとにドイツ陸軍の教官により訓練された。日本は短い戦争に三勝した。欧州諸国が、世界大戦の打撃に悩んでいるのに反して、日本はひとり漁夫の利を得た。そして西欧諸国の戦争の惨禍の成果であり、また戦争再発の防止を目的とする戦後の多边的条約(註二)に日本も亦、欧州諸国同様参加したとはいえ、日本は、その歴史的伝統と最近の体験に鑑み、平和的目的を持つこれら条約の真意が、西洋がそれを感じるように、体得するとは思えないのである。

(註二) 國際聯盟規約、所謂九ヶ国条約及びパリ協約。これ等の文書は全部附録一、二及び三として印刷した。

極東において、日本の外に、少くとも日本同様にアメリカの政策に密接な影響を及ぼす他の友邦がある。満州において發生しつつあつた事件に対してアメリカの政策を樹立するにあたり、我々は決して中国の問題と関心を見失つてはならない。げに、長い目で「数十より更に數百年を」見るならば、アメリカと太平洋の彼岸との關係は、窮局において、たとえ優越的でなくとも、日本の背後に横たわる、大陸に住む四億五千万の中国人の發達によつて影響されるであらうことは今さら贅言するまでもない。過去四千年間、中国は間断なくこつこつと、その全体とその特異な文化を發達し維持して來た。中国は、屢々攻撃され、また、時には征服されたが、結局、その征服者よりも永續し、同化して、西洋文明よりも古い文明の維持に成功した。

十九世紀の機械的發明が距離を短縮し、極東の他の世界の手の届く所に置く場合、中国の孤立は破れ、その習慣と文明が、他の世界に非常な影響を及ぼすことは到底避け難いことであつた。中国は容易に屈服しなかつた。中国は、日本が西洋の科学を同化したり西洋の標準を採用したような機智を示さなかつた。寧ろその反対に、中国は、永い間、そうした変化に対して頑強に反対した。そして西洋諸国の關係において、中国は実力のもとに漸く屈服したのであつた。

しかしながら、二十世紀の初葉、遂に不可抗事が来た。そして中国の現代化が初まった。過去三十年間、中国は、現代世界の問題に合致すべき政治的行政的变化に余念のない変遷の国家であった。中国の同化と変化は、その領土の規模、行政的財政的欠陥及び、その国民が国家的統一よりも、自身の家族とその地方のために考える傾向のために、日本に比して遙に困難であつた。

けれども、中国は、疑いもなく変化しつつある。一八九五年、日本軍の行動に影響された地方を除いては、日清の戦争を知らなかつた他地方の大多数は、一九二五年、上海租界における「国際」警官の学生射殺事件から俄然国をあげて国民的感情を激発させた。その結果、事件ありと考える国々に対し、通商上の報復手段に出た。『旧王朝は倒れていた。』孫逸仙【孫文、1866-1925】により提唱せられた西洋理論は、北中国における保守的軍閥に打ち勝ち、共和形態の政府が南京に樹立されたのである。

何人も、中国における大きな変化の窮局的結果が如何なるものであるかを予見し得られるほど賢明ではない。ただこの大変化が全世界に対し、善かれ悪かれ、非常に大きな影響を及ぼすことは確かである。そしてもし勤勉なる平和好愛の中国人が全部、昔の虐待に激怒し、世界大戦以来欧州諸国が廃棄せんと努力しているところの軍事的搾取の理論に支配されるようなことにならうものなら、将来、全世界の安定と平和は、逆に悪い影響を蒙るであらう。

幸いにしてアメリカ政府は、こうした問題を賢明に認識して、過去三十年間以上にわたり、对中国政策を指導して来た。この政策は、最初ジョン・ヘイの門戸開放政策として宣言せられ、その後、一九二二年のワシントン条約に、その実を結んだのであるが、この政策は、一国の先見的自己利益が隣邦に対する正義とフェア・プレーに頼ることを認識せる一例であつた。欧州の強國が勢力範圍を中国に求めんとする企圖が義和団事件の混乱状態を惹起した時にあたり、ジョン・ヘイは俄に、中国と取引するすべての國々は平等の機会を均等すると云う理論を中外に宣言して、その混乱状態を防止し、更にその機會均等は中国の領土保全【“integrity”】と行政の確立に基づかしめたのであつた。

かかる原則は、アメリカの外交政策の新しい点ではなかつた。それは実にアメリカの対外通商政策の原則であつた。しかし中国の場合、この原則は、十九世紀の末期において偉大なるアジア國民の未來の發展と主權を脅すのみならず、列強間の危険な対立情勢をかもすが如き事態を救わんがために提出されたのである。一九二二年、これら門戸開放主義の原則が、ワシントン會議における九ヶ国条約の正式規約のうちに首尾よく具現せられた際、アメリカ政府は世界中の最も危険にしてしかも重要な部分において、最善の國際的外交の一例を貫徹した。それは自己侵略主義【self-seeking aggression 利己的侵略】に対比する精練されたる自我（enlightened self-interest）の政策

である。

それと同時に、この門戸開放政策の確立により、将来アメリカにとり永久的かつ真実の価値となるであろうところの中国人の対米親善の基礎を置いた。この点において、該政策は、他の対中国事業にも良好な結果をもたらすことになった。多年、中国は、アメリカより宗教、教育、医学の方面にも非常な恩恵に浴した。そればかりでなく米国は、他国に率先して義和団事件の賠償を【教育目的に】中国に返還したが、更に、中国は過去三十年間にわたり、自国の近く、フィリピン島においてアメリカ政府が、鋭意、フィリピン島民に対し、西洋の自由も社会組織の實際を教育した成果を目撃していたのである。

中国人の眼に米国人が他国民と異つて映ずる所以は、要するに上述の事実によると私は思う。現に私のフィリピン在職中、そうした感情の表現を再三再四目撃したのである。勿論、常に変転する国際生活において、そうした感情が、永續するかを予言することは不能だ。例えば、その後、アメリカの意図に対する中国の信頼を裏切つた不幸なる事件があつた（註三）。然しながら、少くとも中国の近代化により将来の時代のために開かれた驚くべき可能性に直面して、アメリカ政府は、そうした未来の好調さを予知させるスタートを切つたことは事実だ。それは善良なる将来性に富む空気を創造した。それ故、満州において発生しつつある事態に対して、我々の行動と政

策を具体化するにあたり、アメリカのフェア・プレーと善意に対するこの中国の信頼こそ実に重要な要因をなすことを忘れてはならない。

(註三) 例えば一九三四年アメリカ合衆国の銀買上法は中国財政を攪乱し、貿易上莫大な損害を与えた。日中両国の利害關係が遂に戦争にまで惹き起した満州は、中国のうちに於て最も安定せざる部分であつた。地理的には、日本、中国及びロシアの三大国が相互に手をのばせば相触るる程度の近さに位し、各国それぞれの重大の利害關係を持ち、過去四十年間、政治的、人種的、經濟的行動の激震地点でもあつた。

滿州民族は、人種的には中国人と似て居り、明朝の没落より一九一一年の革命に至る三百年間、事實上、中国を統治していたに拘らず、そして他方において満州はおよそ二千年來、南方より移住した中国人により植民され、中国文化の恩沢おんたくに浴していたにも拘らず、大部分の地域は、二十世紀の初葉まで未開發のままであり、人口極めて稀薄であつた。滿州民族の中国征服に伴い、その南方へ移動した結果、滿州の人口は著しく減少し、三十年前まで、その状態が持続した。一九〇四年、日露戦争当時、滿州は殆んど空地同様の辺境に過ぎず、最初に植民に成功する国民の手に帰すべき競争の目的物として放任されていた。その面積は、ドイツとフランス両国を合せた位の大きさにて、その大部分の土地は農業に適し、山岳地方は木材と鉱物、特は石炭に富んで

いる。

永い間日本は、西方に横たわる大陸に懸念していたが、殊に、その懸念はシベリアにおけるロシアの勢力の増進によつて増大した。日本陸軍の指導者の目には、満州の南方にある朝鮮は、「日本の心臓につきつけた短刀」であり、その背後には、太平洋岸に氷結しない港灣を狙い、結局世界征服を目差して着々に南進しつつある優勢なるロシア帝国の脅威が横たわっていた。

一八九五年の日清戦争は、そうした脅威を防がんとする日本の第一戦であつた。戦争の結果、日本は朝鮮における中国の名のみの主権を打倒して、「『フリーハンドを得て』結局一九一〇年、これを『占領し』併合することに成功した。また日本は日清戦争の結果、旅順口を獲得し、満州本土に足場を求めたが、フランスとドイツ両国の支持を持つロシアは、日本に干渉し、遂に日本をして一旦獲得した満州の要地を中国に返還せしめた。その後、幾ばくもなくロシアが、これらの要地を自己の手中に収めるや、日本は、その生命線の確保のため国の全資力を投じてロシアと戦い、旅順口には遼東半島を再び奪回し、ここにロシアに代つて南満州における權益を引継いだのである。

あらゆる日本人によつて、これは自由と安全のための戦争であつた。満州におけるこれらの權益は、日本国防の「生命線」と称せられた。そしてその勝利のために十万の兵士と二十億円の国

幣を犠牲にし、日本をしてこれらの犠牲を無意味に終らしめないよう断乎として決心せしめた。かくしてロシアは、北滿に退却し、僅かに東中国鐵道——かの国の北部を横断しシベリア鐵道の大迂回を短縮していた——の權益を保持するに過ぎなくなつた。

しかるに不思議にも日本は探い愛國心を鼓吹する一方、後からは飛躍的に増加する人口に追いつめられながら、他方において広大な土地が彼等のために開かれたにも拘らず、日本は、滿州に植民しなかつた。日露戰役後、今日に至る三十年間、滿州に移住した日本人は、僅に二十三万に過ぎず、しかも彼等の多くは南滿州鐵道沿線地帯と遼東半島に集結した。滿州の農作地は、日本の食糧供給に必要なると認められていたにも拘らず、日本農民は、滿州に赴きその土地を耕そうとはしなかつた。そして日本移民の大多数は、生産者にあらず、主として鐵道や都市の管理に係する人々であつた。かくの如く人口増加に悩む日本は、西方に開放せるこの大地に膨張しようとはせず、あるいはそれが出来なかつたのである。

他方において、中国も亦、滿州を国防の第一線——日露兩國に隣接せる緩衝地帯であり、中国に侵入するこれ等外国の勢力に対する前哨として見るようになった。そればかりでなく、中国は、滿州の經濟的重要性に目醒め、彼等は、滿州を中国の「穀倉」と称し、最近では、隣接せる省の農民及び労働者に季節的の就職を提供する地方として重視していた。しかし日本の関心が主とし



てその戦略的地位を強化せんとする軍部指導者の努力と、鉄道と産業開発の機会を開拓せんとする鉄道行政官と資本家の努力に極限され、また日本人が全体として超然主義を採るに反して、中国農民は、どしどし南より移住して土地を占めた。かくして過去三十年間にわたり、満州への中国農民の移住は、世界史上最大の大衆的移民として現れたのだった。殆ど三百万の中国人が、山東省と河北省から東北に向つて流れ込み、満州を保有してしまつた。現に「満州は今も依然として變ることなき中国である」と、一九三二年のリットン報告書中に判定されてある。一九〇五年日露戦争の終幕を下したところのポーツマス条約は、満州における中国の法律的主権を再確認したが、それ以来、中国人自身は、その法律的所有権を事実 に具体化したのであつた。

本問題に關して、世論は中国移民の必然的結果について充分なる重要性を与えなかつた。元來、有名無実の統治權なるものは、恰も所有により裏書されない法律的名目のように、解消されがちなものである。併し民族的文化を固執し、頑強に個人的權利を強調する三千万の人間を永久に無視することは出来ない。殊に彼等の占拠せる土地が、孤立せず、四億の同一民族が居住し、今や全国統一に拍車をかけている國に境を接せる場合、特に然りである。

一九〇五年以來の満州開發は、日中兩國國民の力に負うところが多い。兩國國民はそれぞれ独自の方法にて、満州開發に貢獻した。日本の資本と製造の恩恵を受けずして、満州はその彪大なる農

村人口を吸収することが不可能であり、同時に、中国農民と労働者の流入なくして、満州は日本のために市場を提供し得ず、また日本に食糧と原料を供給し得なかった。こうした経済的倚頼いらいを考えれば、両国間の提携を破壊するが如き紛糾の発生したのは誠に悲しむべきことであつた。だが現実の事情において、かつ人類が常に影響される行動と反応に鑑み、そうした誤解と紛争の惹起することは寧ろ必然であつた。

満州は事実上にも法律的にも中国の一部分であつた。然し日本国民は、そこに歴史的、感情的、政治的関心を持つていた。そしてその関心は特殊權益をもつて強化した。かくてこれらの權利と中国の主權との間に紛争をかもすことは避け難かつた。これら多くの權利は常に強調されながら、非常に概括的意味に定義され、しかも否定し得ざる文書の証拠をもつて証明されていないところに、紛争の危険を胚胎しているのである。日本の主張する条約のあるものは、信用し得ざる種類もしくは強迫のもとに作成されたものと中国は主張する。

これら条約の確実性が何うであろうと、日本は、条約の下に隠れて、満州の重要地点に占拠した。日本は、遼東半島の租借地一帯を統治するのに事実上、完全なる統治權を以てした。南満州鐵道会社附屬地を通じて、日本は、保持することを許されたる兵力の基礎に基づく行政權と警察力を実行した。奉天及び長春の如き大都市の一部及び小都市にわたり、日本は税制、教育、警察、

公益事業を統制し、更に、少くとも三種の軍隊——関東軍、鉄道守備隊、領事館警察——を事実上維持しているのである。

リットン委員は、變則的情勢に關して次のように概説している。(註四)

上記滿州に於て日本の有する数多の權利の概説に依り、滿州に於ける日中兩國間の政治、經濟及法律關係も特殊性は明瞭にして、この如き事態は恐らく世界の何処にもその例なかるべし、又隣邦人の領土内にこの如き広汎なる經濟上及行政上の特權を有する国は他に比類を見ざるべし。若しこの如き事態にして双方が自由に希望又は受諾し、且つ經濟的及政治的領域に於ける緊密なる協力に關する熟策の表現及具体化なりとせば、不斷の紛争を醸すことなく之を持続し得べきも、かかる條件を欠くに於ては右は軋轢及び衝突を惹起するのみ。

(註四) 調査団の報告、國際聯盟公刊一九三二年 No. C663, M. 330, 第七、第三章第一(爾後リットン報告と稱す)

世界の他の方面においても、強国が、異人種や、異文明、政治的及び社会的に後進の人民に、多少これに似た關係を持つている場合がある。しかもかかる場合に於てさえ、歴史の行進は、明らかにかかる關係が過渡的であることを証明する。しかしながらここでは、かかる關係は全然容認されないのである。個人的に、中国人は、太古より、能力、文化、人種において少くとも日

本人と同等視していた。中国人は、自国の地位を隣邦に比して遙に高く見ている。事実中国人は昔から他人種に優越して居ると確信していたのである。そしてただ日本は、中国が心から嫌い排斥したところの西洋文明の外観を真似する敏捷さから、最近漸く、政治と軍事の方面にて、中国は日本に一等を輸した【一籌を輸するは少し劣る】のである。

しかも今や中国の覚醒は真剣に開始され、そしてその覚醒が、満州における変則的關係に働きかけた。一九一二年、中国の帝政は崩壊し、その後二十年間にわたり地方軍閥の權勢慾と掠奪のため、中国は全く麻の如く乱れて無秩序状態に陥った。しかし孫逸仙の指導の下に、国民党は立憲主義を標榜し広東より擡頭し、次第に北伐に成功した。最初、国民党はロシアの共産黨員の支持を受けたが、その後幾ばくもなく、ロシアと抗争し、共産主義を猛烈に弾圧した。一九二八年この国民党運動は、中国において名目上の統一と、實際上の統一策をもたらし、蒋介石の下に中央政府を南京に樹立した。この時期における中国の鬭争状態を目して、単なる混乱と見る者があるけれども、それは当を得た見解ではない。この大なる国民が、昔の家長制度を蟬脱<sup>せんだつ</sup>して、現世界の近代国家主義に変形する過渡期においてかかる粗暴は避け難い【原注②】。そしてその過程において中国の国家主義は、排外精神を採用した。もしそれ我々が租借地、治外法権、居留地などの外国人の侵入を想起すれば、中国人がこれから脱しようとして、それが排外精神に傾くことは

不思議とするに足らないのである。彼等が、この期間において未だ曾て持合せなかつた協同的行動と、そして彼等特有の掛引を發達させたことは注目値する。そして中国人が個人として常に表現していた忍耐力を遺憾なく發揮した。彼等はその勢力を益々拡大して行つた。過渡期における国内の無秩序状態に失望せず、交通通信機關の不備に直面しながらも、孜孜として實力を以て進歩を示したことは中国の友人をして意を強くせしめたところである。

(註五)ワシントン會議は、中国に於ける状態が今日よりも遙に混沌としていた過渡的時代に行われた。同會議はその遂行に多大の問題を惹起したる一にして、同會議に集りたる各国の指導者は、その期待外れの様子により、意氣阻喪することなく、寧ろ同情せられ保護せらるべき中国の奨励すべき進化の避く可からざる表徴であるという事を認めた。九ヶ国條約の原則はその時ワシントンに於て採用せられ、中庸なる日本政府を包含する極東に於いて、利害關係を有するあらゆる國家によりて、同意せられ遠謀ある且つ理智的精神を表現したのである。【底本では注記箇所を謬る】

中国各地に、澎湃として起つたこの新精神が滿州に蔓延すべきは必然だった。そして滿州において下積にされている中国民衆と、上から統治する日本の特權との間の均衡に動揺を与えるのも到底避け難いことであつた。滿州における國家主義の勃興と、滿州中国人と南方の中国人との密接なる同胞感、彼等の統率者の行動によりても容易に測定することが出来るのだつた。

一九一一年の革命勃発の時、満州の当局者は先ず軍隊を以て革命軍の進撃を阻止せんとした。その後、中国の内乱時代を通じて、張作霖は、満州における事実上の独裁者となり、当時中国本土における軍閥に対して独自の行動を採った。或時は甲に加担し、また或時は乙の味方にもなった。かれはまた向上時代の孫逸仙及び国民黨員に対しても同じ態度に出た。或る場合は、国民党と行動を共にしたが、またある時は、彼等に反対した。かれは、孫逸仙博士の憲法を承認しなかったが、孫逸仙とその一党が次第に完成しつつある全国統一政策に共鳴した。張作霖は、数回にわたり日本の指導を受け、日本の援助により国民党の北進を阻止した。けれども中国統一が一步步と完成し、国民政府の樹立と共に、彼は、次第に日本との提携より離脱した。彼は漸次、日本が諸種の条約による特権によつて、利益することを喜ばなくなった。国内における軍閥の勢力争いを外にして満州開発に全力を傾注すべしとする日本の勧告を無視した。彼はしばしば南方の軍閥と戦争し、再三再四、軍隊を率いて中国本土に侵入したが、彼は、決して外国に対するような態度ではなく、単なる中国内乱の参加者としてに過ぎなかった【「リットン報告第二章第二節参照」】。

一九二八年六月、彼は奉天市外の列車内にて爆死を遂げたが、その背後には……日本の力が動いているとさえ専ら信じられた。彼の子、張学良は、父の遺業を継ぎ、日本とは益々離反し、それより

i 「彼の日本からの離間が、日本の影響による彼の死を齎したと、彼の支持者達は強く信じていた」

六ヶ月経ないうちに、日本の希望に反して、一九二八年十二月、南京政府に忠誠を誓い、青天白日旗を自己の旗色として採用した。それと同時に、彼は東北辺境軍司令官に任ぜられ、内蒙古の一部、熱河を併せて満州の政治を手中に収めた。

満州の支配者によつて公式に南京政府を認めたことは、当然満州における国家主義と反日本感情を刺激した。外国人の高圧的権力から満州を救うべき「前進政策」は張作霖によつて開始されたが、その政策は彼の子息により著しく促進されたのである。南京政府はそれまでとても、「喪失せる自主権の回復、不平等条約と、帝國主義邪惡の排除」のために、中国全土にわたつて運動を力行して居つたのであるが、張学良の南京政府に対する忠順は、一層これに拍車をかけた。そしてまたそれが満州という外国の裁判所と警察と守備隊と軍人との形式に於て、外国の利益の實在が、甚だ明白なる個所に強い影響を与えたのは当然であつた。

一九二九年、中国政府は、北満州の東中国鉄道におけるロシアの権力に向つて公然の鬭争を開始した。これは不成功であつたけれども南満州に於ては、日本に対する煽動が、漸次に高まつて行つた。組織的な圧迫を加えて日本人及び朝鮮人在留者の位地を不愉快にした。また南満州鉄道の中国への回収を目論むと同時に満州に於ける日本の権利の清算を論議するために「人民外交政策協会」の商議が開催された。かくして、次第に、緊張は加わり、危機を孕んで來たのである。

斯くの如くして、中国共和国全部を通して外国人の例外的特権を制限せんとする、中国政府数年の努力の結果は国民主義の昂揚となり、それが満州に於ても、漸次明らかになって行つた。それは中国の混乱の証拠ではなくて、その反対に、以前にはこの人民が持たなかつたところの統一的国家主義精神の成長の証左であるのである。

この緊張は、満州地方に於ける中国と日本の利害關係の政治的對抗乃至經濟的對抗によつて益々助長された。中国人口が増加するに従つて、中国資本は鐵道建設を増大し、満州地方の豊富な農業地方を開拓した。これが、南満州鐵道の利益と猛烈な競争を惹き起した。日本は、この新しい鐵道敷設は両国間の条約違反であると主張した。中国はそれを否定した。だが先に敷設してあつた日本の鐵道の犠牲において、中国の鐵道が増々繁榮することが緊張の度を益々高めたのである。

一九三一年の夏までには、多くの事件が勃発した。それは両国の政治的、經濟的衝突の増大を語るものであつた。これ等の事はわが國務省は極東から受ける電報で知ることが出来た。ここで、それを評論する必要はない。何れも、正常な国交關係にある政府間に於て、平和に処置しかねるが如き重大性あるものではなかつた。然し、満州に於ては、前述の如く、遅かれ早かれいつか爆發せねば止まない二つの競争國民の間に、いや増す圧迫を反映したのである。



満州に於けるこの局面に対する日本政府の政策を検討するに当つて我々はその問題の困難性を感ずる。一方において日本人の間に、或いはその政党、政治家の間に、満州における日本の特権の重要性に関して明確な区別がない。日露戦争後、日本は、満州において他国が有すると異なるところの最も重要な特殊権益を有すると称したが、その権益が果して如何なる性質のものなるや——政治的もしくは主権、乃至は単なる商売上或は契約的なものなるや——その点は未だ明白にされない。日本の政治家は、満州における「特殊権益」の国際的承認をロシア・フランス・英国及び合衆国に求めたが、彼等はその性質を定義せず、結局その努力は報いられなかった。これに反して一九二二年、日本は九ヶ国条約の調印国となり、最も明白な言葉をもつて、中国において『その主権と、独立と、而して領土的、行政的保全』を願うところの日本の権益の破棄を宣言した。

既に述べた如く、満州における日本の特殊権益の重要性に関する日本国民の感情には何等の分裂はなかったが、日本国内の政治思想のうちには、その権益を支持し実行すべき方法について、意見の開きがあつた。これは前にも述べたように、立憲政治の理想を標榜する一方と保守派と軍部の指導者に二分され、これにより対中国積極政策と友好政策とが並立するに至つた。歴史的には、これらの名称は、一九二一年のワシントン会議当時までは、未だ充分に展開されなかったの

である。

对中国親善政策と共に連想されるのは、日本の偉大なる外務大臣幣原男爵にて、彼の对中国政策は『親善と善隣の基礎』に置かれてある。これに反して積極政策の主唱者は陸軍大将田中【義一】男爵であつた。彼の積極政策は、窮局において、軍事行動にて、「もし満州及び蒙古に擾乱じようらんが起こり、その結果、特殊權益が犯される場合には日本は如何なる方面より脅かされるとも断乎として防衛にあたる」と、卒直に告白した田中大将の言葉を徴すれば判る。かくして日本は満州における平和と秩序を、武力に訴えても維持せんとする。

之を要するに、満州における日本の特殊權益は、日本国民の一般的支持を受けてはいたが、その性質は依然として明白にされない、のみならず、國際的にも承認されていなかったのである。しかして来るべき中国との競争において、日本がその特殊權益を確保せんとする方法こそ、日本において今なお發達の途にある立憲政治への進歩の根柢に達する問題なのである。

【原版では、次のページに幣原喜重郎の正装姿の写真がある。】

## 第二編 満州事変における和協工作

### 一、衝突

一九三一年、九月十九日早朝、満州において日中の衝突が勃発し、更に即夜、日本軍が奉天のみならず南満州の他の都市をも占拠した事を知つて、全世界は驚倒した。

勿論、我々は、国務省にあつて、日中両国民の拮抗に基づく満州の緊張せる關係を知つていた。それは名目のみの主権を固執する中国と激しい人口増加になやむ日本との争い、そして又南満州鐵道に沿うて存在すると主張する条約上の權利から發生する日本の利益についての尖鋭的論議から生れたものである。

すでにその夏、この紛争の最初の予告が發せられて居た。日本軍の中村大尉が行方不明となり、ついで虐殺されて発見されたこと、これである。日本軍は痛く憤慨し、報復的行動を起そうとしていたのである。調査は行われ、そして日本軍首脳部と東京における外務省との間に、その取るべき行動につき甚しい対立が報導された。然し米国国務省の各員は事態を見守り、なお目前の危険を予想しなかつた。

本省に達した満州に於ける日中衝突の報知には、例によって相当区々たるものがあり、いずれも全く相異なる事情を伝えた。

九月十九日、土曜の朝、私は日誌にこう認めた。

「満州において再び紛議が勃発した。日本、明らかに日本軍部、は突如として奇襲を敢行した。彼等は奉天を奪い、そして南満州一帯の軍路上重要都市を占拠した。状況は甚だ混乱して居て、軍隊が政府の計画に基づいて行動したものか、或は自身勝手に行動したものか判別しがたい」と。

然し、間もなく重大な事件の全貌が明らかとなった。日本人の主張するところによれば、彼等の行動の原因となつたのは南満州鉄道における中国従業員の怠業であるが、それは実際には存在しなかつたといふことを暗示するほど過小なものにすぎなかつた。<sup>i</sup> 然るに、日本軍は事前に練つた戦略計画……の下に行動したことが明瞭なほど、極めて機敏迅速に行動したことが認められた。鉄路上の衝突は、九月十八日夜の……<sup>十時までには起こらなかつたにも拘らず、</sup>……、……、……は攻勢に出でて中国兵營と、中国全満州軍の軍需品の貯蔵されていた奉天大造兵廠を略取し、日の出前には、満州駐屯の全日本軍及び朝鮮軍の数部隊が、南満州全区域にわたつて

i 原注 Cf. Westel W. Willoughby, *The Sino-Japanese Controversy and the League of Nations*, pp. 34 et seq.

行動したのである。

九月十九日の午後までには、それぞれ数百哩を隔てている安東、長春、半莊が……日本軍

て占領された。日本人は直ちに、これ等の都市において文官当局の役目を引受け、公共事業を管理し、電信局を閉鎖し、無線電信局を自ら管理し、そして電話を日本人の監督下においてのみ使用することを許可したのである。二十四時間以内に南満州全部は、ひとり南満州鉄道の沿線のみならず、中国人によつて建設された鉄道の或るものの沿線までが、效果的に占領されたのである。証拠の示すところ満州における……日本の最高幹部と、恐らくは、……東京に居る高級参謀によつて計画

され、指導された深慮ある工作である。秩序の整備、精確さ、時刻の一致、南満州の重要戦略地点を略取した用意周到さは、かかる権威なくしては企てがたい参謀の仕事の完全さを示している。

中国人は實際上何等の抵抗をしなかった。張学良から抵抗するなという命令が発せられたのである。かようにして、十万に垂んとする中国軍は、主として南満州鉄道守備軍から成るおそらく総計一万五千名には達しない日本軍によつて、蹴散らされ、武装解除され、圧伏された。

この突然の攻撃が、……日本の文民政府によつて企劃され、或いは默認されたものでなく、却つて、恐らくは彼等の予見すら無くして起つたものであることも、同様に明らかである。それは、日本に在るわが代表者のみが、中国に在るものも含めて、局に直面した消息通の一致した意見である。

この間、幣原男と外務省が、……<sup>軍部</sup>によるこの種の計画を懸念していた事が報導されたが、幣原男はこれに……<sup>関与していない</sup>のみかこれは彼の全政策に矛盾するものであると想像された。以上が九月二十一日月曜までに、國務省に在つて我々が達したところの結論であつた。

時の経つにつれて私のこの解釈は確証された。その後の事件、更に外国人にさえも明らかに知られたところの……<sup>数ヶ月に亘る外務省と軍部との激しい政争</sup>、総てその正確を指示し、公平なる歴史家も同意見なることを断言したのである。<sup>i</sup>

## 二、当初のわが政策の理由

満州の特殊な状態に当面して、國務省がとるべき政策については、何等の異見も対立することはない。我々は日本の外務省及び幣原氏に対して、「脅迫あるいは世評からも」自由に事態を收拾させる機会を与えることの賢明さを信じた。

我々は日本における議會政治の発達の未完成をよく知つていたし、また軍隊が政府の下になくて国家の主権者たる天皇親しく御統帥せらるる所であることも心得ていた。勿論、我々は、日本が絶え間なき人口過剰に当面し、急迫せる經濟問題に当面していることも承知して居り、その解

<sup>i</sup> 原注：Cf. Royal Institute of International Affairs, Survey for 1931, pp. 439, 440.

決をなし遂げるために、世界大戦中から、……中国全土に対して、植民政策を行うとしていたことも知っていた。即ち、約十年間幣原氏とその一派の指導によって日本は、それ以前に取った、好戦の方針からは、およそ縁遠い方向を忍耐強く進んでいた。そしてワシントン会議から一九三一年の九月会議までの十年間、武力によって市場獲得に出ずることなく、「商業的伸張及び政治的善隣主義」という全く反対な方針によって進んだのであった。——強制的に移民のはけぐちを獲得するのではなく、他の国々との親睦的貿易の発展によって、その増加しつつある人口問題を処理しようとした。日本は困難と反対に直面しながら、この方針に従った。そして猛烈な軍部の反対にも拘らず、シベリアと山東省より軍隊を撤退したのであった。

日本は日英同盟の消滅を容認し、かくてワシントン会議後の解決を、可能ならしめた。又日本は合衆国議会が日本人の入国者の問題を処理するに当って、日本に対し不必要且つ無礼な方法をとると思われた時に際して<sup>i</sup>、非常な自制の態度に出で、そして、中国に内乱の進行中に相次いで起った中国人の挑発に対しても、一貫せる非報復的政策を実行したのであった。

以上の外、一九三〇年のロンドン海軍条約の批准に際して、時の民政党内閣がとった経過に於

i 「慎重且根気強く軍国と逆に帆を向けていた」原注: Royal Institute of International Affairs, Survey for 1931, p. 400.

i i 1924.5.15 アメリカ議会、排日条項を含む新移民法を可決。

でも、国際関係の近代の見解に対して日本の責任感と忠実との一例を観る事が出来たのである。この件に就いては、彼等は、関係国の中にて最も困難な立場に立っていた。

このロンドン海軍条約は、日本に於ける海軍当局にとり最も不人気であつた。然し浜口首相は、遂に最後に、その生命を失うが如き猛烈な反対に直面しつつも、遂に之が批准を敢行したのである。続いてロンドンに於いて日本主席全權であつて、同条約の批准を得るために活動した若槻氏が、首相になった。

日本政府は、斯くしてこの十年間、国際間に於て、善良な公民としての異常な記録を作つたのである。我々は幣原氏が満州に於ける軍部指導者の圧迫に対抗しつつ中庸の道のために、よく努力した事を知っている。我々は、これ等の……指導者たち……が、多分、彼幣原の関知せぬ間に、また恐らくは彼の意志に反して、この事件を造り出したものだという結論に達した。事態の円満なる解決の機会が幣原にあるところから、我々は彼の仕事を困難にするが如き手段を執るべきでないことが明白になった。

歴史は逆風に抗して進むことの危険なことを教える。一世紀半以前、欧州同盟国の干渉は、革命フランスに於て国家主義の熱情と、その国の軍隊の愛国心を鼓舞することに煽るに役立つたに過ぎなかつた。国内闘争に対して外部からする干渉の危険は日本国内においても然りである。更



に又、我々英語国民の歴史は、固有の議会政治の礎石——軍隊の文治当局に対する従属——が国内的発達によつてのみ進化したものだということを示している。日本人の如き、甚だしく鋭敏で愛国心ある国民の場合、外国の干渉から来る不法の反動は、特に強烈である。

それと同時に、一方において日本国民の感情を刺戟しないために非常な用心が肝腎であるが、また他方における真相を明白に認める必要がある。もし軍部のその意志を貫徹し、幣原が結局譲歩すればその結果、戦後の条約により定められた国際平和機構は致命傷を受ける。【この光景を我々が見失う虞はなかった。二年前に同じ場所で同じ問題が我々に提示された。】一九二九年夏から秋にかけ、パリ条約の批准を祝福する最中、北満においてロシアと中国の紛争が勃発した。米国务務省は、新しく誕生した不戦条約に従い、直ちに世界の世論を指導して、ロシア、中国両国に対して、条約違反を注意した。その当時の記憶は、はしくも我々の心に浮び出たのである。

かくしてこれら二つの相反する危険に直面して、私は、九月二十三日、次のように日記に記した。「私の問題は、日本をして我々が見守りつつあることを知らしめ、それと同時に正しい側にある幣原氏を助けるような方法で工作し、国家主義者の煽動者に利用されないようにすることだ。」

### 三、聯盟の行動に影響された米国の方針

満州に於いてこの危機が、勃発した時には、あたかも国際聯盟では、ジュネーブに定例の九月會議を開いていた時であつた。

そこで、九月十四日の聯盟會議の席上では、中国を聯盟理事会の一員に推すことを、満場一致を持つて、可決したのである。当時、日本はすでに聯盟の一員であつた。丁度會議が取り行われている日に、満州に於ける騒乱の第一報は、世界の隅々にまで報道されていた。その時施肇基【Sao-ke Aifed Sze, 1877-1958 中国の外交官】博士は、国際聯盟理事会で、中国の代表たる地位に正式に就任することになつたのである。<sup>i</sup>

會議開始の劈頭、日本代表芳沢氏は満州に起れる騒乱に就いて、聯盟の注意を喚起した。中国代表施博士もその紛争に関する意見を述べた。二日後れて二十一日、第二回目の會議の席上では、中国は正式に施博士より日中紛争に関して、聯盟に訴えるところとなり、規約第十一条の条文中に照して聯盟は、

「二国家間の平和を危急ならしめつつある状態の、より以上に拡大されることのなき事、原状を復  
i 原注…中国が、日本の特別の承認の下で国際聯盟理事会の一員となつたことを、聯盟内の組織された国家としての中国の適性の日本による後の批判に照して、よく覚えておくべきだろう。

活する事、そして、中国共和国が当然受くべき賠償の性質と金額を決定する事。」

の諸項の手続を取り行われたいと中国代表は要求した。この要求によつて、国際聯盟は直ちに、両国家間の論争を裁決することになった。

【原著では次の付近に、ジュネーブの理事会に於てとして、施肇基の写真を載せる】

聯盟の行動は、当然、わが国の政策の上に重大なる影響をもたらした。われ等は聯盟の一員ではなかつたが、しかし、聯盟の権限によつて採択されたる問題には、深甚なる興味を抱いていた。地理的接近と、今一つは中国と日本との開国に因縁を持つ米国は或る点にては、世界何れの国よりも大きい直接的興味を保持しているのである。更に我々にかかる特殊なる機会における平和の保有のみならず、又上述せる如く平和の破壊が戦後平和条約に影響する先例を衷心より懸念していたのであつた。

かかる事態によつて生れたのは困難なる国際的協調の問題である。この国際的協調は常に困難なる問題であるが、特に米国と国際聯盟との協調が、従来未だかつてなかつただけに問題は容易でない。しかも、アメリカに於ける国際聯盟に対する反感は、十年以前の聯盟規約批准に関する政争に依つて益々激発された。かかる場合に於て、アメリカの國務省が採り得べき最も普通且妥

i 原注：聯盟規約十一条は附録に。

当な手段でさえ、国民の或部分から必然的に攻撃され易いのである。

第一、こうした場合に於て政党の泥仕合を回避すべき必要がある。『これはどの外務大臣にもなじみのしつこきと困難性の問題である。』共同の目的が如何に明白であろうと、政党側の支持が如何に熱心であろうと、各国が協調しようとする場合、予期せざる方法或は行動の衝突が起きるものである。これは総て人間の行為が集る場合に於て、常にこの現象が起り易い。然しながら国際協調の場合においては見解及関心の相違に依り事態が複雑化した場合、及び総ての問題が朝から晩まで世論の攻撃や宣伝を受け易い場合問題は想像以上に困難である。これらの困難は決して完全に解消され得るものでない。ただこれらの困難は友好的卒直さと、他人の立場に立つて問題を觀察する才能に依つてのみ少なくないことが出来るのである。

そこで我々の眼前にあるこの特殊な問題に関して、アメリカの側の協調方法を左右する二つの考慮があつた。

一、一方に於て国際聯盟は六十ヶ国以上を網羅する世界的団体である。他方においてアメリカ合衆国は孤立している。随つて滿州に於ける日本軍の行動の結果、日本との紛争が起り、そしてその紛争が日本と聯盟との間で問題になったとすれば、それは日本対全世界の問題となるであろう。斯くして聯盟は世界の世論を最大限度に利用するであろう。然るに他方において、もし日米

間に紛争が起こるとせば、それは必然日米二ヶ国の紛争の觀を呈するのである。

二、聯盟の組織は、紛争の調査、和協、解決のための機構を産み出した。この機構は、過去十年間にわたつて進行していたもので、既に國際紛争において一つの手続となつていた。聯盟の加盟国は、常に集會を繰返して、運用方法を發達させたが、それは確に世界史上の一大進歩であつた。他方米国は、戦後二つの条約、ケロッグ平和条約【パリ条約】と中国に関する九ヶ国条約に参加しているけれども、何れもそうした機構を有さなかつた、また経験もない。どんな方法をもその条約によつてどうしても、困難に遭着すべきは明らかであつた。【我々の条約の下のような手順も、新しさから来る困難と反對の全てに、出會うであらう。】

以上の考慮は、聯盟が既に問題をその権限内に取上げていたという事実と共に、行く方角を明らかにしていた。つまり最も有用な我々の機能は、指導者の役割に立つよりも、寧ろ聯盟に対して独自の支持を与えることであつた。我々の政策は、協調と支援とであつて、出来る限り聯盟との衝突を避けることであつた。

我々が聯盟の目的を熱心に支持していることを彼等に認識せしめると同時に、聯盟が規約第

十一條によつて始めた審議と和協の仕事は聯盟に委ねなければならぬ。そして聯盟のみならず、<sup>i</sup> 原注：日英同盟の終了を強いたこと、および移民問題での議會の対応に依つて生じた日本の過敏さから見て、日米間の拮抗はたいへん不運な時にあると、我々は感じていた。

その他の国際的協調問題に対するわが歴史的的政策に鑑み、我々は最初より、我々の行動が常に独自の判断の結果であることを明らかにしなければならないのである。

九月二十一日、月曜日、聯盟から最初の通告が到着した。それは聯盟理事長エリック・ドラモンド卿からの通牒であつて、疑いもなく、我々の態度と見解、特にわが米国がこの問題を以てケログ・ブリアン条約に関連するものと思惟するや否やを打診するためであつた。これに対して、私は協調的にして卒直なるわが態度を明らかにし、満州よりわが方に達した情報を与え、九ヶ国条約と不戦条約下におけるわが条約上の義務に鑑み、事態の成行きを注視しつつあるものの、情報不足により当惑している旨を答えた。それと同時に、日本軍主脳部と外務省間の問題【明白な論争】に彼の注意を喚起し、且つ一方において条約上の義務を履行すべく用意しながら、他方において、軍部を支持し幣原に反対する日本国内の国家主義的感情を激発せしめるが如き行為を避くるを以て、賢明なりとする所以を説いた。

【「ちょうど翌日、避け難い困難性——そのような協調においては、関係し銘々の行動場所を持つ二体の異なる観点、制限と限界から必然にもたらされる——を持つて問題が、立ち現れた。」】夕刻に到つて、聯盟は調査員を使命して之を満州に派遣する計画を立てつつあること、日本は之に反対したること、聯盟が多分之を断行するであろうこと、而してもし必要ならば、満州の地方主権者としての中国当局の

下に調査を行うべしとの報告が着いた。而して聯盟はアメリカが行動を共にしその調査団にアメリカ委員を参加せしむるや否やを知りたいのであった。更にその翌朝、私は右の電報を考慮しつつあったのであるが、わがスイス駐劄公使を通じて電話をもつて、調査委員派遣並びに事件勃発に関する対日、対中国通牒發送の提案を示した。同時に、もしも米国がその代表者を聯盟理事会席上に於けるこれら提案の討議に参加せしめ、又は、本問題審議のため任命された特別委員会に列席せしめるならば、その結果は劇的且つ有效ならんと暗示するのであった。

勿論、私はその劇的效果について疑を挟まなかつた。然しながら私は、その芝居が果して如何なる影響を日本国民に与えるかを非常に憂慮した。私は同日、電話及び長文の電報をもつて私の見解を明らかにしようと試みた。私は直ちに米国が、聯盟が外交上の手続を経て日中両国に対して開陳すべき意見と同様の通牒を發すべきであるとの提案を容れた。然しながら私は当時、日本の反対を押しつけて聯盟が調査委員団を滿州に派遣する提案に対しては不賛成の意を表した。東洋人は第三者による合法的調査と判定方法に十分通曉せず、且つ私の意見では彼等は関係当事者間の直接交渉により問題の解決を図らんとする傾向があるから、私は、先ず彼等をしてこの直接交渉の方法を試ましむべきことを暗示した。もし聯盟が日本の反対にも拘らず、かかる調査を強請するとせば、それは必ず日本国民を憤慨させ、事件解決に當る幣原を益々困難な立場に陥れるで

あろうと、私は話した。更に理事会に列席する権利を有さない非聯盟国たるアメリカが、若しかかる調査に参加すれば、危険は一層尖鋭化するだろうと私は考えた。そこで、もし聯盟にしてかかる調査員の必要が絶対的であるならば、従来の国際的事件の慣例に従い、日中両国自身の任命する委員に中立国より一員を参加させる事が、調和を要する種々の条約に一般に用いられ、且つ了解されたるものなる事を慫慂した。これを要するに、アメリカ政府にとつて満州問題に関する協力の最も効果的方法は外交機関を通じ、日中直接による解決を勧請する聯盟を支持すること、第二にもしこれが何等の效力なき事が明らかとなり、外部よりの行動を必要とするに至らば、それは日中両国が加入国である聯盟機構を通じてなさるべきことで、且つそれは既に中国より聯盟に懇請せる処であつた。最後に、もしこれも効果なき場合、我々は九ヶ国条約とパリ不戦条約の下に可能となるべき行動を考慮すべきであると考へたのである。

私は、この問題につきやや詳細に述べたが、そのわけは、その後の、ある著者等が、もし当時私のこの調査員任命に関する援助の拒絶が全満州問題の円満解決を阻止したのかも知れぬと示唆されたからである。私の行動は、極東における私の経験に基づいていたもので、私の判断はその

i 原注…私はまた、満州の状況は、聯盟から送られてきたギリシャ・ブルガリア国境紛争の調査委員会と、非常に異なると指摘した。その場合は地理的事実の決定であり、委員の任務は実質、地理的にラインを決めることだ、この調査は、多くの深く複雑な政治的違いに立ち入った調べに卷込まれるだろう。



後発生した事件により誤り無き事を確認されたと信ずる。斯の如き場合にかかる調査を日本に強要すれば、必ずや日本の国民主義的感情の勃発を促進すると信じた（その後その通りであったが）、且つそれは当時全力を尽して軍部を抑制していた民政党内閣の瓦解を早めるであろうと私は考えた。更に、同年十二月十日まで幣原氏は在職することを得て、結局、日本を代表してリットン調査員の派遣を承認したのであるから、もし当初我々が日本を蹂躪していたならば、恐らくその調査委員会の事実よりもたらされた貴重な結果が得られなかったに違いない。

それと同時に、私は聯盟の提案より予期していた危険なくして、聯盟初期の目的を達成すべく有効に行動した。私は東京大使館を通じて、現地において満州事変に関する急速の調査をなすべく、極東駐在の米国代表者二名を派遣したとき幣原男爵に通告し、かかる調査の遂行上完全なる自由を与えられるよう申込んだ。私は、これが調査委員として、極東通にして且つ我々の信頼せる東京大使館員ソルスベリ【ソールズベリー】氏と在ハルビン総領事ハンソン氏を抜擢した。私の申込みは直に幣原男爵の容るるところとなり、両者に行動の自由と保護を与え、あらゆる便宜を講ずる旨約束された。

九月二十八日私はこれら二人に機密命令を打電した。この命令の範囲は私が彼等の使命に附せる重要性を指示したものであった【原注】。ハンソン、ソルスベリ両氏は直ちにその任務に就き、

非常に短時間のうちに、私は現地における彼等より、既に発生した事態及びやがて次々に起こるべき事態の結果につき、私の判断を結成する上に非常に価値のある報告を入手し始めた。

【原注…彼等は、様々な、戦闘地域或は日本軍が条約の境界を越えた地点を訪問しました。彼等はこれらの軍の移動——その広がり・程度・主張される理由——が正当化されるかの判断を報告することになっていた。占領の企てが、事実一時的であつたのか、危険が去つた後、退くものであつたのかの証拠を収集することであつた。中国の都市で、もしあるなら、日本人によつてなされる民政の形式、また日本軍による中国民政への干渉の全て、特に、奉天における現地人のまた国際地区において、民政がその都市において独立し行ふことが出来るように回復したか、を報告することになっていた。日本人に対する中国人の態度も、例え日本軍に非撤退の本物の言い訳があつたとしても報告することになっていた。要約すると、遠く満州における日本の占領はどこまで拡がり、拡張の正当化はあつたのか、原状回復する明らかな意図があつたのかどうか、を報告することになっていた。】

#### 四 九月十九日より九月三十日に至る事変当初の日中両国関係

九月二十二日、国際聯盟理事会議長は、聯盟規約第十一条に従い、日中両国【底本では「日米」】に同文電報を發し、（一）問題の平和的解決を傷つけるそれ以上の戦争行為を抑制するよう懇請し、更に（二）両国民と財産の安全を脅かす事なくして、即時軍隊撤退の方法を發見するよう勧告し、

更に理事会はかかる軍隊の撤退に関し、日中両国各々と商議を開始せんとする旨通告した。

九月二十四日、聯盟の行動を支持せる米国政府は、日中両国に同文通牒を發して、両国軍隊のこれ以上の戦闘中止を希望し、その事態に関しては、両国はいずれも国際法と条約の要求を満足すべき手段を講ずるよう要望した。

九月二十二日、これらの通牒發送前、私は非公式に日本大使を通じ、真摯なる覚書を幣原男爵に送り、事態に関する我々の懸念を披瀝し、日本軍隊の行動により日本政府が南滿州を完全に支配せる事實に鑑み、必然的に日本の負うべき責任を指摘した。私は事態が必然的に多数の中立国に道義的法律的政治的關係を持ち、日中両国政府が戦闘を中止すべき手段を講じ、且つ両国政府が武力の行使により、滿州における特殊權益をこれ以上増大する意図なきを、表示すべき方法を取られたき旨を指摘した。

これ等の通牒に対する回答に於て、日本政府は、その軍隊がそれ自身の安全と、鐵道の保護と、日本国民の安全とを確保するために必要なる範圍に於て行動したものであると主張した。彼等はまたその軍隊を、附屬地外の數ヶ所に在る僅少部隊を除いて、大部分はすでに鐵道附屬地へ帰還せしめた。尚、更に日本国民の安全と鐵道の保全のための必要を限度とし、その他は極力撤退する筈だと發表した。そして、「両国間の交渉により、可及的迅速に」この問題の平和的解決に到

達する様、深厚な希望をいただくものと確言したのである。

九月二十四日に日本の内閣が発表した長文の公文書【不拡大方針】には、九月十九日【原著のママ】の椿事の原因たる中国側の種々の煽動挑発事件に関する陳述の後、日本軍はすでに撤退を開始し、事態の解決の措置をとりつつあることについて更に繰りかえし述べている。日本は満州に於て何等領土的野心を懷くものではないことを確言し、更にただ資本及び労働によつて、満州の発展のために種々の平和的業務に従事する彼等国人を保護せんと希望するのみであるとして、中国政府と共に、現在の事態を解決し、尚将来いかなる軋轢の原因をも残さざるように建設的計画に努力し、努力する準備あることを誓約したのである。

他方、中国政府は、九月二十二日及び二十四日の回答文書に於て、それぞれ、この暴動の総ての責任を拒絶し、それは全く日本の侵略によつて惹き起されたものであること、中国軍隊は日本軍の攻撃に対し抵抗を試ることさえしなかつた事を確言し、侵略行為が、いまだに継続しつつある事を述べ、更に事態の悪化を慎しみ、被占拠地帯より日本軍が撤退するや否や、直ちに生命財産の保護に全責任を以て当る用意ある事を保証したのである。その上に、九月二十八日の国際聯盟会議前の討論に於て、施肇基博士は、中国は事態の真相を判定するために満州に向つて中立国委員派遣の用意あることを公表したが、日本代表芳沢氏は、この提議に賛成することが出来なかつ

た。

かくてこの論争の当初より係争問題の輪廓が明確に画かれたのである。日本は日本軍の行動が全く単に、自衛のためにとられたものであつて、在留日本人民の安全さえ確保されるならば直ちに、その軍隊は原駐地に撤退するであろうと主張した。実際、日本は、その行動が既に取られて居ると断言した。一方、中国は、この事件には中国側の何等の挑発煽動の無かつたこと、これは純粹の侵略行為であつてそれが今尚継続しつつあることを断言し、更に侵略を受けたる地域より日本軍が撤退するや直ちに、全責任を以て、生命財産の保護にあたるべきことを誓約した。

【次のページに駐仏大使芳澤謙吉の家族揃つての写真】

中国は事の真相は国際聯盟中立委員によつて現地に於て調査さるべき事を希望したが、日本はこれを欲しなかつた。九月三十日に国際聯盟は、中国及び日本の代表者を含む、その全員によつて一致せる決議に従い、この事態に処する行動を起した。

(1) 国際聯盟は、日本が満州に領土的野心なきを認めたる事を記録した。

(2) 国際聯盟は、日本が、日本人の生命財産の安全が確保され次第、その軍隊を『可及的迅速に』鉄道地帯の附属地に撤退することを継続する様誓約したることを記録した。

(3) 国際聯盟は、中国が、日本軍撤退さるる時、鉄道地帯以外の日本人の生命財産の安全のた

めに責任を取り、中国の地方官憲及び警察力の再建に責任を負うべきことを記録した。

- (4) 国際聯盟は、中国及び日本が、共に事変の範圍の拡大或いは情況の悪化を防止すべく誓約したることを記録する。

- (5) 国際聯盟は、中国及び日本が、正常なる国交の恢復を促すべく、汎ゆる努力をなし、その目的を以てこれを継続し、速やかに、前述の委任を完成せんことを要求した。

- (6) 国際聯盟は、中国及び日本が、この事件の發展に関して、屢次、完全なる通報を聯盟に提出せんことを要求した。

- (7) 国際聯盟は、この論争の裁判権を保留し、十月十四日、その時の状態について更に考慮するため、再び會議することを決意した。

この決議に就いて重要な事は日本の代表者が、この決議事項に言質を負わされた事である。この行動及びその結果たる満場一致の決議が、すべての当事者を合法的に束縛する事となつたのである。我々はそこ迄は甚だ愉快であり、勇気づけられたのである。事変は正常に終局を結び、遂に事変以後の情態、*“status quo ante”*「以前の狀態」を恢復したかに思われた。幣原男は、彼の權威とその以前からの政策とを維持することに成功し、また、疑いもなく未だ正常な国交を恢復しないうちに、解決せねばならぬ困難な問題が有るかも知れない、否事実有るだろうが、然しこれ

以上の敵対行動なしに兎に角、両国民の満足するような解決に成功したかに見えた。

私は幣原男が私の任命した調査員を局地に接近する事を許し、且つ陸軍当局の黙従する処となつた許可証を与えてくれた早速の好意により、個人的に勇氣を得た。

然しながら、まだ不安の原因は残つていた。幣原男は、彼の書簡に於て日本政府を代表して、我々の輕信を除くに足る或態度を取らざるを得ざる事であつた。日本の行動について、彼の弁解は從來發表せる事実とは充分符合しなかつた。中国の煽動挑発を如何に斟酌して考慮するも、日本軍がとつた現実の行動は、生命及び財産の保護に必要な程度のもゝとして是認し得べき何の事實をも知らない。日本軍は、注意深き計画なることを示す迅速さと強力を以て行われたものであつた。今や南滿州全体はその掌握に歸しているのである。「一ポンドの肉」を代償として手に入れる迄は、日本はその有利な地位を捨てようとはどうしても予期されなかつた。そして既に新聞通信により暴露されたある事態は、日本政府自身その軍部的勢力の蔭から、かかる状態を是認し、そうした地位を確保すると指摘していた。

我々は、關係両国間の商議解決を歓迎すべきではあるが、しかし我々の意図する商議は、交渉国の一国が武力を以て相手国の咽喉を扼し、その理屈を押すが如きものとは全く異つていたのである。かかる交渉は決して我々の關係する大条約の条件に合致しない。然し、その後数ヶ月間に

示したように、日本軍及び政府が、条約の義務或は世界の世論を全然無視しようなどと、予想するものはその傍聴員の中には殆んどあり得なかつた事だけは確かであると、私の思推する所だ。

一方、我々はその既存の困難のある事は解つたが国際聯盟と協力する我々の努力が巧に始まつた。十月五日、私は、次の電報をエリック・ドラモンド卿に打電して、聯盟の成功に対して米国の謝意を表明し、同時に協力方法を徹底させた。

『この困難なる問題の取扱上、将来我々は事件勃発以来開会中の聯盟理事会及総会の採つた方針に従つて相協力すべきものと私は信ず。理事会は本問題につき永く且つ真剣に審議し、聯盟規約は聯盟国間の問題取扱上、恒久的且つ試験済の機構を提供して居る。日中両国は事件を理事会に提出討議し、本問題の経過は出版されたる報告によつて全世界に知られた。理事会は結論を定め紛争当事国のとるべき方針を概説した。而して両紛争当事国は理事会に公約した。聯盟は、その権限内にていささかたりとも監視を緩めず、前言における日中両国の約束せる行動に対して使用する事を怠らざらん事は、すべての圧力と権力を最も好ましい事である【圧力と権限の行使をやめないことが好ましい】。アメリカ政府は、独自の立場において、その外交代表者を通じて聯盟の行動を補強し事件に対して熱心なる関心を有することを表明し、もしパリ条約及び九ヶ国条約を持ち出すことが得策なりと思意する場合、紛争当時国がこれら条約調印国に対して負える義務を喚起するであらう。この



方針により、我々は聯盟が委托されたる方針につき聯盟を窮地に陥れしむる危険を回避する。』【原

注：“Conditions in Manchuria,” Senate Document 55, 72nd Congress, 1st Session, p. 14】

この電報は、最初非公式にドラモンドへ打電されたが、その後ドラモンド氏はこれを公表し、且つ聯盟国間に配布するの許可を要請した。

## 五 一九三一年秋日本軍の攻勢的行動は依然継続す

1、我々の休息期間は、極く短かった。ほっと息をついたかと思うと、間もなく俄然、事件は次々に起り、満州における日本軍の主脳部は、東京政府が我々に公言したところとは、全く別個の目的を有し、彼等に代つて外務省を通じてなされた公約には全く無頓着で、その目的の遂行に夢中になっていることが明らかとなった。

九月十九日に日本軍の奉天占領後、中国政府及び軍隊は直隸省【河北省】と北中国に接する満州の南西端の錦州に移動した。九月三十日の聯盟決議の一週間、関東軍司令官本庄中将は、張学良政府なるものは最早や日本の承認し能わざるものなる事を公表した。更に同中将は、張学良政権を満州より完全に駆逐するまで日本軍の行動は中止されない旨発表した。東京政府は、これら

i 底本では「西北端」、原著は“extreme southwestern corner”

の声明を咎めないばかりか、日本陸軍の飛行機は、実に思い切った方法でその政策を実行に移し始めた。十月八日に十一機の日本軍飛行隊は「非武装で無警戒の」錦州市中に三四十個の爆弾を投下し、多数の市民を死傷した。これは明らかに弁護の余地なき侵略行為である。わが抗議に対して東京政府は遺憾の意を表したが、それは不十分である様に思われた。<sup>i</sup>

2、その後、十月下旬、関東軍司令部は、黒龍省の首都チチハルへその部隊を送った。この地は南満州鉄道のいずれの地点より数百マイル北方にあり、日本の満州において主張する附属地より遙に離れている。派遣部隊は中国の所有する鉄道に沿い北上し、更にロシアの所有する東中国鉄道を横断した。かくしてウラジオストクのロシアに対する戦略的地位を確保した。この派遣部隊は、黒龍省における張学良麾下<sup>きか</sup>の馬占山の指揮する軍隊を壊滅せしめて、ここに張学良の軍隊に、完全に北満より葬られてしまった。

3、チチハル占領により、張学良の威光の及ぶところは、僅に錦州地方だけとなった。十一月下旬、関東軍は錦州進撃を開始した。その時、後述する通り、聯盟とわが米国は、日本政府に対して頗る強硬に抗議した。その結果、漸く東京政府は、最初の予定を取止め、十一月二十八日日本遠征軍を奉天へ撤退させることになった。それは一時の猶予であつて、十二月十一日、民政党

<sup>i</sup> 原注: See "Conditions in Manchuria," Senate Document 55, 72nd Congress, 1st Session, p. 16.

内閣の総辞職後、錦州攻撃は再び開始され、一九三二年一月三日、遂に同市は日本軍に占領された。かくして張学良の軍隊は、完全に壊滅し、満州は日本の手中に帰したのである。

## 六 外交関係に及す漸増的影響

政府の公約を

反抗的に無視する日本軍の示威行動は

、その秋を通じて、我々の眼前に、一幅の物凄い写真

として展開された。その間、これら次々

に繰出された行動は

日本国民の動力なる国家主義思想の

強い後押しを受けて、

日本軍

は全力を集中して

いた事実が次第に明らかとなつて来た。それと同

時に、日本政府は、

陸軍の行動を規制し得

ぬのみならず、ある重要な点に関しては、陸軍の行動

によって、却つて、利せられようとしている事実が同時に闡明されて来た。日本政府は、日中直

接交渉を固執し、更にその交渉において、現在の紛争解決のみならず、これを好機に多年両国間

に残された全般的懸案を一掃すべきことを強調した。永い間、中国は、満州における日本の権益は、

有名無実の協約もしくは、強請的協約に基づくものであるとして、権益の拡張を論駁した。今や、

日本は自国の

軍隊が中国の諸都市を占領している内

に、すべての紛争問題を有利に解決せんと意図せること

が次第に明白となつた。換言すれば、

日本は、剣の力によって

これらの諸懸案を解決せんと強要し

ていたのである。

これは、世界大戦の平和条約——聯盟規約第十条、九ヶ国条約第一条のみならず國際的紛争解決には平和的方法以外の方法によらざることを明記したケロッグ・ブリアン条約——に対する日本の義務と全く矛盾する立場である。この極東及び日本の情勢から観て、全世界を國際生活のヨリ高き水準に導かんとする大戦後の努力が今や全く危険に瀕する不快な成り行きが、その秋の永びける交渉の進行の中に明らかに認められるに至った。即ち、これら平和条約は全く無視されて、存在しないかの如く扱われただのである。

勿論、我々は最初よりかかる可能性に直面していた。十月九日に於ける閣僚會議に対する私の初期の報告として私の日記中に左の項を發見した。私は西洋国民によりて發議されたるこれらの近代の條約が、時々欧州及米國に於ける産業化されたる世界の窮乏に資すべく企てられたる條約が、東洋に於ては真面目に取られないかもしれないかもしれぬと思う。されども私が閣僚に指摘せる如くこれらの條約は嚴存す。良きにせよ惡きにせよ、我々に取りて熱烈なる希望を表現するものである。我々が降伏しそれらを紙くずとして扱うこと………を彼等に許すならば、世界に於ける平和的發展は打撃を被るであろうし、又その打撃は急速には回復出来ぬであろう。

かかる状態に面して、或る基礎的事実に我々は對せざるを得なかつた。一九二二年ワシントン會議に於て數箇の相關連した條約が締結された。これらの條約は英米兩國が日本との關係に於

いて夫々の海軍力を縮少し、更に現在の満州事変の如き紛争ある場合に、欧米の国家が武力を以て干渉し得られない様に、極東に於ける欧米各国の属領に要塞を設けない事を規定したのであつた。こうした制限は別として経済不況時代に、たとえ可能であるとも、欧米諸国が単にかくの如き問題から戦争を惹起する希望を有しない事は、如何なる人口にも明白な事実であつた。これらの事実からして我々の行動は、

一、日本に対して或る集团的経済制裁

二、若しくは外交的圧迫と、世界の世論の力を発動させ、日中交渉の際、弱少中国の為に公平な取扱いを与えること

三、世界の世論を背後に日本に対して強硬なる判断を下し、  
.....日本の行動により公然と無視された.....平

和条約に対する尊重を求めること

これ等はジュネーブ及パリに於ける聯盟の解決案のその失望せる行進を辿る中に、わが国務省に於て、その秋屢々論議された目的であつた。

## 七 聯盟十月会期の終了迄の経過——米国代表ギルバート氏理事會列席

【これらの事は出来るだけ手短に抜おう。】その後聯盟は規約第十一条の効力の下に、交渉による日

中紛争解決の努力を続けた。中国がこの規約に基づき聯盟理事会に訴えて出た訳は、疑いもなく種々な理由があつた。先づ第一、この聯盟規約第十一条は、過去の幾多の事件に理事会が行動したお気に入りの条項と考えられていた。この第十一条の下で、聯盟は紛争処理に広汎な自由裁量が与えられ、これまでの紛争には常に慣用の手続きをとつた。併し第十一条の唯一の制限は、紛争当事国自身の承認及満場一致を必要とする点である。中国が聯盟に提訴した当時、この制限は未だ明確に決定されていなかった。そうして十月下旬の理事会に於て決定が下されたのである。

聯盟規約第十一条の下に於ける聯盟の努力は嚴格に制限され、僅かに両紛争当事国の和協に依つて、その問題を解決しようとするに過ぎなかつた。第十一条に基づく行動は、侵略国に対して、軍事的もしくは経済的制裁に迄、自動的に導かない。その当時、中国はかかる制裁に訴える積りはなかつた。私の知る範囲では、かかる制裁の発動を提示した国は無かつた。処が反対に九月二十六日に遡り、既にジュネーブ（即ち聯盟国）が制裁行使に反対であるとの非公式通報が我々に到着していた。その上に中国の提訴は最初の日中衝突の僅々二日後になされた。そうしてその当時、既に重大な事態を惹起していることが判明していたが、日本はもともと防衛的目的で行動し、防衛手段が不必要になり次第、軍隊を撤退すると云う立場を取つて居た。更にジュネーブでは、全世界の抗議に直面する日本が、是以上中国の領土を占領するであらうとは信じられなかつ

た。それ故、從來屢々試みられた伸縮性のある規約第十一条の条項が、無論最も妥当であり、且つ世界の世論を背景に、事態の平和的解決を齎すに充分であると考えられていた。

フランスのブリアン氏は十月十四日の聯盟理事會に於て議長に就いた。

その後日中問題は、その理事會に於て最も辛抱強く且つ工夫を凝らして取扱われた。中國は施肇基代表の下に、日本軍隊の「繼續する」侵略行為を益々明白に持出し、中國の爲、聯盟規約に基づき全世界の同情を強調した。

アメリカは外交機關を通じ、理事會の行動を支持する政策を続けた。

既に述べた如く、日中兩國間の交渉が暗礁に乗上げている間、日本は問題の解決を日中直接交渉に依る事を固持し、之に反し中國はあくまで日本の主張を拒絶した。その時國務省に於ては、曾て一九二二年のワシントン會議中、日中間の之に似た行き詰りをオズバーに依り、交渉を纏め上げた事実を想起した。その当時バルフォア卿とヒュース氏、もしくはその代表者が、日中交渉の際サイドラインに着席し、非常にデリケートな論争問題を首尾よく解決したのであった。そこで我々はこれと同様の方法に依れば、中國も日本との交渉に応じ、日本の優勢なる武力に依り不利な立場に置かれる懼れもないであろうと考えられた。処で、この提案はジュネーヴの理事會から出されたならば、兩當時國の承認を受ける機会が遙かに多いと考えたので我々は非公式に

聯盟理事長へ打電し、更にその後この提案は理事会へ提出されたのである。

併し日本は之を拒絶した。

九月三十日聯盟理事会が休会された時、十月十四日再開する計画であつた。その日が近寄るに従い、日本は公約せるが如く占拠地域よりの軍隊撤退を少しも進捗させないのみならず、事態は前理事会休会当時に予想されていたよりも、遥かに重大化されていた。

日本軍の錦州攻撃と、日本飛行機の中國鐵道列車「いわれ無き」爆撃は、米国民のみならず、海外に於ても非常に悪い印象を与えた。ワシントン及ジュネーヴでは全世界の世論を動かし、日本政府及び国民に対し、更に大きな道徳的圧迫を加える可能性に就いて考えていた。ワシントンに於て、我々はこの感情を示す方法として、ケロッグ・ブリアン条約の下にて、その署名国間に世論を喚起すべき時であるかないかを考慮していた。十月九日私はこの問題を閣議に諮つた。その翌十日、私はフーバー大統領と長時間に涉つて熟議した。

大統領はその時迄国内に於ける經濟危機に没頭していた為、滿州問題に關して考慮する余地を持たなかつた。処がその朝は国内問題は一時少康を呈していたので、私の持出した極東問題に非常な関心を持つようになっていた。國際聯盟はこの問題の討議にアメリカを引入れることに依り、欧米諸国の世論の一致を表明したくてたまらなかつたのである。既に述べた如く、アメリカ引入



策は、問題発生当時既に非公式に提案されていた。この十月十日の會議に於て、フーバー大統領は前日の閣議以來、この問題に就き熟慮していたと見え、活潑に私の問題に対して意見を述べ、自らケロッグ・ブリアン条約の問題を繞り、連合會議を開く用意があると言明した。

勿論この事は国内のみならず、外国に於ても明白な困難を伴う提案であつた。更にこの問題に對する国内の反動は、既に表面化されていたので、万一それが不結果に終るならば、大統領個人の打撃になる懼れが多分にあつた。そこで私は大統領自身が自発的にケロッグ・ブリアン条約引用の用意のある迄、この問題を懸憑する事を躊躇した。のみならずこの問題に對する日本の反動をも慎重に考慮しなければならなかつた。元來アメリカは聯盟理事会の行動や責任に公式に参加する権利を持たなかつた。アメリカは聯盟機構に参加する権利もなく、その署名国のみに限られたる討議に關与する事さえ出来ないものである。併しながら常任理事国及聯盟国全部はケロッグ・ブリアン条約の調印国でもあつた。従つてもしこれ等の国々がジュネーヴに於ける代表者を通じて、ケロッグ・ブリアン不戰条約の下に執るべき行動を、我々と討議する希望があるならば、我々はその討議に参加して悪い筈はなかつた。勿論ケロッグ・ブリアン条約と聯盟との権限は明確に区分すべきである。

今一つ注意すべき点があつた。ケロッグ・ブリアン条約には二つの箇条がある。第一は戰爭に

関するもので、国策の道具としての戦争を破棄する声明によつて成立して居る。第二はそれとは全く別で、各調印国は平和的方法以外の手段に依つて、紛争を処理すべからずという規約によつて成立っている。

もし我々がこの不戦条約を援用するならば、その第二条の下に於てのみ行動する事を、明らかにしなければならぬ。処で日中両国の場合、何れも戦争を布告していない。そうして中国の権利保全の立場から、不戦条約に関する国際會議が、戦争の嚴存を認める事にならないようにするのが肝要である。然らざれば日本軍部に依る侵略の手にまんまと陥る懼れがあるかも知れない。たとえば日中両国間が戦争状態に置かれているとすれば、日本は一般的戦争の法則を楯に、中国の港を封鎖し、中国の領土内にて軍事行動を敢行させることになるであらう。

最後に私が既にこれまで引用し、更に国際聯盟との協調を通じて常に我々の心にあつた問題がある。それは国際聯盟のイニシアチブと、アメリカのイニシアチブとを明白に区別する要点である。最初聯盟とアメリカの協同行動を提示したのは、ジュネーヴにある国々からであつた。米政府と聯盟の協同行動は、アメリカの提案でなく、各国の一致せる意見に因るものであつた。併し日本に於ける誤解を避ける為、その情勢の真相を明白にする事が肝要であつた。この国際會議に対する招待状は聯盟国より発しなればならない許りでなく、もしかかる會議の結果、ケロッ

グ・ブリアン条約の引用を決定すれば、その条約の発動に必要な手段を講ずる際の指導者は、その条約の調印国でなければならない。これは非常に重大な点である。もし然らざれば、わがアメリカは日本国民の目にこの問題の主唱者として排日を煽動すべく国際聯盟に潜り込んだと見られる懼れがある。

十月十四日国際聯盟理事会はジュネーブに再会され、前述の連合会議開催に関する方法を討議した。同月十六日聯盟理事長ブリアン氏は次の如き言葉で、私に招待状を打電した。

私は国際聯盟理事會が本日理事長として、私が提案した所の次の提案の条件を可決した事を貴下に報告する光榮を有す。

問題の審議中に、理事会に提出された非常に重要な問題が、国際聯盟規約のみならず、パリ条約より発生する義務の遂行に關している事が披瀝された。

この意見はパリ条約の第二条即ち

契約国は事件の原因及性質の如何を問わず、總ての紛争若しくは抗争の協定若しくは解決は、平和的手段以外に依つて求める可からざる事に同意す。

パリ条約の調印国の最も有力なる国の中に、アメリカ合衆国がある。合衆国は条約提唱者の一にて、私は當時の合衆国國務省と共に、この条約の協同創案者として協力した光榮を有す。その結果、合衆

国は、今回の紛争を平和的方法に依る解決に特別の関心を有するものと認める。

更に聯盟理事会の提出されたこの紛争に関する文書を交換された合衆国政府は、国際聯盟の態度に満腔の賛成を表し、聯盟の行動を補強する希望を確言した。

アメリカ政府が理事会に代表者を送り、現在の事態もしくはその将来の発展に鑑み、如何にして条約の条項を最善に実行するかに就いての意見を表明することは、私及他の理事国の希望であると信ずる。この方法に依りアメリカ代表者は全体として問題の審議に列席する機会が与えられるであらう。

私はパリ条約に基づき実行さるべき行動が今聯盟理事が国際聯盟規約に依り課せられた義務に従い、目下審議中の問題の平和的解決を齎す努力を助けるものと信ずる。故に私は該提案に包括された招待状を、合衆国政府に発送する光榮を有す。

この招待状に対して、十月十六日私は聯盟會議に屢々アメリカの非公式オブザーバーとして行動したジュネーブ駐在アメリカ領事フレンティス・ギルバートにその招待状を受け、問題の審議に代表として行動する権限を与えた。私の指令は次の通りであつた。

貴下は聯盟理事会が米国もその一員であるケロッグ・ブリアン条約の適用をなす時、理事会の討議に参加する権限を与えらる。貴下は国務省にこれらの討議の結果を報告すべし、もし貴下が日中紛争の討議に他の關係に於て参加する場合は、単にオブザーバーと聴取者たるべきこと。

同日ギルバート氏は聯盟理事会に出頭して、招待状の受諾書をブリアン理事長に手交し、更にパリ条約に基づき、我々の権限内で協力する希望を述べ、その権限以外の行動を除外する必要な制限を明らかにした<sup>i</sup>。

聯盟理事会の委員と、ギルバート氏は直ちにケロッグ・ブリアン条約引用に関して討議した。その翌十七日日中両国の代表者を除く理事会全委員は、各国政府が条約の第二条に基づく義務に就き、日中両政府の注意を喚起すべきことを決定した。この決定に従い、フランス・イギリス・ドイツ・イタリア・スペイン・ノルウェーの政府は同日かかる覚書を日中両政府へ伝達した。更にフランス政府はこれら各国政府の決定を、アメリカを含む他のパリ条約調印国へ通告した。フランス政府よりこの通告を受け取ったわが米国は、十月二十日、日中両国政府に対しケロッグ・ブリアン条約に基づく義務に関する両国政府の注意を喚起する覚書を送った。

ケロッグ・ブリアン条約引用が決定された直後、理事会には聯盟に関する事務の商議以外の事項が存しなかったため、私はギルバート氏に命じて、十月二十四日理事会の卓よりギルバート氏の臨時の席を退き、単に一オプザーバーとして理事会に留まらしめた。

i 原注 11: For M. Brandt's and Mr. Gilbert's remarks see Willoughby, *The Sino-Japanese Controversy and the League of Nations*, p. 104.

アメリカと理事会との連合会議は、斯の如く最初我々が意図していた通りの方針に従った。然るに米国と聯盟とのかかる協調の困難を示す事件が起った。曩にブリアン氏（さき）が理事会にて米国招待の問題を開陳する時、彼は直ちに日本代表者の法理的反対に逢った。米国は聯盟国に非ず、理事会の討議に参加する権利を有しないという事が、日本の反対する理由であつた。日本代表者はこれらの反対を文書にして提出したが、明らかにアメリカの参加の範圍に関して全く誤解してゐた。之は同日ブリアン氏の發した回答の中に明らかに説明された。十月十五日理事会の他の委員は之が単に手続き上の問題で、實質の問題でなく、満場一致の投票を必要とせざるとして、芳沢氏の反対を脚下した。併しながら果然この反対は、東京にある外務省のスポークス・マンより發せられたアメリカ政府に対する攻撃と共に、日本政府の敏感性を一層刺戟した。

それにも拘らず、【これらの些細なあいにくの出来事に】私は聯盟の招待を引受けた我々の主要な目的が達せられた事を感じた。その目的は要するに、本事件に関して、アメリカが聯盟に与えた支持と協力を強調し、且つ一般に表明する為であつた。斯くしてこの紛争の平和的解決を決める一般的目的を達成するに就き、アメリカ政府の完全なる道德的支援を聯盟に与えて、聯盟を激励する為であつた。聯盟は日本の反対を処理するに当り、決然たる態度を示した。我々が

i 原注 12 : See Willoughby, op. cit., pp. 90-91.

日本の反対に直面して怯む事は、米国と聯盟間の間隙を益々大きくし、我々の前に横たわる紛争に絡る平和と戦争の重要問題を取扱う運動を破る事になる。

聯盟の十月の会期は十月二十四日決議案の採択を以て閉会された。この決議案は日本を除く全理事国の投票を得た。日本は之に対し反対の投票をした。この決議案の主要な点<sup>i</sup>は、理事会は九月三十日の決議に基づき、日本政府をして、「その軍隊の撤退を直ちに開始し、順次に進行させ、理事会の次回開会期十一月十六日以前に全部撤退を完了させること」であつた。日本の反対に依りこの決議は満場一致とならなかつた。そうしてこの事實は、ブリアン氏に依り決議案の法律的效力を失つたと認められた。尤もブリアン氏はその演説の終に於て、決議案はその完全なる「道徳力」を保持するを確言した。決議案に関する討論に於て、提案された軍隊の撤退は、猶、時期尚早であり、その為日本国民は危険に曝されるというのが日本の反対理由であつた。日本はいつ何時でも中国と別箇に交渉する用意のある旨を再確言した。そうして日本は日中両国関係の「基礎となる根本的諸点を決定した」旨、開陳した。その時これら根本的諸点に就き詰問されたが、日本の代表はその時言明を拒絶した。然るに理事会の休会二日後、十月二十六日、日本政府は東京に於て、その根本的諸点を公表した。それに依り、満州に於ける日本の条約上の権益に関する

i 原注 13 : For text of Resolution, see Willoughby, op. cit., p. 113 et seq.

全問題の解決を包含している事が明らかとなつた【原注一】。

【原注 14:これらの主要点は以下の通りである..

- 1 攻撃的政策や行動の相互否認。
- 2 中国領土保全の尊重。
- 3 自由貿易を阻害し国際的憎悪をかき立てる全ての組織的な運動の完全な抑制。
- 4 日本臣民によつて為される全ての平和的な事どもの満州中での効果的な保護。
- 5 日本の満州における権益の尊重。(この第5点で日本はこのように、両国間にある最も古く最も根本的な論争点を含めた。】

日本の代表者が日本の国策遂行の為、武力に訴える意図なき事を、公式に声明したが、聯盟の十月開会中に於ける日本の態度に依り、日本が武力に訴えて国策遂行に余念なき事が明らかにされた。日本の軍隊はその当時撤退していなかった。寧ろ事實は軍事行動を進めていたのである。そして日本政府は日中両国間に横たわるこれら根本的国策問題が解決される迄、日本軍隊の行動を阻止することを拒絶した。

聯盟理事会議長ブリアン氏は、十月二十九日に、アメリカ政府が十一月五日駐日米国大使を通じて日本政府へ宛てた通牒に依り、いずれも事態に関する我々の見解を発表した。<sup>i</sup> 他方中国政府は、十月二十四日条約の解釈に関する論議を平和的且つ法律的な方法で解決する目的のため、日

i 原注 15: See "Conditions in Manchuria," Senate Document 55, 72nd Congress, 1st Session, pp. 25, 30.



本と仲裁条約を締結する希望を発表した。日本は冷淡な態度を持ち、十月末日に於ける日本の立場は既に他の歴史家が記述した如く次の通りであった。

日本は軍事行動を起こし、平和を破り、この不法な手段に依り法律的に中国の行政下にある地域の占拠を達成し、頑強に二つの根本的条件を固持して譲らなかつた。即ち、中国との紛争の實質的交渉が行われる迄軍隊を駐屯地域内に撤退することを拒絶し、更にこれ等の交渉は日本軍隊の撤退に先んじて行われるばかりでなく、交渉は中立的のオブザーバーの干渉なく両当事国の間に於て行われるべきことを固持した【原注 16】。

【原注 16 : Royal Institute of International Affairs, *Survey for 1931*, p. 476】

八、十月の聯盟總會閉会より十一月十六日理事会再開までの出来事——北満州における軍事行動——日本国内における国家主義の擡頭——米國における激昂——

ジュネーブ十月會議に示されたる平和的解決の意向に対する日本側の抗議の反響が薄れると共に、満州北地に於ける日本側の軍事行動に關し諸種の情報が、つぎつぎに我方に到達し始めたのである。それは云うまでもなく東中国鐵道の沿線 Supingkaï【四平】より Angangkï【昂昂溪】に至る中国國有鐵道に沿うて行われた作戦行動……………だった。そして軍隊の遠征は……………単に南満州に於ける

………の附属地帯を去る数百哩の地点にわたるのみならず、直接に満州北地黒龍省の首都チチハルを目指しているものである。がこれによつて蒙れる打撃は張学良の最後にと取残された地を脅すのみならず、ロシヤとウラジオストクを結ぶ最短線をも脅かすものと云わざるを得ないのである。

従つて如何に想像をたくましくすると、………この作戰を  
する為のものと關係づけて考えることは到底不可能である。十一月四日より六日の三日間にわたり、日本軍と馬占山軍との間には兵火を交えているが、十一月十八日には日本軍に依り馬占山軍は潰滅されるところとなり、チチハル市は日本軍の占拠するところとなつている。日本政府は我方及び聯盟に対し、我方の執れる今回の軍事行動は、中国土匪によつて破壊されたる嫩江河橋修築に要する保護の目的のもとに行われたること、次に馬占山軍は南方に於ける權益をかかる遠隔の地にわたつて脅かしつつあること、保護の目的の終了せる後は直ちに軍を撤退せしむること等を挙げ、軍の行動に対する説明を加えているが、日本軍の地理的位置とその行動とによりこの説明は遺憾なく反駁せられるのである。

我々は、日本軍の前進の行動と共に着々として起りつつある日本国内に於ける国民一般の興奮に関して、陰鬱なる報道に接しつつあつたのである。然かも、この間のニュースは、東京の米国

大使館及びワシントンの日本大使館、及び世界各地に於ける日本代表部と我方のオブザーバーに折衝に依り我方に到来せるもので、伝えるところに依れば日本国民の間に現れた鬱積せる一般的感情は、中国及び列国に対する愛国的敵愾心に燃えさかると共に熱狂せる……<sup>秘密結社</sup>が存在し、彼等は軍部首脳者をも……<sup>威圧</sup>すると同時に、政府の文官要路に対し……<sup>暴力を以て脅迫</sup>しつつあったのである。日本に於ける我方大使館は、若槻・幣原内閣は「『ぐらつており、興奮する民衆の前に』」最早永続せずと報じているのである。更に日本よりの最近の通信によれば、若槻首相、幣原外相、井上蔵相の暗殺者の陰謀が暴露されたる事である。しかもそれと同様に……<sup>軍隊</sup>内にも、我々外国人には到底了解し難き方法に於て、……<sup>司令行動</sup>を左右せんとする……<sup>若手士官</sup>の徒党に依り、……<sup>軍隊</sup>内の首脳者が個人的に脅迫されつつあると云うことである。私は、十月十九日に入手せるこれ等の通信のうち二三を次の如く日誌に記した。

『要するに、これまで我々が相手として折衝しつつある日本政府は、最早や支配力が無くなった』

これと同時に、自国に於ける国民の感情も高まりつつあると云わざるを得ない。会議の全期を通じて、アメリカの各新聞により、私の困難なる立場に理解ある処置をとられたことは私の最も

i 原注 17:1932.29 井上蔵相、血盟団により暗殺される。3:5 団琢磨三井理事長、日本で最も影響力のある一人だった、も暗殺された。5:15 犬養首相も同様に暗殺された。

好都合の点であつた。

奉天に於ける最初の突発事件の直後に當る九月十八日に、私はウッドレイの私宅に於て各新聞連合の重立つた人々や、ワシントン事務局の首脳者と會議を行つたのであるが、その機会に私はこれらの人々に対して滿州の【底本では「滿州国」】背景、及び多分に懸念さるべき係争問題、及び我々も当然關係すべき諸種の困難なるべき問題の見透しにつき私の所見を開陳し、その後機會ある毎に國務省内に於ける正規の新聞連合の会合の席上で、ワシントン上席記者団との会合に於ても、私の意見を補足したのであつた。私が隱忍自重を懇請せるに對し、この期間中記者団の示せる態度は洵に賞讀すべきものであつた。彼等は結束して新聞紙の煽動的なることを控えしのみならず、この間不安定の時に當り、屢々腕を支えて私を保護せんと努力してくれた。

然し世界の公論を無視せる日本【「軍」】側の再三の行為と、それが保証に善処すべき筈の日本政府の失敗により、一般的批判は國をあげて高まりつつあつたのである。殊にアメリカに於けるこの種の感情が増大しつつあることは、國務省内にある我々にも新聞を通じて極めて明瞭になつたのである。アメリカ國民が、ワシントン及びジュネーブに於ける會議の進行に、多大の興味をつなぎつつあると云うことも又明白なところである。

また我々及び聯盟が作成したる提案に對して、日本軍がこれを見殺しする態度をとつても【日

本軍の挑戰的態度に面して」、各国【their own】政府が沈黙を守っているので、それが却つて彼等を怒らせた。

この（日本軍の）態度は、正常なる外交機關を通じて発せられた我々の通牒及び提案条項の大部分の内容が、（日本軍に）判明しなかつたことによつて一層激化した<sup>1</sup>。彼等の知つていたのは、提案があつた事と、それが無視された事実だけであつた。彼等は日本政府が我々に約束した保証や、そして政府自身がその……<sup>軍隊</sup>によつて愚弄されていたことについて、完全に知るところはなかつた。又何故に、我々が斯く忍耐するか理由も知らなかつたのである。

私はこの紛争を処理するに当り、アメリカの世論が何等これについて指導もされず、また発言もしないという如き外交的方法が、平和の目的に添うものでないとの結論に到達した。私はわが国が日本の穩健なる政府を擁護し、それをしてその不穩分子を抑制せしむる機会を与えんとするわれ等の希望が最早や極限に達したことを感じた。

そして我々は好むと好まざるとにかかわらず、世界における法律遵守の分子と、日本軍隊によつて代表さるる法律無視の分子とが、その黒白を争う時期が近きつつあることを感じた。これについて、幣原男との間に誤解なからしむるための準備行為をなすことを、賢なりと考えたのである。

i この訳文に於ける二つの（日本軍）は、原文にはない語である。意味を取り違えていると見える。

よつて日本軍が馬占山を破つて、チチハルを占領したと云う最後の報知を受けた、十一月十九日に、私は出淵大使を招いて、時局に対する自分の意見を充分、且つ率直に述べて、之を外務大臣に伝えるように要請した。私はその秋の事変が私の目にこう映じたと言つた。

『九月十八日には満州における政權は張學良によつて組織され、この政權は南京中央政府の認めてゐる所のものであり、且つ満州に於ける正統なる唯一の政權であつた。この日及びその以降、日本軍は張學良の軍を総ゆる場処に襲撃し、日本政府が約束せし如く軍を撤退せしめないばかりでなく、最早打つべき中国兵がなくなる迄攻撃を止めなかつた。斯くして日本軍は満州最北地、日本の鐵道区域より数百哩離れたる所まで馬占山軍を攻撃する為に侵入し、チチハルを占領した。私はこの事実に対し、日本軍がケロッグ・ブリアン協約及び九ヶ国条約を侵害したと見做さざるを得ない。』

それから、私は出淵大使に、かかる事情あつては、この問題に就いて我々兩政府間に取交された總ての文書を公表する自由を、私は保留する必要があると日本政府に傳達する事を要求した。私は必ずしも、直ちにそれを公表する積りはないが、公表する完全なる自由を持つて居ねばならないといった。更に私は、大使が既に知つてゐる如く、二ヶ月の間、日本政府の当惑と、事件の解決の機會を思つて、文書の公表を控えて來た。又私は同氏も知るように、アメリカ人の日本に

対する悪感情を燃焼する様な如何なる事も書き立てない様にと、わが国の新聞に要望して来た。然し今に到つては、われ等の政府自身の立場の利益の為に、私は総ての事を公表する完全なる自由を保持せねばならないことを語った。

私は最初から、熱心に真摯に、この事件の名誉ある解決につくさんと願うていた出淵大使に対しては誠に気の毒であつた。それはかれにとつて『暗い日』であることを認めた。だが彼は率直に私の執つた方法に対して不平のない事、そして総べての事件を本国政府に報告すると云つた。

## 九、聯盟の十一月會議

私が前に述べた陰鬱から屈辱的な事態に当面しつつ、十一月十六日理事会はバりに再会せられた。我々の前途に横たわる重大なる問題に鑑みて、この會議に於て我々が聯盟と協同する為に、最も勝れた経験のある公人にわが国を代表してもらおうと決心した。即ちロンドン駐在大使であり、前合衆国副大統領であるチャールス・ドーズである。

ドーズ氏に対する指令は、十月のギルバート氏に対するそれと大同小異であつた。ただ氏が會議に自ら出席すべきかは、全く氏の裁量に委ねた点だけが相違していた。

かれが公人として有名であることに鑑みて、私はかれが他国の代表者と容易に非公式の論議を

なしうることを信じたし、また同時にかれの人格と名声は、わが国においてかれの仕事の重要性と、そしてかれがなすところの裁断が、国民を安心せしめるであろうことを信じた。この点で私の期待は満足させられた。

彼はブリアン氏とも亦、他の有力なる代表者とも理事会會議に於て密接なる連絡を維持する事が出来た。中国代表者施肇基博士や、また当時バリの會議に出席していた日本の駐英大使松平氏とも同様の連絡をとっていた。従つて、会期中、彼はこの多事なる幾週の間に行われた多くの公式の出来事及び非公式の議論を、電話電報で私に知らせてくれた。同時に、彼がこの連絡の位置に任命された事は、アメリカの諸新聞に歓迎された。

十一月十九日、日本軍が馬占山を打破り、チチハルを占領したとの報が来た時、パリは興奮した。施肇基博士は、中国の為に対日制裁を加えるべく會議を導かんとの見地から、聯盟規約十五条に訴えん事を切望したと伝えられた。

聯盟の議員達は、もし彼等がその方針で進むとすれば、米国は如何なる態度を取るであろうかをドーズ氏に質問したところ、彼等はいかざる行動について論議する以前にまず我々の言質(Commitments)を得んことを希望した。我々としては、そうした言質を与えることは元より出来なかつた。と云うのは、アメリカに於て議會は開催されていなかったし、従つて行政部には経



済的制裁を加えるような成文律的権限は無かつたのである。それにまた議会在が左様な権限を与えるであろうことも考えられなかつた。

十年前アメリカに於て、聯盟に加入すべきか否かに就いての議論が盛んだつた時、聯盟規約中の軍事的及び経済的制裁で多くの反対があつた。後にパリ協約及び九ヶ国条約の締約国となつたが、アメリカ政府は、世論の制裁のみに依頼することに限局した。左様な事情の下にある我々は、制裁に対して言質を与えることの出来ないのは明瞭だつた。しかも他方において、もし国際聯盟が規約第十五条及第十六条に拠つて、かかる経済的制裁を加えんとするならば、我国としても聯盟を失望させたり、その進路を阻止するようなことをしなかつた。十一月十九日、大統領と会谈後、私はその旨ドーズ氏に打電し、彼の裁量において、我国の態度をブリアン氏に徹底させるよう通じた。翌朝ドーズ氏は、ブリアン氏に右の旨を通知し、同氏は我国の態度に満足した旨、私に報告した。

ところで、理事会の委員のあるものは、ドーズ氏がこの機会において理事会に当然出席してたことで協議すべきことを慫慂した結果、事態は複雑化した。然るにドーズ氏は、その際、理事会に出席することは、制裁問題に關して本国政府が態度を決定しているとの誤解を受け易い危険があるところから、これには極力反対した。この点につき私は、ドーズ氏の考えと全く一致していた。

ニューヨークの一新聞は、我々が故意に二重外交をやっていると中傷した。即ち我々はある点において国際聯盟に公然提議しながら、裏面において、日本に向つて決して日本の害になるようなことは行わないと言明しているというのである。かかる誤解を一層深くするは愚の骨頂である。ドーズ氏の注意によつて、我方の立場を理事会の会員に徹底させることが出来たのであつた。

その後、日本政府は、およそ前回とは正反対な措置を採つた。これが我々を勢気づけさせた十一月二十日、日本政府はジュネーヴにおいて、中立の調査委員を満州に派遣することを洩らした。それより二三日して日本政府は、正式にこれを提案した。これは日本政府が事件の当初以来執つて来た態度と全く正反対であつた。ここにおいて初めて日本が非常に熱心に、当該国以外の国との討議を回避して来た国際的紛争の、公平なる調査の機会が提供せられたのである。勿論、日本は、この提案を調査進行中、戦争行為を停止するとの協定に結び合わせることを拒否した。然し、かく制限されても、世界平和の維持に最も大切な問題の善悪に就き、權威的報告を得る機会を可能ならしめたのであつた。そしてまた、これは西洋諸国民が多年發達させていたところの、国際紛争の法律的調査方法を極東に適用する初めての機会となつたのである。

今一つの事件も、全く予期しないものであつた。十一月二十二日、我々は、近く日本軍が錦州に対し新しい行動を開始するであろうと云う新聞情報を耳にした。同月二十四日と更に同二十七

日に、私は駐日大使館を通じて、日本軍の攻撃的行動に対して強硬なる意志表示をした。その時の私の成功の一部の原因が、果して同月十九日私が幣原男爵に送った警告が公開的なものであつたか故か否か私は知らない。そうであつたかも知れぬ。しかしながら、理由は兎もあれ、幣原は、この問題に対して非常に努力して、一時的には成功した。奉天より錦州に向つて進撃を開始した日本軍  
……は、十一月二十七日、明らかに……より進撃を中止して奉天に帰還した。関東軍司令官本庄中将は、明らかに一時に……上級当局から否定され注意を受けた【原注187】。

【原注18: Royal Institute of International Affairs, *Survey for 1931*, p. 455. 「十一月二七日、東京政府が、この条件を明確な保証を以て与えたまさにその日、満州における司令官、本庄中将は錦州に爆撃を加え、奉天の全ての部隊を乗せ、北京―奉天鉄道の南西に送った。そして、前線部隊が去った後の街を守備させるために奉天に居住する日本の予備役を全て呼び出した。しかし、同晩、本庄中将は、見たところ、東京からの断乎とした指示に従い命令を撤回し、錦州派遣軍の奉天への撤退は二八日順当に始まった。」このまねな効果を生じたねじれた事態は、二四日に送られた抗議の強化において二七日、外務大臣に対し駐日米国大使が読み上げた声明において、ブリアン氏でもシモン卿でなくスティムソン氏に因つたものと見える。】

ところで、これら二つの行動こそ外務省と民政党内閣が、世界の世論に一致せんとする最後の努力であつた。そして、既にその時民政党内閣の寿命は、旦夕に迫っていることが明白となつた。日本軍は間もなくその一時的退却より恢復した。日本軍は、中国軍が長城以南に撤退する約束で軍の行動を中止したるにも拘らず、却つて中国軍のために欺かれたと主張した。ジュネーヴにお

ける理事会の最後の数日間は、既に事実上決定された中立国委員会決議案の通過はそんな訳で遷延した。然し結局、僅の差をもつて決議案の通過が成功した。十二月十日、この決議案は、日本代表部の承認をもつて首尾よく理事会を通過した。そして翌十一日、民政党内閣は総辞職を敢行したのであった。

結局、採択された決議案は、日中両国は、事態をこれ以上悪化せしめぬこと、これ以上に軍事行動を起して、人命を失う様な事をせざることを規定した。然るに日本代表芳沢氏はこの条項に同意する際、之の条項の価値を大いに害う様な保留をした。その決議が通過すると直ちに、私は聯盟によってなされた長い交渉の顛末と、米国がこれらの会議に対し協力し、支持した努力と、中立調査委員の任命の決議に対する満足とを述べたステートメントを発表し、次の様に之を結んだ。

「満州問題の解決は、日本及中国相互の間の何等かの協定によつてなされなければならない。米国は米国もその一員である条約の義務に合致する方法により、世界の平和を脅かすことなく、武力の圧迫による結末でない様な解決方法が採用されん事を望んでいる。之の解決方法こそ米国その他会議に出席せる各国が熱望する根本的原则であり、之の原則の背後に世界各国の堅く一致せる協力がなされたのは、それ丈でも目醒ましい成功である。

他方、この決議案の採用は、決して、從來滿州において行われた行動の裏書となるものではない。アメリカ政府はケロッグ・ブリアン協約及び九ヶ国条約の一調印国として、滿州に起りたる事件に關して無関心ではあり得ない。他の決議案の効力は、再び敵対行動を起さないと誓つた日中兩國の信義、及び最後の解決を目指す条項を生み出せる精神の上にかかるのである。アメリカ政府は、この条約の加盟国の義務として、この時局のあらゆる發展に對して、今後懸念を以て見守るであらう。」

【原注 19: 聯盟決議文、理事長声明、日中兩國の弁明、米國國務長官の声明全文は、see Willoughby, op. cit., p. 177 et seq.】

この決議案の通過を以て國際聯盟評議員会は幕を下し、聯盟委員會の第十一条によつて九月二十一日を以て開始せる長期の商議を實質的に終えたのである。この決議案に基づいて委員は任命され、我々はその委員中にアメリカよりも一人加えるべきことに同意した。そしてブリアン氏の要求を容れてアメリカ陸軍の陸軍少将フランク・マッコイ氏を委員に任命した。マッコイ將軍は多年極東に勤務し、ウッド・フォークス委員會の一員として一九二一年にはフィリピンの調査に従事し、又一九二三年の大震災には日本救恤のアメリカ派遣国の團長たりしこととなりとあり、日中兩國には有名かつ好意を持たれて居る人である。そして他の四委員は英、仏、伊、独の代表者を以てし議長にはリットン卿が当られた。

## 十、第一期の結論

斯の如くして、討論と調停とに依つて満州問題を解決せんとせる我々の計画は失敗に歸した。我々は併し、東京に於て穩当なる政府が勢力を占めつつあることは好都合であつたと同時に、私は少くとも軍部統制の問題の解決に対する努力につき、日本政府に我々の信賴をつなぎしことに誤りなかりしと信じている。かかる事情の下に於て、それは最善の機會であつたことは事實であるが、併しもとより十全ではなかつた。内閣の支配統制を離れて獨立したる、決断的な軍部は満州に関する伝統的日本人の感情に裏づけられて、内閣を征服し、その背後に結束し、燃焼せる国民の後援を贏<sup>か</sup>ち得た。しかしてこの計画の完成と迅速なる軍事行動によつて、金曜日の夜半より月曜日の早朝にかけ（九月十八日より二十一日早朝）、南満州の地を征服して既成事實をつくつた。かくて内閣に対して完全に勝利を得た。

エドワード・グレー卿は、もしかがセルビアに最後通牒を出した『一九一四年七月の十二ケ日』の間に、欧州諸国を強制的に会合せしめ、権力を有して居つたとすれば、世界大戦に或は避けることが出来たであろうと述べたと伝えられる。聯盟は一九三一年九月には會議召集の権力をもつて居り、またあれこれと行使したが、満州の情勢はそれで充分ではなかつた。私は一九一四

年の場合にしてもその力の発動が、陸軍の各種の勢力を総動員すべき最初の重大な命令が下される前、そして文官政府より軍部の首脳者に事件の指令権が移される前でなければ有効であるかを疑う。一九三一年には日本軍は、世界の各国が危機到来の如何なるニュースにも接せざる前に、既に行動したのである。

批判する側のものは、何故当時直ちに日本に対する制裁の更に一層強力なる機関を発動せしめなかつたか、又何故直ちに経済的制裁による圧迫を適用しなかつたかを非難するものがある。これらの批判は、国際間の行動に於ける人間の限界を無視せるものである。かかる方法を適用すべき権力はたしかに聯盟条項の中に存在する。併しそれは嘗て用いられたことがなかつた。人類は一足飛びに新たらしき国際的機構を巧みに運用しうるほど熟練して居らぬ。進歩の一路は遠く、前車の不成功なる努力によつて打壊されたる幾多の破片が散らばっているのが普通である。今度の場合でも、聯盟は従来経験あり、かつ過去において成功しているものを先ず試みたのである。しかも聯盟は、前述した理由によりアメリカの制裁的協力を得ることが出来なかつた。アメリカの協力なくして聯盟の制裁は不完全であり、比較的に非効果的である。それはイタリア対エチオピアの場合よりも更に効力がないと云わざるを得ない。大体において合衆国は日本とは日本の有する世界貿易の三分の一を有し、他の列国を合しても三分の二にしかならないのである。聯盟が

我々の道徳的援助を保証され、かつ我々はその經濟的制裁に対し如何なる障害をも与えないであろうとは明らかであつたが、聯盟は制裁を適用すべき如何なる手續も取らなかつたし、最も關係のある中国側でさえ制裁を主張せず、これはついで十一月の末近くまで討論さえしなかつたのである。約言すれば、聯盟の指導者は、滿州に関し一九三一年の秋には制裁に対し何等の準備もなかつたのであつて、合衆国政府は、十一條の規約の下に聯盟との協力に対して合法的権限の限局まで、そして少なくともその一般的支持の最大限まで行つたのである。

かくして調停への努力は水泡に歸したが、ただ二つの確實なる建設的事業が残された。一つは、世界の一般的平和が冒されたる場合に、アメリカは極めて大胆かつ明白に聯盟と協力することの新たな先例であり、今一つは重大なる極東問題について日本の同意によつて國際委員会が任命されたことである。これ等は何れもそれぞれ頗る重要なものである。



### 第三編 中国は聯盟総会に提訴す

#### 一、今や我々が直面せる変化せる状態と問題

一九三一年十二月十一日、民政党内閣が総辞職をすると同時に、ここに一つの全く新しい問題が我々の前に展開された。次の政権を執った政友会内閣は、中国と極東に対してはその前任者とは全然異つた態度を表明したのである。日中「親善」の政策、ならびに西方諸国の社会的及び政治的見解との密接な協調を唱えていた政治家達は今や舞台からその姿をかくしてしまった。幣原、井上、浜口はこの型の代表人物であつたが、今やすべて日本の陸軍首脳部の見解ともつと密接な、もつと同感的な関係を持つている人々と代つてしまった。

前任者が陸軍を押えようとしてなし得なかつた事は、後継者によつては全然なされないだろうという事は明らかであつた。早くもこの事は、直に軍隊の前進という事になつて現れて来た。即ち一九三二年一月二日に軍隊は前進して綿州を占領した。國務省にあつて、我々は、多分一つの新しい時代に直面して居るのだと云うこと、そしてまた我々の眼前に展げられた時期は、あの世界大戦中の一九一五年に、中国に対する二十一箇条の要求、山東ならびにシベリアの占領、と

云う事件を惹起し、次にこれ等の地域から日本軍を撤退させるために要した長期の努力を、必要とせしめたあの時代と同様な時代であると云うことを痛感した。

我々はまた、日本の或る政治家に依つて屢々提唱され、そしてその後ただ単に提唱されるばかりでなく、日本の北中国及び蒙古への進出となつて行動に移され始めたところの、隣邦中国に対する日本の使命と称するものの雄大な意味を知らないことはなかつた。

過去三ヶ月間のわが米国の政策は、日本の内部から何等かの行動がなされるであらうという希望の上に樹てられていた。だがその希望は今や失せてしまった。極端な国家主義的な感情が日本国民に依つて示されつつあつた。

「恐怖時代」

「×××××」という言葉によつてのみ言い現される……事態が続いて、それが穩健主義の人々に――

日本の立憲政治への進歩発展に努力を尽して来た人々に向けられたのであつた。日本の公的また社会的方面に高い地位を占めている人々、しかも欧米諸国にも知られ且つ尊敬されていた人々が、軍国主義と帝国主義の熱狂的な煽動者によつて、命を脅かされ背後に追われた。一例

を挙げると、欧米に於てその学識とすぐれた公人的功績を以て知られていた新渡戸稲造博士は、病院の病床から、陸軍の在郷軍人協会に出頭し、軍国主義は共產主義と、同様に危険であると、講義において述べたことを弁明するために引きずり出されたという報告がなされた。

満州に於ける軍隊の新しい前進の一つ一つは、この精神の……………の合図であつた。

かくて満州問題を和解に依つて解決しようとする望みも、中国との対等公平な商議に依つて公正な解決を得ようとする望みも、凡て当分の間は絶望だという事は明らかだつた。現在の日本のような心構えを持つてゐる国は、その頭を、固いがしかし徐々に動いてゐるところの世界の経済的、社会的現実には、自らぶつけるに任せねばならないという事は全く明らかであつた。

若しも西方諸国の、特に英語を国語とする国々の現代の政治的、社会的信念が確固たるものであるとするならば、そしてまた若しも植民スペインの没落とジョージ三世の植民政策の失敗に依つて教えられた教訓が誤りなきものであるとするならば、遅かれ早かれ日本も亦、自己と知的、精神的に同等者である国民に依つて作られてゐるところの、そしてしかも、自己よりも遙かに広大であるところの国家を、旧時代の方法によつて永久に支配し、搾取しつづけることは出来ないという事を知るであらう。

然しながら、これを悟るに到る過程は実に長年月を要するであらう、そして、その間に於て、それが必然的に惹起するであろうところの遠大なる紛争のために、世界の他の諸国は多大の害悪を蒙るであらう。そこで、かかる害意を防ぎそれを最少限度にとどめるために、極めて切実且つ重要な問題が我々に残されたのである。

この時局に於て必ずアメリカが蒙る損害は次の三つの部類に大別される。

第一、必然的に受けるわが貿易の直接の物質的損害と、この損害ほど確実とはいひ難いが、将来

日中間のかかる紛争がわが国民及び領土を脅かす危険。

第二、日本が批准し、且つ又わが民族及び我々の世界の幾多の希望がかけられた大戦後の一連の

条約を、もし日本が何の抗議も譴責も受けずして蹂躪し無視することを許された場合に、必然的に全世界の平和運動と戦争防止運動に加えられる大打撃。

第三、多年の間、近代キリスト教文化の理想に向つて中国の教育及び発展に公私の努力を尽し、

また、「中国の自主権、その独立、その領土保全を尊重する」運動を率先して起し、列強の盟約を得たのにも拘らず、この盟約が破棄された場合に、もし我々が中国をその運命のままに抛棄した時に、直接に中国に於けるアメリカの威信に及ぼし、又究極に於ては中国に於けるアメリカ及びアメリカ国民の物質的利益に及ぼす、測り知るべからざる損害。

これ等の考えに關してなお数言を加えておこう。我々は近年の大不況に際して我々自身の苦悩と後退に心を奪われていたために、我々は中国との商業關係に於て当然附随するところの有望性と、当時、特に大戦後の最初の十年間に、我国と中国の貿易の開発になされた迅速な歩みを忘れてゐる。大戦後の十年間に於て中国との貿易は、我国とヨーロッパのそれよりも遙かに迅速な速

度で増加した。

中国は極めて彪大な国であり、また現在のところ、あの種類のそしてあの智能程度の普通の必需品さえも、充分供給し得ない程発達が遅れているのであるから、中国が近代文明の軌道に沿うて発達して行くにつれて、その必要品を供給する中国との商業の有望性は、実に大なるものである。日本に次いでわが国は、その地理的な位置よりして当然、中国との商業に参加すべき国なのである。

第三の部類は、全世界に及ぼす将来の利害も依つて考える場合には、或る点に於て、最も重大な事柄を含んでいるのである。しかし現在、この問題についての論議には、この第三の部類の事はしばしば忘れられ又は無視されて居る。

極東の未来は、中国系民族四億五千万の未来に依つて支配されるであらう。数世紀の間、東部アジアはその性格を、主としてこの大農業国の平和的な伝統に負うて来た。もしも中国の性格が万一侵略に依つて大変革を受けて、軍国主義的、侵略的になつたならば、アジアばかりではなく全世界が震えあがらねばならない。アメリカ合衆国は、中国との友誼を開発するに極めて順調に乗り出したのだ。もし我々が、中国の極度に困窮しつつある時に際して背を向けたとしたならば、それは最も近視眼的な愚劣な行為であつたであらう。

## 二、第一段の処置

最初の必要な処置は、民衆を教育するという処置であつた。秋のはかばかしからざる、長期間の折衝は、殆んど外交的手続の帳の裏で行われた。もしその折衝が両紛争国に公平な解決を与えることに成功したならば、それで充分であつただろう。紛争の事実をそれ以上明るみに出す事は、アメリカ国民には不必要であつただろう。国民はその結果に満足してそれで事はおしまひにしたであろう。だが今や我々が、何時燃え上つて、我々の物質的利益や、或は安全をさえも脅かすかもしれない永続的な危険な抗争に直面している時、アメリカの国民がそれが何であつたかという事を、彼等が実際に知つていたよりも、もっと充分に正確に知る事は大切なことであつた。

第二に、比較的に些少な結果しか生まなかつた、長たらしい外交文書作成の仕事を終るために、またそれにすつぱりと、——不満足な議論の交換にびたりと止めを刺すと同時に、アメリカ合衆国はこの上論議を続けなうとは云え、その重要な権利がその論争の中に捲き込まれているという事を、日本に知らしめるに役立つ声明を以て、すつぱりと結末を与えるために、何かの方法を探さねばならない。

最後に、和解が成立しなかつたからには、満州に於ける平和の破壊に対して世界の道義上の不

賛成を公式に表明する何等かの方法を求め、なお、もし出来るならば、その表明の裏に、償いをなすべき責任を有する側に対して、圧迫を加える一つの制裁を香わすことが、極めて大切であった。経済上の制裁は、発動されないであろうと信ずべき理由があつた。国際聯盟は常に用意していたかかる制裁の機関を動かすことには、最新から躊躇しまだ望んでいなかった。我々はそのような機関は持つていなかった、そしてまたそうしたものを新しく創り出すには非常な困難があることも明らかだつた。もし出来るならば、凡ての国々が同意出来、且つまた、少くとも道義上の刑罰宣告の力と意味を持つような何等かの代用的なものを探すべきであつた。

これ等の処置の先ず第一のものが講じられつつあつた。

十一月十九日に私は幣原男爵に、もし必要ならば、私は我々の交換したる文書を公表する権利を留保しておかねばならないと言う事を通告しておいた。十二月十七日に上院は、全々前以て私の知らない裡に、満州の状況に関するわが政府と他の凡ての国々との間の記録、文書、通信を上院に回付せよとの決議文を可決した。これ等の文書は今や整頓され準備されていた。その発表をもうこれ以上差し控える理由がなかつた。一月二十六日、文書の整頓が出来るやいなや直ちにそれは上院に送られたのであつた。(註一「満州に於ける状況」上院文書五五号【Senate Document 55; 72nd Congress, 1st Session】) 上院に依つて発表された時が丁度、日本の上海攻撃と時を同じうしたといふ

事は、実に幸運というべきであつた。これは全國民の興奮を惹き起こしつつあつた。そこでその文書は、議會と國民と両者からの熱心な注意を集め、それが事件を判明させるに実に役立つたのであつた。

日本軍の事実上の錦州占領で、秋の商議の間の凡ゆる我々の努力が最後の嘲弄された事を知るや、私は直に第二の処置に取りかかつたのであつた——即ち、我々の權利に関する最後の通告に依つて論議を捲き起すことであつた。侵略国に対する警告として、非認の通告を使用する考へは勿論新しいものではなかつた。一九一五年に國務長官ブライアン氏は、日本が中国に対して二十一箇条の要求を提出して、中国を圧迫して、門戸開放政策またはその他によつて与えられたるアメリカ合衆国の權利を侵害する虞れある協約を締結させようとしていた時、日中両国にかゝる通告を發したことがあつた。現在の紛争に於て我國の立場を強調するためにこうした方法を採用するという考へは、幾週間も前から我々の頭の中にあつた。私の日記を見ると、既に十一月九日【底本では九月】に私は側近の人々と、この処置が究極に於いて用いられる武器であろうと論議して居り、それ以来、その処置は常に我々の議論の中に現れていたのである。ブライアン氏はその通告を、中国のみに関する条約下の合衆国政府の權利に基づいて、合衆国の一国の通牒として使用したのであつた。しかし十一月の九日に於てさえも我々は、もし世界の他の国々が参加するな



らば、その方策が更に大なる力を持つ事を論じていたのであった。侵略行為の結果の非認という事は、全世界がそれに一致するならば、一国がそれを通告するよりは、遙かに有力な制止力を侵略者に与えるという事は明らかである。

ブライアン氏在任以来、列強と中国との関係は一九二二年の九ヶ国条約に依つて固められていた。この条約は調印国の通商上の權利を、中国の領土及び行政の保全に対する尊重という遠大な本義に基づいて樹立していたのであった。なおまた、ブライアン氏在任以来、九ヶ国条約加盟強国の加盟弱少国侵略を否定するこの政策は更に、日本を含む調印国が、決して平和的方法以外の方法によって紛争の解決を求めず、と誓約したケロッグ・ブリアン条約の実現に依つて、一層力強く補強されたのだった。

(注2) 九ヶ国条約それ自体がその第二条に於いて、日本が滿州に樹立せんとしつつあった「アレンヂメント調整」を直截に否定する、調印国間の約定を包含して居る。されば、それは直接的に「侵略の結果否認」政策を支援するものであった。附録第二参照。

もし我々の警告が、特に中国に関する条約侵犯の結果のみでなく、全世界を包含するケロッグ・ブリアン盟約の侵犯による結果をも承認しないというまでに範圍が広められたならば、それはより高くそして広大な原則の上に打ち樹てられるばかりでなく、更に一層大なる力を以て世界

のもつと多数の国々に訴えたであらう。

これ等の国々の多くは、わが国ほど中国に対して特に関心を持つていなかったのであるが、過去一箇月の間、満州の平和恢復のために国際聯盟の努力に熱心に協力して来たのであった。そこで徐々にそしてまた自然に、上述した第二段の目的——即ち、わが権利の積極的表明によつてこの紛争に関する論議を終結しようとする目的を実現する我々の努力には、この同じ努力がまた秋の商議に我々の協力者であつた他の諸国に、再び起つの機会を与え得るかもしれぬという希望が加えられることとなつた。かくの如くにして、それは我々のすべてが暗中に模索していた制裁の代用手段として役立つことが出来たかも知れなかつた。

かくて國務省では、我々は遂に一九三二年一月七日の覚書に到達したのであつた。それは自然なそして殆んど必然的な順序であつた。そして私が記憶している唯一の意見の相違点は、その覚書の範圍とそれを表明する明確の程度と最後の表明方式に關してであつた。しかし私はそれは極めて重要な決定であり大統領とも協議しなければならぬと感じた。そこで私は一月四日に夕刻、ホワイト・ハウスに於て大統領に事態を説明したのであつた。大統領は、嘗てリンカーン内閣の閣議室になつていた一室に私を待つていた。當時は經濟的大不況時代であつた。大英帝国に倣らつて金本位制を放れようとする国々が続出して、わが国の資源に重大な窮迫が加えられていた。世

界の通貨は動揺し下落しつつあった。外国為替を保護するために到る所に貿易障壁が設けられた。我国の貿易は絶え間なく減少して物価は下落しつつあった。わが金の流出と外国預金の引き上げは、我国の国内銀行を苦境に陥れ、ひいて我国の産業を圧迫しつつあった。失業は迅速に増加していた。

更に、前と変つた多数党の下にある新議會は、この不況に処するために、さきの十二月の議會に大統領がなした提案に協力しなかつた。私が訪問したその日大統領は議會に對して、さきに促した幾多の建設的救済案に對する一般の支持を求め、議會の行動を促進する事を望む新たなる緊急教書を發したところであつた。こうして大統領の上にかかつて来る重荷は、明らかに彼の顔に現れていた。こうした事態の下に、わが国内經濟の再建設の中軸になつてゐる大統領に、東洋の危機から生じつつあつた、複雑な新しい問題の考慮を求める事は、殆んど狂氣の沙汰と思われるのだつた。

説明を簡単にし安易にするために、私は二通の私の提案の覚書を用意して行つた。一通は一九一五年の覚書に従つて、ただ單にわが通商權益にのみわたる狹義のもので、他の一通はケロッグ盟約の下に全般の義務を採り入れた、私の望んでいた形式のものであつた。大統領はその二通に眼を通した。私はかいつまんで二者の相違を説明した——即ち、前者の保守的な性質と、

後者の有望性と同時に新味と危険性とを。大統領は一瞬も躊躇されなかった。「私は君の意見に賛成だ、それを広義の基礎の上に立てようではないか」大統領はこう言われたのだった。そして後の討議に於て大統領は、その案の中に含まれていた国際的再組織の有望性を直ちに語られた事を私に示された。かく賛同を得た覚書というのは次の通りである。

【*Simson Announces the Doctrine January 7, 1932* スティムソン・ドクトリンと呼ばれる。一九三二年一月七日文書として、繰り返し言及されているものである。】

錦州附近に行われたる最近の軍事行動に依つて、一九三一年九月十八日以前に存在せる南満州の中国共和国政府の最後の残存せる行政権は破壊された。アメリカ政府は、国際聯盟會議に依つて最近委任されたる中立委員會の活動が、目下日中間に存在する困難の究極的解決を容易ならしめる事を信じるものである。然しながら、その現下の状態と、アメリカの権利及びそれに伴う義務に鑑み、アメリカ政府は中国共和国政府並に日本帝国政府に次の諸項を通告する義務を有するものと思ふ。即ち、アメリカ政府は如何なる事実上の状態の合法性を認めることを得ず、またこれ等政府またはその代理機関の間に締結さるる条約または協定にして、合衆國並に中国在留米國市民の条約上の権利（中国共和国の主権、独立、または領土、行政の保全に関するものまたは一般に門戸開放政策として知らるる中国に関する国際政策等に関連するものをも含む）を侵害するものはこれを認めるの意志を有せず、

且つまた、日本、中国並にアメリカ合衆国が参加したる一九二八年八月二十七日のパリ盟約の契約並に義務に反する手段に依つて、齎らされる如何なる状態、条約乃至は協約をも承認せず。

### 三、一月七日の通牒

かかる通牒の目的と性質は明らかに、それに関する他の国々との予備的全体會議を不必要とした。その第一の目的はこの紛争の平和的解決のために真摯にして忍耐的な努力を尽し、そしてまた、幾度か与えられた保証を直ちに無視されながらも大なる忍耐を保持して来、そして今や最後のともいふべき意図で、重大な決心を余儀なくされた有力な一政府の最後の決意を記録するためである。かかる通牒を九ヶ国条約或はパリ盟約の全調印国の協同行動を目的として論議にかけようとする企ては、必然的に躊躇と遅延と遺漏を生ぜしめたであろう。これ等の事は、その通牒の心理的効果を破壊しないまでも害ねたであろう。その性質及びその発端を取り巻く事情からして、その通牒は必ずや「事の凡ては神の御手に委せて」「賢明にして正直なる者が赴くところの基準」の建設であつたのだ。

しかしこの事は、我々の行動が、過去三ヶ月の間共通の大義のために協力者として、我々が共に努力して来た人々の少くとも同情や即座の支持を得る事を、我々が望んでいなかったという意

味では全然ないのだ。この支持を得るために、私は我々が為そうとしていた事を前以て私かに、秋を通じて、聯盟に依つて開かれた商議に主導者をつとめた二つの国に知らせたのであつた。

一月五日の朝私は英国大使に面会した。私は大使に、今や日本が錦州を占領したからには、私は日本及び中国両国の政府に、中国に於けるアメリカ合衆国及アメリカ国民の条約上の權益を侵害し、中国の主權、独立、領土乃至行政保全を犯し、或は門戸開放政策に累を及ぼし、或は又、パリ盟約に反する行為に依つて齎らさるるところの、日中間の如何なる条約、了解、或は情勢をも承認しないという通告を發しようとしていると語つた。私は大使にその通牒の写しを読んで聞かせた。私は大使に、我々は一九一五年の二十一箇条の要求の時にも幾分同様の事をした事を話したが、又私は、もし我国と同じ立場にある英国及びフランスのような国が我々と同じ歩調を取られるならば、我々の行動はこの際大いに支援され、もつと効果的になるであらうと述べた。私は大使に向つて米国の意向を英国政府に伝えられたしと願ひ、そしてこの事件についてフランスの注意をも促したいと思つていと話をした。そして同じ朝、私は早速フランス大使に会見して、通牒の写しを読み、我々の意向と目的を私が英国大使に話したと同じように話した。私はこの兩者に、直ぐ一兩日の裡に実行するつもりであると話した。

それから二日後の一月七日に私は同文通牒を、日本大使出淵氏と中国代理公使顏博士に傳達し

た。それから直ぐ後、同じ朝、私はこの通牒の写しを九ヶ国条約の他の六つの調印国の代表者に手交した。次の日、一月八日、私はその通牒を公表した。しかし私はその公表に先立ってウッドリーに於ける新聞通信代表者中の有力者との会合で、我国が中国に於て実行し來つた歴史的政策の一般的背景を説明し、併せて今回の処置全体に関する記事取扱に際し、煽動的ならず、激越ならず、然かもこの行動が極東に於けるわが国の一般的政策に関連して、正当なる見地から觀られるよう力められたいと切に要請したのであった。

我々は当然、我々が既に採つた立場に対し、大英帝国政府の同情ある理解を要望し、同時に、我々の政策をもつと效果的にするように、その後の処置に於ても出来る限りの協力を望んでいたのであった。全ヨーロッパの国々の中で、大英帝国が中国に最も大きな通商の利害を持つていたのだ。サリスベリー卿【ソールズベリー】とジョン・ヘイ氏との熱心な協力に依つて門戸開放政策が一番初めに樹てられたのだつた。バルフォア卿のワシントンに於ての熱心な協力はその政策を九ヶ国条約に結晶させ、同時に当時達成された極東に関する一般的解決に極めて助けとなつたのであった。而して終に過去二ヶ年間我政府は、多年英、米両国の交友關係を特徴づけていたところの、親密な理解を最も完全にし之を保持して來たのであった。我々は多くの事に協力した、即ち一九三〇年のロンドン國際海軍會議の成功、それから又、一九三一年のロンドンに於ける國際

金融會議の成功も我々の協力に依つてであつた。この協力は、ケロッグ・ブリアン盟約がアメリカが、世界大戦以来国際聯盟に対して保持していた強度の孤立主義から最近離脱するのを促進した事に起因するのである。一九二九年十月のラピダン會議に於てマクドナルド首相はフーバー大統領と共に次の声明をしたのだった。

英・米両国政府はこの平和盟約（ケロッグ・ブリアン盟約）を我々の友好的意図の宣言としてのみならず、その誓約に従つて、我々の国家政策を指導する嚴然たる義務として承認することを決意す。

一月七日のわが通牒は、その誓約を実現するためになされたわが政府の最もめざましい努力であつた。英國に於て最近政府に変更があり、二年以上もの間我々が交渉を持して來た労働党内閣に代つて、連立内閣が組織された事を我々は知つていた。しかし新政府は過去三ヶ月の間協調的努力を以てこの滿州問題の解決のため参加して來た。我々は英國がたとえ我々の行動に追従する事が何等かの理由で出来ないとしても、我々の行動を同感的に見ないであらうと予測する理由を持たなかつた。

こうした我々の予測に照らして、我々は實際に起こつた事を見て失望したのであつた。

一月十一日、英國政府は新聞紙上に一月七日のわが通牒に関する告示を発表した。<sup>(3)</sup> この告示の内容は大抵の読者に——特に重大なことは日本政府に——アメリカに対する一つの反撥と考えら



れるようなものであった。その告示の要点は、先に日本の代表者が、日本は門戸開放政策を飽くまでも固持するのであつて、満州の諸事業に於ても各国の参加と協力を歓迎すると声明したことに鑑みて、英国政府は米国の通牒に追従して公式的通牒を日本に発するの必要を認めず、ロンドン駐在の日本大使に、日本政府がさきになした保証を確認するように要求した、というのである。それは中国の主権、独立、保全の保護について、ケロッグ・ブリアン盟約について、不法侵略の結果の非承認という原則の確保について全然沈黙していた。それはかくして世界平和の問題、なお又、我々の通牒の最も重要な部分であるばかりでなく、国際聯盟及び英国政府の努力を支援して、我々がなし来つた過去三カ月の商議の最も重要な部分である所の世界平和及び中国保全の問題を全然無視してしまつていた。その告示は満州との今後の貿易関係の単なる問題のみを論じていた。

(3) 告示の全文は次の如し、「英国政府は、ワシントンに於て締結されたる九ヶ国条約によつて保証されたる満州に於ける国際通商上の門戸開放政策を支持す。満州事変以来、ジュネーヴの国際聯盟理事会日本代表者は十月十三日、日本は満州に於いて、総ての国民の経済的活動に対する機会均等及び門戸開放の原則の擁護者であると声明した。更に十二月二十八日日本の総理大臣は、日本が門戸開放政策を固執するものなること、及び満州の諸事業に於いて各国の参加及

び協力を歓迎する旨を声明した。これ等の声明に鑑みて、英国政府は日本政府に対して米国防府の通牒の如き公式通牒を発することを必要と認めず。然しながら、倫敦駐劄日本大使に対して本国政府より如上の声明に関する証認を得られんことを要請した【駐英日本大使は、本国政府から確証を得よと要請された】。

英国政府は一月十一日わが国務省に対しても上記と同様の意味の、鄭重なる覚書を手交したがそれは一月十二日迄私の手許に届かなかつた。

同じ日、(二月十一日)しかも右告示と同じ頁に発表されたロンドンタイムスの社説は、この通告が無視している諸点についてその行為を肯定する解釈を施していた。その社説文は先ず

英国政府がスティムソン氏の通牒に従うことなく、日中両国政府に通告を発する事を拒絶したことは賢明な処置であつた。

と冒頭し、次に私の通牒と九ヶ国条約を掲げた後、更に次の如く論じた。

その条項(九ヶ国条約の条項)を援用するに當つて、アメリカ政府は、日本当局が満州に事実上独立政府を樹立して、他国の通商を阻害し、以て日本の利益を専らにするであろうという恐怖に動かされたのであるかもしれない。ただ外務省がこうした憂慮を抱いていない事は明らかである。又九ヶ国条約は関係諸国間に於ける協議を規定しているが、この通牒が、南京及び東京に通達される

以前に何等協議されなかったという事も明らかである。

更に中国の「行政保全【administrative integrity】」が単なる一個の理想以上の何物かにならなければ、それを保護すると云うことは、英国外務省の当面の時務であるとは考えられない。その保全は一九二二年には存在なかつた、そして今日に於てもそれはまだ存在しないのである。九ヶ国条約が調印されて以来、一度たりとも中国中央政府は、その巨大な領土の広く且つ異れる地域に如何なる眞の行政権を設定した事がないのである。今日その命令は雲南及び他の重要な地方に行きわたっていない。而して、中国の満州に於ける主権は論外とするも、南京が中国の首都となつて以来、中国が満州に於いて何等かの眞の行政を施したという実証もないのである。

この臆断的な解釈に依つて示される所の英・米両国政府の見解と政策の間に存する亀裂の深さは、一九二二年にバルフォア卿とヒューズ氏がワシントンに於て九力国条約を作成していた当時の中国内乱によつて惹き起こされた混乱状況が、一九三一年九月に日本が満州政府を攻撃し破壊

した時よりも、遙かにひどかったという事を想起するならば最もよく理解されるのである。<sup>(4)</sup>

(4) リットン調査委員団報告書第一章参照

しかしながら、中国が自治国家の自由な制度を發達させて行く大事業を成功させるために、條約に依つて中国に充分な時間を与え、外国の侵略から免れさせておくことが、これ等政治家の明示された意図であつた。その條約は、結局に於て中国と通商している諸外国の利益は、中国を利己に搾取するよりは、條約が規定しているような自制克己、政策によつて、より多く増進されるであらうと言ふ仮定に基づいて締結されたものである。

かくて、ロンドンタイムスの「中国の行政上の安定」の欠如に関する断定は、九ヶ國條約の目的と妥当性に全然見当違いであり、又、その断定が、最近の滿州に於ける不幸な變化に対しては、日本自身が責を負うべきであるという事實を無視しているばかりでなく、かかる断定は明らかに、その條約が築き上げようと言ふ意圖していたものの廢能を發育しつつあつた日本のような國にとつては、極めて好ましい断定であつた。

多年の間、中国に軍事的經濟的霸權を占めようとする野望を抱いていながら、一九二二年當時の日本政府をも加えたワシントンの公明な政策によつて、その望みを押えられていた日本の一群の帝國主義政治家達は、この断定よりも都合の好い、有力な確認を求めることは出来なかつた。

ろう。

満州事変勃発当初から、日本をして、曾てその政府が表明していたところの責任ある対外態度に帰えらしめるための凡ゆる力や制裁を考えて、私が最も有効と感じて来た制裁は、この問題を支配している根本的原則に於て、アメリカ合衆国と大英帝国とが完全なる了解に到達し、相協賛して立っている日本に信じさせておく事であつた。これは、私がわが政府の各員と共に抱いていた考えであつたばかりではなく、私がこの事件を論じ合つた極めて重責の地位にあるアメリカ人士も共に持つた考えであつた。

のみならず、それは日本自身が一九二二年のワシントンに於ける九ヶ国条約の商議を通じての英米の協力、茲に、一九三〇年のロンドン海軍會議の長い困難な商議を通じての英米の協力を觀察して、充分に把握していた所であつたかもしれない。私が今掲げたロンドンタイムスのこれ等声明の主要なる惠結果は、日本のかかる所信を忽にして破棄させてしまったという事であつた。この亀裂の記憶は自然と色付けられ、そしてその後数箇月にわたつてなされた如何なる企ても、困難を与えた。

日本の首脳者達は、彼等に提供されたこの意見の分裂の確証に素早く乗じたのだ。秋の間、満州事変を弁護しようとして長い間努めていた彼等が、中国が組織された国家としては明らかな欠

陥があるために、九ヶ国条約その他に依つて中国に対する盟約の義務を負う必要はないと、一度も論じようとしたことはなかった。実に彼等は一九三一年の九月十八日に、中国が日本自身の動議と賛同に依つて国際聯盟の一員になったという事実を鑑みて、そうした事を論じることが出来なかったのだ。しかし今や、この確認を与えられて、彼等はこの立場を保持する胆力を得たのである。

一月一六日に日本政府は、わが一月七日の通牒に答えた。その回答の調子には日本がその大目的に助力を得たという証跡が見受けられたばかりではなく、それは殆んど文字通りにロンドンタイムズの論説を利用していた。即ち――

なお、中国に関する条約は、必ず同国時々の事情に適當なる考慮を加えて適用さるべきであり、且つ又、中国現在の不安定にして乱脈なる状態は、ワシントン条約當時に締約国側の考慮になかったところのものであることを附言したい。確かに中国は當時に於ても満足な状態ではなかったが、それは今日に見る如き不和と対立を示していなかった。この事は条約の規定の拘束力に何の影響を与えるものでない。しかしながら、条約は当然有るがままの事実の状況に従つて適用さるべきであるを以て、この事実は實際上の点に於て条約の適用に修正を加えるものである。

(注5) この文書(日本の対米回答)は、極端なる高慢心の中から生まれ来れる高雅な垢抜けのした

皮肉の気分が案出されたものである (Royal Institute of International Affairs, Survey for 1932, p. 545.)

日本政府の回答は特異なものである。何んとならば、その第二節は米国に回答せんがためではなく、寧ろ米国を苛立たせる事を目的としたに違いない。(Willoughby, *the Sino-Japanese Controversy and the League of Nations* p. 202)

然しながら、日本政府は中国は組織された政府を有せずとのロンドンタイムスの説論を嬉んで受け容れたのであるが、日本政府はこの通牒の中に、英国外務省が未来の「満州国」に対して不安を抱いているとタイムズが主張している点については賛同を拒否しているのである。何故ならば、対米通牒の中に於て日本は、直ちに、論議Ⅱ回答通牒直後建設されたる「満州国」はこの議論の上に樹立されたⅡの基礎を築き始めたからである。曰く、

わが政府は更に、満州政府官吏の交迭は総て、地方人民のため必要な行為であることを申し述べたい。敵対占拠の場合に於てさえも——この度のものはそうではないのであるが——地方官吏が留まつてその機能を遂行するを習慣とする。現在の場合に於ては、それ等官吏は大部分逃亡或は辞職した。行政機関の活動を破壊すると考えられるのは彼等自身の行動であつた。日本政府は、中国国民が他の凡ての国民と異つて、現存したる官吏が彼

等を棄て去つた場合に、文明の状態をつくるための、自決力と組織力を欠いていると考える事は出来ない。

中国が組織された国家ではなく、且つこの事が日本を、九ヶ国条約の盟約及び國際聯盟規約を守る義務から免かれしめるという議論は、その後日本政府に依つて外交言辭に定つて用いられた。<sup>(6)</sup>それは、日本が、その後最大の確信を以て頼みとした議論になつたと言つてもよいのである。それは最後に於て、九月のリットン委員会の全員一致の報告に依つて、眞実ならざる不健全なものとして拒否された。<sup>(7)</sup>

(注6) かくて、それは二月十九日、國際聯盟理事会に於いて、規約第十条の適用に対する、日本弁護のために日本代表によつて試みられたる議論の中で使用された。それはまた、二月二十三日同じ問題に関する【二月一六日の】聯盟理事会の要請に対する日本政府の回答中に於いても用いられ、更に、前記二月二十三日の回答に附帶した日本政府の立場に関する公式声明の中に於ても用いられた。(後出)【この注6と7は底本では間違つた個所にあつた。またこの「後出」は原注にはない。】

(注7) リットン委員報告書第一章参照(後出)【附録四、「第三部 紛争の主なる要因」】

私は非公式にフランス政府より、フランスは英国の態度のために、最初に考へていた日本に対する処置に出でなかつたのだと云うことを聞いた。また他の数ヶ国、オランダ、ベルギー等の九ヶ



国条約の調印国も後に到つて、今回の事態に関する通牒を日本或は中国に発することは必要とは考えなかつたと私は語つた。

英国の態度に依つて明瞭になつた意見の対立に照して、極東に領土的利権を持つてゐる小国政府とすれば、かかる立場を保持する事は容易に理解出来る事である。

英国政府の行動に関する厳正なる批判及びその行動をとるに到らしめたる諸種の原因の詳細にわたる分析は、王室国際事情研究所の研究部長に依つて、一九三二年度報告中になされてい<sup>(8)</sup>る。

(注8) Royal Institute of International Affairs, *Survey of International Affairs for 1932*, pp. 523, et seq., 540 et seq.

私がかかる分析を試みる事は適切ではなからう。ただ私は、政策の分裂を深く遺憾に考えたものではあるが、当時その事実を認めるに際して、我々が容赦なき苛酷な氣持になつていたのではないという事は言つてもよい。

我々は、九月の英国政変以来大英帝国は国家的大難局に<sup>いにやう</sup>圍繞せられ、それが困難な政策の遂行を特に困難にならしめていた事を知つて居た。我々は又、前の日英同盟から生じた美しい感情と感謝の自然な結ばれをも充分に理解した。のみならず、私は曩に、極東に於いて一行政長官であつた關係上、ロンドンタイムズの社説に現れた中国に対する心構えもよく知つてゐる。それは永年極東に居住して仕事に従事し、その地方の土民に対して、凡ての者が共通に持つてゐる態度を受

けた人【“Old Timer”注8a】の、典型的な態度であつた。【“Old Timer（中国通）はフィリッピンでもおなじみの姿であり、私がそこに滞在中、彼の特徴の私の観察と、香港のイギリスの同僚の観察とが似ているのを見たのは一再ならずだった。】

【原注8a: 時に又、“Old China Hand”と呼ばれる。〈旧チャイナハンド〉】

中国人は集団として取り扱うに容易な国民ではない。そしてこの特徴は、革命以来、治外法権の枷を、領事裁判を、特権と外人租界を撤廃しようとする彼等の努力によつて更に強められた。古い居住者【“Old Timer”（中国通）】の記憶は小さい悲しみに満ちている。彼は、同じ時代を共に生活して来た中国人、或いは他の東洋人に復讐する機会があれば、殆んどどんな機会でも悦んで迎えるのだ。彼の態度は常に極東通商に従事する人々の観方に色を着けている。そこでここに於て、英国政府は一時的に、通商關係に影響された見解を持った人々の唱える所に従うのが、楽だと考えたのだと私には思えるのだ。英国政府は一時「町」【“City”財界】の意見に随つたのだ。

#### 四、上海の軍事行動

凡そ、一九三二年の一月下旬に上海で日本海軍が、中国人に加えた攻撃に依つて極東に起された変化ほど、急激に国際情勢が変化した例は稀れである。

日本の満州侵略

一月下旬、凡ゆる点に於て、日本軍は満州における全ての戦略地点を占領は完全な軍事的外交的成功をおさめていた。

.....し、張学良の政府を覆えしてそれを.....し、自己

破壊

の軍隊よりも遙かに数に於ては多数であつた中国軍を.....し分散させた。同時に日本政府は、世界の他の諸国が有力な干渉に出でようとする試みを拒否するのに成功した。規約第十一条による聯盟會議の出動を遅延させ妨害した。そして最後に、この國際的活動に関心を持つていた二つの主要國家、大英帝國とアメリカ合衆國の間に、異つた政策の楔が打ち込まれてあるのを見た。中國は完全に力を落してしまつた。他の國々はあつけにとられ、悲觀的になつてしまつた。集團的平和機關は、完全に無力と思われる程の打撃を受けた。

軍事行動

五月一日までにこの画面は根本的に變化した。日本はその.....を揚子江にまで延長して、日本の商業に對して、經濟上のбойкотを繼續しようとする上海の中國人の努力を.....ししようとした。其處で日本は、その近代史に於ける.....の打撃を受けた。最も激しい軍事的打撃を受けたのだった。

五千

.....以上の陸戰隊員が、後になつてそれに.....

二個師団

.....と大砲、戰車、爆撃機を

有する.....が加わつたのであるが、一ヶ月以上もの間、.....小銃や機関銃だけで

武装した中國軍によつて抑止され阻まれ無力な.....

注9

.....最後に中國兵は、

日本軍が幾週間もの間、なそうとしてなし得なかつた広大な迂回運動によつて彼等の側面攻撃を

始めた時、（以下二行削除）

「迂回運動によって側面に出た時、完全に正しく後退した。無力な上海の閘北近郊が、爆撃されるといふ無慈悲さに衝撃を受けた世界の憤激に面して、日本は、本来の目的を達せず軍隊を上海から撤退させた。」

【原注⑥：第3の師団、第14師は又増援部隊として送られたが3月7日までには到着せず、戦闘の後、消えた。中国人はいくつかの大砲を持つて居たが、それらは続く作戦に実質的な役に立たないほど数も少なく効果もなかった。】

自己の歩兵の目ざましい行為に感動した中国は、新しい勇氣に満ちたのだつた。揚子江に於ける英国利権の中枢に加えられた<sup>日本の打撃</sup>……に依つて、喚び起された大英帝国は、日本に掣肘を加えるために、今までなかつた一つの精神を諸国の協力活動に投げ入れつつあつた。

聯盟に加入していた国々の全集団が、満州事變を理事会から總會の手に移した。そしてかく組織立てられたこれ等の国々は一致して、満州に行われた行政変革を正当なものとして承認しないという事を誓つた。

この間に於けるアメリカ政府の政策の全貌を明らかにするためには、これ等の軍事活動と複雑多岐な問題の或るものを、幾分詳細に説明する事が必要である。

## (A) 中国のボイコット

上海事変のその発端は、その前の夏以来から、中国全土を通じて日本商品に加えられた効果的なボイコットにあるのである。このボイコットは満州の………日本の侵略………に対する中国の返答であった。【原注10】それは極めて効果的な武器だった。幾多の国々がそれには苦しみめられた経験を持っている。アメリカとても亦たその経験を持つ。その恐怖は、中国のように軍を動かす事を好まない、或は出来ない国にとつて、極めて大切な防禦手段であつた。

【「事実、その効果は、聯盟規約第16条において提案されているような集団的経済制裁のシステムのもたらすところのものと比べ更により大きな潜在性を、注意深く検討される価値をそれに持たしめるものでもある。」中国がただ独りで何の助力もなく、その………侵略者………に対してなしたところの事、そしてまた、それが言うまでもなく未来の侵略に対して示した防禦的效果を考へるならば、もしそれがただ一国のみに依つてでなく諸国家の一群に依つて集団的に真剣に適用された場合の、かかる方策の力強さを知る事が出来る。】【原注11】

【原注12】ボイコットは、中国人と韓国人との間の争いの結果として1931年1月に實質的に起こっていたが、日本人が9月18日に奉天を攻撃した時、大幅に強化され拡大された。】

【原注13】1926年私は香港を訪れた、その時、前年の上海における「学生大虐殺」と言われるもののため

に英国貿易に加えられた中国人のボイコットに苦しんでいた。目に見える効果は全く顕著だった。商業的には、香港は殆ど廃墟のようだった。」

この場合、日本は非常な苦痛を受けたのであった。即ち中国は、アメリカ合衆国に次いで、日本商品の最大の購買者であった。上海に於ける日本の海軍の行動は、上海が中国の主要工業都市であり又日本と中国の貿易の中心であつたために、そのボイコットを破壊するために目論まれたものであつた。

かくて、この上海事変の含む意味は実に広く且つ重要なものであつた。一方に於て、中国はそのボイコットを効果あらしめようとして、言うまでもなく、日本通商、日本商人を攻撃し或る程度の暴力行為を犯した。国際上の慣習に基づけば、もしも中国政府が、その領域内にいる日本国民に暴行を働くことを防ぎ得なかつた場合には、日本は適当な保護を与えるために乗り出して来る。他方に於て、もしかかる干渉が、武力に依つてボイコットを破壊するために、外套代り【隠れみの】に使用されていたならば、それは日本の中国に対する非合法攻撃であり、既に満州に於て日本が行っている権利侵害を償うために、中国が手に持っている唯一の平和的防衛武器の破壊を意味するものである。その時局の正邪はかくて複雑な、遠大な意義を持つてゐるのだ。

## (B) 上海の共同租界

この論争の起つた上海は、中国第一位の商業都市たるのみならず、多数の国々の重要交易の核心地たる世界共同の大港である。上海は世界中から来訪せる諸商人と、彼等の工場と倉庫と塵鋪と、そして邸宅とで満されていた。上海は中部中国の広大なる地域の入口で、揚子江流域近くにある。日本人は上海に住居し、商業を営める外国人の大部分を占めているが、港と揚子江流域は英帝国の対中主要貿易の中心であつた。合衆国とフランスも、等しく非常に大きな商業的利権を上海に持つていた。上海は三百万以上の人口を有し、取引の容積は世界有数の貿易港の一つであつた。

上海の河岸は黄浦江に添つて拡がり、揚子江の河口にある海口に這入っている。市街は広い半島の基部近くに横たわり、市街の南東は黄浦江によつて、又、北東は揚子江によつて限界されている。市街組織と統治の点では奇妙に混交している。上海市街の真中と主要部分は、共同租界とフランス租界として知られている二つの外国租界の地域より成り立っている。これ等の租界は黄浦江の北側に面している。租界の人口は一部分は外国人で、一部分は商業、居住、又は保全の目的で租界に這入りこんだ非常に沢山の中国人から成り立っている。

これら二つの共同租界を囲んで、主として中国人によつて占められ中国人によつて統治されて

いる大都市地域が横たわっている。この中国の地域の一部分は北から共同租界内に突出して居り、閘北として知られている。この中国の地域の他部分は、南からフランス租界に凸出していて「中国市街」又は「旧市街」として知られている。

外国租界の地域内では、外国人は取引と生活の目的で土地を賃貸することを許され、そして或る程度に局限されたる警察権と課税権に依拠して、市政を設けることを許されている。諸外国人の生活は、上海租界では治外法権なる権利を与えられ又、列強諸国家に中国全土を通じて許されたる特権を享けることが出来る。或る点においては彼等も、又他の居住者等も等しく租界の内外を問わず中国の司法権に服するのである。共同租界内におけるこれらの特別な警察の局部的権能と課税は、外国人居住者の一部と納税者等に選ばれたる人が組成する市会によつて実施されている。フランス界においては最高地方官権はフランス総領事で、諮問機関たる市会により補佐されている。共同租界は一部は外人、一部は特別に選ばれたる中国人よりなる敏腕な国際警察隊により秩序を保っている。これらの警官に加えて、租界には上海における交易に利害關係を有する主だつた列強諸国の陸戦隊員が恒に駐屯されている。一九三二年一月二十八日紛争の勃発したる場合の諸外国の駐屯軍は、日本駐屯軍を除いて、英国の約二千三百人、アメリカの千二百五十人と、フランスの千五十人とやや稍少いイタリー人より成り立っていた。その時港内には日本の二十三



隻、英国の五隻、フランスの二隻とアメリカの一隻の軍艦が碇泊していた。

河から訪れる訪客には、上海は斯様な広闊な繁華路、美しき交易のための建築物、製産と商業、そして愉快を感じる諸館邸と諸公園をもつて充たされた大近代都市の絵の如き美しき風景を示している。この近代都市の形態は、同掲せる地図にて解る如くに、最も不規則なものである。しかも尚、来訪者は或る明瞭さを欠いている境界線を横切らるるや否や、直ちに典型的な中国都市にある脆弱なる建物と建物の間に、そして稠密せる人口の間に踏込んだことに氣附くであろう。これ等の地勢は、過去十ヶ年又は十五ヶ年間に時々発生した如き非常事態に際して、外国人を保護するということが如何に困難な問題であるかを顯著に示している。

帝国の倒壊以来の騒然たる内乱期間中、この内乱暴動の侵入を許さない局外中立の地域として、これらの租界は扱われるべき慣例を設けるために、上海の共同租界の当局者の努力は為された。

外国部隊の司令官等、市會議長、警視總監、そして上海義勇兵団の指揮官より立つ共同租界防護委員会が創出された。一九二四年、一九二五年と一九二七年の内乱の期間中に生じた如き急変に際しては、二つの共同租界の境界線附近に、租界でない所から来る中国の交戦中の徒党の侵入に備えて組織された、防衛隊である外国部隊より成り立つ防禦的非常線を設定する習慣が出

i 原注12：これは、外国人租界の住民から創出された武装義勇軍である。

来た。この防護線は恒に正確に租界の境界に置かれるものではない。或場合には防禦線を設けるために、中国人市街地域内の外側に必須の軍隊の非常線を拡げたこともあった。然し軍事上の目的は外国租界の防護にあつた。そうした急変が市会によつて宣告され、急変が存続する時は何時でも、多種多様な外国軍隊の間の防禦線に扇形戦区を割り当て、各司令官に向つて各国に割り当てられた線に軍隊の配備を乞うのは防護委員会の義務であつた。これら以前の急変に際して騒乱を惹起したところの紛争は、中国自体の多種なる党派の間のことであつて、例えば一九二七年に起つた北方中国軍閥と南方中国の軍閥の争いの如きものであつた。総てかかる場合に際し、租界内の諸外国人は、局外中立という共通せる精神を以て、一単位として行動することが出来た。

然るに、一九三二年の一月に生じたる紛争は全く異なるものであつた。その紛争は諸外国中の一国と中国国家の間に起つたものであつた。そして問題は、市街及び居住者を暴力から保護するというが如き、明瞭にして疑うの余地なきものではなかつた。日本はそうした事情であつたと主張するかも知れないし、又主張したのであつた。が然し中国は、幾多の理由に依つて問題は左様に狭いものであつたと承認しなかつた。中国は、日本の目的がより広義なものであり、それは在留日本人を暴動から保護することではなく、既に（以下三行削除）【満州で行われていた、中国に對する日本国家の攻撃の継承であり、上海において新たな攻撃をすることによつて、中国の守りをぶち壊すこと

を狙ったものであった、と主張した。」

租界当事者にとつて多くの困難な問題を生起せしめ、又上海に利害關係を有つ諸国をして、過去の事変に於けるよりも遙かに困難なる問題に直面せしめた。

### (C) 戦争の起源

中国人によつて行われる最も強度な效果的な対日ボイコットが、四箇月以上も続いており、又満州の出来事が中国住民の一部に激しい感情を抱かしめていたのは事実だが、個人的暴行は驚くべく、少なかったといえる。財産はおそらく不正な方法で破壊され、中国裁判所は日本の諸要求にかかる賠償を遷延していたであろうが、私は一月十八日迄は生命を失つたと云う報告に接しなかったと思う。一月十八日には閬北（こうほく）にある中国工場の前で衝突が起こり、二人の日本人が重傷を負い、一人は負傷のため間もなく死亡したのである。二日後、約五十人の日本在留民の一団が工場へと行進し、工場に火を放ち市の巡警と衝突した。この衝突で三人の中国巡警と三人の日本人が傷つき、孰れかの側の一人は間もなく死んだのである【原注13】。一月二十日、日本総領事は上海市長に次の如き要求をした（上海市長は全都会地の最高な中国人の権力者である）

【原注13：例えば、日本の当局が支配に失敗した七月の韓国における反中国暴動では、五百人以上が負傷し百

人以上の中国人が死亡したうえに、多くの中国人の財産が破壊されたが、それとこのささやかな死傷者を比較してみよ。】

一、市長の正式謝罪。 二、一月十八日の襲撃者の即時逮捕。

三、損害並に治療費の支払。 四、抗日運動の充分なる抑圧。

五、敵対感情並に抗日宣伝を起すことに従事する抗日団体の即時解散。

これ等の中、最後の二つは、要するにボイコット団体の解散要求に帰することは注意すべきである。翌朝、市長は前三項目の要求は考慮する準備あるも、後二項目に応ずることは困難であろうと回答した。そこで同一月二十一日上海碇泊の日本艦隊司令官塩沢幸一【1883-1943】提督は、新聞に左の如き公表をなした。

若し上海市長にして日本に満足なる回答を与えず、遷延することなく諸要求を満すに非ざれば、提督は日本帝国の権利並に財産擁護のため必要なる手段を採ることに決した。

その上有力な救援艦隊が直に上海へ急行を命ぜられ、一部は二十四日一部は二十八日未明にそれぞれ到達した。それは………<sup>二隻の巡洋艦、航空母艦、十六隻の駆逐艦</sup>………よりなり、多数の水兵を陸戦

隊たらしめる目的を以て、塩沢少将指揮下に輸送し来たのであるが、その数は約………<sup>三千</sup>人に達した。一方、十九路軍として知られている約三万の軍隊が、当時常設的に上海の閘北区域及びその附近

に駐屯していた。南京・上海地方の防衛がその任務である。この部隊は広東人の兵隊よりなり、中国軍中最も経験ある軍隊である。十九路軍の上海出現は、ボイコット紛争とは何等の関連もなく、また恐らくはこれに参加していなかった。そればかりでなく塩沢少将の警告後、上海市長は衝突を避けるため出来るだけの譲歩をし、かつ抗日ボイコット団体を終焉せしむる様、中国各地の指導者達に勧告している旨を声明した。彼はこの意味の声明を一月二十七日に発している。彼の努力の結果、一月二十七、八日の夜間、抗日団体の事務所は検挙された。故に中国側当局者側には何等それ以上の煽動が行われなかったことは明らかで、彼等の努力は反対に日本の全要求に對し譲歩する方向にむけられたのである。

然るに一月二十四日、日本領事は更に警告を發し、一月二十七日には市長に對し『翌日午前六時迄に、諸要求に満足なる回答を期待し、若し満足を与えない場合は、日本はこれを強制すべき必要なる手段を採る』と警告した。一月二十八日午前七時半、塩沢少将は上海碇泊の各国艦隊司令官に對して、若し中国側より満足な回答が得られない場合には、翌二十九日朝行動を開始すべきことを通牒した。

脅迫

これ等の打ち続く……の自然の結果として、上海在住の中国人並に他の諸商人の危惧は深化した。若し中国がこれ等の激烈なる要求に對して、満足なる回答を与え得ない場合には、同租界

は日本の行動に面しなくてはならぬ。その行動が何であるかは明らかにされないけれども、もし満州事変

……を以て計ることが出来れば、極めて重大なる性質のものであらう。一方若し、中国当局が屈服すれば中国一般民衆からの憤激的反動が起こるであらう。

かかる状況にあつて共同租界の議員達は、一月二十八日午後二時に会合し、緊急事態の存在を宣言し、午後四時には日本人を除く国際兵力は、防備のため割宛られたる地位についた。日本に割当てられた区域は租界の北東の部分である。その上にその防備区域は租界外北方にまたがり、多数の日本国民の住んでいる虹口地方をも含んでいる。

虹口の先端は、北停車場から北に走るところの上海南京間の鉄道の東に位している。閘北の主要部は鉄道の西に位し、その一部は鉄道と重なっている。この閘北の一部に十九路軍が駐屯しているのは、知られた事実であつた。日本の防備区域が、租界外虹口迄も拡張されたことは、今回が始めであり、しかもこの事は、防備委員会から中国当局に通知されて居らなかつた。恐らくそれは当時の混雑と昂奮のためであらう。それ故日本軍が何等充分な警告をも与えることなしに進出すれば、十九路軍の鼻先きに出で、これと衝突するに到るであらうことは確かであつた。

同日の午後、上海市長は遂に日本領事に日本の要求を全部受入れ旨の回答を伝えた。午後四時、領事は他国領事にこの回答を受領した旨を報告し、それが全く満足なるものであることを述べた。

その日の夜半、各国兵が各自の持場をとつてから、少なくとも五、六時間後の日本水兵は国際共管地の海軍本部に集合した。

午後十一時、塩沢司令官は市長に声明書を送達して、閘北の日本国民保護のため軍隊を派遣することを通告し、且つ現に閘北に駐屯中の中国軍隊を鉄道線路の西側に迅速に撤退し、同地域の敵対的防禦を移動するよう、中国当局に要求した。上海市長は、その通牒を午後十一時十五分に受取つた。日本の部隊は、午後十一時四十五分にその行動を開始した。勿論、塩沢司令官の通告接受後の短時間内に、中国当局が通達された地域にいる中国軍を実際に撤退させることは不可能であつた。

その夜、約〇〇名二千の陸戦隊と水兵により編組された日本部隊は、装甲車、トラック、軽砲兵と共に、鉄道の東側にて鉄道に平行して、共同租界より北へ走る北四川路に沿うて進み、西へ通ずる街々に小隊を配置した。同夜半これらの小隊は、一定の合図と共に、西へ鉄道及閘北に向つて進んだ。そして間もなく先ず中国巡捕と衝突し、後には同方面に駐屯中の第十九路軍の軍隊と衝突した。

この最初の衝突に関して日本は、共同防備委員会及び市参事会より認可されたるより以上に出ず、日本陸戦隊は、規定の部署に移動中、中国軍隊と便衣隊のため射撃されたと主張した。これらの主張が、たとえ議論の余地がないで、はなく許容される。そのような技術的防禦は、.....として、.....

決して事件の根柢をつかず、窮極的責任の基礎に達しない。

先ず第一、九月の満州事変に際して、日本軍は同様自国民保護の理由に………  
 四十八時間 侵略し尽くし、同地方の中国軍隊を一掃してしまったのである【その  
 ……以内に………し、比較的に些細な………事件を同様の口実として、上海の港に、

事は皆の心にあつた。今上海において、………更に新しい増援部隊を増加した。第三に、司  
 ……不釣合いに大きな海軍部隊を一時に派遣した急いで

令官の警告は、中国の排日を武力により放棄せしめるといふ以外に何等の確かな手段  
 を示していない。最後に、他国の司令官のなす通り昼間にその部隊を行進させないで、  
 夜陰に乗じて軍を編成し、………全く通牒にならない通牒をもつて行動を起こし、秘密のペールで作戦  
 ……す  
 ……警戒を起し、させなければならなかったのである【原注147】。

結果、………させなければならなかったのである【原注147】。

【原注14：報道はこの秘密を強調した。AP通信員は、二十八日夕遅く日本が軍事行動を始めたのを知つて、  
 市の北部地域と租界外ぎりぎりの地域を通つて移動した。彼の記事の一部は次のように書いている…

一般人の殆ど居なくなつた暗い通りで、日本の水兵と海兵が列に列を重ね、侵略開始の命令を待っている…  
 日本の計画に維持されて来た秘密は、中国の市の警察が、いつものように日本人居住区の末端から受け持  
 ち区域の端までパトロールしているのを、私が見た事実によつて示された。日本水兵が通りに沿つて展開  
 しており、中国の警官は口をあぐり開け、茫然自失した。彼等は小銃を取上げられる間立ちすくみ、一  
 部の者は司令部におい立てられた。ちょうど以前に、私は今日焼け落ちた閘北地区の通りをいくつか訪ね



ていた。そこでは全てがまったく静かで平和であるのを見た。鉄道駅さえ閑散としていた。半時間後、その同じ通りに、タタタという機関銃と小銃の音が響き、閘北の重大な戦闘が始まった。

ほぼ同じ時間同じ地域を巡っていたロイター通信員は、右記を確認している。】

日本は何

上海在住の外国人の心の中でさえ、………をなさんとするか、その行動に非常な危惧を覚えていた。そして直接関係のある中国人の危惧はそのために図り知り難いまでに強められたのである。彼等の市長は、………どんな正当性を越える要求にも譲り、事態の拡大を極力防止していた。それにも拘らず日本の司令官は………脅し続け、どのような正当な保護的目的に妥当な………関係を持たない行動を継続した。

かかる背景に対して、更に中国人側のこうした空気を留意して、公平な歴史家は、  
塩沢司令官………が行動を起した時、彼は、彼の軍隊が移動せんとしていた区域内にて中国軍と軍事衝突する  
………ことを敢えて辞せなかったと云う結論に達しなければならぬ。事実、彼はそのような衝突を自ら求めていたのであり、また彼は、予めそのことを知っていた筈である【原注15】。

【原注15：1月26日、東京の内閣は、領事の要求に満足な回答が返されない場合には、上海の海軍に「積極的行動を取る」事を承認した、と報道は伝えていた。 See London Times, January 27, 28, 1932】

# D 一月二十八日より三月三日までの戦闘概況<sup>i</sup>

もし日本の司令官が、多分そうだろうと思うが、中国軍から大した抵抗を受けないだろうと予期していたならば、彼のこの予期はやがて突然に悟らされた。彼の部隊は、まず中国街の中国

巡捕と衝突した。然しその後四十分程経て、第十九路軍の第七十八師の三千名の兵士に遭遇し

た。それと同時に、日本軍は突然停止した。そしてその夜中国軍隊が保持していた陣地は、そ

の後一ヶ月以上にわたった激しい戦闘でも奪取されなかった。鉄道線路を越えて北停車

場を奇襲して占領した日本軍は、その夜の明けないうちに中国軍の反撃に撃退された、そ

れがため日本軍司令官はすべて増援部隊を急派させた結果、陸戦隊は少くとも三〇〇〇に増

加した。翌朝四時三十分、彼は、全く冷酷か、ひどく興奮した男であるかのいづれかの行

為としか見られないような命令を発した。彼は、かれの爆撃機のため、空母を派遣し、

警告も受けず、且つ無力な一般市民の居住する閩北の爆撃を続けた。許し難い残虐行為で、

それは上海の地に永久に日本の前科を刻んだ。中国軍陣地に爆弾を投下する

だけでなく、焼夷弾が用いられ、閩北全帯は忽ち猛火のうちに包まれた、ロイター通信員に

<sup>i</sup> 改造社版鈴木訳ではこのD節全て削除。

よれば、その朝五時半頃までには閘北は『宛然火の海』と化して、猛火は次第に共同租界に向つ  
て、這に進むかに見えた。火焰は、『七十五呎乃至百呎の天に冲し、火事の音響は遠距離まで響いた。』  
数千の一般市民が予告もなく死に遭い、二十五万の避難民は、閘北の廃虚から共同租界  
に流れ込んだ。併しこの悲慘は、全く中国軍の堅い守りを揺さぶる事の役割  
もしなかった。閘北の敵に対して、前進することが出来なかつた、日本海軍当局は、その精力を、彼等が防護  
する筈だつた租界内に集中した。彼等は市街にバリケードを築き巡捕の武装解除を行い、消防  
隊を含む租界当局の正規な活動、を全て麻痺させた。中国住民に対する夥しい狼藉が働かれた、  
多くの即決処刑を含み、【紛れもなくテロの支配を結果した、その間】租界の日本人以外の住民は他所に避  
難した。やがて正規の部隊ではその地域の防禦に不足と信じ、日本の司令部は、所謂「予備役」  
を総動員した、これらの不完全に統制されかつ武装した日本の市民は、興奮と恐怖を増す事になつた。  
米国の防衛区域は日本の区域の西部に接していた。日本の分遣隊は、明らかに昂奮のあまりす  
べての自制を失つて、アメリカ管轄区域に侵入し、中国人へ暴力行為に及んで、米国軍隊にとつてはか  
なりデリケートな情態を惹起せしめた。日米両軍がこの騒々しい数日間に衝突しなかつたわけ  
は、主として、米司令部の指揮と、その部下の賞讃に値する自制によるものであつた。

英米両国の総領事の支持を受けた上海市長の強硬なる抗議により、一月二十九日午後八時

発砲と爆撃は中止された。この休戦は、曇眉目に考えても不完全且つ一時的であつた。日本

軍は、一月二十八日の夜の最初の撃退により威信を失つた。 閩北の爆撃は、世界を通じて

彼等に最も苦い印象を作つた

………、その証左は、日本のあらゆる出先官吏より東京へ送られた。かくして最早や「………面 目 を 保 つ」軍事的勝利を得ることなしには止める ためには何等かの………ことは出来ない

と考えられるようになった。【二月四日、彼等は、二月一日に出された、中国日本両軍が中立勢力によ

り保証され巡回される中立線まで共に撤退するという四列強からの提案を、拒絶した。<sup>i</sup>………陸海の増援隊を

積んだ運送船が陸續と到着し始めたので、………二月三日 彼等の攻撃が再び始まつた。増援司令

部がその戦闘状況と結果を見て始めて、仕事の大きさと………敵の戦う姿勢に驚いたことが自ら

明らかとなり、しかも彼等の戦術に………基本的欠陥のあることも明白となつた。

読者は、一七七五年六月十七日、バンカー・ヒルの戦当時の戦術を比較すれば、今回の上海事変における日本軍の作戦を理解することが出来るであろう。バンカー・ヒルの戦において、アメリカの国防軍は、ボストンの方に向け突出する半島に、危ない陣地を布いた。このアメリカ軍の陣地に接近する海に軍艦を浮べたイギリス司令官は半島の起点、チャールスタウン・ネックに若干の部隊を上陸させて、急速にさしたる被害を蒙らずしてアメリカの全軍を捕虜することが出来

i 原注 16: これらの様々な外交過程は、次章 E 節「日本政府我国の居中調停を要望す」に記す。

た。しかし彼は、敵の防戦力を軽視し、半島の端から麾下の軍隊を上陸させ、米国軍を真正面から攻撃して、海峡から駆逐せんとしたが、その結果は却つて多数の軍兵を失い、自分の威光を損じた。これに反して米国軍の士気は益々振い、戦闘力の自信と熱意を高めたのだつた。

上海において、中国軍隊は閩北より呉淞鎮にわたる広汎な半島に沿うて配置されていたが、戦略的にはかなり危険な位置にあつた。何故なら日本軍は何時でも揚子江岸に上陸し、包囲隊形をとつて南京上海間の唯一の鉄道を遮断し、比較的僅かな損害だけで、中国軍を撤退させることが出来たからである。結局、日本軍はそうした行動を余儀なく取らざるを得なくなつたが、しかし

一七七五年バンカー・ヒルの戦における英国司令官ハウ卿の如く、日本軍は、敵の戦闘力を軽視し、一ヶ月にわたり閩北や呉淞鎮や、十一両地点の間にある江湾鎮などの正面攻撃で、常に増大する勢力を冗費した。結局、第<sup>十一</sup>師団の主力部隊は劉河に上陸して包囲陣型で進んだ。その結果、中国軍は直ちに後退を開始し、ここに両軍の軍事行動が停止されたのであつた。

若し日本軍が、もつと早くこうした行動を進んで執つていたならば、自軍にほぼ千五百人に及ぶ死傷者を、また中国軍に五千名の死傷者を出さずに、同じ結果を得たであらう。

閩北の廃墟と<sup>八千の死と傷つた市民がその代価であつたのは言う</sup>までもない【原注二】。更に、日本にとつて

これより遙に重大な要因、即ち中国軍の予想外に強い犠牲的行為により産み出された愛国心を、

中国民衆の心に喚起させることを回避し得たであろう。

【原注17：中国政府は五月末に、軍は死亡4274名、負傷1770名と発表した。日本政府は5月11日の死傷者は死亡634名、負傷791名と発表した。社会局の上海支局は3月半ばに、6080名の中国の民間人が死亡し、2000人以上が負傷、一方10040名が行方不明であると推定していた。】

【「必要な範囲で」詳述せんに二月二日、野村大將は、日本より到着して海軍司令官に就いた。翌三日、日本軍は先ず、軍艦の掩護砲撃の下に呉淞砲台を占領せんと【上陸】した。彼等は多大な損失を蒙つて撃退された。二月四日、日本軍陸戦隊は約5千に増員され、大砲・

爆撃機の援助を得て閘北攻撃を再開した。日本軍の進出は僅かにしか前進せず、飛行機と大砲に

より閘北一帯は大損害を受けた。海軍による総攻撃はなかったが、大砲と飛行機は、依然として砲火を閘北に浴せて、同地区に多大の損害を与えた。大砲を有せざる第十九路軍は、死傷者を続出したにも拘らず、頑強に抵抗して陣地を譲らなかつた。

二月七日、到着した日本の第二十四混成旅団は、呉淞河の南方に上陸した。中国軍は北岸と呉淞砲台との間に防禦を設けた。同夜より八日にかけて、日本軍は呉淞河を渡ろうとしたが成功しなかつた。二月十四日、日本軍は呉淞河を遡る地点にて渡河に成功し、呉淞砲台に対して砲撃を再開したが、中国軍の逆襲により、多大の損害を受けた。

日本軍は二月十八日までに、  
.....第九師団だけではなく第二十四混成師団を含めて一万六千名の陸軍部隊

の集結を完了していた。これらの部隊はタンク、飛行機、榴弾砲、機関銃等を有していた。更に河岸に飛行場を建設し、用意周到なる攻撃計画をたてた。日本軍は右翼の小部隊をもって呉淞砲台の中国軍を抑えておき、陸戦隊は、左翼において閘北の敵を支え、第.....<sup>九師</sup>団の主力をもって江湾鎮を中央に敵を西方へ突破し、更にこの主力部隊は真茹の方へ南に迂回し、かくして敵の左翼に向つて側面攻撃を加え、頑強な閘北の防備軍をしてその根拠地より返却せしめる作戦であつた。

その間、中国軍は中部より移動した第五路軍の第八十七師と八十八師を、呉淞と江湾鎮方面へ増派した。これらの中国軍隊はいずれも第十九路軍と戦つていた部隊であるが、今や共同の外敵の脅威に対して昔の敵愾心を解消し、両軍はいずれ劣らぬ熱意をもつて第十九路軍を相助けて戦つていたのであつた。

植田大將は日本より来り、日本軍の指揮に當つた。東京の陸軍省は、植田司令官が、中国軍司令官に対して、二十四時間の期限付きにて中国軍の撤退を要求する最後通牒を發送する権限を有する旨公表した。しかし二月二日の中立国の提案によれば、両交戦国は交戦地帯より同時に撤退すべき条件であつたが、この植田司令官の最後通牒は、中国軍のみ二十キロメートルの距離まで撤退すべきことを要求しているのである。更に中国に対し要塞及その他の軍事施設を除去し、要

塞地帯の再武装を禁止している。こうした中国主権の侵害……には決して……日本国民保護の理論……を以て

弁護する余地はない。この最後通牒は、明らかに中国軍司令官に依り、容認される積りでなされたものではなかった。果然、その最後通牒は、中国軍司令官のために、拒絶されて了つたのである。

日本軍は、二月十九日の夜、所定の位置に就き、翌朝未明攻撃を開始した。最初は慎重に組織された攻撃も円滑に進行するかの如く見え、同日午前十時、植田司令官は、その午後四時迄に、江湾鎮を占領する予定であると、公表した。所が、日本軍は、中国軍の頑強な防戦に遭遇し、その後七日間、第<sup>九師</sup>……団は、江湾鎮に於ける<sup>中国軍の抵抗に動きが取れなくなつた</sup>……軍事報告のぶつきら捧な言葉は……<sup>長期にわたる不当な戦闘</sup>……に示された勇氣を充分に描写することは出来ない。

一方に於て日本の軍隊は、相協調して、爆弾或は大砲を、応ずる術もない敵陣地に雨の如く降らした。その際日本軍付きのアメリカ觀戦武官は次の様に報告した。

この戦線に於て、徹宵中国軍の砲弾は、一発も発射されなかった。中国軍は日本軍の送り出す總ての襲撃を受けながら、依然として、江湾鎮と廟行鎮を死守した。

そうして、日本歩兵が進軍する度に、中国軍は窪地から這い出て、機関銃或は小銃を以て、日本歩兵を要撃するのであった。

再び補充が要請され二月二十八日、第<sup>十一</sup>……師団が日本から到着した。翌二十九日、新任司令官



白川大將は到着と同時に、彼は全軍の指揮に就いた。第<sup>十一</sup>師団の一部隊は、呉淞に上陸して立ち往生していた第九師団を補充した。  
……………然しながら第<sup>十一</sup>師団の主力部隊は、揚子江を遡り、三月一日未

明龍浦近くに上陸した。斯くして、長らく延期されていた包囲行動がやっと開始された。翌夜即ち三月一日より二日にかけて、中国の全部隊は、秩序整然と退却を開始した。そうして、翌三日迄には、以前の戦線の背後より約二十軒後の新陣地に移った。この位置は、茜涇營・老人橋・大場鎮の村を通過する南北の線に通じている。日本軍は、注意して唯中国の退却部隊を、飛行機を以て威嚇するだけで、追撃はしなかった。

同三日、日本軍は劉河鎮・南翔・嘉定の村々を通ずる南北の一線を占拠し、同日白川司令官は即時砲撃中止を命令し、中国軍の撤退と同時に戦闘は終熄され、中国軍にして敵対行為をなさざる限り、進撃を停止する旨声明した。戦況報告は龍河からの中国軍の撤退が、包囲の脅威に因つて行われたものか否かについては一致してない。過去二日間、増遣部隊を得た日本軍は江湾鎮に於て、相当の成績を挙げていたし、他方中国軍の退却が整然と、成功裡に行われた事から想像するに、中国軍司令官は、過去数週間退却を準備していたらしい。殊に、龍河に上陸した日本軍の行動を聞き、愈々退却の決心をつけたと思われる。併しながら、これを道徳的影響の立場から見れば、退却の決定的容認は問題にならない。中国軍が斯くも勇敢に強気の防禦を示したことは、

敵も味方も、意外の事とした。日本は、……<sup>当惑</sup>……以外の何物も得られない様な事態から、早く退却したかった。そうしてあらゆる情報に依れば、中国は共和国成立以来始めて、勇氣と統一の国民的感情を以て、興奮していたのである。

## 五、上海事変に関する問題と政策

### A 【「予見」】

日本軍の上海攻撃は、世界各国に意外な衝撃を与えた様に、我々米国民にも不意打を喰わせた。我々は一月七日の非承認の通牒を、日本へ発送することに依り、事件の終幕を告げさせ、論議を終結せしめる積りであつた【原注二五】。我々は外交的無風状態を予期していた。併しながら、却つて我々は、その影響する所極めて重大なる一事態から発生せる新たな問題に、直面するに至つた。これ等の問題は、私が一月二十四日、四十八時間のニューヨーク滞在から歸つて来た時に発生した。それは塩沢司令官が閩北攻撃を実際のに始める四日前であつたが、私が歸府した日の朝、入手した日本艦隊の「大なる」行動に関する通知は、我々に事態の重大性を充分意識せしめた。私は直ちに日本の真の目的が、中国の排日boycottを打破するにあつて、謂う所の

上海の自国民保護……という理由は、単に表面的な口実に過ぎないということを、直に看破した【原

注19】。それで、このことから、三つの結果が予想された。先ず第一、アメリカ合衆国は、他の列強と共に、共同租界と、そこに集中せるわが商業上の利権を保護する焦眉な、且最も困難な問題に当面することであつた。日本が中国の排日ボイコットの弾圧を図るために、共同租界を一根拠地として使用する結果、我々に危険の迫ることは明白であつた。それは不可避免的に租界及びその中に含まれる総てのものが、中国民衆の目に、日本の攻撃と同一視されるような抗戦状態に捲き込まれ、従つて中国人の無差別的な怨恨と攻撃の的となる。もし共同租界から出て来る日本軍隊が、附近にある中国部隊を攻撃するとなれば、中国人が共同租界にある諸外国人に対し報復行動の拳に出る危険がある。のみならず、かかる排外感情は、中国全土に蔓延するであろう。又中国政府は、日本に対する宣戦布告の拳に追い込められるかも知れない【原注20】。多分に日本はこれを要望……していかもしない。そうして、もし中国から宣戦布告されたならば、直ちに上海及河港のみならず、中国の他の港湾を封鎖するかも知れない。それは他の世界の国々の貿易に、非常な損害を与える結果となる。

【原注18】我々は1月16日の挑戦的な日本人の反応に応答さえしなかった。日本との秋の長いやり取り——上院が求めていたそれ——は、まさに公表されようとしていた、そして、我々は、これらの文書が、それは

日本の満州における振る舞いに鮮明な光を当て、我々の最も威厳ある返答となそう、と決意した。】

【原注 19：私の日記、個人記録は、我々の議論、結論、そして、あの日1月24日に取られた行動が、4年間の展望として振り返ったものとして、私を取り囲む部局に依つてなされた予言の正しさを示している。それは、我々が終始一貫して維持しようとしていた賢明な政策の進展の結果を明らかにしている。】

【原注 20：蒋介石——満州侵略を通して日本との宣戦を避けようと、世界の世論と彼の国を守る大国の道徳的影響を信じようと、一貫してなしている彼——は、陳友仁“Eugene Chen”と、武力へ訴ると宣戦布告をとうるさく求める他のリーダー達から、激しい攻撃の下に長く居た。】

私の第二の結論としては揚子江流域に集中された英国の貿易に対する右の如き脅威は、遂には日本の対中国……行為が終局に於て如何なる意味を持つかに就いて、英国商人の認識を喚起するであろう。そうして、その際我々は英国の我々に対する協調が、同年一月七日よりも一層容易に且つ能動的になると思われるのであつた。斯くして、英米両国間に於ける政策一致への基礎は、築かれ得るであろう。

併しながら、第三に於て私は日本の目的は、結局全世界に対して、最も重大な性質の結果を、及ぼすかも知れないことを予想した。もし中国が、敵に対する年来の平和的武器、即ちボイコットを奪い去られるとすると、中国は結局武装を固めて平和的国家の代りに軍国となるか、もし

くは中国よりもっと……軍国的な隣邦日本に完全に屈従するかの二者、いずれかを撰ばなければならなくなる。この何れの場合にしても、その結果は世界の平和並に多年極東に於て、米国と英国がその確保に努力しつづつあつた平和的通商の自由に不吉な危険を齎すであろう。我々は、中国が無援孤立の感にあることを知っている。中国の政治家の多くは、中国は、聯盟規約及他の平和条約に倚頼いらいしたが、結局、折れた芦に身を寄せて、その力を頼りにしていた列強に見棄てられたのであると言つていた。我々はかかる危機に於て、これ等の条約の神聖を維持し、且つ条約の下に在る中国の利害關係が、決して忘れられてないということを、中国にはつきり知らせることが、何よりも一層重大であると感じた。

ワシントンの我々は、中国の勇気を蘇生せしめた驚くべき事件が、事実起きるとは世界中の誰よりも予想しなかつた。我々は、中国の兵隊が自国政府の命に反して、日本に対し世界を驚かす様な防戦振りを發揮しようとは予想しなかつた。そうして、この「宣戦布告なしの戦争」が、諸外国に依つて示された如何なる道徳的同情よりも、日本の……侵略に對して、中国の勇気を取戻すのに、一時的に一層与つて力があつたことも予想しなかつた。幸にもこの意外な出来事は、両国間を衝突させないで、寧ろその反對に、我々が信じている遠大な政策と合致して進んだ【原注B】。それは中国の保全を尊重する政策が、公正且遠大な政策である許りでなく、中国自体が、批評家

の或者が云っている以上に、かかる政策の恩恵を享くる価値あることを示した。

【原注21：實際私は役立ったと信じます、それは、私が引き続き英国政府に提案した9ヶ国条約の発動から成果を得るのに力強い援護をなした。】

興奮の日が連続的に続いた当時我々は、常にこの遠大な政策をはつきりと認識し、目前の出来事に依り、それを曖昧にさせない様に努めた。我々は、興奮に次いで起つた兇激な事件に於て、種々なる保護的行動の問題に直面した。我々は他の国々と協調する上に於て、これ等の危険を極力回避し、日本軍隊の撤退を求めんと努めたが、我々はこの目前の目的の背後に、結局に於て、遙かに重要な別の目標がある事実を決して見落さなかつた。

一月二十四日朝、私はこれ等の問題を、國務省の私のアシスタント等と討議し、それを大統領に相談した。大統領は、こうした非常時に於ける場合、例の如く、右の事態が持つ広汎な可能性に就き、極めて敏感で、我々の見解と全く一致していた。私はそれから英国大使の来訪を求め、事態に関する我々の解釈と、我々の考慮する可能性の予測を示し、英国政府が我々の見解と一致し、事態に対処すべき協調的政策に協力するや否やを、確かめたい旨披瀝した。私が提案した手段は先ず第一、日本軍が対中国戦争行為の根拠地として、共同租界を利用することに就いては、我々が重大関心を有し、且つ共同租界の警官（工部局）の能率及排日貨に絡まる暴力行為の無き点に

鑑み、中国に対する日本の武力干渉は、少くとも時期尚早なる旨の通牒を即時日本に発することであつた。第二に、私は、日本の動員が、既に上海及び揚子江上流沿岸に於ける米國代表者達を、憂慮警戒せしめつつあること、及び日本の干渉に依つて惹起さるべき非常事態に、米國民を保護するため、軍艦増派を要求しているという事実を、語つた。私は、もし米國がかかる軍艦を増派するとせば、英國も亦同様の手段に出るかに就いて、訊ねた。私はこれによつて在留外人の憂慮を鎮静させるのみならず、現下の事態に対して、我々が責任を忘れてはいないということを、中國に納得させるであらうと、指摘した。斯くして、その日のうち、即ち、塩沢司令官に依る實際的攻撃の始まる四日前、我々は米國の一般の方針を講じたのみならず、この困難な問題の協調的解決に向つて、第一歩を踏み出していたのである。かくて偶発的事件の続出が齎せる非常時への対策を、我々が講じつつあると、時を同じうして、アメリカ艦隊の運動が開始されたが、これに或程度迄事態を安定せしめ、且つ上海に於ける事態を全く收拾すべからざる状態に陥らしめず、また他の遠隔の地方に拡大せざるよう努力しつつあつた関係者の手を強化するに役立った。

## B ハワイに於けるアメリカ艦隊

滿州事変勃発前の夏に、作成されて發表された計画に依り、アメリカ海軍は、カリフォルニア

海岸と、ハワイ群島の間の太平洋に於て、定期大演習を行う命令を受けていた。これが実行のため、米國艦隊は自然のコースに従いハワイへ集結した。滿州事變直後、我々はこの計画を変更すべきか否かに就いて、討議したが、この問題は、元來日本に対する脅威として発案されたものでないことが、よく知られていた事実に鑑み、大演習は計画通り続行されることになった。その後日本軍が上海攻撃の真最中、アメリカ艦隊は演習コースに従い、二月十三日、ハワイへ入航した、そうして慎重な考慮の後、艦隊をそのまま、ハワイ近海に残留せしめ、演習終了後も、解散もしくは大西洋へ帰還せしめざることになった。その後の騒然たる不安な時局にあたつて、我々は右の処置を喜んだ。日本政府が、從來の事態に依り、狂信的興奮状態に迄、激情した民衆を背後にする……指導者の完全な支配下に陥つた事実を現す事態に鑑み、如何なる突発的の一大政變が惹き起されなかつとも限らなかつた。その年の冬、極東に駐在する責任ある外国の觀測者は、日本が近隣にある歐米政府の属領に対し、突如として攻略を開始する實際的可能性のあることを、彼等の意見として各自國の政府に報告していた。かかる状態に於て、ホンコン、インドシナもしくはフィリピンの方面に対する日本の南進行動の側面に位している港湾に、アメリカ全艦隊を集結することは、疑いもなく、鎮靜剤的效果を挙げた。それはたとえ如何に興奮しても、何者たりとも看過することのできない平和的アメリカの窮極的な武力を、示す大きな注意信号であつた。



## C 共同租界の防禦

私は四日間、曩に一月二十五日、私がローナルド・リンゼー卿を通じてなした、将来の協調に關する質問に対する英国政府の回答を、待ち焦れていた。事態は、日本領事及司令官が中国の市長に送った要求及び最後通牒で、逐日險惡になつてゐるかの如く思われた。私は、毎日現地の我代表者から報告や問合電報を受けていた。上海駐在米國總領事エドウィン・シー・カニングムは、同地に於ける長老領事であつた。そうして、領事館の伝統的組織の下にあつて、忠告助言及びイニシアチブをとる非常な責任が、彼に負わされていた。彼は、共同租界の当局のみならず、列國領事の相談に与り、且つそれを我々に報告し訓令や指示を求めて來たことは無論である。更に中國の首府が、北京から南京へ還されてから、上海は南京に近い關係上中國政府の要人、或は外國大・公使等が、南京への途中、絶えず立寄る所であつた。斯くの如く、上海は常に政治的活動の中心であつて、今はあらゆる興奮と噂の渦中に卷込まれてゐた。

一月二十九日、英國政府からの回答が到着した。その回答の主旨は、好意的であつた。併しながら、その回答は、その朝陸統と到着した閘北の攻撃に關する電報や報告の爲、殆んど下積みにされた。そこで我々が予想した如く、英國外務省の人々は、俄然覺醒したので、将来はわが方か

ら行動又は協調の提案をする必要が無くなった。英国政府は、我々の今直面している緊急事態に対処すべく、寧ろ我々よりも遙かに強硬な手段をとらんと望んでいるように見えた。そうして、凡てかかる対策に於て、両国政府が、再び十分相提携して進みつつあるかの様であつたので私は大に満足し、且つ安堵した。

一月二十九日の夕刻前、英国政府は閩北攻撃に關して、強硬なる抗議を日本政府に發して、我々にも同様の通告をなす様、要請した。閩北攻撃前の一月二十七日、私は東京政府へ、共同租界の警官（工部局）の能率に鑑み、在留民保護の爲の日本政府による武力干渉は、不必要なる旨の注意的通牒を發して置いたのであるが、今英国政府の要請に應じ、且完全なる協調精神を確認する爲、私は英国政府が提案した方針に基づき、今一つの意思表示を、東京政府へ發送した。一月三十一日、私はロンドン大使館の電話に依り、イギリス海軍は、追加陸戦隊と共に更に八吋砲巡洋艦二隻を増派しつつある故、米国も同様の措置に出る様の提議せることを知った。同日、フーバー大統領と会談の後、第三十一歩兵連隊を乗せた巡洋艦ヒューストン、及び歩兵第三十一連隊を乗せた運送船ショーマンは、他の駆逐艦と共にマニラより上海へ急行を命ぜられた。斯くして、モンゴメリー・テーラー中将麾下のわが全アジア艦隊は、上海に集つた。同日、英国は共同租界を保護する爲、中立地帯の設定を提案し、且つもしそれが設定されたならば、米国がその警備を

分担するや否やを質した。これに対して我々は承諾を与えたが、唯々かかる手段が、米國軍隊と、中國軍隊の衝突を招来する危険のない様、まず中國の承諾を得べしと注意した。

この英米兩國の直接協調に加えて、國際聯盟との協調も亦必要だった。聯盟は依然として、日中紛争に關して、最後の司法權を持つていた。自然、聯盟は、上海に於ける暴動の勃発により深く憂慮していた。一月三十日、聯盟事務總長エリック・ドラモンド卿は、上海に於ける聯盟各國の現地代表者等が、聯盟理事会の審議に備えるため、上海に於ける事態の報告をジュネーヴの同卿に送付すべき委員會の設置を提案した。エリック・ドラモンド卿の招待により、わが方は直ちに上海總領事カニンガム氏に対し、同委員會と協調する様、訓令した。上海に於ける急激な事件の連続的勃発に關するこの委員會のその後の報告は、これ等事態の記録された歴史の主要材料となつた。カニンガム氏は、彼等委員の仕事を援助し、彼等の報告と、全体に於て一致した。二月一日、スイス駐在わが公使ヒュー・ウィルソンに對して、聯盟による上海事變の取扱ひに就いて、常に接觸を保ち、彼自身が、聯盟と米國との間の情報交換の爲の連絡係となる様、訓令した。

私は既に、最良の条件の下に共同租界の防禦をなすことの困難さを、述べて置いた【原注22：前編B節「河から訪れる訪客には、」以下参照】。一九三二年の特殊な事態の下にあつて、これ等の困難は、非常に増加した。日本軍艦は、共同租界に面する黃浦江に投錨した。しかも租界外に於ては、

中国の十九路軍は、閩北を占拠していた。これ等の対立する軍隊の間に、租界の細長い地域が狭まっていた。

租界と閩北の境界線は、多くの場所に於て、全く無理があつた。租界の河岸には、日本人所有の波止場がある。数週間に渉り、租界当局の抗議にも拘らず、日本軍隊は、間断なくこれ等の埠頭に上陸し、そこより細長い共同租界を横切り、中国軍に対する行動の位置に就いていたのである。黄浦江に投錨せる日本の航空母艦からは、爆撃機が閩北の中国人に対して、その破壊的使命を帯びて、租界の上空を飛んだ。その爆弾の一つが二月十一日アメリカ地区にある中国の工場に落ち、労働者五人が死亡十五人が負傷した

勿論、かかる行動は、中国軍の報復行動を喚起し、その結果、租界を危険に陥れ、爆撃機或は日本軍艦に向つて狙つた中国の砲弾は、租界内に落下し、現に二月十七日、二名の英国水兵が、かかる砲弾の為、重傷を負つたことがある。併しながら、最も大きな危険は、租界内より始まる日本の攻撃が、中国軍を憤らせ、遂には中国軍隊をして共同租界それ自体の襲撃に到らせることであつた。もし彼等が、その拳に出ていたのであつたなら、租界内の居留民を保護するは不可能で、由々しき結果を齎したであらうほど中国軍の数は夥しかった。こうした再三の危険に鑑み、わが方及び他の国々は、日本政府に対し、根拠地として租界を使用することに反対する旨の熱心な意志表示をした。既に述べた通り、租界利用は不必要であるのみ

ならず、日本人自体の立場からしても、作戦上誤った方法と見られた。しかも、租界内に於ける日本軍隊の上陸は、二月末迄継続され、最後の強硬なる連合抗議に敬意を表してか、遂に租界内の上陸は中止され、その後の増遣部隊は、河下の呉淞に上陸したのであった。

日中交戦の最初の数日間、アメリカ軍隊の地位は、日本軍隊及び不正規部隊の侵入に依つて、更に危険を感じた。日米両軍は、各々相隣接していた。二月三日、共同租界防備委員会は、日本軍が十二箇の機関銃を有する五百名余の陸戦隊を、アメリカ地区の数工場に、明らかに中国に対する攻撃力としての意図を持つておいたと報告した。そこに

は、これ等の行動が、中国の攻撃を、直接わが方に引く危険が、多分にあつた。同日、日本軍が、アメリカ陸戦隊の哨兵所近くに、二箇の機関銃を据えた為、米国陸戦隊は、日本軍の発砲区域内に置かれることになったとの報告があつた。更に、アメリカ及イギリスの防禦地帯の背後に於て武装した日本兵とか浪人による、無防備な中国人に加えられた非道に関する長い詳細の報告もあつた【原注

23】。そうしてこれ等の行動は、時々我々の部隊自体に対する挑発を伴つた。事実最初二、三日の間は、多くの日本人は中国人の意外な反撃に刺戟されて、度を失い全く自制できない状態に陥つた

かの様に見えた。併し、非常に幸な事に、英米の司令官及兵士は陰忍自重して行動した、そうして上海に於けるテラー司令官の抗議、及び二月四日わが強硬なる意志表示の圧迫に依つて、わ

が防備区域内の日本部隊は、日本司令官に依り撤収されたのである。併し、約一週間というものは、事態は全く火藥箱の様であつた。

【原注23:「浪人」日本語で、日本の攻撃に同行、あるいは先行する非正規武装兵。】

## D 南京の砲撃

中国国民政府の首都南京には、多数の日本人商人と家族が居住していた。上海事變の勃発当時、二隻の日本軍艦が、南京の反対側の揚子江上に碇泊し日本人の保護に當るべく待機していた。上海攻撃の直後、更に数隻の日本軍艦が、南京に派遣された。この軍艦増派は、都市部の中国民衆の不安を募らせた。二月一日の夕刻、これ等の日本軍艦は、およそ一時間都市を砲撃した。これは南京と中国中のみならず、全世界を非常に刺戟した。そうして、それは既に上海事變に依つて惹起された緊張を、非常に尖鋭化したのであつた。当時、上海に於ける行動が、揚子江流域の日本の総侵略の単なる前奏曲であろうと考えていた多くの恐れを強固にした。様であつた。

この爆撃の原因に関して、中国及日本側より發表された事實は、全く背反していた。幸せなことにはその損害も極く僅少なものであつたし、それ以上の軍事行動が、それに続いて起こること

もなかった。然しながらその結果として中国政府は、一時南京より洛陽に政府を移した。

国務省に於ては、我々は、その砲撃を昂奮せる………日本海軍司令官の錯誤に基因するものであると

考えた。そしてそれが、今では歴史家達によつて採用されている見解である【原注22】。事件に

より惹起された恐慌は、幸にも間もなく全く鎮静に來したが、然しこの一事は、………日本の指揮官達

が非常事變の重圧下に、その指揮下にある………破壊的兵器を使用したという無責任さの例証として役

立った。もつと嘆かわしい事例が二月六日に起つた。その日には、………日本の複数の航空機が、揚

子江の大洪水犠牲者のため、国民水難救済委員会総理事たる國際聯盟のサー・ジョージ・シンプ

ソンが、上海近傍に建てた避難キャンプの一つの………の上に爆弾を投下した。五十人以上もの人命

がこの………爆撃で殺されあるいは恐怖で死んだ。日本政府は、この事件に対して深甚なる遺憾の意を表し、これを

「嘆げかわしき過失」と呼んだ。

【原注24：以下を参照 Royal Institute of International Affairs, Survey for 1932, p. 485. 事件のまゝにその時、上海の

黄浦江にプラントを持つアメリカ石油会社の一つからのメッセージが机にあつた、それは日本の海軍司令官

官の「緊張によるいらだち」の例証となる出来事を報告している。新年を祝う中国の市民が、大型の爆竹

を日本の船が通るちようどその時鳴らした、そして船は直ちに石油プラントに機関銃を發射し、事務所は

穴だらけになつた。】

# E 日本政府我國の居中調停を要望す

我々は間もなく、日本政府が、塩沢司令官の關北攻撃の結果について、憂慮している事実の報告を入手し始めた。その攻撃に対する世論の反動は、かの満州に於ける………不当な侵略………的攻撃によって起つたそれとは著しく異つていた。日本軍が満州に於て採用した猛烈な戦術に就いては、適当な認識を得る機会を世界各国は有ち得なかつた、と云うのは、一部は満州の地が比較的遠隔の所にあつて、觀察からはひき離されていたのと、一部は疑いもなく、日中両抗争国間の和解策を講じ、且つ日本政府をしてその軍隊を再び制御せしむるよう、我々が一切に手控えていたからであつた。然しながら、上海に於ける………暴虐………は國際都市衆人環視の裡に發生した。確かに、人口稠密の防備薄き都市の爆撃し焼尽すは、アメリカ人の國民的感情を強く刺戟した。その点に關しては一人の擁護者をも持たなかつた。日本によつて發せられる幾多の弁明は、一つとしてわが國の新聞や國民を首肯せしめるものがなかつた。事件の發生当時、出淵大使はキューバに行つて留守中であつた。一月三十日同大使は帰任と同時に、漸次昂まりつた世論の激昂の爆発に真向からぶつかった。そして彼がその日私を訪ねた時には、彼の受けた衝動が無言の裡に感ぜられた。私は、彼がその印象を東京に通達したことを疑わなかつた。



一月三十一日の午後、連合通信からの飛電が、日本に於ては内閣総理が米国をも含む数ヶ国の大使達に対して、我々にその戦事行為を停止するための居中調停の労を執られたい旨、提議したとのニュースを齎らした。翌朝この事は、海外電報によりまた日本大使によつても同日確認された。我々は細心の注意を以てこの二重の確認を待ち、一方直ちに行動を開始し得るよう準備した。と云うのはそれは簡単な提議でなかつたからである。日本政府は恐らく愕然として驚いたに相違なかつた。明らかに塩沢司令官は途方もない間違ひをしたのであつた。彼は十分でない兵力を以て攻撃をなし、相手の……軍隊からの手厳しい反撃を喰らつた。そして、民間の集団で行われるテロの遺口で以て……し、ために世界をして激奮【“affront”世界を侮蔑】せしめた。

本国政府は、直ちにその非を悟り、処置に困るような新事態の発生を極力免かれようと希望したに違ひなかつた。然しながら、この悲しむべき事件発生した紛争の真原因に就いて、進んで調停を受け容れるまでにこの感情は強かつたろうか。平和的な手段によつて、日中間の一切の紛争を解消し得るような解決方法に同意する程、日本政府は世界の世論の攻撃を充分に感じていたであらうか。或は彼等は、九月以来採用し來つた……軍事的……手段によつて、なおも事を運ぶ積りであつたのであらうか。若しそうでなかつたならば、彼等の現在の要望は、不利の立場から脱して再び対中国攻略を継続せんがため、単に我々の助力を求めていると云うことを意味する、我々は左様なこ

とに味方するわけには行かなかつた。このような事にでもなるならば、我々の努力は決して永続的な福祉を齎し得ず、却つて其等は巧妙な、しかも決意固き侵略者の力を強大にするに過ぎなかつたであらう。

予備的ニュース【前置きのニュース速報】が電信により確証されるや否や、私は大統領フーバーと会談し、その結果彼も亦如上の見解に十二分に心底から同意した。上海に於ける危険な事態の圧力下に於ても、彼はこれ以上日本の侵略的行動を助けるようなため、御先棒を担ぐことを好まなかつた。よつて我々両名は、事件解決の基礎として、仲介的立場にある列強により提出さるべき五項目よりなる試案を纏め上げた。私は電話を以てこれ等条項を大英帝国の総理大臣及外務大臣に伝達したが、大統領フーバーもその通話に聴き入つていた。三時間足らずのうちに、我々の提案は熟議されて、殆ど無修正のまま英国政府によつて承認された。そして英国政府は、これ等解決案を日本に提出するためにフランス、イタリアの同意合流を求めることにも同様賛意を表した。これが済むと、この解決案を東京及南京両政府に向つて、二月二日に上述四ヶ国の名に於て提示し、同三日公表の予定日割が出来上つた。こうして決定を見た五項目は次の如くである。――

一、両国は、次の条件に基づき、直ちに一切の武力行動を停止すること。

二、両国は、今後動員或は如何なる種類のものと雖も、戦争の準備等一切為さざること。

三、上海地内に於ける凡ての相互接触地点より、日中両国戦闘員を撤退せしむること。

四、両国、戦闘員を隔離するため、中立地帯を設定し共同租界を保護すること。なおこれ等の地帯は、局外中立の第三国にその警備を一任すべきこと。及びこれ等中立地帯決定は、各国領事に於て決定さるべきこと。

五、以上の条件容認の上は、パリ条約の精神並びに十二月十日の国際聯盟の決議に基づき、何等の既定的要求或は保留を附せず、且つ局外中立オブザーバー或は参与者の助力により、両国間の、一切未解決紛争を解決せしむるための商議を即時進めること。以上

我々が電話を通じて会談中にも、なお南京砲撃を報ずる海外電報が、我々の許に齎らされ、且又、日本は更に大々的な軍隊移動を準備中であるとの報道が、他の電信により伝わって来ると云うような有様であつた。これ等の報道に照らしてみても、上述の提案諸条件中の第二項の重大性が諒解されるであらう。

第五項に於ては我々は、満州に関する紛争の解決を目的として、各国の一致的行動を主張したのであつた。この理由は明白である。上海攻撃は、かの満州に於ける抗争の結果として惹き起されたのであつた。その抗争の解決されない限り、我々は両国間に永続的平和を期待し得なかつたばかりでなく、寧ろ逆の将来が想像されたのであつた。更に、その秋、遷延に遷延を重ね、揉み

に揉み抜いた商議に於て國際聯盟は、我々と同様に、滿州に於ける日本の軍事行動に対して断乎たる態度をとつたのであつた。若し我々が、既述の提案中より第五項を削除したのであつたならば、全世界の新聞はそれを発表するであらう、そして日本は、我々が永い間その擁護のため努力して來た重大な条約を、抛棄してしまつたのだと信じたであらう。

中国政府は、速かに我々の五提案を容認した。二月四日、日本政府は第二及第五項を素氣なく拒絶し、他の三項目に対しては實質的価値を失つた条件を含む回答を寄せた【原注25】。

【原注25：日本の返答は次の通りだつた (Willoughby, op. cit., pp. 320-321):

(一) 支那軍の挑戰並びに騷擾的行為を即時且つ完全に停止せしむるを要す。右にして確保せらるるにおいては帝國軍においても戰鬭行為を中止す。もし支那側(正規軍たると便衣隊たるとを問はず)にして挑戰もしくは騷擾的行動ある場合帝國軍の取るべき行動については完全にその自由を留保する。

(二) 支那側從來の不信なる行動並びに現在の重大なる形勢に鑑み、我方としては動員又は戰鬭の準備をなさざることは不可能なり。

(三) 日支双方交戦者の離隔並びに必要に應じ、關北附近中立地帯の設定に關し、領事及び軍隊指揮者をして取決め交渉に當らしむるに異存なし。

(四) 所謂両国間に現存する一切の紛争中には滿州事件を含むものと解せらるる處、同事件は上海事件と全然別個の問題なるのみならず、滿州事件については客年12月10日の理事会も存しており、且つ又同事件の解

決につき第三国監視者又は参与者の援助を受諾し得ざるは帝国政府の既定方針なるを以てかたがた本項【第五項】はわが方の同意得ざる所なり。：国会図書館デジタル資料「国際聯盟理事会並に総会に於ける日支紛争の議事経過詳録」第二冊32～3ページから。なおこの史料では「三国調停」としている。原注では（三）を3、4、（四）を5と五項目に振っている。」

日本の返答が私の手許に届いた丁度同じ日に、私は、上海の事件に関する限りは、何処より来たものでも国務省に達したものは勿論、陸軍及海軍の在外武官より到達したものをも含む一切の通信を、巨細に検討してみた。

そのうちには、わが陸軍の参謀総長及びわが連合艦隊総司令官からの進言もあつた。これ等の通信を全一として、且つ相互的に関連して見ると非常にハッキリと次の事がわかる——即ちこの期間中に、一方日本の外務当局が、我々の調停を求めつつあつたに反し、日本の陸軍及海軍では、上海に於ける事態を收拾するために、大部隊陸軍力を日本より同地に向けて移動させる準備をしていたのであつた。その時以後私は日本政府は、アジアに於けるその威信が上海に於て、蒙った敗北の後には……所謂「顔を立てる」ためにもその地に於て、何等かの形で軍事上の成果をかち獲ることを、自ら要求してゐるのを感じてゐるのであると考えようになつた。

次の数週間うちに、四五遍も各方面より、日本政府は戦争の終結とその軍隊の撤退に同意す

るだろうと云う情報が集まつて来た。

私は、如斯提議の眞実性に信を置き得なかつた。私は、諸列強の干渉による戦争の終結と云うことは、そのうちに中国軍の撤退を含んでいない限り、日本の容認するところではないであらうと信じた、そして中国軍の撤退は日本にとつて勝利と同じであり、中国にとつては、屈辱以外の何物でもないのである、然しそのような干渉は明らかに我々が、力を藉し得ない様な種類のものではあつた。如斯提議が我々の許に達する毎に、私は、それら提議を無下には斥けないように戒心した。それらの提議は、大抵上海に在つて、出来る限りその事態を共同的に処理していた各国政府の局地的代表者達によりて、造り出されたものである。

然しながら、私は、我々の代表者達に対する訓令に於て、そのような要求に基づいて行動するに當つて、我々は必ず中国政府に対して、明らかに公平を欠き、その同政府の敵意を買う様な提案に導き入れられない様に特に注意した。さて時日の経過と共に、当時検閲の陰にかくれてひそかに行われていた軍事行動に関する諸事実を調査し、それらと日本の調停提議とを対照比較することが可能となつたので、我々は斯の如き提案と共に、直ちに新らしい軍事行動を伴い、それが諸外国に与える影響を緩和するための計画であることを明確に知つた。【この長い文章の後半は、わざと判り難くされている。】それらの提案はどれも、直ちに新しい軍事行動を伴い、そうして明確に、その行動の

外国への影響を緩和するにすぎないものとしてデザインされていることを、我々は知ることが出来る。」

こうして二月三日と四日兩日に、即ち私が上述した彼等の外交的行動の直後、日本軍は彼等の海軍陸戦隊員を以て呉淞砲台の攻撃を開始し、実に閘北の再攻撃を始めた。二月六日には、上海に於て商議を進めたいとの新提議が、同地駐在の当局を通じ日本から到達した。その直後二月八日には、彼等は新たに到着した陸軍を以て呉淞砲台を斷乎攻撃したが不成功であつた。植田大將指揮の下に江湾の總攻勢が始まる二三日前彼等は休戦を欲び迎えるだろうという新提議が再度上海から我々の許に届いた。ところが直ぐその後から、植田大將より最後通牒は発せられ二月二十日の攻撃が引続いて起つた。とうとう二月末日、即ち劉河に於ける包圍政略と江湾鎮に於ける攻撃の再開直前、また例の御馴染みの提議が、ジュネーヴにある日本代表松平子の許より外交手続の形式をとつて我々のところへやつて来た。

以上のような比較検討によつて、今や明らかなように、これ等の橄欖かんらんの枝々【オリブの枝】諸提案のことは、平和の果実を結ぶためのものではなかつた。

五項目より成る我々の提案、及びそれが日本に迎えられた方法は、上海の戦鬪に於て、日本が意圖していた方略に関する私の見解を、明確ならしめるために役立つた。わが政府が明らかにせんとした終局の目的のために、私は真の意味で主義を抛棄してまで、無理にも戦鬪を終局せしめ

ようとは望まなかった。私は唯、若し日本が当然受くべきその道德的譴責を感じずに、我々の助力によって事をなして行つたならば、更に一層大なる困難が伴うことを予知した。勇敢なる中国歩兵が、日本の軍隊に対して加え得た新しい反撃、及び彼等が余儀なくされた一層犠牲の大きい努力は、ただ日本が決してそのような譴責を被らないでは済まないことを益々確実にするに役立つ丈であつた。【全ての新しい反撃が、……役立つばかりである。】

日本の増援隊の不足と、議會より財政的援助を仰ぐことの困難は、我々に対して、  
日本軍国主義者たち

……が彼等の冒険に対して将来必ず高い価を支払わずには居れなくなるだろうと云うことを、はつきり示してくれた。その犠牲が高ければ高い程、世界に於ける法の究極的支配に対する希望は一層輝かしいものとなるであろう。

法律と秩序の将来のために、軍隊【soldier】が商議者よりもより善き奉仕をなし得る稀な歴史的瞬間が、到達したように思われた。

#### F 九ヶ国条約と上院員ボラー氏への書翰

永い間、私は、極東に対する米国民の関心と、極東の紛争問題に対する政府の有する真の政策を、明白かつ完全に表示し得られるような何等かの方法を衷心探し求めていた。その秋行われた





この年月の間に、アメリカに於ける大抵の相当規模の大きい都市、就中北東部中北部の諸州のものは一二の教会を有せざるものはない、其各が一人若しくはそれ以上の外国宣教師を支持している。その宣教師の大多数は中国に於て活動していたのである。これ等宣教師の報告或は書信による報導は、この国土の殆んど凡ゆる地方に住んでいる国民多数の手に達した。彼等の多数にとつてこの仕事の進展は異常な興味の的であつた。ついで中国の進歩状態の巨細が報ぜられ、かくて彼の国という国民に対する、全く個人的性質の人道主義的関心が起こるに至つた。この運動と並行しても、一つの規模は小さいが顕著な運動が中国人自身によつて行われた。それはつまり教育の為に、前途多望な青年女子を多数我國の学校及び大学に送つたことである。私が年十八、まだアンドバーにあるフィリップ・アカデミーの生徒だつた時、級友の中には数人中国の留学生が混つて居た。彼等は学校では尊敬もされ、愛されて居た。或る者などはエグズターに於ける当時のわが校の好敵手との例年の野球試合にセンターとして活躍し、すばらしい三塁打をとばして勝利をかち得た事もあつた。その彼は先年ワシントン駐在中国大使として歸つて来た。かかる中国留学生は我國各地の学校、大学で教育をうけ、多数は後年中国国民政府の指導者となり、或は教育者、専門家としてその要位にあるのである【原注26】。

【原注26：例えば、宋子文、前中国財務大臣はハーバード大の卒業生。王正廷、前外務大臣、そして顧維均は

また内閣の一員でふたりはエール大の卒業生だ。現代中国の創設者孫文の未亡人【宋慶齡】はジョージアの Macon のセミナーの卒業生で、彼女の姉妹の一人、蒋介石—中国の將軍で前大統領—の妻【宋美齡】はウェルズリー大の卒業生。孔祥熙、現財務大臣はオーバリン大とエール大の卒業生。蒋夢麟、中国国際大学の学長は、カリフォルニア大とコロンビア大の卒業生、そして胡適、中国の文学で最も著名な一人はコーネル大とコロンビア大の卒業生。施肇基と顔惠慶、国際聯盟で満州問題では中国側代表を務めた彼等は共にアメリカで教育を受けた。これらの人々は全て現代中国の發展に於て卓越している。【次のページに蒋介石夫妻の写真】

上述の如き二つの接触の通路を経て、中国に対する普通以上の興味がわが国民間にひろく拡がったのである。これは我国の商業逐利【商人】の衝動に基づくものではなく、むしろわが政治的、人道的理想主義に根ざすものである。これはフィリピンに於ける植民的冒險を、改めてアメリカ式な自治政治にこの東洋の国民を訓練せんとする遠大なる企てに転ぜしめた我国民の有する特性の同様な表れと見てよい。断じてそれは日本への敵意を含むものではない。

それ所か、我国民は、日本国民に対しても教育以外において同様な經驗を有しているのである。然しながら、日本が中国を<sup>擄取する</sup>……權利があるとか、中国国民は結局日本人には劣った種族であるとか等の考えは、いかなるものであつても、全部的に反対されたのである。この点について云えば多数のアメリカ人は、事実かかる考を持つていたのみか、この考は、この二つの民族との

充分な経験の上に基礎を有するものであると感じていた。

私が指摘した如く米国民の中国に対する感情は、一九三二年一月十一日のロンドン・タイムスの記事に書かれたそれとは全然別種のものであることが知られるであろう。それは、中国との通商から起る偏見とも、又オールド・タイマア誌<sup>i</sup>のか不平とも何等の関係を有するものではない。又さきの軍事的同盟より起った、日本にする何等の感情により悩まされたものでもない。それはいわば理想主義的なものであつたらう。又軍事的又はその他の階級觀念からでもなかった。それは純粹に民主的であり自治、人道主義、平和等に深き信念を有する国民によつて支えられたる感情である。この中国の国内的發展に対する利害関心は、米国の「メイン・ストリート」の方が英京<sup>ii</sup>ロンドンに於けるよりも数等切実であり伝統的であつたのである。

私の信ずる所では、この中国に対するアメリカの歴史的態度は意識的にしろ、無意識的にしろジョン・ヘイ【1838-1905】とチャールス・イバン・ヒューズ【1862-1948】の努力に影響されたものである。即ち一人は門戸開放政策を創唱し、一人はそれを九ヶ国条約として具体化するに力を尽したのである。この政策は、中国が政治的支配権及び領土の保全への侵害に対して保護される

i 誤訳、前出のように「Old Timer」は雑誌ではない。「古参の中国通」の不平…。

ii 「City」ロンドンでは金融の中心街のこと。

ことよつて始めて、現代世界に於ける自己を發展せしむる公平な機会を有し得ると云う前提に、基づくものである。これは中国の發展の範圍、及びその継続の期間を充分考慮の上採用されたもので、それを完成すべき真個の機会を彼に与えんと企図されたものである。それは政府の組織が、未だ不完全であるがために、それにより一時的強力な国家がこれを支配し得るなどという教義には一切耳をかさぬものである。即ち、この条約は、中国に於ける諸国が利害關係を有して居る特殊領域に対して抱いて來たかかる考えを、終熄せしめんがために一八九九年、明白に構成されたものである。

我國のこの対中国感情は閘北の炎上によつて蹂躪され、従つてそれと同時に、中国を利用し、或いは支配せんとするが如き提議に対しては、之を鋭く批判排斥する様になつたのである。

今や太平洋の彼方に進展しつつある事態に対し、熱烈な関心を以てこれに対し、アメリカ全土にかくも広く拡がり、アメリカの伝統にかくも深く根ざした感情の弁明を自国政府によつて表現されん事を求めていたのであつた。

この感情の表現が新聞には、接触した人々を通じて私に達した時、私は大戦当時【第一次大戦】ベルギーの中立が犯され、ベルギー国民が殺戮されたという知らせが、ブライス委員によつて齎された時、私の住める町村に於て激発したと同様な感情の記憶を思い浮べたのであつた。

この時、合衆国は、ベルギーに關して侵犯されたこの条約には加盟していなかったのである。従つてアメリカ政府は、何等の批判も公式に表明する義務も權利もないことを識つていたのである。現在極東に於ては、わが国の加盟している条約が少くも二つある。これらの条約の目的とするところが犯されたのである。わが国民の間には、この条約の効力がひろく信ぜられていたのであるが、未だこの不正事件に對して、その責任を問う充分なる非難がなされていない。情々考える時、將來私が屬して居る政府がその様な形勢に処しながら、充分に自己を宣明し得なかつたと云う意味の、歴史の判決に面することを私は欲しないのである。丁度、この時東京から私の思っていることを証明する様な報知が齎されたのである。即ち、ロイター電報通信社代理店の二月八日東京発の急報に、次の如き趣意の文言が報ぜられている。

「中国問題一般、殊に上海問題に就いての永久的解決を目標とする一つの探りとみらるべきものが、今朝日本外務省より發表せられた。それは簡単に言えば、主なる貿易港、殊に上海、漢口、天津、広東、青島の周圍約十五哩より二十哩の間に非武装地帯を設置せんとする提案である。一方滿州も、よく訓練されたる中国軍隊は、警官として利用せられることあるも、また同じく軍備を撤廃せられるであらうことを暗示している。

この提案に對し列強の意嚮を公式に尋ねないが、海外の日本の外交代表者達に依つて公式、或は

非公式に、適當な機會を求めて發表される様訓令であると、外務省の代弁者は云つてゐる。」

公式の代弁者は亦率直に言明して次の如く報じてゐる。即ちかかる提案は九ヶ国条約に反してはいるが、この十ヶ年間の試みはその間に実施せられた政策の効果なきことを証明してゐるし、又外國人に対してと同じ様に、中國人に対しても、福利を招來し得る、唯一の政策は、即ち干涉の政策なることを示してゐるものであると。

たとえ、非公式なるものとは云え、ここには東京の外務省からの明らかな暗示が含まれてゐる。それは今こそ過去の時代に立ち帰り、中國分割の政策に立ち戻るべき時であると云うことである。それは、一八九九年にジョン・ヘイが門戸開放の條約に依つて、制止し得たものである。分割の政策は拳匪の叛亂を惹起し、北京に於けるわが公使館の包圍を齎し、中國を局外諸國に対する公然たる反抗の渦中に投じたのである。二日を出でずして私は、この東京からの提案が中國國民の上に与えた影響の重大な警告に接した。我々は、この國民が、これらの條約の侵害に関する彼等の訴えに対する答が何の效果もない事に、失望させられてゐるということを長い間にわたつて知つて來た。この新しい刺激【provocation 挑発】は、彼等の失望をして、局外の國々に対し恰も三十年前に起つた事件と同じ様に、爆發的行動へと變ずるかも知れないと云うのである。この中國人の感情に於ける新しい危機は、わが政府の態度を宣明せんことを、更に強く要求してゐるも

のと私には思われる。わが国民が政府の政策を了解するためにも、又国際正義に関して、アメリカの信念を遂行するに最善を尽しつつあることを再び証言する為に、この如き声明書を必要とするばかりでなく、中国の人民は、彼等が頼つて来た嚴肅な盟約の国際間の機構が、今や、その当の設定者によつて破棄せられんとしているのを、再び確保すること【安心すること】を必要としたのである。

九ヶ国条約は、かかる両保証を運用するのに明らかに、最も適当な機関として存在している。聯盟規約第十条に「加盟国の領土保全、並びに現在の政治的独立を尊重し、且外部よりの攻撃に對して之を保全す」とあり、パリ条約第二条に「總べて紛争の解決は決して平和的手段以外に依らざること」との条文があることは事實である。然しこの条約は、いずれもその条文の語が甚だ一般的であつて、その条件が多辺的であり、且亦特殊國家に關係無く作られたものである。これに反して九ヶ国条約は、特に中国の場合に適用す可く起草されたもので、その締盟國の賛意せる第一条に於て左の如く規定してある。

(1) 中国の統治權・独立、領土並びに行政的保全を尊重する事

(2) 中国自力を以て有力堅固なる政府を發達維持せしむるために、充分且極めて支障なき機會を与える事



は、日本の行動に依り、今回世界に提出された如き事件を防止せんが為、特に、工夫されたものである。

如何なる人間の言語も前述の二条文程、満州、上海に於て我々の直面せる局面に明白に適用し得る言葉はないであろう。今日までの凡ゆる時期に於て、各国は聯盟規約とパリ条約のみに依つて処理し來つた、九ヶ国条約は今迄適用の清新【発動】は無かつたが、今や条約を採用する必要ある事態に到達したかの如くである。我々国民に彼等政府の歴史的政策を説明するに最も簡明な方法は、該条約が起草されるに至つた実情を述べる事に依り、該条約の条文を指示するにあると思われる。次に中国を安心せしめる最も効力ある方法は、該条約加盟国が今猶条約上の義務を尊重する意志あることを諒承せしむることであろう。

これが私に行動せしめる二つの動機である。併し、若しかかる行動が採られ、この公平明白なる条約が、その重立つた主唱者並びに締盟国に依つて、強硬に而かも誠意を以て提出されたならば、却つてより大なる結果が伴い来る可能性がなかつただらうか。九ヶ国条約中には、加盟国に強制的に會議に参加せしむる権利を附与するが如き条文は存しない。が第七条に次の条文が記されてある。

調印国の何れかの意見で現行条約の規定を適用する必要あり、更にかかる討議の必要ありとされ

る事態の起こる時、当該条約国間に完全且つ率直なる意見の交換を行うべきものである。

日本は不正を行わざりしのみならず、今回の上海事件の工作に於ては苦しい立場に置かれた。<sup>i</sup> 日本は全世界に対し釈明的位置にある。日本が、或程度の成功を収めるまで現在の工作を強行せんとする事明白なる折に、上海攻撃前に日本国民は、我々が企図していた事、則ち中国紛争を中心とする公平な会議へ、相当、否全く切迫した今日、この苦しい立場にあつて、出席すると云う事を進んでなすと云う事は不可能であろうか。たとえ日本がかかる会議出席を拒絶したにしても、他に九ヶ国条約の引用がこの上もなく重要になる可能性がある。

日本に対する経済的制裁の効果的適用は、昨秋よりも上海事変以後に米国に於て論議されていた。その実行の可能性が増大して来た。その行使を求める声は漸く高まつて来た、ハーバード大学のロウエル総長や、ニュートン・D・ベーカー氏等の有力者によつて援助されて。国会は正に開会中で、かかる行為をなすべき権能を、大統領に附与する法律案が、数人の議員によつて議会上に提されていた。米国政府が、世界の他の諸国の共同作業によつて、日本商品の輸入禁止を行うことを勧告する必要があるような状況が最後に起こるとしても、国際聯盟により単独に勧告されるよりも、九ヶ国条約に訴えて勧告される時に、かかる方法が国会によつて採用される機会<sup>i</sup> 「日本は、自分を悪者に行っているばかりではなく、上海の軍事行動では拙い位置に、今捉えられていた。」

が多いであろうと私は信じた。

二月八日私は九ヶ国条約に訴えることを大統領に持ち出した。四日前、日本が四強国から受けた斡旋申出を拒絶した時、我々は日本の寧ろ乱暴な覚書に回答しなかった。大統領はこれについて遺憾の意を表した。それは何か回答がなさるべきであつたと思つたからである。その意味の氣持が新聞紙上に表れたように思う。併し私は、何か新しい建設的な回答に接するまでは、覚書の交換を更に行おうと云う氣はなかつた。二月八日に私は、九ヶ国条約に訴えることに、今やかかる建設的な提案を有すと感じたことを付け加えて、大統領に報じたのである。彼は直ちにその行使の適時性と重大性について私に同意し、我々の一月七日の覚書に含まれるような、非認不注意【否認の通告】が条約調印国によつて宣言せらるべき適當な決定として、公表される事が良いかも知れないことを提案した。

二月九日私は英國大使を招請し、次の如く語つた。即ち私は九ヶ国条約締結に関する目下の緊急な重要性を痛感し、これは、閩北の不法砲撃及び吳淞要塞の砲撃をも含む上海に勃発せる現状に關し意見を明瞭にし、且つ全世界の精神上の維持を集中する事を重要なりと感じる旨を語つたのである。更に私は、該条約第七条こそは、中国の主權と独立に斯くの如き攻撃を加えたことに關する声明書に正しく適用して可なるものなりと信ずる旨を語つた。

今や一刻たりと猶予ならぬ時である。即ち日本軍は上海に新規に、以前より一層有力な攻撃を準備中なる事は明らかであつた。二月十一日米大統領は私が英外相ジョン・サイモン卿は直接電話を通じて呼び掛け、事件の促進を計り、提案に関しては出来るだけ充分の議論を闘かわせる機会を与えるため、且つ英政府が協力するや否やを確かめる事を提案した。私は即日斯く行つたのである。

サイモン外相は国際聯盟理事会のために、ジュネーヴに滞在し居た、又、上海に於て採らるべき手段は我々両国政府の完全なる調和の中にて進捗した。又既に互いに電話を通じて、相談した。多くの斯くの如き事柄に関しても同様であつた。

私は、彼に九ヶ国条約の下に取るべき手段に導いた処の主要な理由に就き、充分な且つ説明を与えた、即ち、我々の地位やを明らかにする必要と二月八日のロイター電報に報ぜられたる東京提案の中国人民に加えられるべき危険に関する事等である。我々両政府は、我々に追隨する他の条約締結国と共に、九ヶ国条約の政策についてなされた攻撃に関して、共同の声明を発表するに當つて条約の第七条に基づいて行動するかも知れぬと云うこと、及び条約締結国として我々は、東京より起こる条約廃棄に対しては、如何なる提案があつてもそれに同意することはないと云う事を明確にするであろうことに私は言及した。翌、二月十二日ジュネーヴに於ける彼と再び協議した

が、それより先その提案について考慮する機会が彼にはあつたのである。そして同日彼の要求に応じて、私が役所の書記官達と作つたこの共同声明の草案を彼に電報した。この声明書は形式上から見れば未だ議論の余地あり、改正の必要ある試験的の草案に過ぎない事を彼に明らかにして置いた。その提案は明らかに内閣や宰相が干与すべき重要なものであつた。ジョン・サイモン卿は翌二月十三日にロンドンに帰る事になつて居た。そしてその声明書の草案は、彼の申出のままに考慮研究のため旅行中の彼の手許に送附された。何人にも明らかなことであるが、英国は九ヶ国条約の締約国であるばかりでなく、同じ論題の検討にたずさわつてゐる国際聯盟の一員であると言ふことから、色々複雑な問題が起つて居た。併し国際聯盟はこれより先、秋の論議に於てパリ条約の支持を求める意向を示した。而して国際聯盟の各員は既にジュネーヴに於けるわが大臣との非公式の会談に於て、九ヶ国条約に頼る様になるかも知れぬと言ふ可能性について議論した。だからかかる障害は排し難きものではないように思われた。併し、それらに徴して私が彼に送つた草案は、国際聯盟の前に、審理を待つて居る日中間に於けるが如き現下の事態に対する責任問題に予断を下す事なき様に、明瞭に書かれてあるものであつた。私が英国の外務大臣に説明した如く、その主な目的は中国の将来の主権と保全とを尊重して、九ヶ国条約の契約に飽く迄従ふこととの意図と我々の信念を明らかにすることにあつた。【次ページにサイモン卿の写真】

私は二月十三・十五兩日、ロンドンに於て再び問題に關して外務大臣と語り合つたが、私の提案に対して何等の明白な拒絶はなされなかつたが、私は最後にこれ等の会話に於いて彼の態度から次の如き確信を得た。私はそれに満足なため、質問も批判も加えたくはないが、英政府はかかる手段【*démarche*】に参加するを好まないことを知つたのである【原注27】。それ故私はそれ以上問題を進めなかつた。

【原注27：ジョン・サイモン卿が2月12日のアングロアメリカン記者協會でなした演説と、2月18日に下院の質問に答えた彼の報告は、彼の政府の姿勢の診断の正確さを私に強く確信させた。】

英国の不参加は、明らかにかかる手段の可能性を抹殺した。米政府は、かくてはその手段の効果を破壊する様な性質の署名国から回答を接受する危険を蒙ることなしに、九ヶ国条約の他の署名国に単独に通牒を発することは出来なかつた。従つて、私の計画は阻害された。私は直ちに、仏国大使クロードル氏とその問題を討議するつもりだったのであるが、英国の態度を知つてそれを断念した。

その時、日本人は二月二十日の激烈なる集中攻撃に移つていた。その戦鬭は日増しに激烈と成り、その状態は益々破壊的危機的………に成つて行つた。中国人及び全世界の國際法支持者は、前よりも更に勇氣と指導者を必要として居るように思われた。その上中国人は、二月十二日國際聯盟理事

会から全聯盟からなる聯盟總會にその立場を訴えた。そして中国の立場を考慮する為に、三月三日會議が招集された。

多数国家のかかる會議には、混乱した事態が生ずるのは明らかなことであるが、若しわが政府にその事態を明白にするに役立つ意見がある場合には、それ等を速に発表すると云うことは二重に重要な事であつた。

数日の間と云うものは、我々が嘗て提議したことのある共同の計画を實行しようとして、自分の才能の欠乏に深く落胆したのであつた。一大事件がその定められた経路を辿つて進行している間に、私はまるで何もしないで終る様に運命づけられているかの如く感じた。併し二月二十一日、私の頭に一つの解決策が浮んだ。そのおかげで九ヶ国条約に対する私の意見を、他人の疑いや懸念にさまたげられることなしに表明出来たのである。私はこの解決策に対してよい先例を持つて居たのである。私は突然次のことを思い出したのだつた。エリフ・ルート【Elihu Root, 1845-1937】がセオドア・ルーズベルト内閣の一員であつた時、彼の戴く大統領が、反対や論議の的となることなしに大きな政策の公表をなさんと欲する時は何時も、机に向つてウィリアム・グッドレー・フォークへと題して公開文を書いて居たと諧謔的に話すのが常であつた。フォーク氏は当時米政府監督局の一員であつて文筆にすぐれ、インディアナでは著名人士で、ルーズベルトにとつて

は献身的な親友であつた。ロ氏は斯くしてその効果を毀損する様な敵意ある反駁をいささかも懸念することなしに、声明を発表し得たのである。私はロ氏の技巧を利用してよいと考えた。上院議員ボラー氏は満州問題論議に當つては終始同情的援助的であつたのみならず、上院の外交關係委員會の委員長をつとめていた。それで私は彼に宛てた書簡の形式で九ヶ国条約に対する我々の意見を陳述することを決心したのである。

その翌二月二十二日は公式儀式に忙殺され、終日忙しかった。その日はジョージ・ワシントン誕生二百年記念祭の当日であつた。朝から夜まで大統領及び内閣々僚等は議事堂に於ける記念会及びマウント・ヴァーノンへの訪問、ワシントン記念道路の開通式等で忙がしかつた。然し、晚餐後、連邦政府のロヂャース・クロット同席の下に、ホーンベック博士が私の為に用意した歴史覚書を得て、仕事に取れ掛かり、夜中までに終了した。その翌日、大統領及び上院議員ボラー氏は、それに賛意を表したので二十四日の朝それは新聞に渡された。それは次に掲げるものである。

「一九三二年二月二十三日

親愛なるボラー上院議員へ【底本では「ゼネター・ボラー」】

貴下、最近、しばしば提案せられた如く、中国に於ける現状が、目下の所謂九ヶ国条約なるもの



は実施不能か、或いは無效果か、若しくは正しく改訂の必要ある事を指示し居るや、亦若し斯く指示し得るものとせば、私の包蔵する意向は本国政府の政策と一致し得るや否やに關し、私の意見を求められた。

勿論、貴下の知悉せる如く、この条約は、中国「門戸開放」主義の基づく合法的基礎を形成して居る。その主義政策なるものは、一八九九年ジョン・ヘイ氏に依り宣言され、該帝国の分裂を脅かす所の、中国に於ける所謂利益圈を狙う諸勢力の争鬭に解決を与えたものである。之が良き結果を収めんが為に、ヘイ氏は二原則を提出された。即ち、

(一) 中国との貿易に於ける機会均等主義

(二) 均等への必要手段として、中国の領土並びに行政の保全

この原則はアメリカ対外政策としては、新しいものではない。それは多年にわたる対外關係に對して維持し來つた原則なのである。中国に就いて云えば、將來の發展及びその大アジア民族の主權を脅かすのみならず、世界各国内に危険にして絶えず増大する競争を發生せしむる危機に頻するが為に、この原則が提出されたのである。日中間に兵火は既に交えられて居た。その戦鬭の終熄に當り三国が仲に入り、日本の主張する戦利の獲得を阻んだ。他の諸国も利權を求めて獲得した。一部この行動の結果として、北京に於ける列強公使館を危機に陥らしめた恐るべき暴動が勃發した。公使館攻撃の進捗しつつある時、ヘイ氏は暴動の鎮定の為に、列強の頼つて行動すべ

き原則としてこの政策に関する発表をされた。曰く――

『アメリカ政府の政策は、中国永久の安全、平和を齎らす解決を求め、中国領土及内政を保全し、条約及び国際法により外交列強に許された権利を保護し、世界のため中国帝国の全地に於ける均等にして公平なる貿易の原則を防衛するにある。』

彼は、斯く発表された政策に対する他列強の同意を、得るに成功した。

この段階を踏むに当り、ヘイ氏は英政府の友誼的援助を受けて行動したのである。ヘイ氏の宣言に照応して、英国宰相サリスベリー卿は、『アメリカ政府の政策に最善を尽して協力する』旨を述べた。

以後二十年間、「門戸開放」主義なるものは、かくて列強に依つて作られた略式委員会に基礎を置いて居た。併し、一九二一年冬より翌年までに、太平洋に利害關係を持つ主要国の参加した会議に於て、その政策は所謂九ヶ国条約なるものに纏められ、その政策の基づく原則に定義と正確さを与えた。その条約の第一項目に中国以外の締結国は賛意を表した。即ち、

- (一) 中国の主権、独立及び領土・内政の保全を尊重する事、
- (二) 鞏固にして有効なる政府を發展維持せしめんが為に、充分且つ最も障害なき機会を、中国に与える事。

(三) 中国全土を通じ、各国の商工業の機会均等主義も有効に確立維持せんが為に、その力を用

いる事。

(四) 友邦の臣民乃至は市民の權利を奪う如き特權を得るために、中国の状況につけこむ如き事を控え、又友邦の保全を害う行動を助長することを控える事。

この条約は斯くして、用意周到に發展し、成熟して来た國際政策を表明する。その政策たるや、一方においては、締約国のすべてに對し、中国に關する權利及び利益を保證すること、他方にては、中国國民に對し、近代的な、發達せる標準に應じた統治權独占權を迫害される事なく、發展せしめるため充分な機會を保證するを意圖している。該条約の調印當時、中国が最近の革命後において、專制政體から自由な自治共和國の制度へと進展せんと努力していること、又この目的を達せんがためには經濟的にも、政治的にも、多年の努力を必要とする、従つて中国の進歩は必然的に遅々たるものであらう、ということが分つていた。該条約はかくて中国の進展に干渉する傾向ある如何なる侵略政策も否認する点において、締結各國間の自己抑制の契約であつた。かかる契約の保護の下にあり、かかる方法によつてのみ、中国のみならず、中国と通商するあらゆる國家の全利害は、最も良く整調され得ると信ぜられた。そして、「門戸開放」政策發達の全歴史はその信條を物語っている。

該条約を發表する大統領への報告に於いて、國務卿チャールス・E・ヒューズ氏を首腦とするアメリカ代表部は曰く『本條約に依り、遂に中国の「門戸開放」は事實となつた』と。

条約から生じた論議の間に英国首席代表バルフォア卿は、次の如く述べている。

『大英帝国代表は、利害範囲を普通りに実施することが、どこかの政府で唱えられたり、又は、この會議に上せうらと思う様な代表が、このテーブルに参加している国のないことを知った。英国政府に関する限り、最も形式的な方法で、公然と、英国人は、この実地は、現状に対し全く不適切なものであると考えていることを發表した。』

同時に、日本代表幣原男爵は、次の如く日本政府の立場を報じた。

『何人も中国に対して自治の神聖なる権利を拒むものではない。中国自身の偉大なる国家的運命を作り出すを妨げるものではない。』

該条約はもと、合衆国、ベルギー、イギリス、中国、フランス、イタリー、日本、オランダ、ポルトガルによつて調印された。その後、ノルウェー、ポリビヤ、スエーデン、デンマーク、メキシコの調印するところとなつた。ドイツは、それに調印はしたが、議會が批准しなかつた。

この条約は、ワシントン會議に於て、当該列強によつて、締結された數箇の条約、協定の一であり、これら、すべての条約は、相互に関連があると同時に相互に独立しているものであることを想起しなければならぬ。これ等の条約の何れをでも無視すると、全体として達成せられている一団の条約によつて完成されると考えられる全般的理解と、均衡とを必ずや妨げるに至る。ワシントン會議は本質的には軍備縮少會議であつた。建艦競争の中止のみならず世界の平和、特に極

東の平和を脅かしている他の種々の困難な問題の解決により、世界平和の可能性を企図するものである。これ等の問題はすべて、相互に連関している。その時の戦艦建造の堂々たる先導を放棄し、又、グアム島、フィリピン群島の立場はこれ以上防備を施さずというアメリカの意志は就中、九ヶ国条約に含まれている自己滅却の盟約に基づいていた。その九ヶ国条約とは、世界各国に、東洋貿易に対する機会均等のみならず、中国を犠牲にして他の列強が軍備拡張をなすに反対する事を保証したものである。九ヶ国条約のこれ等の条項を修正し、又は廃棄するの可能について論ずるものは、必ずそれと同時にその条約が真に依存している他の盟約を考えなければならない。

六年後に、九ヶ国条約に基づく強国の弱国侵略を阻む自己滅却の政策は、実質上、パリ盟約、所謂、ケロッグ・ブリアン盟約により有力な補強工作となる世界各国の有力なる援助を受けた。これ等二つの条約は、独断的武力によらず正義と平和の手段によつて、すべての紛争を落着せしむる国際法による系統的発展の組織に賛同し、良心と世論とを一線に並べるためにとられた独立的ではあるが、調和した措置を示している。中国を他国の侵略から保護する企ては、かかる発展の本質的部分である。九ヶ国条約の加盟国並びに、賛同盟者は次の如く感じていた。即ち、中国民衆四億の秩序ある平和な発展は、全世界の平和な幸福に必要であり、又概して世界の安寧は中国の安寧と保護を等閑にしては企てられぬ、と。

中国に起つた最近の事件、殊に満州に生じ、更に上海に進展した敵対行動は、我々が論じて来

た条約修正の得策を表示するのみならず、極東に利害關係を有する、すべての国家に、条約を忠実に遵守することの極めて重大なることを、はつきり知らせるに役立つた。不幸にして、この二国間に招来されたこの紛争の原因を調査し、又責任を配分することは、かくの如き關係においては、必要なことではない。何となれば、原因又は責任には關係なく、次に述べる事柄は疑いもなく明白である。即ち、如何なる状態の下においても、この國際狀態はこれら二条約を誓約すべき責任と矛盾するに至ったこと、及び若しも、この条約が忠実に遵守されたならば、斯くの如き狀態には至らなかつたであろうという事である。九ヶ国条約及びケロッグ・ブリアン盟約の調印国にして、この紛争の局外者たる国家は、これ等条約の条件を変更する何等の理由も有しない様である。これ等の国に対しては、上海において、その国民が受けた危険と損失とが、之の条約の忠実なる実行の眞の価値を痛切に立証したものである。

以上が本政府の見解である。我々はこれ等の条約中に、具体化されたる明白なる原則を没却す理由をもたない。我々は又若しも、これ等の誓約が、忠実に遵守せられたとしたら、かかる状態に至ることもさけられたであろうと信ずる。

更に、我々は、その為この誓約に対する当然の服従により条約調印国及び、その国民は、中国における合法的権利の適當なる保護を阻害せられる事が起ろうと指摘する証拠は、決して無いと

i "far from indicating the advisability"だから「得策を示す事から遠く離れている」

信ずる。

さる一月七日、大統領の指令により、本政府は正式に日本及び中国に対して、我政府並びに中国在住の我国民に影響あるこれ等条約の規約に違反せるこれ等二国間に生ぜざる立場、条約及び契約を何ら認めざる事を通告した。もし万一世界の他の政府によつて、何様な決議がなされ同様な立場がとられたなら、我々は圧迫と条約違反によつて得ようとしているあらゆる称号、権利の合法性を妨ぐるものと確信する。かかる行為に対しては停止警告を発したであろう。又かかる行為は、過去の歴史の示すように、中国が剥奪されたる権利、資格の回復を中国にもたらすであろう。

過去において、わが政府は、太平洋上の一列強として中国国民の将来における信義を継続せんとして、又立派な本質的な行動忍耐並びにお互の好意を以て、彼等と交際することに窮極の成功を得んとして我政策を行つて来た。我々は中国政治家の前に横たわる中国の国家及び政府の進展に関する膨大なる事業を賞讃する。中国の進歩の遅々たること、信望ある政府を持たんとする企ての不安定なることは、ヘイ・ヒューズ両氏及び彼等と同時にこの人々の予知された所であつて、「門戸開放」政策はこの障害に適應すべく工夫せられたものであつた。我々はワシントン會議に於て、世界各国を代表せる政治家と協力して、中国がその發展を完成するに必要な時間を与えられることを決定した。それを我々は将来に対する政策とする用意がある。敬具

i 底本では「昨年一月十七日」で、「十七」はミスだが、『22』を昨年としているが先月の通告を指している筈。

ヘンリー・L・スティムソン

アメリカ合衆国上院議員

ウイリアム・イー・ボラー殿

私は先にジョン・サイモン卿に送つておいた九ヶ国条約の各国全体の希望の草稿によつて、この手紙を書いたのであるが、それが非公式のものであるため、叙述にも論点にも最大の融通性を有しておいた。その文面によれば、それが少くとも五人の別に記名して無い宛名人に精読して貰うつもりで、書かれたものであることは容易に窺われる。その五人の宛名人とは、先ず第一に中国に対する激励の書として書かれたもので、次に合衆国の一般民衆に対する政策発表である。第三に、今回の国際聯盟會議に集るべき諸国に対して将来起り得る行動を暗示したものであり、第四に、現英国政府の支配下にある保守党に対し、彼等はバルフォア、サリスベリー両卿の手を通じて我々と同様、門戸開放主義及び九ヶ国条約の協力者である事をそれとなく注意したものである。最後に、第五としては日本に対する決意に外ならない。即ちもしも日本がワシントン条約において約された条約の一つをでも破らんとするならば、他の諸国は、自分達にとつて重大な九ヶ国条約と同様に日本にとつて重大な、或る種の条約から解放せられた様に感ずるかもしれぬ。

最も、私の興味を惹くのは、勿論日中間の全紛争の裁判権を握つていた今回の国際聯盟總會で



あつた。その會議に於いては、広くあらゆる他の問題を支配する根本方針が決定される事であろう。又幸運にも上院議員ボラー氏に宛てた私の書簡が発表される前日の、二月二十三日に、日本は上海事変に関する聯盟の訴えに対する回答を公表しているのである【附録五】。その文書に於いて、日本は、長文に中国は、聯盟規約の解釈に於ける「組織せられた人民」と見做し得ぬとの理論を論じている。この日本の回答と、時を同じうして、私が上院議員ボラー氏に送った手紙とは、總會の注意の下に遠く極東において反目し合っている二つの相容れぬ政策を全くよく対照させている。その一つは九ヶ国条約に依つて体现せられるもので、弱少国に対する見透しある自製の政策であり、他の政策は、日本に依つて示された。即時<sup>搾取</sup>××のそれである。聯盟總會には唯単に列強のみではなく、欧米の小国列席していた。そして彼等は、全く自然の結果として理事会よりも遙かに、前者の原則に同情的の態度をとつたのである。

事がかくて解決せぬ間に、我々は、一九三二年一月七日【底本では「九日」】のアメリカの覚書に述べられていると全く同様な非承認政策を採用する決議が提出され、多分總會を通過するであろうと云う事を非公式に告げられたのである。實際、私が上院議員ボラー氏に出した手紙の発表前の二月十六日に、理事会の十二ヶ国委員は、日本政府への訴えに於て、聯盟規約第十条の条文について注意を喚起して『聯盟規約第十条に従い、聯盟加入国は他国の領土保全並びに政治的独立

の尊重保持に努めて来た』と云っている。そして次に彼等は彼等（聯盟十二ヶ国委員）には次の如く思われるという注意を加えている【附録五】。

『聯盟加入国の領土保全に対する如何なる侵害も、亦政治的独立に対する如何なる変化も、この箇条に関係なしには生じないという事は、聯盟加入国によつて確實にして效果的であるとみなされねばならない』と。それにも拘らず、この用心深い訴えは、各国全体による積極的宣言とは全く趣を異にしたものであつた。而して總會開会が近づくにつれて、不承認の如何なる決定さえも遂には巧に外されて了うのではないかと危ぶまれるに至つた。

一般軍縮會議が國際聯盟總會と同時にジュネーヴで開かれていた。而して私が上院議員ボラー氏に出した手紙は、この會議に出席して何か云うところあらんと欲する小国の代表者の是認を慫慂していた。私は、會議に於ける承認事項についての有效なる行為が、軍縮會議に於ける長い弁論と決議に変えられることにより、横道に這入りはせぬかということを警告された。

同じ日、即ち三月四日、新聞紙は次の如く報道した。即ち英国下院に於ける質問に答えて、外務次官は、英国政府は不承認に関する決議を支持するか如何か解らぬとの事であつた。

私はこの流言に当惑した。私には總會に上提されている世界的重要性を有する事柄についての

i "Assembly" 底本は「下院」、いっでは聯盟總會だろう。

指導が混乱しているかの様に思われ、この指導が明らかになる迄は、比較的一般に重要性の少いと思われる事件について、我々が共同動作を徐々にする方がよいのではないかと思われた。

上海に於ける戦闘は三月三日に終熄した。日本は、その……軍隊を撤退させて……混乱状態から脱したい

と切望していた。上海に大なる経済上の利害を有する諸政府は、このことを出来得る限り速に完了して貰らいたいと猛烈に迫っていた。公使及びその他の国家代表者の会議が、これを実行すべき方法を樹てる目的で上海に開かれた。上海に於て採られた種々の措置に関する他の総ての事件と同様に、我国は急を要する些細事件の凡てについて他国と熱心に共同動作をとつて来た。今や私には、尠くともジュネーヴの舞台に現れた究極原則の問題について、尚一層明確なる了解が得られるまでは、これ等細目の事も延期することが出来る様に思われた。三月四日私は我国の駐中国公使に訓令を発して、私より今後の通知のあるまでは、上海の会議に出席することを控える様に伝えた。次いで私は、スイス駐在公使を通じて、その当時ジュネーヴに居た英国の外務大臣に私のなした事及びその理由を通告した。英国外相は、私の通告に答えて會議に於ける英国の意嚮に關し鄭重な再保証をした。

その後は最早や面倒な事は起らなかつた。

## G 総会による行動

三月七日<sup>i</sup> 国際聯盟に於て英国政府は、一月七日の我国の覚書の実行に対する決意を強硬に示して次の如く述べた。

総会は、国際聯盟加盟国は国際聯盟規約若しくはパリ条約に背馳する如き方法によつて生ずる如何なる事態、条約、協約をも認めざる義務あることを宣言す。

この決議は十一日の総会に於て満場一致を以て通過した。論議の係争者たる日本と中国とは投票しなかつた【原注 28】。

【原注 28：列強の態度を記述する決議に於ける論議、英国外務省の動き、ボラー上院議員への手紙の議論の影響の記事は、次の書に記述されている、Royal Institute of International Affairs, *Survey for 1932*, pp. 575-578.】

その翌日私は、ワシントンで新聞紙に次の如きステートメントを発表した。

ジュネーヴの聯盟各国は、極東の危機を孕む騒乱に対して、同じ態度と同じ目的とを以て結合した。総会の行動は、パリ条約及び国際聯盟規約の双方に見出される平和の目的を表明している。この表明によつて世界各国は、声を同じうして述べる事が出来る。この行動は、国際法なる語の中に、これ等条約中にある秩序と正義との原則を發展せしむるに至

i 底本では五月。原著は三月。

るであろう。而して合衆国政府は、進んでこの努力に協力して来たのである。

尚、上海で慎重に事を運んだもう一つの同じく重大なる理由がある。上海に於ては種々の国が中国との関係上、苦しんでいて、古くからの【“Topsy-like”】<sup>i</sup> 小さな不平の種が沢山ある。その幾つかは長年の間承け継がれたままになっている。

共同租界そのものが、混乱状態の中に、屢々何等合理的の根拠も関係国全部の承諾も無くして、以前から増大して来た相反せる利害及複雑な問題の進化を表している。問題は、常に中国の自主権と長年の間中国に拠っている国々の利害との間に起つたものである。

上海では中国政府及びその軍隊、市民は……<sup>日本軍</sup>により酷い目に逢わされて居り、この状態を清算し、常態の生活に立戻ろうと努めて、一般會議が開かれたが、これは多くの人々にとつて、こ

れ等の多年の渋滞して居て、問題を中国の負担【犠牲】により清算すべき、天恵の好機を与えられたものの様に思われた。我国の上海に住んでいる市民及官吏は、同様に感じた。彼等は長年の間、中国と討議している種々の小問題を清算決定せんことを要望していた。斯くする事は一つの強き誘惑と云うべきであつた。殊に、ここに居住して働いていて、長い間不合理な不便に苦しんでいた人々にとつて尚更であつた。併し根本的にこの問題は、日本の……<sup>侵略にと</sup>り有利となつたと

i 原著では「古くから」に挿入して、「トプシーのように過去から」と、アンクルトムの小屋に登場する話し。

云われるであらう。

そこで私は、出先官憲に訓令を与えて、第一に中国が要望するまでは会議開催を促がしてはならぬこと、純粹に軍事的事態に關すること以外の問題を、會議に付してはならぬ旨を警告した。一方この會議に於ては、中国に対して、中国が平和的なボイコット（不売同盟）を行う權利の抛

棄を論議にのせることを、強いてはならぬ。それは、ボイコットを挑発した滿州に於ける日本の行動を含む紛争事件の全部を議する様な、日中間の全体會議に讓るべき大問題である。他方、我國の代表者は、殊に注意して中国を犠牲にする様な外国列強間の結託には、凡て参加してはならない。それは、日本の占領に乗じて、共同租界及びその幾多小事件に關して、各自が勝手に

恩恵を奪いとる結果になる。我々は、絶対に潔白な態度を以て會議に臨まなくてはならぬ。将来に於て、我々の真情を曖昧ならしむる如き処置があつてはならぬ。

これ等の事柄に於て、私の甚だ困難な仕事は、大統領の全く正しい見識によつて容易になつた。大統領が私に「未だ日本軍が駐在している上海に於ける今次の會議に於て、若し我々が、仮令一弗と雖も利を奪う時は、ケロッグ条約を侵して武力圧迫のもとに利益を得たことになるであらう。」と語つたことを思い出す。

我々二人は、かかる誘惑に屈することは、中国及び利害關係を有する他の諸国に対して、極東

にその地位を確保するという将来の重大問題について、全く勢力を失墜することになるであろうということを知っていた。

一部分承認規定を含む三月十一日の決議により、議長と会議委員（日本及び中国を除く）及び無記名投票により選ばれた、他の六名の委員よりなる十九ヶ国委員会の任命を見るに至った。この委員会は、わけでも日本軍の上海撤退を見届けるという責任を以て、聯盟総会に代って紛争の裁断権を保持し、一九三二年九月三十日及び十二月十日の理事会決議の実行、及び当事国間の仲裁に一層の努力を致す筈であった。【原注29: この決議文の全文は Willoughby の *Sino-Japanese Controversy*, p. 299, および Royal Institute of International Affairs, *Documents on International Affairs*, 1932, を見ることが出来る】【附録五】

聯盟総会は、会期続行の目的を記録し、結局は問題を收拾することが出来るので、その議長に命じて会議開催の必要を認め次第、開会させることにした。

十二月に紛争調査のため任命されたリットン委員は、既に極東に到着し、その事業の実行に当たった。その間何等の解決に到着しないと仮定して、リットン報告書の提出の際、聯盟総会のなすべき仕事が起こるであろうと予期されていた。

斯くしてその後、上海に於ける事態の解決過程は、二つの国際的団体に依って監禁【監督】さ

れた。即ち、

一、日本軍隊撤退、及びその交戦より結果された他の地方問題に就いての、上海に於ける各  
国公使の会議。

二、ジュネーヴに於ける、聯盟のため一般的監督を行う十九ヶ国委員会。

この点に関し、上海の仲裁者にとつて、非常に熟練と忍耐を要する幾多の困難と遷延が起つた。例えば、中国は、期限付軍隊撤退を要求して止まなかった。一方に於て日本は、撤退に際して日本国民の保護に対する保証の形式で、出来得る限り面目を保ちたがった。四月二十六日【原注30】、十九ヶ国委員会の努力に依り支持された地方の仲裁者の忍耐に依り、首尾よく一つの契約が考案され、五月五日正式の停戦協定が調印された。斯くして五月三十一日<sup>二千五百</sup>××××名の陸戦隊を守備隊として残して、日本軍の最後の部隊が上海を出発した。日本の上海に於ける干渉という、不成功な結果であつた骨折りが終つたのだつた。【原注31】

【原注30】珍事によつて、私自身この契約【打開策】の受け入れに、役に立つことがあつた。後に触れるように、契約が討議中、私は四月の後半ジュネーヴにいた。その時、私は、日本の友人、群を抜いて公平で正しい判断力を持ち彼の政府に影響力を持つ、彼の訪問を受けた。四月二十五日、彼は私を訪ねて、提案されている契約は、日本政府にとり次のような問題があると言及した、即ち、日本の軍隊の行動は、全て天皇の権限下



にあるという憲法に抵触する恐れがある、と。私は、彼に次のような話をした。日本が自身の軍隊に命令する権限を奪う如何なる決議にも同意出来ない、という事は理解出来る、しかし、この決議案は私には、地方の中立委員会は、限られた時間に、生命財産などの危険なしに撤退がなされるかどうかに限った報告をなし得るに過ぎず、天皇には未だ最終決定が残っており、事実、彼には中立的な公平な意見が与えられるに過ぎない、と見える、と彼に話した。友人はこの提案に感心したようで、そうであるなら政府の反対も取り消されるだろう、と言った。日本政府の受理は、すぐ後に続いた。】

【原注 31 : Royal Institute of International Affairs, *Survey for 1933*, p. 514. 「剣によつて上海の難局を一気に打開する日本の試みは、目的を達せなかつたという事を言うことが残っている。反日行動は残つた。一九三二年八月末の『満州国』の日本の承認と同時に、上海で急迫する更なるトラブルの噂が、また、続くボイコットが更なる暴力の発生をもたらすに備えて、日本国民保護のために、海軍が小艦隊を派遣するといふ噂があつた。』 Willoughby, op. cit., p. 362. 「日本をして上海地区に軍事行動を取らせた理由がなんであつたにせよ、日本にとつて事業全体が惨憺たるものであつた。結果的には、日本に向けられた組織的ボイコットの痛みを減らすことは出来たが、日本は巨大な代償を払つた。陸海軍の多くの命を失つた。金銭的損失も莫大であつた。日本の侵略に対する中国の抵抗運動を、弱めるより寧ろ強くした。そして、何より、中国との比較において、日本の遣口の限度と性質を、満州の侵略がなしたよりも更に一層明らかにした。』】

## 第四編 責任の審判

### 一 判決の性質と米国政府への重要性

三月の聯盟總會の行動は、國際的行動に前進の一步を印したと同時に、日中紛争にまつわる四圍の空氣を一掃する道德的效果があつた。けれども兩國間の係争の当否に關しては、何等の決定を見なかつた。そして侵略行為の成果を承諾しない旨の決議案採択は、かかる決定ではなかつた。それは聯盟總會内五十ヶ国が今後法律的事件が起きる場合、これを提起するという、將來の行動を指導するために決定された規準を記録するためであつた。そしてそれは、日中間の特殊な紛争の是非に対しては決定を見なかつた。

中国側は、日本は「満州国」に対し不当に侵害したと主張した。是に対し日本は、右事實を否定すると同時に、行動は全く自己防衛と在留邦人保護の爲であつたと述べた。

満州の地に新國家建設のため他の工作が施されたが、之を繞つて日中兩國の間に新なる紛争が惹起された。中国は之に就き、新帝國は全然日本の単独行動に依つて樹立されたもので、既存の各種日中條約に依る、日本の負える義務に違反するものであると云い、之に対し日本は、「新國

家の樹立は全く満州住民の自治と独立運動の所産であると主張した。これ等の問題に就いて世界の他の国家は、事実の審判及び責任の判定に関して何等の措置をもとつたことはない。

しかしながら聯盟の加入各国は、アメリカと異なり、この紛争に対し審判を行い、決定し得る機構を有して居る。日中両国は聯盟加入国であり、且つ加入である事に依り、この聯盟機構に服従する事を承諾したのである。

而して該機構は既にその活動を始めた。即ち、規約第十一条により、十二月十日招集された總會に於ける決議に基づき、公平なる委員会を満州に送り、紛争の事実を調査し、之に対する報告文を聯盟に提示するに決し、その委員の任命を見た。この任命に日本は完全に同意を表した。

この委員会が聯盟に対して報告を行い、加盟各国が該報告を聴取した場合に、聯盟は事件の本質に就き決定を下し得る訳である。かくして下だした決議は、裁判手続上の基本的要素を形成するものとして、加盟各国に認められた条件に適合するであろう。之と同様な調査報告も亦、他の聯盟規約条項に基づき行ふ事を得る。特に規約第十五条は、かかる裁判手続に基づき公平なる断定をなし得るものである。

かかる考察は読者に対し、日中紛争事件の如き問題に於て、聯盟加入諸国は、非加入国たる米国の占むる地位よりも有利なる立場にある事を、理解せしむるに役立つであろう。之は大なる利

益であつて、現代世界の政治的進歩を表象する。

過去数カ月にわたり、幾度かフーバー大統領と私との間には、この紛争を考察するに際して、アメリカと聯盟諸国との間の地位の相違と云う事が問題にされた。この錯綜せる日中紛争に於て、アメリカの權益を擁護せんとして、我々は常にこの問題に当面した。

条約の尊重と云うことがまた含まれている。これは私の既に指摘した如く、わが政府及び国民にとつてその影響する所甚だ大きい問題だ。極東に於ては現状の変化が着々として行われて居る。それは極東に於て事業に従業して居るわが同胞に直接影響をもたらすのみならず、将来の權益に影響するところ甚大なるものがある。日本の行動及び主張は、これらの条約及び条約に基づき我々の有する權益に対し、重大なる影響を与えるであろうと我々は考えた。これら日本の行動のあるものは我々の眼から見れば、明らかに条約違反であり、且又その理由として発表するものは、到底首肯しえないものである。

然しながら、パリ平和条約、或いは九ヶ国条約の何れにも、日本の行動及び要求に対し、調査及び判定を与えるの権限を我々に附与する様な機関ではない。この機関は、聯盟規約に依り聯盟加入国全部が持つて居るのである。約言すれば聯盟加入諸国は、法律及び法的手段に依つて統治される世界に住んで居り、他方我々は、暴力及び暴力の脅威に依り支配される、無政府と殆んど

変らぬ世界に住んで居るのである。

若し日本さえ承諾したならば、恐らく日本の要求の若干は国際仲裁裁判に附せられる事になったであろう。然し仲裁裁判は遅々かつ煩雜なる方法である。而もこの仲裁裁判の成立は、関係当事者たる両国の賛意を絶対必要として居る。今回日本が「滿州に於ける我行動は、他国よりの何等の干渉をも受くべき筋のものではない。」と主張した如く、或る任意の一国が問題を仲裁裁判に附する事を拒否した場合には、その国の行動の正邪に就き、調査及び判定を為し得る平和的方法は、我々には全然恵まれて居ないのである。然るに聯盟規約にはかかる方法が存在し、且又制裁手段も規定されて居る。更に、或る一国家が非なりと断定された場合には、或る場合、或る状態の下に於て、該国家に対し經濟的圧迫に依る制裁を加え得るのである。しかしながらアメリカ政府には、ある国に対し世論によつて道德的圧迫を加え、乃至は世界的世論のために平和的判決を加える方法すらもない。

この極東の紛争を、その究極の可能性にまで推し進めて考えるならば、これは太平洋を隔ててアメリカの対岸に住む所の、幾億の人民の發展と成長に影響する所の、極めて遠大なる問題である。更にこれら幾億の中国住民及び之と近接せる住民について、長い間に於て最も甚しく影響を受けるものは、恐らくはロシア人とアメリカ人であろう。かくてこの問題の中には法律及び秩序

上の問題及び将来に於ける経済的發展に関する問題も含まれて居ると思うであらう。しかもこの我々の前途に置かれたこの紛争に就き、友誼的傍觀者としての立場以外には、如何なる形式に於ても参加してないのがアメリカの立場なのだ【原注二】。

故に我々は、リットン委員会の任命に際し、聯盟に依つて制定された手続の経過に対し深甚の注意を払つた。そして該委員会が事実に対して公平なる判断を下し得る様、能う限りの道德的援助を惜まなかつた。我々は、今回の紛争が正当なる結末を告げん事を衷心より希望した。而してそれだけが平和裡に問題を解決し得る唯一の方法であつた。

【原注一…アメリカ人のマツコイ將軍がリットン委員会の一員であるのは、事実だ、しかし、彼は単に一員であるにすぎない、聯盟によつて任命されただけなのだから。我々は政府として調査に与る權利を持たない。マツコイ將軍がなしたことは聯盟への責任としてであつて、我々に対してではない。】

## 二 日本政府の取つた行動はその裁決を無効ならしめた

日本軍が在滿中国政權を打倒した殆んど直後、日本政府は滿州の地に政治的、経済的統制を樹立する目的を以て、各種の工作を施し始めた。それは表面独立して居るが、事實は

日本の支配下に傀儡國家  
 .....「滿州國」と称するものを.....強制的に建設するためであつた。

故に、各国がこの<sup>占領</sup>の成果を正当と認めざる旨を声明するや、日本政府は世界の他の国の政策を能う限り、困難且つ非效果的ならしむる為に、更に進んで種々の工作を行った。

これ等の行動によって、<sup>日本</sup>は先ず事態の真相に対する判定の下さるるを妨害し、又かかる判決の下されたる場合には、之が実施を不可能ならしめんとした。

日本が相次いで行つた各種の工作は、リットン委員会の調査の完全なる対象となつた。之に対してリットン委員会が、全員一致で与えた報告は正確にして權威あるものだ【原注二】。此処では、単に日本政府に依る各種工作の簡單なる記述に止める。

【原注一】リットン報告第六章「満州国」参照。アメリカ國務省は、この点では一九三一年秋に受けた報告（既說第二編第三節末参照）により珍しく優位な位置にあつた。これらの報告は、「満州国」の「自主的な」創立を「促進」するのに、またそのように協力した中国人による新しい政府の職の「自発的」承認を成し遂げるのに、日本の役人と密偵によって取られた処置の大変詳細な記述を与えてくれた。】

#### A 「満州国」の成立及び日本の満州国承認

「満州国」建設に當つては、日本は大体に二十年以前<sup>朝鮮</sup>……【韓国】に対して行つた計画に従つた。……は元來名目上は中国の宗主権下に属して居たのであるが、一八九五年の戦役【日清戦争】に

於ける軍事行動に依り、日本は………中国の統治権を破り、中国をして朝鮮の独立を承認せしめた。それから日本の指導下に朝鮮政府が出来あがつたが、遂に一九一〇年日本はその領土の一部として正式に朝鮮を併合した。  
 ……

満州の場合に於ては、中国政府が賢明にも、戦争に陥る事を極力回避したる為、また聯盟が批判的反対に立つたため、日本は前の朝鮮併合当時に比して、より慎重に行動するを余儀なくされた。日本の軍事行動は、承認されたる戦時状態に結果しなかつたので、日本が中国に対して、満州の独立承認を強要する事は不可能であつた。然し日本軍は軍事行動に依つて、在来の中国の政權を強制的に倒壊し、忠誠なる一切の中国人官吏を逃亡せしめるに成功したのであつた。かくて一九三一年十月下旬の初頭、日本軍の圧力下<sup>日本軍の圧力</sup>に、仮中央政權は各都市に、仮地方政權は各地方に建設されたのであつた。

これら政府は何れも日本人に依つて組織され、又その官吏の大多数は日本人であつた。中国人にしてこれら政府の官吏となつた者は、概ね………日本勢力の圧力………に依つて余儀なくされたものであつた。これ等の地方及び都市に夫々樹立せられた地方政權は、やがて糾合されて全満州にわたる中央政權の樹立を見た。この中央政權も亦、同様の形式と同様の人的要素より成立つたものであつた。

i "A puppet Korean emperor and government" 「傀儡韓國王の政權」。



斯くして樹立せられた「満州国」中央政府は、一九三二年二月十八日、『中国よりの独立』を宣言し、続いて翌日共和政体を採るに決し、溥儀氏を行政長官として招くに至った。溥儀氏は中国に於ける前の満州帝国の廢帝で、数年間日本人の保護下に生活していた人で、始め天津日本租界に住んでいたが、後關東州日本租借地【「Port Arthur」旅順口】に移った。

三月九日彼は迎えられて、新国家の執政の位に即いた。而して氏は、『道德、博愛、愛』を基として新国家の政策を行う旨を宣明した。

日本の朝鮮に於ける既往の行動と照し合せて考えるならば、日本の満州に於ける動向が如何なるものであるかを予見する事は、我々國務省に居る者に取つて困難な事ではなかった。日本政府が声を大にして、尺寸の地と雖も中国の領土を併合するの意志なしと声明していた当時、一九三一年十一月十七日、閣僚の会合のあつた時、私は次の如き見解を述べたのであつた。「差し当つて日本はその指導下に属する……傀儡政権……を満州の地に作るであろう。」と。一九三二年一月七日の外交文書起草に當つては、私はこの事を予期したが故に、その字句を広義にして、實際上現出したる『事実上の事態』をも認めずという如き文字を使用したのである。三月十一日の聯盟總會の決議に於ても、用意深く同一方針が踏襲された。

日本が直に公然満州を併合したならば、國際調査委員会の調査は比較的に樂であつたであらう。

しかしこの様な状態の下においては、その証拠や事実が、日本側の監督下にあつて……捏造されたものであるということは、何人にも極めて明らかであるけれども、しかもその法律的調査において遙かに困難な事情にあつた。そこには委員会に、幾多の矛盾衝突する証拠が集るであらうばかりでなく、日本政府は……一方的なる声明書及び報告書に依り、その国民を……欺くことが出来、かつまた日本は何等の不正を犯せることなしと云う情熱的信念を、国民に起さしむることは極めて容易であるからだ。是は明らかに……力によつて獲得された結果を擁護するには、最も賢明な方法である。之が為にリットン委員会はその調査の門途に於て、早くも困難を感じた。この事はリットン委員会に対しても、更に聯盟總會に対しても大なる勇氣と忍耐を必要としたのである。『日本の採った処置は、かの裁判官達に敗北主義の精神と軋轢を促進するためによく計算されていた。』

## B 「満州国」に対する判決を阻止せんための手段

「満州国」肇立の日本の行動が、各国の不承認を到底免れないと知つた時、日本は、これを無理押しに通そうとする数々の運動に着手した。即ち若し、各国が不承認を固執する場合、かかる挑戦的態度がもたらす困難を各国に警告し、最後に、事変調査のため日本自身の承認をもつて任命せられた調査委員会の報告が出る前、「既成事実」として之を各国に提示することであつた。

これらの手段はすべて記録されており、私は簡単に言及するを以て足れるとする。

一、「満州国」官吏承認に対する要求。聯盟総会が中国の要求を考慮すべく開会して後、未だ十日ならざるに、而して不承認の決議案が通過させられたその翌日、三月十二日「満州国外交部々長」は、満州に領事官吏を有する十七箇国並びに又他の約三十五箇国政府に宛て、通牒を發し、「満州国」なる独立国家の成立を声名し、而して通牒接受国と「満州国」との間に於ける正式の外交關係の樹立に対する「当政府の熱烈なる希望」を發表したのである。

二、関税並びに塩收入の没収。満州からの総関税收入及び一部の塩收入は、一九三一年九月十八日の日本軍の事件以前迄は、南京に於ける中国国民政府に所屬し、且つそれに送達されて来て居た。これ等二種の收入は対中国外債の担保に入れられ、且其等の徵集は中国政府雇傭の外国職員に依り処理されて来て居たのである。例えば、塩税の監督長官は一英人であつた。これ等の收入の悉くは今や「満州国」新政府に依り要求され、而して一九三二年六月に強制没収され、中国政府に依る管理は終末を告げたのである。

三、聯盟総会が満州に於ける調査を更に進む曉に於ては、日本は總會を脱退すると威脅したる事。これに関する警告が四月四日私に与えられ、且同様の警告が、大英帝国、フランス、イタリー、ドイツ、チェコスロヴァキア、ギリシャ、ベルギーを含む他の列国に宛て發せられた。

更にまた私の通告されたところでは、日本の反対の特殊的根拠は、日本の満州に於ける特殊なる地位及びその地に於ける日本の權益に依り、日本はかかる問題への外部よりの介入を黙許しないであろうという事、又特に、満州問題に対して聯盟規約第十五条を適用することを許容出来ないであろうという事であつた。規約第十五条の適用に対する同様の反対が、三月の聯盟総会に於て、日本代表に依つてなされたのである。

四、日本に依る「満州国」の承認。一九三二年の八月に、リットン委員会はその実地調査を終了し、蒐められたる証拠の審査とその報告書の起草に従事して居た。この事が進行しつつあつた間に且、仮令、それに影響を与えるという明白な目的ではないとしても、それに直接に連関して、外務大臣、内田伯爵が、八月二十五日東京に於ける議會でなされたる演説に於て、彼は「満州国」に対する日本の承認を「満州問題解決の唯一の有効なる手段であると考えて居る」といつた。而して、同演説に於て、「或る方面に於て考慮せられつつあるところの計画」(明らかにリットン委員会を意味するものであるが)の方針に基づいて、「満州に対する支配權を、何等かの形式に於て中国本国に与え、それに依つて当分の間事件を一時纏め上げるといふ解決方法」に對し、日本国民は「絶対に不同意」なることを述べたのである。その為、日本政府は「満州国」なる新國家に對し、承認の條約を締結することさえ急速に歩を進めたのである。この條約は、九月十三

日、日本の枢密院に依つて承認せられ、九月十五日満州の長春に於て調印せられたのである。該条約の第二条の規定は次の通りである。

(二) 日本と満州国は、その契約当事国の何れか一方の地域或いは平和と秩序に対する如何なる脅威も、同時に他方の安全と存立に対する脅威を構成するものなることを認め、その国家の安全の維持に対して協力することを協定する。而してこの目的のために必要なる日本軍隊を満州国に駐屯せしむることを約す【原注3】。【日本国満州国間議定書：外務省デジタルアーカイブ『満州事変』第二卷第一冊二の第310項】

【原注3: Royal Institute of International Affairs, *Survey for 1932*, p. 463. より、外交の既成事実——日本が若干の「面目を失う」ことなくそこから退くことが出来ないそれ——を通して、満州国の創建をねじ込むことによつて、計画的にリットン報告の出版の機先を制すること、日本政府は、ジュネーヴで「行動に入る」に先立つて、いわば「旗色を鮮明にした」のだつた。日本人の心に庄倒的な反対を呼び起こすことなくその傀儡を捨てることが出来ないような状態を、彼等は意識的に作っていた。】

リットン委員会の報告書は、一九三二年九月四日北京に於て調印されたのである。然しながら、該報告書は、十月一日ジュネーヴに於ける聯盟理事會に提出される迄、公表せらるべきではなかつたのである。【“It was not to be made public until...” 公表されることはなかつた。】

九月二十四日の聯盟理事会會議に於て、議長、アイルランド自由国のデヴァレラ氏は、陳べて曰く、

「私はこの事を述べて遺憾の意を表さなければ日本政府、並びに全体としての聯盟加入国に對して、率直さが欠けて居ることになるであらう。即ち、委員會の報告書審議前に於て、否該報告書の公表さるる以前に於て、日本が、單に所謂滿州国政府を承認するのみならず、条約を調印し、その結果当紛争解決を阻害する計画と考えざるを得ない処置を取った事に就いてである。この遺憾の意は理事会員大部分の感じて居るところである。殆ど一年間、集團的資格において理事会、及びそれを構成する各国政府は、この重大紛争の理非曲直に就いての意見を發表することを、慎重に避けて來たのである。何故なれば既に一委員會が当紛争をそのあらゆる方角から調査すべく組織されて居る以上、該委員會が報告をなし、然してその報告書が聯盟諸機關に依り考慮せられる迄は、全問題は依然として未決なりと考えられるべきものであるからなのである。」

以上簡単に列挙した事実によつてもこの事は認められる。当時滿州においては幾つもの手段がとられ、それによつて、商業上利害關係を有する各政府間の調整の機会が如何に多く作られたかという事、又、若しこの集團的行動が失敗せず、成功せんがためには如何に個人的會談及討議に

よつて相互の誤解を解くことが重要であつたかということである。

一月、私は大統領に依り、一般軍縮會議のアメリカ首席代表に任命されて居た。併しワシントンに於ける私は職務繁忙の爲、他の代表がジュネーヴに出帆した時、彼等と共にその會議に列するため出発する事不可能であつた。その以前に生じて居た或る提案に就いて他の委員と協議する爲、少くとも短期間該會議に列する必要があつた。國際聯盟の總會會議が軍縮會議の諸会合と共に同時にジュネーヴに於て進められつつあつた際であり、而して兩會議は實質上同一の諸国家を以て構成せられて居た關係から、私はこの双方に出席し得るため、四月ジュネーヴを訪れるべく決したのである。

### 三、私のジュネーヴへの旅

私は四月八日に出帆し、五月十四日にアメリカへ再び歸つた。四月十五日朝ハーブルに上陸したる私は当日パリに於て、首相タルデー氏及び外務次官ベルトロー氏に會見し、当夜ジュネーヴに赴き、残余の時間をその地で過ごした。私がジュネーヴに滞在中、大英帝国のマクドナルド及びフランスのタルデュー首相、ドイツのブルューニング宰相、イタリイ外相グランディ氏、ロンドン駐劄日本国大使松平恒雄氏等は何れもその各々の任地から會議のためジュネーヴにやつて来

た。その他多数国家の代表者が既に聯盟總會、或いは軍縮會議出席のためにジュネーヴに居た。これ等の人々の中に、總會會議長であるベルギーのハイマン氏、總會事務次官イリック・ドラモンド氏、及び派遣委員或いは代表者として、英国外相ジョン・サイモン卿がヘイルズハム並びにロンドンデリーの諸卿と共に居り、フランスのボンクル、オーベル、マッシリイ、イタリーのロッソ氏、ドイツのナドルニ博士及びフォン・ビュロー博士、總會前の中国代表顏惠慶博士、スイス共和国大統領モッタ氏、チェコスロヴァキアのベネシュ首相、ハンガリーのアポニー伯爵、南阿連邦のタア・ウオーター【Messrs. le Water】並びに「ユー・ジーランドのウィルフォードの両氏がいた。

これ等の紳士並に米代表随員及その他多くの人々と共に、私は會議をし、その内の或者とは何回も会見した。これ等の會議は非常に有益であつた。私はかねてから國際關係においては如何なる方法におけるよりも、直接的協議が相互の了解に不可欠のものであることを信じていたが、この確信は確かめられた。それは海底電信、至急報、使節という普通の方法を通して遂げられ得るものを一層補強する。他國諸政府の首領等と面談することは、各國の政府が有する困難及び意見を相互に諒解することに利益がある。各國政府の当局者間に於けるかかる正式且直接の接觸は、國際聯盟組織に依りこれ迄確立されて來たものの中最大の革新であり、而して私の考えるところ



では国際関係の処理に対する最も顕著な貢献の一つである。

聯盟の日中問題に関する態度は判明し、また諸問題に対する私の諒解も明瞭になった。小国は、聯盟の期図する【“striving” 目指す】一般的諸原則を擁護することの重要性に就いて、大国よりも遙かに一層強い念を有していた【「また当然に、過程に横たわる細部の困難に僅かにしか煩わされない」】。小国はその諸原則の思想に与るところ大であり、またそれから来る危険や困難は比較的少ないのである。併しながら、彼等ですら、日本の頑固な態度に依って提起されたところの障碍には、大いに心を動かした。併しそれにも拘らず、彼等はその論争の倫理的意味を確く把握し、その倫理的意味を一個の論理的結論にまで進めることを避けなかったのである。

かかる事件の際において、大国側の力強い統率者が必要であるが、しかもこれ迄の所、斯様な統率者は現れて居らない事実について、小国から率直なる意見の発表があつた。後者の点に就いてはジュネーヴに於ける新聞社通信員の批評に【批評は】率直、かつ一致していた。戦争に依つてさいなまれたコーカサス人種<sup>i</sup>の諸国家が、非常なる関心を示しているところの集团的組織の力の最初の大なる試みが、世界の反対側に在る他の人種間の一紛争問題によつて危機に迫つた事を世界の不幸だと感じたのである。

i “Caucasian”、おそらく、戦争に明け暮れてきたヨーロッパ及びその周辺部を指しているのだろう。

私は又、大英帝国、フランス、ドイツ、イタリー、中国、及び日本を代表する人々と再三会議した。マクドナルド氏及びジョン・サイモン卿との最も率直且非公式なる再三の会談に於て、過去に生起した事件及び極東問題として将来予想せられ得る事柄の詳細に就いて、意見を陳べた。何人も事件に対し、将来執る行動に対し完全なる協力を求める熱烈な切望は一致した。誤解を可及的に少なくするために、我々は一会議を開いたが、それには単にマクドナルド氏、ジョン・サイモン卿及び私が出席したのみならず、又各部門の専門家代表者が出席し、将来誤解が予想されるようなあらゆる将来の問題について論議を重ねた。私がジュネーヴを引き上げる時、私は私の出来る限りにおいて誠実にアメリカの目的と政策について、イギリス政府当局者に、明白ならしめた事を感じたのである。

フランス代表者との、私の会談は同様に率直なものであつた。詳細の程度に於ては英国代表との会議より欠けるものがあつたけれども。タルデー氏は旧友であり、常に率直であつた。併しながら、極東問題に対する彼の觀察は、明らかに他のものを通じてのものであつた。事務次官ペルトロー氏は其等の問題に詳細に通じ、会談に於て同情あり理解ある見解を表明した。私がワシントンのクロードル氏に依り、フランス筋から受取つたところの極東情勢に関する報告は、他の外国筋より入手したものよりも最も正確であつたと思われたことを氏に語つた。

四、アメリカの欧州に対する協力【アメリカの協力の誠実さと継続として誤解を避けヨーロッパを励ます更なる努力】

一九三二年の春、アメリカをめぐって、国際的關係について種々困難なる問題が生じていた。当年は大統領選挙の年であつた。又、アメリカに於ける不景氣の絶頂であり、かつ夏期に始まつた上向はまだ来ていなかった。アメリカ合衆国に対する外債支払の問題は、風景を蔽う雲の如く垂れ掛かり、アメリカとヨーロッパ諸大国の關係を毒していた。加えるに我々の地位を一層困難ならしめたものは、議会が一九三一年十二月共同決議案を通過して、該問題をば商議に依り解決し、その暗雲を払わんとする如何なる試みに対しても反対する強制命令を、我々の上に押し付けたことである。

私がジュネーヴに居た時、ヨーロッパ諸国は、ドイツの賠償問題を取り上げそれを解決するため、六月ロザンヌに会せんとしていた。それはヨーロッパ諸国が、その対米債権と密接な関連を有すると考える問題である。彼等は多分、私とその問題を議することを熱心に望んで居たであつたであろうが、私はその地及本国相方【双方】に於ける誤解の生ずるを恐れて、その問題の切り出されることすら許容し得なかつた。

最後にこの際特筆して置きたいのは、丁度私がヨーロッパに向う途中、アメリカ下院が大統領の注告に反対して、フィリピン島の急速且完全なる独立の議案を大多数を以て通過させたことである。フィリピン人に対する保護の放棄と、従つてまた極東に於けるアメリカの一般的責任を抛棄することが、不可避的に極東諸国に対するアメリカの威信の上に、如何なる結果を齎すであろうかは、容易に想像し得られるところである。

併しながら、その當時に於てすら、幾多の手段が可能であつた。そしてその手段を執ることは、アメリカが依然として助力を与え、且協力することを心より切望して居る事実を、聯盟に於て困難なる極東問題を処理しつつあつた諸国政府に知らせるために、重要であつた。

過去二、三ヶ年の間、欧州諸国の指導者達から数回にわたつて、合衆国との提携に関する示唆があつた。それは平和が脅かされる場合に、他国と協議しうるような協定を結ぶことに関する案である。不幸にも、この提議は、ロンドン軍縮會議の際に初めて提案されたので誤解さるる懼れがあつた。若し当時それが採用されたりとせんか、それはアメリカが戦時に於て武装的海軍兵力の援助を与える公約をなしたと考えられたであらう。また實際その様な理由によつて、當時に於てアメリカ上院議員の或る者達に依つて攻撃されたのであつた。他の場合に於てはそうした危険は存在しなかつた。實際問題として、アメリカ合衆国は既に特殊条約に於て斯種の諸盟約の一当

事国であつた。併しながら、一九三〇年、その問題に關しアメリカが拒絶したことは、欧州に失望を与え、その失望はまた批評家に、わが国が全く協力的精神がないと攻撃する彈藥を与えたのである。その後この事柄は我々に依つて再び取上げられ、アメリカ兩大政党の双方の議員の援助をえた結果、一九三二年六月、かかる協議に賛意を表する一項目が共和党及び民主党の綱目中に挿入せられることになつた【原注】。

【原注】…最初の提案はジュネーヴの軍縮會議のアメリカ代表の一人だつたスワンソン上院議員からだつたと思ふ。民主党の綱領の項目は次の通り…

「我々は、…国家の政策の手段としての戦争を抛棄するパリ条約、それは条約侵犯の虞が場合に諮問と會議の用意がある事によつて効果的とされる、を擁護する。」

共和党の綱領項目では、次の通り…

「我々は、パリ条約（ケロッグブリアン条約）の第2条の不履行の虞がある場合に、國際會議を招集あるいは参加する権限をわが政府に与える法案の議會による制定を支持する。」

越えて八月八日に、私はニューヨークの外交問題調査會に於て演説をなした。その演説に於て私は、パリ条約には明白な条項はないけれども、批准以来アメリカ政府に依つて執られたる行動は、該条約侵犯の懼れある際は、他の調印国と協議する意志のあるものという必然的意味を伝え

ている旨を私は指示したのである【原注57】。

【原注57：この演説全文は『Foreign Affairs』誌に特別附録として印刷された。Vol. XI, No. 1 (October, 1932)】

同演説に於て、私は又、現代世界の増大しつつある相互依存は、急速に世界における孤立主義を廃棄せしめつつある事実を指摘する機会を得た。而して私は、伝統的中立主義に及ぼすかかる発展の不可避的影響に対して注意を喚起したのである。

ラテン・アメリカに於ても、平和を維持するために、集团的行動の発展を促進する一機会が生れた。殆ど四年間にわたつて、ボリビア、パラグアイ国に、各々の領土の境界に関して戦争を続けて来た。その問題の場所は、殆んど人の居住せざる遠隔の荒野に於てであつた。両国自身がまた何れも南アメリカ大陸の中部にあつて、外部の世界から隔絶せられ、両国共海への出口を有しない。この地勢の障害並びに交戦国の頑固なる対抗が、中立国家の忍耐深い平和的手段を受け入れないで来た。

一九三二年八月三日、西半球の全部の独立共和国は、アメリカ合衆国の指導の下に、該二紛争国家に対し、先例なく結束して訴えるところがあつた。彼等は、チャコ紛争<sup>i</sup>は平和解決が可能であると宣言した。彼等は熱心に、ボリビア及びパラグアイが該紛争を直ちに調停か、或いは両国

i "Chaco dispute" の戦争は、結局一九三五年まで続いた。

にとり受諾しうる如き他の平和的解決手段に服委するよう要求した。彼等はまた二国が直ちに紛争地域に於て軍事的行動を中止するよう勧告した。そして最後に三月十一日ジュネーヴに於て国際聯盟総会によつて作られた先例に従つて宣言した。その宣言の語は次の通りである。

アメリカ諸国家は、平和的手段に依り獲得されざるところの該紛争に於ける如何なる領土の取極めをも、又武力に依る占領若しくは征服を通して獲得されたところの領土の効力を、認めざることを宣言する。

これ等の諸種の処置に依り、我々は、世界に於ける絶望的雰囲気、敗戦主義の一般的精神に拘らず、アメリカ政府は一度び出発した協力精神を進める覚悟あることを、聯盟に於ける友邦に知らしむべく努めたのである。

## 五、リットン報告書

### A 報告書の到着と公開

リットン報告書は、十月二日日曜日に公表されることになっていた。当日午前七時その報告書は、国際聯盟から一通の密封せる写本として我々の手許に送達されて来て居た。我々は、アメリカ国民がこの決定に重要性を置いていることを疑わなかった。何時に着くか、その内容は何か、

その世界に与える効力は何かについては新聞紙は絶えず臆測を下していた。それ故、國務省はその内容の迅速且広汎なる公表を保するため万全の努力をした。当朝早く、極東局長ホーンベック博士は、定刻にその報告書を聞く準備をし、コピーを造るために特に該省の速記者を動員した。当日の午後までに、全文書は写され且通信新聞の手にわたった。その結果新聞はジュネーヴから打電されたところの拔萃<sup>ぼつすい</sup>に頼る必要がなくて、全文書が彼等の自由なる使用に委せられた。かくて該報告書は全国に極めて大きく取扱われた。それが大統領選挙戦中にあつたに拘らず、恐らくは何処の国よりも詳細に伝えられた。

## B 報告書の性質

同報告書は、それを受取りたる時、既に期待する価値のあるものだという事が発見せられた。その事は、その当時に於ても左様であつたが、今日に於ても尚依然としてその取扱える問題に付き、傑出して公平なる權威を有して居る。

その文章の簡潔にして完成なる点は、その読破を容易ならしめ、而してこの事はその報告書の価値を著しく増加する。同報告書は、単に既に発生したる問題の公平なる解決のみならず、全問題の事実的解決に対する積極的提議をも包含するのである。

就中それは満場一致であつた、これに關しては、小數者の意見及勸告も述べられなかつた。英・



仏・独・伊及米の五大強国より五名の優秀なる且特別の資格を有する人々【原注②】が会して、その証拠を研究したる結果、日中兩國間の恐ろしく混雜したる紛争の事實、及その結果たる責任に關して満場一致の結論に到達した。更に又この事は裁決が金錢上の報酬を含まないが、然しそれは大國に對して、聯盟組織の下に於ける政治的活動の基礎となりうべきものである。かかる報告は單に重大なる事件であるのみならず、又空前の事でもあつた。

【原注③】リットン卿は、ベンガル知事としてまたインド太守また總督代理として東洋での長年の経験があつた。マッコイ將軍は、フィリピンで長年務め、日本と中國に多く訪れ精通してゐた。彼は1923年の大地震〔関東大震災〕の際は日本への救援事業の指揮者だつた。彼はまた、1928年のニカラグア大統領選挙監視、また1929年のボリビアとパラグアイの調査調停委員會の議長という重要な對外支援を爲した。

クロード將軍は、西アフリカおよび他のフランス植民地で多くの海外支援をなしたフランスの役人で、最高戦争評議會の一員であつた。

アルドロバンディ・マレスコッティ伯爵は広い経験を持つイタリアの外交官で、イタリア外務大臣として内閣の責任者であつた。

シュネー博士は、海外で行政と外交の経験を持つてゐた。帝國議員と同じくドイツ植民省の一員であつた。】

### C 報告書の内容

リットン報告書が、諒解せられ、且會得せらるる爲には、その全体に涉つて読破しなければな

らない。私は、茲には唯その内容の一般的性質、及私が既に述べたる外交事件に関する或重要な問題に於ける結論のみに言及する。委員会は、その集めたる一団の実証的事実の中から、決定的事実に到達する為に、必要な結論を援用するを避けなかつた。然しながら、かくして提出せられたる事実が聯盟規約、ケロッグ・ブリアン条約及ワシントン九ヶ国条約の違反に迄到達したか否かを裁断するのは、聯盟總會自身の義務であると考えた。然しながら、これ等三条約の各の神聖を尊重する事は、一般に世界各国の国際関係、殊に満州に於ける現状に於て必要であるという見解が遠慮するところなく報告せられた。かくして同報告書は、その第九章に於て解決の原則及条件に關し次の如く述べて居る。即ち

日中兩國は別として、世界の他の國家は、日中兩國間の紛争を防止する為に重大なる利害關係を有する。我々は、既に現存する多边的條約に觸れて來たのであるが、協約による如何なる事實的且永続的解決も、世界の平和機構の根底をなす基本的協約の規定と兩立しなければならぬ。ワシントン會議に於て列國の代表者をして行動せしめたる考慮は、今尚嚴存する。中国の再建設を援助し、且その主權及平和維持の為に、必要欠くべからざるものとしての領土的及行動的保全を保持する事は、今日に於ても尚一九二二年に於けると同様、列國の利害と相關する所である。中国の如何なる崩壞も、恐らく急激に重大なる国際紛争を招來す

べく、而して万一その紛争が区々の社会制度に於ける争闘と偶然にも符合することあらんか、一層苦々しき結果を招来するであらう。最後に平和に対する利益は世界中皆同様である。世界の如何なる部分にありても、聯盟規約及びパリ条約の原則適用の確信が失われたる時は、其処では常に同条約の価値及動力は減少せらるるのである。【「傍点は著者」】【第九章の項目「國際的利益」全文】

同報告は十章に分たれ、その最初の八章は今日に至る迄の事件及懸案の歴史的叙述より成り、而して最後の二章は、事件解決に関する一般的条件及び特殊的提議に用いられて居る。これ等の各章は次の如く列挙せらるる。

第一章 中国に於ける最近發展の概説

第二章 満州

第三章 日中両国間に於ける満州諸問題

第四章 一九三一年九月一八日及その後満州に起りたる事件の概要

第五章 上海

第六章 『満州国』

第七章 日本の經濟的利益及中国のボイコット

## 第八章 滿州に於ける經濟上の利益

### 第九章 解決の原則及条件

### 第十章 理事会に対する考察及提議

同報告書は事實の報告中に於て、日本によつて為されたる多数の主張と相反する見解を下して居る。

第一、組織せられた国家としての中国の地位に於て、次の如く述べて居る。即ち

中国に於ける主要的要素は、漸次行われつつある国民自身の近代化である。今日中国は進化的道程にある国家であつて、国民生活のあらゆる方面に於ける過渡期の証拠を示しつつある。

報告書は近年に於ける中国の政治的、社会的及經濟的不安が中国及他国に齎す災害について少しも割引して居らぬ。中国の現状はワシントン會議の時よりも遙に改良せられ、而して若し日本の侵略により  
 …………… 阻害せられないならば、その将来の見透しは有望である旨を指摘している。即ち曰く

中国の過渡期の展望は、その不可避的な政治的及び社会的並びに知識的、道德的混乱と相俟つて、中国の気短かな友人に失望を与え、且つ平和に取り一つの危険となつた不和を醸成したとは云え、困難遲滯失敗にも拘らず、相当の進歩が實際上行われたことは事實である。現時の紛争の論議中に

絶えず現れて来る主張は、中国が「統一国家でない」、或いは「完全な混沌と意外の無政府の状態にある」と云うことであり、而して中国の現時の状態は中国から国際聯盟の一員たる資格を喪失せしめ、聯盟規約の保護条項を剥奪すべきであると云う言説である。これに關して、ワシントン會議の當時に於て、凡ゆる参加列強の採つた態度が全く相異なるものであつたことを想起するといひであらう。而も、その當時に於てすら中国には、北京政府と廣東政府なる二つの全く相異なる政府があり、また奥地の交通通信を屢々妨害する多数の地方匪賊による脅威を受けた一方において、全中国を内乱の渦中に投すべき準備が着々と進められていた。

またワシントン會議が繼續中であつた一九二二年一月十三日に、中央政府に向つて發せられた最後通牒に続き、開始された右内乱の結果として、中央政府は五月に顛覆した政府にかわり、北京に樹立せられた政府からの滿州の獨立が、張作霖元帥に依り七月に宣言せられたのである。斯くの如くにして、獨立を主張する政府は、實に三箇あり實質上の自立せる省も若干あつた。然しながら、現時に於ては、中央政府の威令なお少数の地方に於て微弱なりと雖も、中央政府の威令は、少なくとも表面的には、否認せられていない。従つて、もし斯くの如き中央政府が維持せられ得るならば、地方行政、軍隊及び財政は、漸次に国家的性質を帯びるに到るであらうと期待することをする。叙上の理由は、他の諸理由と共に昨年九月の國際聯盟會議をして、中国を理事會に選舉せしむるに至つたことは疑いがない。【第一章の項目「現時に中国の狀態とワシントン會議當時の中国の狀態との比較」】

この理由によつて委員會は、中国は統一国家にあらざるが故に、多边的条約の下に他の諸列国に依つて、主権的政治国家としての処遇を受くる資格なしとする日本の主張のみならず、また九ヶ国条約が既に廢物に歸し、かつワシントン會議はその政策を誤まつたという日本の主張をも退けたのである。

第二、中国及び滿州の關係。報告は、中国が滿州に対する表面上の主権を認めらるる權利あるのみならず、またその後の中国農民幾百万の大移住に鑑み、「滿州は今日では明白に中国のものである」と述べている。(第二章第一節)。

更に報告は、日本の干渉が及ばない以前には、これ等の紐滯が強化せられつつあつたことを認めた。

斯くの如く、日中間の紛争以前にあつては、滿州及びその他の中国の間の政治的並びに經濟的紐帶は漸次に強化の一路を辿つていた。(第二章第二節)

更に報告書は、滿州以外の中国に於ける中国人民の滿州に対する態度に関して次のことを認めた。

中国の人民は、滿州を中国の完全な一部と見做し、且つそれを自国の他の部分から分離せしめんとする如何なる企図に対しても深い憤激を抱く。従来、これ等東辺三地方【東三省】は常に中国並び

に諸外国に依つて中国の一部と考えられて来ているのであり、また中国政府の主権は疑う可くもないこととされて来ている。このことは日中条約及び協約中に、他の国際協約に於けると同様明認せられてゐるし、また日本のそれをも含む外務省の公に発したる幾多の声明中に繰り返されて来ている。【第三章第二節】

続いて報告は、中国人が何故に満州を日本及びロシアに対する緩衝区域として、彼等の「国防第一線」と見做すか、また中国の穀物倉庫或いは食料供給処として、更に中国の人口稠密せる他の部分からの中国人の季節的出傭ぎ、並びに恒常的移住のための機会を供給する地域と見做すかと云う理由を述べてゐる。

第三、日本の自衛的主張。報告は、日本の蒙古及び南満州の占領は、自衛の行動であつたのだとする最初からの日本の主張を反駁する。このことに關しては、用意周到にして極めて公平な事変の記録の後、報告書は次の如く結論してゐる。

上述せるこの夜（九月十八—十九日）【柳条湖事件】の日本軍の軍事的行動は、合法的自衛の手段なりと見做すことは出来ない。斯く言うからとて、委員会は、日本の出先き官憲が、自ら自衛のために行動してゐたと考えたかも知れぬとの仮定を排撃するものではない。（第四章【本委員会の意見】）。第四、所謂自発的起原説と、「満州国」の現状。これ等の点に關して、委員会に依り提出せられ

た歴史的報告は特に強硬である。究極の事実に関するその簡潔な声明は次の如し。

各方面より蒐集した証拠は、委員会が「満州国」建設に与つて力のあつた幾多の要因はあつたけれども、結合して最も有力であつた且つそれなくしては、我々の見る所、新国家は形成せられ得なかつたであらうところの二つの要因は、日本軍の駐在及び民国並びに軍事上の日本官憲の活動であつたと認めるに充分であつた。

この故に、現制度は、純粹に自発的な獨立運動に要求せられて出現せるものなりとは考え得られない。(第六章第一項【結論】)

斯くの如きが、我々の満州旅行中に我々に伝達せられた地方人民の意見である。公的或いは私的会見に於て、また書信及び書かれたる声明に於て我々に与えられた証拠を綿密に調査検討せる結果、我々は、日本の手先である地方的中国人民の考へているが如き「満州国政府」に対する一般中国人民の支持なしとの結論に達した。(第六章第三項【結論】)。

第五、日本の責任に関する裁決の根拠としての判定。この基礎的究極的判定は、「解決の原則と条件」と題する第九章に包含せられている。次の如し。

これ等の事實は、紛争問題を討論する人々「(即ち国際聯盟)」に依つて考察されなければならぬ。  
宣戦の布告なしに、明白に中国の領土であつた広大な領土が不法に、



日本の軍事力によつて占領されたと  
.....云うこと、また.....その作戦の結果として、それが中国の他の部分から  
分離されてしまい、独立を宣言  
.....するに到つたと云うことは、事実である。(第九章第五段)【第五文節、  
項目「解釈の多技性」、なお改造社版では「日本軍隊の強力によつて押収、占領せられ」と外務省訳で、伏字  
にされている】。

これ迄述べ来たつた所は、全体として読まるべき、有力にして信憑すべき報告からの単なる抜  
萃に過ぎない。私には、公平な読者がこの報告の各頁を読んで、日本が聯盟規約第十条に謂う所  
の、国際聯盟において日本の友邦たる中国の「領土保全並びに現在の政治的独立を尊重し、且外  
部の侵略に対し之を擁護することを約す。」との義務を犯さないと考えられぬであらう。日本  
はまた、如何なる性質、如何なる起因に依るものであるにせよ、条約調印国間の一切の紛争或い  
は衝突の処理もしくは解決は、「之を平和的手段以外に求めるべからず」との趣旨を有するパリ  
条約第二条の下に於けるその義務を犯したのであり、最後にまた日本は、九ヶ国条約第一条に於  
ける『(一) 中国の主権、独立及び領土的及び行政的保全の尊重、(二) 中国が自ら有力且安固な  
る政府を確立維持するため最完全にして、且つ最も障礙なき機会を之に供与する事。』と云うそ  
の義務を犯したのである。

然しながら報告は、過去の事変に関するこれ等の判定を以て終らなかつた。それは、建設的政

治的見解の領域に極めて深く入り込んで行つた。即ち国際生活の不斷に發展する諸要求は、過去の紛争の正否に關する裁定だけでは、充分に満足せしめられ得ないことを認め、報告は續いて、国際聯盟に対して日中間題の實際的解決のための案を作成し提言している。報告は、これ等の提案を考慮するに當り、その報告の最初の八章に見出される基礎的事実より推論せる一般原則並びに條件に基づいている。

委員会は、單なる『過去の情勢』の回復は、現在の衝突を惹起せしめたる根本問題の解決では斷じてなく、單に争鬭の繰返しを誘發するに過ぎざるものなることを大胆に認めた。委員会はまた、論破し難き明晰さを以て、「満州国」に於ける、現日本の統治の継続は公平に見て不満足なりと認めた、即ちその統治の継続は、現存の國際的義務の基本原則、並びに東洋平和の依つて以て立つ二国間の善意的諒解を破壊するものであるとした。それは中国の利益に反する。それは満州の人々の願いを無視……したものであり、また、【「委員会は」これが果して、日本の恆久的利益に究極に於て役立つものなりや否やを疑つた。

委員会は、それ故に、中国、日本及びロシアの利益に副う様に工夫せられたる解決案を提出した。この解決は現存の幾多の多边的条約と一致する。また同時に満州に於ける中国の主権及び日本の正当な權益を認めるものである。それは他国の侵略に対する一般的秩序と安全とを維持し、将来

の紛争の解決に備えるものである。その解決は、現在の經濟戰に代る日中間の經濟的な接近に、拍車を加えることに依り、恆久的なものとなるべき解決であらねばならない。而してまた、中国自体の再建に於ける國際的援助のための一層徹底せる準備工作をも包含した。

斯くして聯盟には、聯盟をして過去に關する道德的裁定に達せしめ得た確かな事實が提出せられたばかりでなく、日中問題に於て、先例なきまでに事態の眞實を了知し尽した老練家の委員會に依り立案せられた解決のプログラムが供給された。この案に依つて、聯盟は中国及び日本双方の名誉と國民的要求を満足せしむる見込みを有し、且つ永久に平和的機構にも解決に進みうる機会に恵まれた。この事はそれ自ら偉大なる成功であつた、この計画は、二大國間の同型的困難と重要性を有する紛争に於て、嘗て遂行せられた如何なる事柄よりも優つていた。それは、世界諸國民の平和的集團的努力に一大進歩をもたらしたものであつた。

## 六、リットン報告に対する國際聯盟内の行動

### A、聯盟の事務及びそれに附從する外部的要因の一般的性質

報告の作成される以前にすら、日本官憲は九月二十四日、自らそれを検討する機会を持ち得るため六週間の期日延期を要求した。この要求は、聯盟の討論に先んぜんとする明白な意図から日

本が早急に「満州国」承認をなした事実を鑑み、いささか時期を得なかつたと考えられたであろう。それにもかかわらず、それは聯盟に依り認容せられた。諸国としては、日本に依る冷静な反省と、出来得る限りの再考慮のための機会を与えんとしたのである。【とした努力が、聯盟でなされる引き続きの段階で与えられた。】

リットン委員会は、元來聯盟理事会に依り任命せられたものであり、その報告はその委員会に提出せられた。然しながら、委員会がその調査を続けている期間に、全論争は理事会より總會に移されていた。それ故、日本の研究期間の満了の後、理事会が問題を採り上げた時、十一月二十八日には理事会はその報告を總會の討論に移した。それ以後は理事会は、紛争の考察には何等積極的役割を演じなくなつた。

一九三二年十二月六日に、總會は報告を検討するために召集せられた。大体から言えば、この總會は、事実の錯綜せる問題について専門家或いは審査官を任命したのであるから、今や専門家よりその報告を受けとり、討論に移る以上は、自己が厳正公平なる法廷の地位にあつた。通常の手続きによると、法廷は専門家の報告に対する両当事者の主張を聞いた後、これ等の判定に照して事件を決定し、もしその判定が法廷の認める所となれば、法廷自身の判定をなし、またもし其処で行わるべき討論があればそれを命じて、直ちに判決に入るべきものである。斯くの如く、元

来その手続は、簡単なものであり、また少なくとも英語国間にはよく理解せられていた標準に従つたものである。

然しながら、斯くの如き国際的大会議に於ては、また考察せらるべき他の事柄があつた。先づ第一に、全事態が極めて稀有なものであつた。五十以上の国家が全く先例のない機構の下で活動しつつあつたのであり、且つそれは、重大である。それ故に聯盟規約の規定に副うて進行した。

聯盟総会は先年の二月、中国により要求せられた規約第十五条の效力の下に行動しつつあつた。

日本は、総会がその条項の下に行動を採る権限の有無を非難した。而してこのことは、総会の手続きが周到なる注意の下に行われ、且つその権限と何等抵触する所のなき事を必要ならしめた。

なお、総会の行動は、元来第十五条により起されたものでなく、第十一条により起されたものであつた。而してリットン調査団は、聯盟理事会が第十一条により行動を採りつつあつた間に採用せられた理事会の決議により、作られたのであつた。第十五条、第四項目は、提訴事件に關して聯盟事態【自体】の手に依り報告書を作製し、これを公にすることを規定している。（その提訴事件の如何により理事会、或は総会の手を通ずることになる。）

聯盟が自己の報告を作製する基礎として、リットン調査団の報告書を（聯盟がその報告書を認めるとすれば）利用していけないという理由は、存在しなかつた。併しながら規約第十五条はそ

の第三項に於て、次の事を規定している。即ち、総会にかかる報告書を作製するに先立つて、当事国間の紛争の解決を図るべく努力すべきこと、これだ。この規約は明らかに、第十五条により紛糾すべき提訴事件に、唯形式的に適用さるべく意図せられたものである。併し、今回の事件に於ては、聯盟総会は、かかる解決を調停により達成せんとして、この第十一条による熱心なる努力を少くとも四ヶ月の間つづけて来た。その努力が進められれば進められる程、日本の行動は益々傲慢に且つ反抗的になり

満州より以上に征服を着実に拡張、已に指摘せられた如く、聯盟が繰り返えして要求するのも無視して、この中国の領土を分割し満州国と呼ばれる新国家を建設するに到った。

それ故に、これ以上調停の労を採つても、それは何等賞讃に値するものでもなく、又成功の望みも殆んどないのである。

リットン報告書が新しき、且つ周到に案出された解決案を齎らしたことは真実である。而して、この新しき解決案は、その紛争の平和的解決を目的として両当事国へ伝達されたが、過去の経験に徴しても、何等かの合理的目的達成の希望を抱くべき基礎は存在しなかった。最近に於ける日本の行動、若しくは日本代表による声明は総べて、日本が依然としてその自身の目的を追究する決意を堅めている事を示していた。

それ故に、局外者の見地から觀察すれば、筆者の眼には、次の如く看取される。即ち、ここに留意すべき重要な点は、聯盟は須らく迅速、断乎としてこれらの日本に反対する判決へ進み、それにより統一せられた全世界の精神的非難——日本はこの中に生存しているのだ——とも相応すべき世論の全進撃を、調査団の意見に加えて齎すべきであると。

第十五条の諸規約により秩序を保つと云う見地からは、新しき調停の身振りを示すことは聯盟にとり大切であるかも知れないけれど、それは身振り以上に出るとは全く思われない、大切な事はこの多数国家の集団たる聯盟が、その決議を日本に関する形式的判決の最後の重要な手段へと進めることであると、筆者は感じたのである。

それ許りでなく、調停の提議そのものの中に固有なる……危険性があつた。……それは

の弱点の証左と看做されるであろう。それが、新聞紙上にて大々的に発表せられたのは当然であつた。而して、新聞は必然的にその手段に対する手続上の理由を理解することなく早急に、その報告書を、聯盟がリットン調査団の報告を支持しないであろうと云う証左として発表したのであつた。筋書を迫うて行くことを遅滞したり、心弱き逡巡的な言葉を弄することは、確かに意志薄弱

i 以下に、いくつか「筆者」となっているが、原著は単に一人称単数代名詞である。

ii この前後どのような言葉を使つて検閲に懸かつたのか不明であるが、原著からはこのような訳になる。

の証左と考えられ、且つ世界世論の統一の効果を——そのみが日本の行動に対して何等かの効果を与えるものと期待せられるところの——損傷するものであつた。

聯盟總會の決議を弱めると思われる他の要素が、それと同時に上の如き事情に加わつた。即ち、アメリカの選挙が十一月八日に行われ、その結果はフーバー大統領の政治的大敗北となつた。新政府は三月に組織せられつつあつたが、その来るべき新政府の政策がこの紛争に關して如何なるものであるかは、何人も知る所でなかつた。わが政府当局の政策は、聯盟との協力に賛成することその先任者以上のものがあつた。一月一日以後、我々は諸種の手段に於ては先頭に立つたことさえあり、しかもその後、他の諸国はそれに追隨して來たのであつた。わが国の政策は、数回の声明によりて明らかにとられた。欧州諸国の指導的地位の人達は、わがアメリカが如何なる程度に頼むに足りるかをこの時に至つて知つたのであつた。必然的に彼等は三月四日以後のアメリカ政策が如何なるものであるかに就いては、かかる確信を有していなかつた。アメリカ新政府は、従来の政策を完全に変更するであらうとの流言が、已に親日派の宣伝者により嫉妬的に養われ、且つ四方に飛びつつあつた。もし、かかる変更が起つたとすれば、それは必然的に聯盟總會の立場をいよいよ困難ならしめたであらう。

これに加えて、この問題が總會の討論の狙上に上つていた當時、欧州主要諸会社の対アメリカ



外債支払問題がその頂上に達した。聯盟総会はリットン報告書の討論を十二月六日に開始した。前記の外債の半期利払いは、十二月十五日が期限であつた。従つて、同時にこの二つの題目が討議せられたのであつた。

ドイツの対欧諸国の賠償問題の一時的解決は、その前年の六月に達成せられ、その解決により債権国は従来ドイツより受けつゝあつた賠償の大部分の受領権利を放棄したのであつた。これ等の諸国はこの事が自国がアメリカに負う戦債に対して、利子支払をなす力を重大に弱めたことを、又、自国に対してもアメリカに依り譲歩が行わるべきだと感じた。然るに筆者が先に述べた如く、わが議会は、かかる譲歩は行われまいであろう旨を前年の十二月に宣言し、アメリカ政府側に於てその目的の為に商議を開くことを拒絶した。かくして甚だしくデリケートな問題に關して一つの手痛き難関が、わがアメリカと聯盟内の主要国との間に起つたのであつた。フランス首相のエリオ氏が、利子支払の促進に關する勇敢なる演説を試みたに拘らず、フランス議會は十二月十五日期限の支払不履行を決議した。ベルギー、及びその他の諸国も同様に不履行を決議した。これ等の事件により、アメリカとこれ等の欧州諸国との間の國際關係の雰囲気は全く害われて了つた。大西洋を挟む両大陸の新聞及び國民は勿論、多くの指導的政治家は互いに憤懣と敵意とに満たされた。それは、均衡と公平なる判断とを必要とする國際問題の處理を遂行するには、想像に余り

ある困難なる事態の連続であつた。かかる事情の下に、聯盟総会はリットン報告書に関する討論を開始したのであつた。

## B 総会に於ける討論

日本松岡代表、中国顏惠慶代表の各演説によつて討論は開始せられた。この演説に次いで總會の一般討論が行われた。九ヶ国の小国代表が先ず口火を切つた【原注二】。彼等はこの問題の中に含まれたる全世界的性質を強調し、極東に於けるこの問題が、世界平和の精神と聯盟自身の将来に及ぼすべき影響を強調した。彼等は、聯盟が今その重圧に苦しみつつある困難さを認めたが、聯盟は飽く迄も、断乎としてその規約と以前の決議を楯にとり拮抗すべきであると主張した。彼等は、リットン報告書により明らかに深き感銘をうけたのであつた。而して、彼等の大部分は、その報告を採用し『満州国』の独立を認める事を拒否する旨を宣言した。要するにこれらの小国は、調停に依る解決が望ましいことを認めながら、（かかる解決が原則の放棄なしに可能であるならば）、日本により背犯された大原則の擁護を最大重要として強調したのであつた。

それにつづいて、席順により大国たる英、仏、伊、独の代表が起つた。これ等の演説の趣意は、次の点に於て、その先の演説者のそれとは劃然たる相違を示した。即ち、彼等がもつと用心深く

あり、且つ判決とは別に調停の望ましさを強調した点に於てであつた。彼等は亦、種々なる点で日本の行動に対して寛大さを示した。特に英国外相の演説は、それが直ちに、総会がリットン報告書採決しないであろう証左として、又極度に親日的演説としてアメリカ諸新聞により報道せられた程に、親日的な議論を強調した【原注3】。最初、筆者は迷つたけれど、はいって来る情報と訓電を周到に検討した結果、かのアメリカ諸新聞は総会の終局の行動に関する見通しを誤っている事を、それから又、一見親日的と見えるかの演説は、本当に和解的雰囲気<sup>atmosphere</sup>に於て調停を提言せんとする意図により出たものである事を、筆者は確信するに至つたのである。

【原注1】：「アイルランド自由連合、チェコスロバキア、スエーデン、ノルウェー、スペイン、スイス、ギリシヤ、グアテマラ、ウルグアイ」

【原注2】：「言い換えると、もっぱらジョン・サイモン卿の言うことからの報告の判断の一つは、日本への強い告発を招来することから遠いもので、それは中国の危機である、という見解をもたらずであろう。」

Willoughby, op. cit., p. 451.

「ジョン・サイモン卿としては、リットン報告の或る一節に注意を向けることで松岡代表に対して手を差し伸べたのだつた、それは紛争の状態の複雑な性格と中国問題の弱点を惹き出し、また——満州の将来の行動に關して——以前の状態への単なる復帰は解決にならないことを述べたものだつたのだ。：サイモン卿の演説を聞いて後、『松岡がまずい英語でこの10日間言おうとしていた事を、サイモン卿は洗練された言い回しで

半時間で述べた』、と松岡代表が伝えたと報告された。」Royal Institute of International Affairs, *Survey for 1933*, p. 492.]

四大国につづいて、トルコ、メキシコ、ポーランド、カナダ、パナマ、チリ、ルーマニア、ハンガリー、オーストラリア、及びコロンビアの順で各代表が演説を試みた。而して、討論は日本及び中国の代表による閉会の演説によつて幕を閉じた。十小国の大部分は、大国に先立つて演説を行つた九小国の意見に大体に於て追隨した。

討論は十二月九日に閉会し、総会はその討論に基づきリットン報告書を、先の三月十一日に任命せられた十九ヶ国特別委員会に付議する決議を採用した。この委員会はリットン報告書や当事国の意見、及び討論の席にて発表せられた意見及び提議を早速検討し、且つ可及的迅速に総会に伝達せらるべき紛争解決案を練るのにとりかかった。

その後、総会は一九三三年の二月二十一日迄、充分なる開期を有しなかつた。その裡、この十九ヶ国特別委員会は、調停による日中紛争解決を図ると云うその義務を遂行すべく努力した。この目的の為に、一つの仮決議文が、特別委員会の注釈的意見を添えて、作製せられた。合衆国及びロシア政府をこれ等の調停努力に招待せよとの事が、この仮決議文の中に提言されてあつた。

i 底本では「前年」、preceding。

而して、この提議書の一部はワシントンのわが政府及びモスコウ当局に非公式に伝達せられた。その一部は勿論、当事国たる日中両国にも伝達せられた。それは互に腹を探り合いする時期であった。非公式の議論が多く交わされた。筆者は先きに挙げた理由により、調停による紛争解決が成功の結果を示すとは殆んど考えていなかった。筆者が惧れたのは、その結果が弱氣と逡巡とを示すに止りはしないかと云うことであつた。而して、わがアメリカ当局がかかる努力のために協力することを、筆者は少しも希望していなかった。然しながら、他の諸国をその難事業に失望させることを惧れて、勧誘を拒絶しようとは思わなかつた。アメリカ政府にしる、ロシア政府にしる、かくの如く勧誘を拡大することに日本が反対したことに依つて、筆者は決心をすることの必要から免れたのであつた。

総会の開会以前、二月二十一日に十九ヶ国委員会及び総会参加国は、これ以上調停の勞をとつても無益である云う結論に到達した。日本自身がこの結論をして不可避なものとした。十二月の総会の席に於て日本代表は、主要な論争点に關して、全く非讓歩的態度を維持した。就中、日本代表は、『満州国』の独立を、全世界が承認するという項目を包含せざる解決は不可能である旨を、断乎として主張した。これに加えて、一月の三日に、日本軍はこれまで占領されていなかつた中国の地方に對して、新たな攻撃を続けていた。熱河省は占領されてしまった。

満州から中国内地へ通ずる山海関の入口が………日本は、  
 その政策が満州周辺だけではなく北中国の更に大きな部分を加えるという軍国主義者の計画を更に拡張  
 ……す  
 ることであることを、最も明らかに宣明したのであった。

アメリカ政府の将来の政策に関する情報を受けたことにより、聯盟の活動は益々容易になった。十二月下旬に筆者はアメリカ大統領ルーズベルト氏から、外交政策につき意見を交わさん為、来訪してくれとの招待を受けとつた。一月九日に筆者は、ハイド・パークに赴きその日一日をルーズベルト氏と、彼が関心を持つわがアメリカの外交政策の諸問題を論ずることに費やした。我々は就中、極東に勃発せし事変を論じた。その後、一月の半ば前、諸種の非公式的情報手段を通じて、極東の紛争に対するアメリカ新政府の外交政策の変更はありえないであろうと云う確信が欧州諸国の関係者に伝えられた。一月十七日にルーズベルト氏は新聞紙上に声明を発表したが、それは以上の確信を強める効果を持つた。

今や二点に関して、疑念は解消したのだ。一つはその征服の結果を完全に承認する解決を除いては、如何なる解決をも日本が承諾しないことが明らかである事、今一つはアメリカの政策変更の危惧は解消せられたことこれである。それ故、総会は断乎としてその任務へと進んで行つた。十九ヶ国委員会は討論事実の陳述、及びそれに関して規約第十五条に規定せられてある如く公正、

妥当と思惟される勧告を含む報告書を作製するにとりかかった。この重大なる報告書は日本の不同意を除いて、総会に出席せる全員の賛成により二月二十四日に採択せられた。それはその全員にわたつて論及出来ない程、浩瀚こうかんなものであった。併し、この紛争に関心を有する者にとってはその全部を通読しなければならぬ程、それは重要なものである。その報告書は大体に於て、リットン調査団の結論を完全に、且つ少しの修正もなく採用しており、同調査団の報告の線に従つて解決を勧告しておる。それは満州に於ける中国の主権を認めている。奉天及び南満州に於ける日本軍隊の初期の軍事行動も、又それにつづいて討論の行われている間に進展した日本の軍事的手段も、自衛手段として認められ得ないことになった。一九三一年九月十八日に先立つて、両当事国間に合法的な紛争の原因が存在しており、その当日に到つて両者の間に爆発の因となつたことを認めながらも、一九三一年九月十八日以降の事件の進展に対して、中国の責任問題は生じ得ない、と、報告書は主張している。

又報告書は、満州が『満州国』なる新国家に統一せられた事は、日本………の援助と指導とを以て、又………日本軍配備の支援の下に行われた日本の公式活動に起因するものであるとなし、

『満州国』は自然発生的、真の独立運動の結果としては考えられない、また『満州国』は満州に

i "that I cannot refer to it *in extenso*." 「私には、詳細に／完全に述べる事が出来ないほど」

於ける中国民衆によつて支持せられていないと主張している。又、『満州国』は日本を除く如何なる国によつても承認されなかつたとなし、かかる承認は一九三二年三月十一日の聯盟決議の精神と両立しないとなしている。又、それは、『現報告書』を採択する聯盟参加国は、この政体（即ち「満州国」）を将来、承認すべからず【*de jure or de facto*】と規定している。

かくして、この報告書は要するに、聯盟総会に提訴せられたかの紛争に対する責任者として、日本に対する反駁的判決とはなつた。将来の行動に対し勧告文の中には次の如く規定している。即ち、

（一） 南満州鉄道の旧駐屯地城以外の駐屯地から、日本軍隊を撤退せしむること。

（二） 中国の主権の下に且つその行政的保全と両立すべき、満州に於ける政治組織の建設を規定し、……………、且つ政治的組織は、その歴史的伝統、又日本及び局外国の権利、利益、及び一般にかの多边的条約の原則と矛盾せざる広範なる自治手段を設けるべきこと。

【この第2項は原文は次の通りで、何も伏せられていない。(2) for the establishment of a governmental organization in Manchuria under the sovereignty and compatible with the administrative integrity of China, and yet which should provide a wide measure of autonomy consistent with its historic traditions, with the rights and interests of Japan and other outside nations, and in general with the principles of the multilateral treaties】



を規定している。而して、リットン調査団により勧告せられた方針に従い、この解決を達成する為に、両当事国間に交渉を開くことを勧告している。その決議を遂行せしむる一助となるべき制裁として、報告書は『満州国』の現状を承認しないとの言質をその参加国から取っている【原注9】。

【原注9：総会における論争と将来への勧告文は、附録四に付した。全文は聯盟総会の記録として見ることが出来る。また次の書の附録として全文が印刷されている。Westel W. Willoughby, *The Sino-Japanese Controversy and the League of Nations*, p. 689 et seq】[【国会図書館デジタル化資料「日支紛争に関する国際聯盟総会報告書全文」](#)】

総会がこの報告書を採択した次の日、二月二十五日に、筆者は次の如き声明を新聞に発表した。日中紛争から進展した事態に於て、アメリカ合衆国の意図は、一般的に国際聯盟のそれと一致した。即ち、その共通の目的は平和の維持であり、国際間の紛争を平和的手段により解決することであった。その目的の達成に於ては、国際聯盟がその加入国たる二国間の紛争に対して司法権を行使し来つた間、合衆国政府は、方法と限界に関する判断の独立を自己に留保しつつも、平和の為に聯盟の努力に支持を与えるべく努めて来た。

聯盟の手により達成せられた事実の結論、及びその代表により政府当局に齎された報告によつてアメリカ政府が推論した事実の認識は、大体に於て一致した。事実に関するその判定に照らして、聯盟総会は正式の結論を発表した。アメリカ政府はその結論と大体に於て一致するものである。不

承認の原則及びそれに関するその態度の表明に於て、聯盟と合衆国とは共通の根柢の上に立つものである。聯盟は解決の原則を勧告した。それに加入せる一員として、条約に適當せる範圍に於て、アメリカ政府は、以上の如くにして勧告せられたる原則の全般的承認を發表するものである。

アメリカ政府は、熱心に希望する。我国及び他国民と久しく親睦を維持して來た紛争兩当事国が、世界世論に徴してその政策を、國際間の紛争は、唯平和的手段によつてのみ解決せらるべし、と云う世界同胞諸国民の要求と希求に応ぜしむることの可能なるを發見せられんことを。

二月二十四日のこの總會決議の後一週間にして、筆者の國務長官としての任期は満了した。一九三三年三月二十七日に、日本は國際聯盟脱退の意思を通告した。遺憾な事であろうとも、これは日本の以前の行動からの当然な帰着である。日本が國際社会と交際をつづけていることは、——而してその國際社会の原則と規約を——日本は意圖的に紛れもなく破つた——世界の他の諸国は勿論、その社会の他の成員にとり、厄介事で將來の脅威の可能性にほかならなかつたのである。

## 第五編 結論

本書に前述して来た日中係争にあつて、アメリカ政府の二大目的は左の如くである。

一、従来、米政府に依つて中国と締結された啓蒙的諸条約の下に、对中国義務を適当に遂行することによつて将来の米中關係を維持すること。

二、米中も共に調印した、戦後の多边的諸条約によつて建設された平和維持に対する共同工作体制の基礎を破壊せざること。

これら二つの目的は時々理想主義的であるとか、通商上の利権の維持というが如き一般の外交的活動の目標以上に出るものであるとの批難をうけている。私は喜んでかかる批難の矢面に立つ。平時にあつてすら外務大臣たるものは、国家永遠の安寧を見る目を直接目前の利害の圧力によつて昏まされることがあつてはならない。併しながら、新事件が矢継早に起り、遠き将来にまで甚大なる影響を及ぼすかも知れぬ危機が殆ど毎日の如くに起きる現下の時局に於ては、狭小なる限界と卑近なる目標を何人にも抱かしめる危険は、増大されて来る。

(A) 对中国義務遂行の目標

さてこれら前述二大目標の第一のものに就いて論及せんに、合衆国の对中国並に對極東關係には重大なる一点に於て、ヨーロッパの如何なる強国のそれとも異なるものがある。ヨーロッパの數力国は、中国に於てわれよりも遙るかに大なる通商上並に領土的利害關係を持つているが、地理的に彼等は遠く隔つて居り、我々は相隣っている。ある意味で彼等は不在地主であるが、我々は隣同志である。極東の近代に於て可能的な反響は彼等に及ぼさない。直接の影響を我々に及ぼす太平洋は、も早や交通の障壁ではなくして交通の機關である。政治及び國際關係に對しては、我々と最も相似た平常な態度を持つヨーロッパ諸国と、わが国との对中国觀には、根本的差異があるという事は、ここに記述した長期にわたつて行われた外交的努力を通じて絶えず私の注意を強いた。しかしその根源と理由とを初め、その現象にしても、充分に認識されなかつた。

私は、その理由を考察し分析するに至る遙るかに前から、我々と英國外務省との間に意見の相違のあることを感じ來つた。最近英國の世論に於て一つの運動が起つてゐるが、これに一寸触れることは、極東に関して私が何を言及しているかを英國の讀者に説明する便宜ともなう。アメリカ側の極東に関する氣持は、次第に力を得て一九三二年に於ける当局の態度に働きかけたのであるが、それはその性質に於て一九三五年六月國際聯盟との協調に関する「平和投票」に於て雄

弁に自己表現をなした英国国民の気持と相似たものであつた。後者の見解は、「英国デモクラシー」の深く根ざした「本能的」な気持を代表するものとして描述された。かかる描写は極東に於ける安定とフェアプレーに対するアメリカ的気持の特色に適合するであろう。それは、わが貿易の数量或いは通商を拡張せんとする慾望によつて計られるのではない。我々は東洋の諸国民とは、その移民の衝撃を感じたほど近いのであつて、この衝撃に対して奮然と自己を護らねばならなかつたし、時には、そのために彼等にとつて、苛酷にして苛立たしいものともおもわれる方法を敢行した。しかしこれは、尚更、我々が彼等に親しいものであり、極東の國際關係が安定な基礎となすものであることを重大視せしめるほどに、彼等が我々の世界にあることを認識している証左になるのである。

一九三一年九月に於ける日本の中国攻撃【満州事変】は、アメリカ国民にとつて興味あるものであつた。何となれば、それは近代世界に於ける団体行動の根本基礎——条約義務に忠実であること——への攻撃であるということ許りでなく、もし秩序安寧が北太平洋に維持さるべきならば、隣邦間に存在すべきである友誼關係への破壊的襲撃であつたがためであつた。換言すれば、団体的誠実に対する我々の興味へのこのショックは、事件が我々の側の世界に起つた理由に依つて強

i 底本では「……」になつてゐるが、誤植であらう。

められたのであつた。その世界への………と、西半球に関する限り、スペインの植民勢力の失墜と共に消滅した植民地市場緒論の再燃とは、我々によつて、再武装せるドイツの一隣国蚕食が、大英帝国に与えるであろうものと同性質のショックであつた。序に、私は、この類推は所謂日本モンロー主義とアメリカに於けるオリジナルの主義との相異を、ヨーロッパの読者に説明するのに役立つものと考える。目下日本によつてアジアモンロー主義の名の下に遂行されつつある………を、一八二三年、アメリカのモンロー主義布告によつて南米諸共和国間に制定された、地方的独立及自治の防禦的保壁に例えることは、公平なる觀察者の誰もによつて観破されるほど幻想的である。

中国の将来は時代の大問題の一である。しかしながら一の事は明らかである。即ち中国は自らの思う、【原著に強調はない】通りに発展しなければならない。中国は外力によつて支配されたり、外来の或は希望せざる進化形体に迫込まれたりすることは出来ない。中国のそれは、世界に於て最も根強い文化国家で、四千年の歴史がこの事実を証明している。又その家庭的・内的、文化の本質的に平和的な特性は、今やアジア安定の主要因子であり、その損亡はアメリカを含む隣邦諸国の平和に直接影響する打撃となるであらうし、若しアメリカ政府が条約履行を顧みざることによつて、その損亡を招来せしむるものとすれば、それはまことに先見のない政策であらう。満

入念に武装した日本の軍国主義的冒険の侵入

侵略政策

州問題解決に必要なことは、単に合衆国及日本が、日本に都合よき暫定<sup>。。</sup>条約をうわべだけ結ぶことであると考えるアメリカ人は、この遙るかに重大なる根本的中國問題を忘却しているものである。目下、日本が承諾するが如き協約や協定は、孰れも中国にとつては………<sup>破壞的で受諾</sup>………すべきものでないものはあるまい。本問題終局の解決に到達する前に、我々は緊張と嵐との中間的期間に直面するであろう。しかしながら、このことは必ずしも絶望的態度或は見解ではなく、又日米友好關係の終局的發展と何等相矛盾するものではない。尤もかかる友誼の要素は必ずや（一）對中國友誼の犠牲を含む可からざること（二）世界の他の諸國と共に我國の發展するに重要な諸條約の大儒的破棄を含むべからざることである。我々は能くこれらの義務に添う日本の終局的發展の希望を、以てしてよいと私は信じている。日本の最大指導者のある者は、他の如何なる國家のそれと同等に、善良なる世界市民の義務の正しき鑑識を示している。私はこれらの指導者が一九三一年に直面せる問題の困難さを認めると同様に、國際生活のよりよき秩序を維持せんとしたその熱意ある努力も認める。日本に於ける今次の問題は、その全国民が軍國主義及過去の時代に於ける方法への自発的復歸の問題ではなかった。それよりも更に複雑なものであった。世界的經濟不況は、日本に於て他國に於けると同様の苦難と不安とを醸生し、そこから、受難國民中の若き人達の間に發生した旧時代の代表者達に対する同様の不安が、現れたのである。一九三一年

に至る十年間日本は、外国貿易を發展することと諸外国の一般的目的と調和するの一般平和政策を採ることに拠つて、増加する人口に備えていた。しかるに一九三〇年及一九三一年の大不況の結果、日本の外国貿易は五十パーセント近くも減縮し、この変化の圧迫は、今上述したる如き苦難と不安とを招来した。そこで、不満青年達は、その心意の反感を煽動したところの母国の保守派為政者達を（以下一行削除）「うまく打倒する手段として、満州を不当擄取するその理論と軍の指導權に頼り、そして利用した。」斯くの如く一九三一年、日本に於ては、軍国主義及帝國主義は、經濟不安に發生せると同様な急進的運動に依つて補強されたのであつた。日本人の如く生來愛國者たる國民の間に於ける、この……異常な組合せ……は穩当、平和と、國際的責任を維持せんと努力しつゝあつた人々の困難をいよいよ強化した。

しかしながら、……中国に対する無謀な行動……は日本の商業狀態を良化しなかつたし、又予算を平衡「するとか」國民の苦難を消滅するところがなかつたばかりか、それは正しく正反對の結果をもたらしたのであつた。貸借対照表には一層赤字の数字を増大し、世界に於ける第二の良き顧客たる中国をして対日本商品をボーコットせしめる不幸に終つた。

日本内部の難事は、奉天に於ける……張学良政權への不法な切りつけによつては、解決も緩和もされなかつた。反対にこれらの手段は、直ちに却つて日本の財政狀態に不利に反作用すべきであ



り、又作用したのであつた。数年後日本が不況から急速に回復し始めた場合も、それは他方面に於ける外国貿易の拡張故であつて、満州に於ける冒險に拠るのではなかつた。現下、力づけるためにこれだけのことは言える。即ち、日本の保守的國際政策の獨創的な顛覆<sup>てんぷく</sup>をたらした經濟不況の形に於ける要因は緩和されていると。成程、鞍に跨つた日本の<sup>帝國主義的軍國指導者</sup>は、なお益々<sup>中国における冒險を押し進める</sup>る熱意を有つてゐる。併して、早や今日にあつては、彼等はその背景に五年前に於けるが如き一般の不満に依つて發生した同じ圧力を有つていない証拠が現れて來た。最近の選挙は、日本の議會に於ける<sup>反軍國主義分子の確固とした増加</sup>を示したし、最近の<sup>軍隊の一定の部隊によるテロの</sup>勃發は、四年前に示されたものよりも毅然とした決断によつて阻止された<sup>遺憾なる暗殺</sup>のがそれである。指導者は、その國民の中庸分子同様にその大多数が生存している。おそかれ早かれ、彼等は再び勢力を盛り返すであらう。彼等は母國の安寧は友好の増進と、友誼的對中國貿易に依存してゐて、中國の<sup>不當なる解体とまたかの國から搾取する事と</sup>に依存してゐないと確信している。彼等は、我々同様そして世界の他國民の大部分同様に、今日に於ては世界は、平和及友好關係を犠牲にしてなお永久に榮えうる國家は、その全世界を通じて一つもない位に緊密に結合している<sup>積極的政策としての満場一致の非難</sup>と信じてゐる。一九三三年、ジュネーヴに於ける

満州の不当な搾取と満州国の創設への満場一致の非難は

力強くこれら保守的勢力と共に、軍事的冒険の終

熄のために働くであろう、と信じる。

過去八十年間如何なる国民と雖も、日本ほど外国の良き見解に敏感であることを示したものはない。近代主義への急速なる発展の各段階に於て、日本は海外の賞讃並に非難に対し鋭く敏感であつた。絶えざるプロパガンダによる日本の対満工作を説明する努力は、この感情の今なお現存する証左である。かかる国民にとつては「満州国の否認 × × × × × × × × × ×」は日本の「中国への侵略行為 × × × × × × × × × ×」に対する諸外国の道徳的非難をつぬにおもひ出させる想起語であり、かかる国家に対してはこの想起物は確かに絶えざる効果がある。今はテロリズムの抑制下にある国民中の中庸分子が、再び己の拘束力を取り戻した場合、かのジュネーヴに於ける判決は、日本をしてその国際生活を正常状態に引き戻さしめんとする有力な感化となるであろう。

かかる結果は、中国が、己が蒙つた打撃にも拘らず、尚経済的に行政的統一へ、進歩しつつある事実によつて促進せられ確実化されるであろう。日本の「北部の軍事的 × × × × × × × × × ×」遠征の前進「に拘らず」、偶々の中国に於ける省指導者、或は將軍の背叛及び外国の銀購入に依る財政不安定の齎らす財政困難に拘らず、交通線背後連絡線の改良に依る中国の経済的發展は、秩序ある体系的プログラムに従つて進行しつつあり、課せられた幾多のハンディキャップの下にそれが行われているに拘ら

ず、中国はこの基本的方法に於いて国家統一に向い、何れの先時代よりも一層の経済的進歩を示しつつある。

かかるが故に、私は今より直ちに日本が、その永遠の利害は、他の何れの国よりも中国との友誼なる通商及政治上の關係に依存することを、再び覚るであろうと考える合理的根拠があると信ずる。又かかる關係は………不当な搾取を中国………にすることに依つて増進され得ないことと、然る

ときに到達する公正なる解決に於て、一九三三年満場一致を以て表現された意見及判断は、公許たると否とに拘らず有力なる一要因となるであろうことを信ずるものである。若しかかることになれば、一九三一年の………満州事変………に際してアメリカ政府の採れる強硬なる態度は、全く正当なものと証されるに至るであろう。

#### (B) 平和維持に対する協力行動制度を保存せんとする目的

一九三一年、国務省にあつて事に當つた我々は、今日の相互連結して、産業化せる世界に於ては、戦争は前時代に於けるよりも計りうべからざるほどより破壊的であり、拡大し易いものたること、並に、これを統御せざる限り文明は真に危険にさらされていることを認知し、国民の協同動作によつてのみ、戦争は效果的に抑制せられるものと信じた。又戦争があればそれが強国且つ自立的であつても、国民は経済上の損害又は實際的に卷添を喰うの可能性からまぬがれ得ないこ

とを認識した。目前の世界に於て国際聯盟こそ、かかる協力的戦争防止に対する唯一の現存する一般的システムを代表するものであった。判然と我々が直面したこの危機に於て、我々の採るべき只一の道は、戦争行為拡大防止、及終局的平和克服は共通目標をなす聯盟との真率なる協同であつた。もし我々がこの協同をなさず、我々の世界に起つた問題を傍觀し、ヨーロッパは又それに対して我々が特に関心を有つべきものと当然考えていた場合、最初より聯盟の努力は跛行的であり、わが政府が主導し、且つ調印者たる二つの他の平和条約は必然的に死文となつたであろう。故に我々は、当面の狀態に於て聯盟の活動との協同に最善の努力を尽したのである。

現下の脅かされ、阻喪せる世界に於ては、次の如き質問がなされている。即ちかかる努力は努力の仕甲斐あるものであつたか、聯盟体制は欠点多く且つ無用のものであつたか、団体的活動の全概念は根本的錯誤であるか、人類を一つの戦争防止体制に統一することは全く不可能であるか、近代世界に於て頗る欠点多くして且つ破壊的であることを、立証しているにしても、なお古き侵略的軍備の道へ還元する他に、我々に残された方法はないのであるか。これらは遠大な問題であり、私は此處で私の見るままの解答を任意に概論しうるにすぎない。

一九三一年の日中係争史は、國際的侵略の防止を目標とするある種の行為標準を冒瀆した廉を

i 「抗戦の拡大を防ぐこと、やがては平和を回復すること、を共通の目標とする」という意。

以て一大強国を告訴し、裁判し、有罪を宣告した記録である。これは人類の有史以来始めてなされたことであつた。この裁判が支持したこれら行為標準は十二年足らず存在していたのである。

(註)

(註) 國際聯盟規約は一九一九年、九ヶ国条約は一九二二年、パリ条約は、一九二八年に調印された。

しかるにも拘らず、その処置は、聯盟総会に議席を有する四十二ヶ国によつてなされた宣告の最後の段階に至るまで、威厳と堅実とを以て遂行されたのであり、且つその判決は満場一致で支持されたのである。アメリカ政府の一月七日の通牒に示された例に倣い、この判決は又四十二ヶ国の「満州国」不承認の一致によつて強化された。

これら諸国の共同動作は極東に於ける宣戦布告、中国海岸封鎖及日本の満州直接併合を恐らく防止した。それは一時日本軍隊のある運動、特に錦州への進出を抑制し遲滞させしめた。併し日本の対中国……侵略を停止せしめることは出来なかつた。が、これには協力行為による效果的成績を阻害した様々な理由があつた。大不況、聯盟当然の指導国から現場【*locus in quo*】が遠隔であつたこと、日本軍隊の機敏及既行事件【*fait accompli* 既成事実】を速かに世界に提示したこと、特に共同工作を遲滞困難ならしめた当時の情勢並びに匡正機構の新奇性や、諸国の意とすべき慎重さ、及各国間に發生せる政策の相違に幾分の責任もあつたこと等、これらすべてが合流して、断乎た

る行動成果の効力に対して有力なる制限となつた。

後の日本の北中国進出は、聯盟が、ドイツ及イタリアに於ける不安なる政局に捲込まれている事が明瞭になつてから敢行された。換言すれば、日本に対する聯盟の統一戦線が、ヨーロッパの強国に取つてより一層近接な利害關係をもつ他の問題へと分割されるに至つた後に、行われたのである。然しながら、縷述せる如く、之まで統一戦線を保持する事に与つて力のあつた所の『満州国』不承認決議は、この決議に事実上参加した全ての列強によつて、依然として忠実に奉戴ほうたいされていたのである。其故、この規約は、尚日中紛争の終局的に正しい解決を促進する上に於て役立つていと言えよう。

我々は、極く差迫つてゐる事件の陰影によつて不当に影響を受けたり、意氣阻喪せしめられ易いものである。國際的行動に於ける人類の進化の通常な進歩によつて測るならば、滿州紛争に於ける國際聯盟の成果は、從來の状況から偉大な一步を進めた記録的な重要な事件であつた。その相違を測るには、僅かに十七年の過去を振り返つて見れば明らかにされる。一九一四年七月に我々は、高潔な英國外相が世界の災禍を防遏ぼうあつせんとしながら、關係諸国の代表者を説服するばかりか、彼等とテーブルを囲んで問題を談じ合う事さえも出来ずに、呆然としていた光景を目撃したものである。斯の如き折衝を強制すべき何等の機構も當時は存在しなかつたのである。各国の王様や

皇帝達が冗<sup>くだ</sup>らない電報を互に送り合っている片方で、彼等の政府は自殺的な戦争へ押し流されていた。セラエボ殺人事件にセルビア政府の手が動いていたという主張は、明らかに司法問題であったが、かかる主張に関する真否が、強制的に判決される如き最も初歩的な機構すらも世界は用意していなかった。確かに満州事変は、国際裁判処置の諸要素の構成に素晴らしい進歩を示したし、又斯くの如き処理の存在は、国際社会に於ける重要な且つ必要な進歩を印すものである事も確かである。

戦争回避に対す集団的行動觀念の正しさを測る今一つの尺度は、人類其自体が斯くの如き組織を明らかに信用せんとして來た事実、及び之が為の運動が、世界を通じて益々世論の支持を受けて來た事実によつて給与される。この事を示す証拠は種々な方面で、尚且つ全然別な分野から我々の注目を強要している。

先ず第一に、聯盟の集団的組織に対して、全世界を通じて、諸小国の国民達が理智的にして忠誠なる支持を与えてきた事である。これらの国民は、聯盟の結成以來着実に之を支持し、日中紛争に関する討論に於ては、彼等の代表者達が立役者であつた。實際、司法処分が確實さを伴つて動き出したのは、諸小国の代表によつて圧倒的多数を占めている聯盟總會が、紛争の裁決に当り出してからであつた。これらの小国こそは、從來『強国外交』と呼ばれてきたものから分離して、

世界に於ける法律の支配を確立する可能性は、言うまでもないこと、その必要の確信を、聯盟の歴史を通じて示してきたものである。彼等の裁断を無責任なものとして非難するのは当たらない。彼等が大国よりも弱小であるから、集團の力によつてのみ求め得られる保護の必要を、法律の支配という支持の中により確實に認めるのだという事実が、右の非難の根拠になつてゐる事は疑のない所である。然しながらこの事は實際は、彼等の見解が大国の代表者の見解を屢々歪曲せしめる幾多の障害から解放せられてゐるという事の証拠となるのである。大国の指導者達が、相互依存的な世界に於ける近代戦争の少くとも經濟上の損失から彼等自身の国家と雖も、決して絶対安全ではないという事を認識する事が早ければ早い丈、この点に関する見解の正確さも其丈早く一般的になるであらう【原注27】。

【原注28：「こう言うのも、私は、自分の国の、とりわけ或る指導者たちを思つてゐる。」】

故に私は、集團的行動運動の健全性の最も有力な証左の一は、世界の凡ゆる小国から受けてきた揺ぎなき世論の支持であると言つて誤りでないと考えるのである。

更に進んで、満州事變の進行中、聯盟との隔意なき協力をせんとする我々の政策に対する高まりゆく関心と、支持の証左がアメリカ合衆国の中に顯著に現れてきた。我々は多少の危惧を抱きつつ我々の政策の遂行に着手したのであるが、絶えず昂まりゆく国民の関心と支持とを見たので



あつた。ヨーロッパに於ける戦争の脅威と混沌たる政情とがアメリカを驚駭せしめている今日に於てさえも、矢張り、歴史上曾て見ざる程の大なる関心と聰明な研究とが外交関係に於て、わが国を通じて多くの新らしい国際教育の中心地で進められているのである。これらの研究の中には共同動作の重要性と可能性に対して絶えず成長しつつある関心が含まれている。

最後に、満州エピソードの終熄後に、恐らくは最大の衝撃的な示威と言えるものが行われた。それは一九三五年六月に国際聯盟の支持が大多数を以て決した英国国民が、その後為政指導者が蹉跌した十二月に、世論の声によつて、経済制裁の実験を継続すべき事を主張するのに成功した事である。斯くの如き民衆関心の示威に照して見るとき、私は世論が勢力をもち、專制的政府によつて圧迫される事のない全ての国家においては、地球上の諸国家の協力による戦争制限及防止策を探求せんとする運動が次第に促進されつつあると断言する事が無謀でないと考える。

斯く断言すべからざる何等かの理由があるのか？ 我々は、内国の政治団体内に於ける個人的争闘の人的処置が、同様の進化を辿つた事を目撃した。一千年以前、ヨーロッパ社会に於ては、争闘による裁判が我々の祖先の私的紛争を解決し、殺人犯懲罰の責任は社会にではなく犠牲者の遺族にあつた。私的戦争は、名誉に関する決闘という形式で近世まで残存して来た。然しながら

i イタリアによるエチオピア占領を英仏政府は認める方針を出した、が撤回することになる。

人類の防圧し難き發展は、かかる暴力方法を屏息<sup>へいそく</sup>せしめ、法律という平和的方法をしてこれに代らしめた。

同一の変遷が、人類のより大なる団体の中にも生ずるに相違なく、終局に於て其は普遍的になるという事に疑の余地があるか？ この場合に於ける危険な特性は、この新しい世界の結合が、他の場合なら優に數世紀の歲月を要したかも知れない性質の進化に、必要な速度を与えたという事である。最近、我々が近時創造した文明は余りにも脆弱であり、戦争の武器は余りにも危険なものであるので、従来生長の遅々たる点で定評のあつた人道の組織化された自己統制の發展を促進しない事には、我々の全文明は危険に瀕するに至るであらう。個人としては私は、新秩序が到来しないのではないかと憂慮しない。唯その到来が余りにも遅れて、その間に於ける我々の償い得ざる被害を憂うるのである。

私はそれ故に、戦争防止という我々の課題の解決の為に、集團的行為の理論の健全さに関して決して案ずる事はないと信ずる者である。従来試みられてきた組織による方法の問題が、今一つ残されている。我々が現在それによつて斯くも甚だしく攪乱されている所の、諸々の失敗を生み出した従来の諸方法の欠陥を、指摘する事が出来るであらうか？ 或程度まで私は出来ると確信する。

国際聯盟は、戦争防止に於ける集団的行動のための主要な現存機関である。聯盟規約の条項は主として紛争の調停と裁決及び侵略の抑制に向けられている。これらの方向に於ては、その非難者でさえも、実現された進歩と捷<sup>か</sup>ち得られた漸進的且つ周到な成長の賢明さを認めているのである。聯盟は些細な然しながら危険な紛争の解決に、甚だ価値のある技術を発達せしめた。聯盟は國際上の刺戟の初期に対する安全弁として、絶えず「面つき合せての討議」の価値を発見し之を伸長した。それは又、極めて重大な結果に導き易い國際經濟問題の解決を手がける能力をも示した。聯盟は専門家の助力を求め之を利用する為の仲介者となった。一九二六年に於ける中部ヨーロッパの金融及為替の安定恢復に対するその援助は、賞讃に値するものがあつた。同様の事がオーストリア、ハンガリー、エストニア、ギリシャ及ブルガリアの經濟上の救済に就いて言い得る。

然しながら、近來聯盟は、有力なる國家の不滿から生じた大問題に直面しているのである。大國側は、彼等の政治上の權利が不当に取扱われた、或いは彼等の經濟上の必要が抑圧され脅威されたと主張するのである。斯の如き問題に關して、聯盟の戦争防止的機能は崩壊してゆく可能性がある。世界に於ける經濟的又は政治的變動の爲の必要に副<sup>た</sup>うべく考案された聯盟規約の条項が、狹隘且つ不完全であるばかりでなく、又聯盟其自体が最初からヴェルサイユ條約に縛られているものであり、従つて變化や生長を要求するが如き情況に対しては現状を維持するため機関に作り

上げられているのである。之が私には聯盟の構造に於ける主要な欠点であると考えられるのであり、而して私は之が甚だ重大な欠点であると信ずる。

(註) この点に関しては、スタッフォード基礎理論小叢書の一冊で、一九三六年三月十九日プリンストン大学に於て為されたジョン・フォスター・デュルス【ダレス】氏の「国際界内の平和的変化」と題する興味探ぎ講演を参照せられたし。【John Foster Dulles, "Peaceful Change Within the Society of Nations", 1936】

我々のこの世界は成長し発展しつつある社会である。そこでは人口、土地、資源に関して諸国家の間に甚だしい不平等が存在する。或るものは永年にわたつて持続され来つたものであり、他のものは戦争の結果としての最近の政治的変動から生じたものである。斯くの如き世界に於て、法律の支配は如何に望ましくとも成長と変化を妨害する狂人拘束服としては役立たないし、況んや不正を保護し圧制を維持する為には更に無益なものである。戦争防止組織を斯くの如くに使用せんとする試みは如何なる試みと雖も、結局に於て全組織を優に破壊するに足る爆発を惹起せしめる丈である。

私が指摘した如く、日本が仮令経済的不満と圧制に苦しんでいたとはいえ、毫もその圧迫と苦悩とを緩和する目的でなしに……暴力的行為をなしたところの満州紛争……の場合には右の事は当嵌らない。日

本が必要とするものは通商であつた。日本がその最上の顧客を攻撃し解体しまた怒らせた時、同国は通商を求めもしなければ獲得もしていない。しかし、ヨーロッパに於て現在注目を惹きつつある今一つの場合には、右の事が当嵌ると私は考える。そして不満を醸成しつつある圧迫の根本的原因を<sup>さんじよ</sup>芟除する方法を用意しない限り、ヨーロッパは仮令如何に健全な司法組織を考案しても、戦争防止の恒常的組織を得る事は出来ぬであらうと私は憂えている。

一例を見よ！ 一八七〇年から一九一四年までの間にドイツは、ドイツの土のみで養い得る数を大凡二千八百万人超過した余剰人口を持つに至つた。右の期間、この人口は、ドイツの食糧品その他の供給の大部分を国外から輸入しつつ、国際貿易によつて維持せられた。今日もその人口は元通り残っているが、之を支えていた貿易は大部分喪失した——関税障壁の新システム及び同国の従前の通商の発展を妨害した動揺する為替相場の不安定によつて。他の欧州諸国にも同様の事が当嵌まる。

(註) 筆名著「欧州に於ける民主主義と国家主義」第二章はこの主題を取扱っているものである。参照された。Henry Lewis Stimson, "Democracy and Nationalism in Europe", 1934]

斯の如き情況は、必然に再整理を要求する。欧州の或国々の事態に戦争によつて突然加えられた変化に關して妥当するものは、多少の程度の差はあれ全世界にも妥当する。世界組織は未だ曾

て固定した事はない。国家の境界も国家の貿易線も常に変化を受けてきた。過去に於ては、これらの変化が普通、戦争によつて行われてきた。それ故、戦争を防止する目的を以て世界的制度を設置せんとする試みは、常に動的であり決して靜的でなかつた世界に、必要な平和的変化を用意しなければならぬ。

変化の激しい世界の日日に移り行く事態に適應すべき建設的な機構を設備する問題は、その様相に於ても亦その全体的見透しに於ても、極めて困難である。国境の平和的変更は、伝統的に困難である。然しながら幸いにも近代社会に於ては、世界の組織に孕れている不平等から發生する圧迫の大部分を救済する如き安全弁が存在する。それは通商の自由である。アメリカはそれ自身の歴史の初期に、近代ヨーロッパの危険な環境から多くの点で相異していながら、しかも尚右の事が有用且つ有意義なものである事を知つた例を記憶するであらう。革命戦争は、北アメリカに十三の不満にあふれた好争独立州を残存せしめた。彼等は豊富な土地を有し、對外戦争に於ける戦勝の記憶を有していた。然しながら、彼等は戦い疲れ貧窮し、その經濟状態は絶望的であつた。インフレーションは盛んに行われ、彼等の商工業は疲弊しきつていた。そして各自の天然資源と事業とは頗る不同であつた。英国との敵対中止後の七ヶ年間に、彼等は急速に不和と無政府状態へ押し流されて行つた。彼等は深刻な境界及関税の紛糾に煩されていた。彼等は分離主義の

国家感情を發展させ始め益々相互に敵対心を増進した。

最後に至つて彼等は、二つの基本的經濟改革に救済策を見出した。彼等は十三州の間に無関税及自由貿易制度を採用し、又安定し且つ統一された金融制度を樹立した。これら改造の必要こそ、嫉妬深いこれら十三の独立州をして連邦憲法を作製批准すべく仕向けた大きな原因であつた。僅か数年を出でずして繁栄と信用と満足とが獲得され、国境の紛糾は解消した。經濟的な基礎が築かれ、その上に各州間の紛争を平和的法律的に解決せしめる可能性を有つ機構が設立された。

若し世界大戰の終了後に、中部ヨーロッパの戦い疲れた新興国の間に、関税障壁の樹立に対する右と同様な禁止制を命令的に設定する事が可能であつたならば、産業の恢復は踵を接して實現し、又現在ヨーロッパを新たな戦争で脅やかしている圧力は回避し得られたであろう、と私は信ずる。より以上困難な事態の下にある現在に至つては、斯の如き救済方法を設ける仕事は速急に始められねばならぬ【註】。

（註）一九三〇年、フランスのブリアン氏によつて提唱された「欧州合衆国」案にも、斯の如き行動の暗示が包含されている。その進展は大不況の襲來の為に挫折したが。

政治的にせよ、經濟的にせよ、正当な不平が抑圧し難き暴力の爆発を誘発することを防止し得るような設備は、何れにしても集團的なシステムの中に設定されなければならない。貿易關係を

開くという予防的衛生は、紛争が起つた後になつてそれを法律的に決定せんとする外科手術よりは確かに遙に有効である事は立証されるであらう。

私はこの主題が、議論の繰返し行われたあの制裁の問題に直接な関係を持つものと考ええる。制裁を課する試みが抑圧し得ざる戦争へと導くものか否かは、制裁の性質に依存することは当然であるが、他の諸要素の性質によつても亦甚だ左右される。例えば紛争の正しさであるが、これは反抗国に対する協同戦線の強弱によつて左右される。又正しい根拠を背景として完全に統一された戦線は、極めて穏やかな制裁を以てしても、弱力な或いは因循する戦線が最も厳格な制裁を以て臨んだ場合よりも、却つて遙かに効果を挙げる事が出来るであらう。合衆国連邦の如く完全に組織された統一体に於ては、各主権州間の紛争に関する最高法院の制裁は、ただ世論という制裁で以て一様に遵守されている。一般に世界平和維持の爲の有效な集団組織は、考え得べき両極端の中間の何処かに、其自身の制裁組織を追々発見してゆくであらうと私は考える。然しながら、人を絶望に突落す所の経済問題の建設的解決法が設けられたならば、前述集団組織を実現する上に非常な便宜が得られるに違いない。

この過渡期に在つては、権力者は常に如何なる批評家にも断定や冷評を許さぬ問題に当面している。私自身としては、紛擾ふんじょう惹起の場合には、「強国外交」の種々ようよう容喙かいに委せるよりは、法の



支配という確実な対象によつて操縦する方が、安全でもあり賢明でもあると信ずる傾きがある。

如何なる制裁制度に於ても、その成否は指導者の智能と熱意とに負う所大であり、之によつてそのシステムの最初の國際的テストが完成に齎されるものである。究極の成功はハズミによつて甚だしく促進される。殆ど全ての集團的行為形式は、若しそれがその構成員の信頼を勝ち得て居り、且つ溫情的にして有效な結論を實踐に移す能力を持つて來たものであれば、戰爭を抑制する方法の解決を躍起になつて探している世界に必ずや迎合されるであらう。成功の影響は、國際聯盟それ自体のみに限られているわけではない。之はアメリカでは非常に有力であると私は信ずる。國際聯盟が一九三五年の秋に斷乎としてその制裁を進行せしめつつあつた時に、アメリカの世論を観察した私は益々この見解を強めた。戰爭防止のその組織的機構を、目的通り實現するのに確實且つ有效である事を示した聯盟と合衆国との協力は、比較的容易であると私は信ずる。

本書に於て、私は大英帝國政府との協力に於ける我々の經驗を強調した。その理由はヨーロッパに於ける集團的行動の究極の發展には、それが現在の國際聯盟に依つて行われようと否とを問わず、大英帝國政府及その屬領に大なる指導責任が歸する事は、余りにも明瞭であると確信するからである。かかる指導者の進路が、例えばアメリカの様な非参加国によつて背面から妨害されるという惧れを招来してはならないという事は、極めて肝要であると私は信じている。かかる保

障を確立する為には、國際活動の大部分を構成する執行方法のすべてに於ける両国政府の協同は、率直であり能率的であり且つ傳統的たるべきである。若し私が本書に批判めいた叙説をなしたとすれば、それは私がイギリス政府の当面せる難局に対する認識不足からでもなく、又我政府が間違を犯していないという理由からでもない。私が斯く記述したのは、率直であることは我々両国間に於ては可能事であり、率直であることに於てのみ両国間の真正なる協同の永遠の伝統が確立されうると信ずるからである。これを試みるに當つての私の経験からいって、それは可能である許りでなく容易であると同時に更に、この困難なる世界の問題解決に於ける英米協力の重大性に關する私自身の考えは、わが国民大多数のものなることを確言し得ることは、私の欣快とするところである。

結論せんに、しかしてこの結論を世界に於ける戦後の絶望状態の天底<sup>i</sup>とも見える時に記述するに當つて、私は今日必要なる重大特質はわが民族の歴史的伝統に対する信念、お互いの困難に対する公明正大、特に勇氣であると信ずる。理知的希望に対しては充分なる根柢がある。わが世界は我々の周囲に廢墟となりつつあるかに見える。我々の進歩は又もとの出発点へと引き戻されているかに見える。更生の仕事すら現在の過誤がそれを不可能ならしめたかに見える。併しながら、

i 1936年を指すのであろう。もっと深い底があったのだが。

斯様な考えは永い闘争のある毎におこる共通の出来事である。軍人は誰も劇烈な戦場に出る毎にこの考えに出会する、そしてその考えは堅持する勇氣の前に蒸発することを知っている。

何人も我々の限定された見地から正確に真近の終来をも予告することは出来ない。併し我々が少くとも文字通り数百万年漸次に作り上げて来た、自由、寛容、正義に於ける永い進歩は所謂民衆政治なる組織的自製の成長と共に永遠に破壊されるものでないことを認知している。現在の世界は不完全であると雖も、混乱の中に全部溶解し去るものではない。この世界を相互依存的なものたらしめ一見脆弱なものたらしめて、かくて我々にして現在の難局を直面せしめた創意こそは、同時に知識と経験の一般的破壊を不可能ならしめたものである。

現下の圧倒的な諸問題も、結局すでに人類に依つて海図に記されたコースをすすむことに依り且及各時代の知者、自由者、勇者の追求した諸原理に従つて解決される。信念と勇氣とを働かせることによって、疑惑と不安定のこの過渡期を、出来うる限り短く且つ無害なものたらしめることが我々の任務である。

## 附録一

【以下の附録一〜四は、末尾の附記にあるように、新たに訳されたものではなく、外務省公表の文書の写しである。それは当時、漢字カタカナ混じり文で、殆ど句読点もなく、濁点もない。平仮名に直し、適宜句読点を挿入、更に本文同様読みやすいように、部分的に現代文に改めた。】

### 国際聯盟規約

締約国は

戦争に訴えざるの義務を受諾し、

各国間における公明正大なる関係を規律し、

各国政府間の行為を律する現実の基準として国際法の原則を確立し、

組織ある人民の相互の交渉において正義を保持し、且つ厳に一切の条約上の義務を尊重し、

以て国際協力を促進し、且つ各国間の平和安寧を完成せむがため、

ここに国際聯盟規約を協定す。

## 第一条【加入と脱退】

一、本規約付属書列記の署名国、及び留保なくして本規約に加盟するその該付属書列記の爾余諸国を以て、国際聯盟の現聯盟国とす。右加盟は、本規約実施後二月以内に宣言書を聯盟事務局に寄託して之をなすべし。右に關しては、一切の他の聯盟国に通告すべきものとす。

二、付属書に列記せざる国、領地又は植民地にして完全なる自治を有するものは、その加入につき、聯盟總會三分の二の同意を得るにおいては、総て聯盟国となることを得る、但し、その国際義務遵守の誠意あることにつき有効なる保障を与え、且つその陸海及び空軍の兵力その他の軍備に關し聯盟の定むることあるべき準則を受諾することを要す。

三、聯盟国は、二年の予告を以て聯盟を脱退することを得る、但し脱退の時までにその一切の国實際上及本規約上の義務は履行せられたることを要す。

## 第二条【機関】

本規約による聯盟の行動は、聯盟總會及び聯盟理事会並びに付属の常設聯盟事務局に依りて之をなすべきものとす。

### 第三条【聯盟總會】

- 一、聯盟總會は、聯盟国の代表者を持つて之を組織す。
- 二、聯盟總會は、聯盟本部所在地又は別に定むることあるべき地において、定期に及び必要に應じ隨時之を開く。
- 三、聯盟總會は、聯盟の行動範圍に属し又は世界の平和に影響する一切の事項をその會議において処理す。
- 四、聯盟国は、聯盟總會の會議において各一箇の表決權を有すべく、且つ三名を超えざる代表者を出すことを得る。

### 第四条【聯盟理事会】

- 一、聯盟理事會は、主たる同盟及び連合国の代表者並び他の四聯盟国の代表者を持つて之を組織す。該四聯盟国は、聯盟總會その裁量に依り隨時之を選定す。聯盟總會が第一次に選定する四聯盟国に於てその代表者を任命するまでは、ベルギー国、ブラジル国、スペイン国、ギリシャ国の代表を以て聯盟理事會員とす。

二、聯盟理事会は、聯盟總會の過半数の同意あるときは、聯盟理事會に常に代表者を出すべき聯盟國を追加指定することを得る。聯盟理事會は、同會に代表せしむるため、聯盟總會の選定すべき聯盟國數を前同様の同意を以て増加することを得る。

二の一、聯盟總會は、聯盟理事會非常任代表國の選挙に関する規則、特にその任期及び再選の条件に関する規則を三分の二の多数により定むるべし。

（本項は一九二二年十月五日の決議により追加せられ、一九二六年七月二十九日効力を發生せり）

三、聯盟理事會は、聯盟本部所在地又は別に定むることあるべき地において、必要に応じ隨時に且つ少なくとも毎年一回之を開く。

四、聯盟理事會は、聯盟の行動範圍に属し又は世界の平和に影響する一切の事項をその會議において處理す。

五、聯盟理事會に代表せられざる聯盟各國は、特にその利益に影響する事項の審議中、聯盟理事會會議に理事會員として列席する代表者一名の派遣を招請せらるべし。

六、聯盟理事會に代表せらるる聯盟各國は、聯盟理事會會議において一箇の表決件を有するべく、且つ一名の代表者を出すことを得る。

## 第五条【総会と理事会の議事】

一、本規約中又は本条約の条項中別段の明文ある場合を除くの外、聯盟総会又は聯盟理事会の會議の議決は、その會議に代表せらるる聯盟国全部の同意を要す。

二、聯盟総会又は聯盟理事会の會議に於ける手続きに関する一切の事項は、特殊事項調査委員の任命と共に聯盟総会又は聯盟理事会が之を定む。

三、聯盟總會の第一回會議及び聯盟理事会の第一回會議は、アメリカ合衆国大統領之を招集すべし。

## 第六条【聯盟事務局】

一、常設聯盟事務局は、聯盟本部所在地に之を設置す。聯盟事務局には、事務総長一名並びに必要なる事務官及び属員を置く。

二、第一次の事務総長は、付属書に之を指定し、爾後の事務総長は、聯盟總會過半数の同意を以て聯盟理事会之を任命す。

三、聯盟事務局の事務官及び属員は、聯盟理事会の同意を以て事務総長之を任命す。

四、事務総長は、聯盟總會及び聯盟理事会の一切の會議に於て、その資格にて行動す。



五、聯盟の經費は、聯盟總會の決定する割合に従い、聯盟国之を負擔す。

(本項は一九二二年十月五日改正を採択せられ、一九二四年八月十三日効力を發生せり。改正以前のものは次の如し、

「聯盟事務局の經費は、万国郵便連合総理局分担の割合に従い聯盟国之を負擔す」<sup>1</sup>。

#### 第七条【聯盟本部所在地、職員、特権】

一、聯盟本部所在地は、「ジュネーヴ」とす。

二、聯盟理事会は、何時たりとも、その議決に依り、他の地を持つて聯盟本部所在地となすことを得る。

三、聯盟に関し又は之に附帶する一切の地位は、聯盟事務局の地位と共に、男女均しく之に就くことを得る。

四、聯盟国代表者及び聯盟職員は、聯盟の事務に従事する間、外交官の特権及び免除を享有す。

五、聯盟、聯盟職員又は聯盟會議參列代表者の使用する建物その他の財産は、之を不可侵とす。

i 原著では、改正された文をイタリック体で表示しているが、改正前の文、改正案の文などは載せていない。

## 第八條【軍備縮小】

一、聯盟国は、平和維持のためには、その軍備を国の安全及び国際義務を共同動作を以てする強制に支障なき最低限度まで縮小するの必要あることを、承認す。

二、聯盟理事会は、各国政府の審議及び決定に資するため、各国の地理的地位及び諸般の事情を参酌して、軍備縮小に関する案を作成すべし。

三、該案は、少なくとも十年毎に再審議に付せらるべく、且つ更正せらるべきものとす。

四、各国政府前期の案を採用したるときは、聯盟理事会の同意あるに非ざれば、該案所定の軍備の限度を超ゆることを得ず。

五、聯盟国は、民業による兵器彈藥及び軍用機材の製造が重大なる非議【objections】を免ざるものなることを認める。仍て聯盟理事会は、該製造に伴う弊害を防遏し得べき方法を具申すべし。尤も聯盟国中その安全に必要な兵器彈藥及び軍用器材を製造し得ざるものの需要に關しては、相当参酌すべきものとす。

六、聯盟国は、その軍備の規模、陸海及び空軍の企画並び軍事上の目的に供用し得べき工業の状況に關し、充分にして隔意なき報導【information】を交換すべきことを約す。

## 第九条【常設軍事委員会】

第一条及び第八条の規定の実行並び陸海及び空軍問題全般に關しては、聯盟理事會に意見を具申すべき常設委員會を設置すべし。

## 第十条【領土保全と政治的獨立】

聯盟國は、聯盟各國の領土保全及び現在の政治的獨立を尊重し、且外部の侵略に対し之を擁護することを約す。右侵略の場合又はその脅威若しくは危険ある場合に於ては、聯盟理事會は、本条の義務を履行すべき手段を具申すべし。

## 第十一条【戦争の脅威】

一、戦争又は戦争の脅威は、聯盟國の何れかに直接の影響あると否とを問わず、総て聯盟全体の利害關係事項たることを茲に声明す。仍て聯盟は、國際の平和を擁護するため、適当且つ有効と認める措置を執るべきものとす。この種の事變發生したるときは、事務総長は、何れかの聯盟國の請求に基づき直に聯盟理事會の會議を招集すべし。

二、國際關係に影響する一切の事態にして、國際の平和又はその基礎たる各國間の良好なる了解

を攪乱せむとする虞あるものに付き、聯盟總會又は聯盟理事会の注意を喚起するは、聯盟各国の友誼的權利なることを併せて茲に声明す。

### 第十二条【国交断絶の虞ある紛争の仲裁】

一、聯盟国は、聯盟国間に国交断絶に至る虞ある紛争発生するときは、当該事件を仲裁裁判若しくは司法的解決又は聯盟理事会の審査に付すべく、且つ仲裁裁判官の判決若しくは司法裁判の判決後又は聯盟理事会の報告後三月を経過する迄、如何なる場合においても、戦争に訴へざることを約す。

二、本条に依る一切の場合に於て、仲裁裁判官の判決又は司法裁判の判決は、相当期間内に、聯盟理事会の報告は、紛争事件付託後六月以内に之をなすべし。

（本条は一九二二年十月四日改正案採択せられ、一九二四年九月二十六日効力を発生せり。「司法的解決司法裁判の判決」なる字句を挿入せられたることが改正点なり）

### 第十三条【裁判】

一、聯盟国は、聯盟国間に仲裁裁判又は司法的解決に付し得ると認める紛争を生じ、その紛争が

外交的手段に依りて満足なる解決を得ること能わざる時は、当該事件全部を仲裁裁判又は司法的解決に付すべきことを約す。

二、条約の解釈、国際法上の問題、国際義務の違反となるべき事実の存否並び該違反に対する賠償の範囲及び性質に関する紛争は、一般に仲裁裁判又は司法的解決に付し得る事項に属するものなることを声明す。

三、審理のため紛争事件を付託すべき裁判所は、第十四条の規定に依り設立せられたる常設国際司法裁判所又は当事国の合意を以て定め、若しくは当事国間に現存する条約の規定の定める裁判所たるべし。

四、聯盟国は、一切の判決を誠実に履行すべく、且つ判決に服する聯盟国に対しては戦争に訴えざることを約す。判決を履行せざるものあるときは、聯盟理事会は、その履行を期するため必要なる処置を提議すべし。

(本条は一九二一年十月四日改正案採択せられ、一九二四年九月二十六日その効力を発生せり。改正以前のものは次の如し)

「聯盟国は、聯盟国間に仲裁裁判に付し得と認める紛争を生じ、紛争が外交手段に依りて満足なる解決を得ることを与わざるときは、当該事件全部を仲裁裁判に付すべきことを約す。

条約の解釈、國際法上の問題國際義務の違反となるべき事實の存否並び該違反に対する賠償の範圍及び性質に関する紛争は、一般に仲裁裁判に付し得る事項に属するものなることを声明す。

審理のため、紛争事件を付託すべき仲裁裁判所は、当事国の合意を以て定め又は当事国間に現存する条約の規定の定むる所に依る。

聯盟国は、一切の仲裁判決を誠実に履行すべく、且つ判決に服する聯盟国に対しては戦争に訴えざることを約す。判決を履行せざるものあるときは、聯盟理事会はその履行を期するため必要なる処置を提議すべし。〕

#### 第十四条【常設國際司法裁判所】

聯盟理事会は、常設國際司法裁判所設置案を作成し、之を聯盟国の採決に付すべし。該裁判所は、國際的性質を有する一切の紛争にして、その当事国の付託に係るものを、裁判するの権限を有す。なお該裁判所は、聯盟理事会又は聯盟總會の諮問する一切の紛争、又は問題に関し意見を提出することを得る。

#### 第十五条【聯盟理事会の紛争審査】

一、聯盟国間に国交断絶に至るの虞ある紛争発生し、第十三条による仲裁裁判又は司法的解決に付せられざるときは、聯盟国は当該事件を聯盟理事会に付託すべきことを約す。何れの紛争当事国も、紛争の存在を事務総長に通告し、以て前記の付託をなすことを得る。事務総長は、之が充分なる取調べ及び審理に必要な一切の準備をなすものとす。

(本項は一九二二年十月四日改正案採択せられ、一九三四年九月二十六日効力を発生せり。仲裁裁判なる字句の次に「又は司法的解決」なる字句を挿入せられたることが改正点なり)

二、この目的のため、紛争当事国は、成るべく速に、当該事件に関する陳述書を一切の關係事實及び書類と共に事務総長に提出すべく、聯盟理事会は、直にその公表を命ずることを得る。

三、聯盟理事会は、紛争の解決に力むべく、その努力、功を奏したるときは、その適当と認める所に依り、当該紛争に関する事實及び説明並びその解決条件を記載せる調書を公表すべし。

四、紛争解決に至らざるときは、聯盟理事会は、全会一致又は過半数の表決に基づき当該紛争の事實を述べ、公正且つ適当と認める勧告を載せたる報告書を作成し之を公表すべし。

五、聯盟理事会に代表せらるる聯盟国は、何れも当該紛争の事實及び之に関する自国の決定に付き陳述書を公表することを得る。

六、聯盟理事会の報告書が紛争当事国の代表者を除き他の聯盟理事会員全部の同意を得たるもの

となるときは、聯盟国は、その報告書の勧告に応ずる紛争当事国に対し戦争に訴えざるべきことを約す。

七、聯盟理事会に於て、紛争当事国の代表者を除き、他の聯盟理事會員全部の同意ある報告書を得るに至らざるときは、聯盟国は、正義公道を維持するため必要と認める処置を執るの権利を留保す。

八、紛争当事国の一国において、紛争が国際法上専ら該当事国の管轄に属する事項に付き生じたるものなることを主張し、聯盟理事会之を是認したるときは、聯盟理事會は、その旨を報告し、且つ之が解決に関し何等の勧告をも為さざるものとす。

九、聯盟理事會は、本条に依る一切の場合に於て紛争を聯盟總會に移すことを得る。紛争当事国一方の請求ありたるときは、亦之を聯盟總會に移すべし。但し右請求は、紛争を聯盟理事會に付託したる後十四日以内に之をなすことを要す。

一〇、聯盟理事會の行動及び権限に関する本条及び第十二条の規定は、聯盟總會に移したる事件に関し、総て之を聯盟總會の行動及び権能に適用す。但し、紛争当事国の代表者を除き、聯盟理事會に代表せらるる聯盟各国代表者及び爾余過半数聯盟国の代表者の同意を得たる聯盟總會の報告書は、紛争当事国の代表者を除き、他の聯盟理事會員全部の同意を得たる聯盟理



事会の報告書と同一の効力を有すべきものとす。

#### 第十六条【制裁】

一、第十二条、第十三条又は第十五条に依る約束を無視して戦争に訴えたる聯盟国は、当然他の総ての聯盟国に対して戦争行為をなしたるものと看做す。他の総ての聯盟国は、之に対し直に一切の通商上又は金融上の關係を断絶し、自国民と違約国国民との一切の交通を禁止し、且つ聯盟国たると否とを問わず、他の総ての国の国民と違約国国民との間の一切の金融上、通商上又は個人的交通を防遏すべきことを約す。

#### 改正案 本条第一項後段を次の通り改める

「他の総ての聯盟国は、之に対し直に一切の通商上又は金融上の關係を断絶し、自国版図内に居住する者と違約国の版図内に居住する者との間に一切の交通を禁止し、且聯盟国たると否とを問わず、他の総ての国の版図内に居住する者と違約国版図内に居住する者との間に一切の金融上通商上又は個人的交通を防遏すべきことを約す」（一九二二年十月四日採択）

#### 本条第一項後段を次の通り改む

「他の総ての聯盟国は、之に対し直に一切の通商上又は金融上の關係を断絶し、少くとも自国版図内

に居住する者と違約国の版図内に居住する者との間の、又若し適當なりと思惟したる場合には自国民と違約国民との間の一切の交通を禁止し、且つ聯盟国たると否とを問わず、少くとも他の総ての国の版図内に居住する者と当該国の版図内に居住する者との間の、又若し適當なりと思惟したる場合には聯盟国たると否とを問わず、他の総ての国の国民と違約国国民との間の一切の金融上通商上又は個人的交通を防遏すべきことを約す」(一九二四年九月二十七日採択)

(編者『國際條約集』の)曰く、第十六條第一項後段については二種の改正案存在する次第なり) 本條第二項として次の一項を加える

「規約の違反ありたりや否やに關し意見を述ぶるは聯盟理事会とす。聯盟理事会に於ける右問題の討議に當りては、戦争に訴えたりと申立てられたる聯盟国及右行動の仕向けられたる聯盟国の表決は之を算入せず」(一九二二年十月四日採択)

本條第三項を加える

「聯盟理事會は、本條に依る經濟的圧迫の措置の實行に付その勧告する期日を一切の聯盟国に通告すべし」(一九二二年十月四日採択)

本條第四項として次の一項を加える

「尤も聯盟理事會は、特定の聯盟国に付前項に掲ぐる措置の何れかを、一定の期間猶予するを以て右

措置の目的の達成を容易ならしむるものと認めるとき、又は該聯盟国が受くべき損失及不便を最少限度に止むるため必要ありと認めるときは、該猶予を決定することを得る」(一九二一年十月四日採択)

二、聯盟理事会は、前項の場合において、聯盟の約束擁護のため使用すべき兵力に対する聯盟各国の陸空又は空軍の分担程度を、關係各国政府に提案するの義務あるものとす。

改正案 本項に「前項の場合に於て」とあるを削る

三、聯盟国は、本条により金融上及び經濟上の措置を執りたる場合に於て、之に基づく損失及び不便を最小限度に止むるため、相互に支持すべきこと、聯盟の一国に対する違約国の特殊の措置を抗拒するため相互に支持すべきこと、並びに聯盟の約束擁護のため協力する聯盟国軍隊の版図内通過に付き必要なる処置を執るべきことを約す。

四、聯盟の約束に違反したる聯盟国に付ては、聯盟理事会に代表せらるる他の一切の聯盟国代表者の聯盟理事会における一致の表決を以て、聯盟より之を除名する旨を声明することを得る。

#### 第十七条【非聯盟国の關係する紛争】

一、聯盟国と非聯盟国との間又は非聯盟国相互の間に紛争を生じるときは、この種の紛争解決

のため聯盟国の負うべき義務を該非聯盟国が聯盟理事会の正当と認める条件を以て受諾することをして之に勧誘すべし。勧誘の受諾ありたる場合に於ては、第十二条乃至第十六条の規定は、聯盟理事会に於て必要と認める修正を加えてこれを適用す。

二、前項の勧誘をなしたるときは、聯盟理事会は、直に紛争事情の審査を開始し、当該事情の下において最善且つ最有効と認める行動を勧告すべし。

三、勧誘を受けたる国がこの種の紛争解決のため聯盟国の負うべき義務の受諾を拒み、聯盟国に對し戦争に訴える場合においては、第十六条の規定は、該行動を執る国に之を適用す。

四、勧誘を受けたる紛争当事国の双方が、この種の紛争解決のため聯盟国の負うべき義務の受諾を拒む場合に於ては、聯盟理事会は、敵對行為を防止し紛争を解決すべき措置及び勧告をなすことを得る。

#### 第十八条【条約の登録】

聯盟国が将来締結すべき一切の条約又は国際約定は、直ちに之を聯盟事務局に登録し、聯盟事務局は成るべく速にこれを公表すべし。右条約又は国際約定は、前記の登録を了するまで、その拘束力を生ずることとなるべし。

### 第十九条【条約の再審議】

聯盟総会は、適用不能となりたる条約の再審議、又は継続の結果世界の平和を危殆ならしむべき国際状態の審議を、随時聯盟国に慫慂することを得る。

### 第二十条【規約と両立しない国際約定】

一、聯盟国は、本規約の条項と両立せざる聯盟国相互間の義務又は了解が、各自国の関する限り総て本条約に依り廃棄せらるべきものとなることを承認し、且つ今後本規約の条項と両立せざる一切の約定を締結せざるべきことを誓約す。

二、聯盟国となる以前、本規約の条項と両立せざる義務を負担したる聯盟国は、直ちにその義務の解除を得るの処置を執ることを要す。

### 第二十一条【両立し得る国際約定】

本規約は、仲裁裁判条約の如き国際約定、または「モンロー」主義の如き一定の地域に関する了解にして平和の確保を目的とするものの効力に、何等の影響なきものとす。

## 第二十二條【委任統治】

一、今次の戦争の結果、従前支配したる国の統治を離れたる植民地及び領土にして近代世界に激甚なる生存競争状態の下に未だ自立し得ざる人民の居住するものに対しては、該人民の福祉及び發達を計るは、文明の神聖なる使命なること、及びその使命遂行の保障は、本規約中に之を包容することの主義を適用す。

二、この主義を實現する最善方法は、該人民に対する後見の任務を先進国にして資源、經驗又は地理的位置に因り最もこの責任を引き受けるに適し、且つ之を受諾するものに委任し、之をして聯盟に代わり受任国として右後見の任務を行わしむるに在り。

三、委任の性質に付いては、人民發達の程度、領土の地理的地位、經濟状態その他類似の事情に従い差異を設けることを要す。

四、従前トルコ帝国に属したる或部族は、独立国として仮承認を受け得る發達の程度に達したり。尤もその自立し得る時期に至る迄、施政上受任国の助言及び援助を受くべきものとす。前記受任国の選定に付いては、主として当該部族の希望を考慮することを要す。

五、他の人民殊に中央アフリカの人民は、受任国に於てその地域の施政の責に任ずべき程度に

在り。尤も受任国は、公の秩序及び善良の風俗に反せざる限り良心及び信教の自由を許与し、奴隷の売買または武器若しくは火酒類の取引の如き弊習を禁止し、並びに築城または陸海軍の根拠地の建設、及び警察または地域防衛以外のためにする土民の軍事教育を禁遏<sup>きえあつ</sup>すべきことを保障し、且つ他の聯盟国の通商貿易に対し均等の機会を確保することを要す。

六、西南アフリカ及び南太平洋諸島の如き地域は、人口の希薄、面積の狭小、文明の中心より遠きこと、又は受任国領土と隣接することその他の事情により、受任国領土の構成部分としてその国法の下に施政を行うを以て最善とす。但し受任国は、土着人民の利益のため前記の保証を与うることを要す。

七、各委任の場合に於て、受任国は、その委託地域に関する年報を聯盟理事会に提出すべし。

八、受任国の行う権限、監理又は施政の程度に関し、予め聯盟国間に合意なきときは、聯盟理事会は、各場合に付き之を明定すべし。

九、受任国の年報を受理審査せしめ、且つ委任の実行に関する一切の事項に付き聯盟理事会に意見を具申せしむるため、常設委員会を設置すべし。

聯盟国は、現行又は将来協定せらるべき国際条約の規定に遵由し【Subject to and in accordance with】

(イ) 自国内に於て及びその通商産業関係の及ぶ一切の国に於て、男女及び児童のために、公平にして人道的なる労働条件を確保するに力め、且つ之がため必要なる国際機関を設立維持すべし。

(ロ) 自国の監理に属する地域内の土着住民に対し、公正なる待遇を確保することを約す。

(ハ) 婦人及び児童の売買、並びに阿片その他の有害薬物の取引に関する取極めの実行に付き、一般監視を聯盟に委託すべし。

(ニ) 武器及び弾薬の取引を、共通の利益上取締るの必要ある諸国との間に於けるその取引の一般監視を聯盟に委託すべし。

(ホ) 交通及び通過の自由、並びに一切の聯盟国の通商に対する衡平なる待遇を確保するため方法を講ずべし。右に關しては、一九一四年乃至一九一八年の戦役中、荒廢に歸したる地域の特殊の事情を考慮すべし。

(ヘ) 疾病の予防及び撲滅のため、国際利害關係事項に付き措置を執るに力むべし。

## 第二十四条【国際事務局】



一 一般条約に依る既設の国際事務局は、当該条約当事国の承諾あるに於ては、総て之を聯盟の指揮下に属せしむべし。国際利害関係事項処理のため今後設けらるべき国際事務局及び委員会は、総て之を聯盟の指揮下に属せしむべきものとす。

二 一般条約により規定せられたる国際利害関係事項にして、国際事務局又は委員会の管理に属せざるものに関しては、聯盟事務局は、当事国の請求に基づき聯盟理事会の同意を得てその一切の關係情報を蒐集頒布し、その他必要又は望ましき一切の援助を与うべし。

三 聯盟理事会は、聯盟の指揮下に属せしめたる事務局又は委員会の経費を聯盟事務局の経費中に編入することを得る。

#### 第二十五条【赤十字篤志機関】

聯盟国は、全世界にわたり健康の増進、疾病の予防及び苦痛の軽減を目的とする公認の国民赤十字篤志機関の設立及び協力を奨励促進することを約す。

#### 第二十六条【改正】

一、本規約の改正は、聯盟理事会を構成する代表者を出す聯盟各国及び聯盟総会を構成する代表

者を出す過半数聯盟国、之を批准したるとき、その効力を生ずるものとす。

#### 改正案 本条第一項を次の通り改める

「本規約の改正にして、その本文が聯盟總會に於て四分の三の多数に依り表決を経たるものは、右四分の三中には、會議に代表せらるる一切の聯盟理事会構成国の表決を含むことを要す、表決の際に於ける聯盟理事会を構成する代表者を出す聯盟各国及聯盟總會を構成する代表者を出す過半数聯盟国之を批准したるとき、その効力を生ずるものとす」(一九二二年十月三日採択)

#### 改正案 本条第一項の次に次の一項を加える

「聯盟總會の表決後二十月以内に必要なる批准を得ざるときは、改正決議はその効力を生ぜず。」  
(一九二二年十月三日採択)

二、右改正は、之に不同意を表したる聯盟国を拘束することなし。但しこの場合に於て当該国は聯盟国たらざるに至るべし。

#### 改正案 本条第二項を次の二項に改める。

「事務総長は、改正が効力を生じたるときは、その旨を聯盟各国に通告すべし。

右通告の際、未だ改正の批准を了せざる聯盟国はこれが受諾を拒絶する旨を一年以内に事務総長に

通告するの自由を有す。但しこの場合に於て当該国は聯盟国たらざるに至るべし」(一九二一年十月三日採択)

## 附録二

## Nine Power Treaty

## 中国に関する九カ国条約

アメリカ合衆国、ベルギー国、英帝国、中国、フランス国、イタリア国、日本国、オランダ国及びポルトガル国は、極東に於ける事態の安定を期し、中国の権利利益を擁護し、且つ機会均等の基礎の上に、中国と列国との間の交通を増進せしむとするの政策を採用することを希望し、

右の目的を以て条約を締結することに決し、之がため左の如くその全権委員を任命せり（委員名省略）。

右各委員は、互いにその全権委任状を示し、之が良好妥当なるを認めたる後、左の如く協定せり。

第一条 中国以外の締約国は左の通り約定す、

（一）中国の主権、独立並びにその領土的及び行政的保全を、尊重すること、

（二）中国が自ら有力かつ安固なる政府を確立維持するため、最も完全にしてかつ最も障礙な

き機会をこれに供与すること、

(三) 中国の領土を通じて、一切の国民の商業及び工業に対する機会均等主義を有効に樹立維持するため、各々尽力すること、

(四) 友好国の臣民又は人民の権利を減殺すべき特別の権利又は特権を求めるため中国における情勢を利用することを、及び、右友好国の安寧に害ある行動を是認することを、差し控えること。

## 第二条

締約国は、第一条に記載する原則に違背し又はこれを害すべき如何なる条約、協定、取極又は了解をも、相互の間に又は各々別に若しくは協同して他の一国又は数国との間に、締結せざるべきことを約定す。

## 第三条

一切の国民の商業及び工業に対し、中国に於ける門戸開放又は機会均等の主義を一層有効に適用するの目的を以て、中国以外の締約国は、左を要求せざるべく又各自国民の左を要求

することを支持せざるべきことを約定す、

(イ) 中国の何れかの特定地域に於て商業上又は經濟上の發展に關し、自己の利益のため、一般的優越權利を設定するに至ることあるべき、取極、

(ロ) 中国に於て適法なる商業若しくは工業を営むの權利又は公共企業をその種類の如何を問はず中国政府若しくは地方官憲と共同經營するの權利を他国の国民より奪うが如き、独占權又は優先權、或いは、その範圍・期間又は地理的限界の關係上機會均等主義の實際的適用を無効に歸せしむるものと認めらるるが如き、独占權又は優先權。

本条の前記想定は、特定の商業上、工業上、若しくは金融業上の企業の經營又は發明及び研究の奨励に必要なべき財産又は權利の取得を禁ずるものと、解釈すべからざるものとす。

中国は、本条約の当事国たると否とを問わず、一切の外国の政府及び国民よりの經濟上の權利及び特權に關する出願を處理するに付き、本条の前記規定に記載する主義に遵由すべきことを約す。

#### 第四条

締約国は、各自国民相互間の協定にして中国領土の特定地方に於て勢力範圍を創設せむとし、

又は相互間の独占的機會を享有することを定めむとするものを、支持せざることを約定す。

## 第五条

中国は、中国に於ける全鐵道を通じ、如何なる種類の不公平なる差別をも行い又は許容せざるべきことを約定す。

殊に、旅客の国籍、その出發国若しくは到達国、貨物の原產地若しくは所有者、その積み出し国若しくは仕向国、又は前記の旅客若しくは貨物が、中国鐵道により輸送される前若しくは後に於て、これを運搬する船舶その他の輸送機關の国籍若しくは所有者の如何により、料金又は便宜に付き直接間接に何等の差別を、設けざるべし。

中国以外の締約国は、前記鐵道中自国又は自国民が特許条件、特殊協定その他に基づき管理を為し得る地位に在るものに関し、前項と同趣旨の義務を負担すべし。

## 第六条

中国以外の締約国は、中国の参加せざる戦争に於て、中国の中立国としての權利を完全に尊重することを約定し、中国は中立国たる場合に中立の義務を遵守することを声明す。

## 第七条

締約国は、その何れかの一国が本条約の規定の適用問題を包含しかつ右適用問題の討議をなすを望まんと認める事態発生したるときは、何時にても関係締約国間に十分にしかつ隔意なき交渉をなすべきことを約定す。

## 第八条

本条約に署名せざる諸国にして、署名国の承認したる政府を有しかつ中国と条約関係を有するものは、本条約に加入すべきことを招請せらるべし。

右目的のため、合衆国政府は、非署名国に必要な通牒を為しかつその受領したる回答を締約国に通告すべし。

別国の加盟は、合衆国政府がその通告を受領したる時より効力を生ずべし。

## 第九条

本条約は、締約国により各自の憲法上の手続きに従い批准せらるべく、かつ批准書全部の



寄託の日より実施せらるべし。右の寄託は、成るべく速やかにワシントンに於てこれを行うべし。

合衆国政府は、批准書寄託の調書の認証謄本を他の締約国に送付すべし。

本条約は、フランス語及び英吉利語の本文を以て共に正文とし、合衆国政府の記録に寄託保存せらるべく、その認証謄本は同政府より他の各締約国にこれを送付すべし。

右証拠として前記各全権委員は本条約に署名す。

一九二二年二月六日ワシントン市に於てこれを作成す。（署名省略）

## 附録三

【パリ不戦条約、ブリアン・ケロッグ条約】

昭和4年7月25日条約第一号

昭和4年7月24日発効

〔昭和4年外務省告示第64号〕とある文書を前述の方針で読み易くしたものである。】

### 戦争放棄に関する条約（不戦条約）

ドイツ国大統領、アメリカ合衆国大統領、ベルギー国皇帝陛下、フランス共和国大統領、グレート・ブリテン及びアイルランド及びグレート・ブリテン海外領土皇帝印度皇帝陛下、イタリア国皇帝陛下、日本国皇帝陛下、ポーランド共和国大統領、チェコスロヴァキア共和国大統領は、人類の福祉を増進すべきその厳粛なる責務を深く感銘し、

その人民間に現存する平和及友好の関係を永久ならしめんがため、国家の政策の手段としての戦争を率直に抛棄すべき時期の到来せることを確信し、

その相互関係に於ける一切の変更は、平和的手段に依りてのみ之を求めべく、又平和的にして秩序ある手続の結果たるべきこと、及今後戦争に訴えて国家の利益を増進せんとする署名国は本

条約の供与する利益を拒否せらるべきものなることを確信し、

その範例に促され世界の他の一切の国がこの人道的努力に参加し、かつ本条約の実施後速に加入することに依りてその人民をして本条約の規定する恩沢に浴せしめ、以て国家の政策の手段としての戦争の共同抛棄に世界の文明諸国を結合せんことを希望し、

茲に、条約を締結することに決し、これがため左の如くその全権委員を任命せり。

ドイツ国大統領

外務大臣ドクトル・グスタフ・ストレーゼマン

アメリカ合衆国大統領

国務長官フランク・ビー・ケロッグ

ベルギー国皇帝陛下

外務大臣兼国務大臣ポール・イーマンス

フランス共和国大統領

外務大臣アリスティード・ブリアン

グレート・ブリテン及アイルランド及グレート・ブリテン海外領土皇帝印度皇帝陛下

グレート・ブリテン及北部アイルランド並に国際聯盟の個々の聯盟国に非ざる英帝国の一切の部分

ランカスター公領尚書外務大臣代理ロード・クッシェンダン  
カナダ

総理大臣兼外務大臣ウイリアム・ライオン・マッケンジー・キング  
オーストラリア聯邦

聯邦内閣員アレグザンダー・ジョン・マックラックラン  
ニュー・ジーランド

グレート・ブリテン駐在ニュー・ジーランド高級委員サー・クリストファー・ジェームス・パール  
南アフリカ連邦

グレート・ブリテン駐在南アフリカ連邦高級委員ヤコブス・ステファアヌス・スミット  
アイルランド自由国

内閣議長ウイリアム・トーマス・コスグレーヴ  
インド

ランカスター公領尚書外務大臣代理ロード・クッシェンダン  
イタリア皇帝陛下

フランス国駐劄伊太利国特命全權大使伯爵ガエタノ・マンゾニ  
日本国皇帝陛下

枢密顧問官伯爵内田康哉

ポーランド共和国大統領

外務大臣アー・ザレスキー

チエツコスロヴァキア共和国大統領

外務大臣ドクトル・エドゥアルド・ベネシュ

因て各全権委員は、互いにその全権委任状を示し、之が良好妥当なるを認めたる後、左の諸条を協定せり。

## 第一条

締約国は国際紛争解決のため戦争に訴えることを非とし、且その相互關係に於て国家の政策の手段としての戦争を抛棄することをその各自の人民の名に於て嚴肅に宣言する。

## 第二条

締約国は相互間に起こることあるべき一切の紛争、又は紛議はその性質又は起因の如何を問わず平和的手段に依るの外、これが処理又は解決を求めざることを約す。

## 第三条

本条約は前文に掲げらるる締約国に依り、各自の憲法上の要件に従い批准せらるべく、且各国の

批准書が総てワシントンに於て寄託せられたる後、直に締約国間に実施せらるべし。

本条約は前項に定むる所に依り実施せらるときは、世界の他の一切の国の加入のため必要なる間置き置かるべし。一国の加入を証する各文書は、ワシントンに於て寄託せらるべく、本条約は右寄託の時より直に該加入国と本条約の他の当事国との間に実施せらるべし。

アメリカ合衆国政府は、前文に掲げらるる各国政府、及び爾後本条約に加入する各国政府に対し、本条約及一切の批准書又は加入書の認証謄本を交付するの義務を有す。アメリカ合衆国政府は、各批准書又は加入書が同国政府に寄託ありたるときは、直に右諸国政府に電報を以て通告するの義務を有す。

右証拠として各全権委員は、フランス語及イギリス語を以て作成せられ、両本文共に同等の効力を有する本条約に署名調印せり。

一九二八年八月二十七日　パリに於て作成す

グスタフ・ストレーゼマン

フランク・ビー・ケロック

アリスティード・ブリアン

クッシェンダン

W・L・マッケンジー・キング

A・J・マックラックラン

C・J・パール

J・S・スミット

リアム・ティー・マッコシユガル【MacCosgair コスグレーヴ】

クッシェンダン

G・マンゾニ

内田康哉

アウグスト・ザレスキー

ドクトル・エドゥアルド・ベネシユ

【日本は批准するにあたって条件があり、

宣言（昭和四年六月二十七日）

帝国政府は、一九二八年八月二十七日パリに於て署名せられたる戦争抛棄に関する条約第一条中の「その各自の人民の名に於いて」なる字句は、帝国憲法の条章より観て、日本国に限り適用なきものと了解することを宣言す】

## 附録四

### 「国際聯盟規約第十五条第四項に依る国際聯盟總會報告書」

(一九三三年二月二十四日採択)

【原著では“FINDINGS AND RECOMMENDATIONS OF THE LEAGUE ASSEMBLY ON THE LYTTON REPORT, FEBRUARY 24, 1933”リットン報告に関する聯盟總會の所見と勧告】【全文は、国会図書館デジタル化資料「日支紛争に関する国際聯盟總會報告書全文」】

総会は、規約第十五条第九項に依り、總會の審議のため提出せられたる、紛争の解決をなすの目的を以て同条第三項に依りそのなすべき義務ありたる努力が、失敗したることを認め、同条第四項に基づき、紛争の諸事実の記述及び右紛争に関し公正且つ適当と認める勧告を載せたる次の報告書を採択す。

(日中紛争の發展に関する歴史的概観を述べし第一部第二部は、之を略す)

## 第三部

紛争の主なる要因



右概観に依り、理事会又は総会が、日中紛争の解決方法を見出さんがため、十六箇月以上にわたり引続き努力し来れる事を知り得べし。聯盟規約の諸条項及びその他の国際約定を基礎とし多数の決議採択せられたり。既述せるが如き事件の史的背景の複雑性、後述するが如く、日本が中国の領土内に於て広汎なる権利を行使せる満州の特殊なる法律的地位、最後に満州の或部分に於ける中国及び日本の官憲間に存する錯雑且つ機微なる関係は、聯盟のなせる交渉及び調査の努力が長期にわたりしことを是認するものにして且つ之を必要ならしめたり。然るに、当事国の声明に基づき且つその参加を得て採択したる決議を基礎とし理事会及び総会が懐きたる事態の改善に関する希望は、裏切られたり。反対に事態は不断に悪化の傾向ありたり。満州及び聯盟国の領域の他の部分に於て調査委員会報告書が「仮装せる戦争」と称したる軍事行動継続せられ来り、且つ現に継続せられつつあり。

総会は、紛争の主たる要因を考究し、特に次の結論に到達すると共に次の事実を認めたり。

一 総会が付託を受けたる中国及び日本間の紛争は、中国及び諸外国に於て中国の主権の下に在る中国の完全なる一部なりと常に認め居りたる満州に於て発生したるものなり。日本政府は、調査委員会報告書に対するその意見書中に於て「南満州鉄道附属地として知らるる極めて狭

i 原注：Document C. 775, 1932 VII; *Official Journal*, Special Supplement No. 111, page 99.

隘なる地域に於て」ロシアに許与せられ、次て日本に依り獲得せられたる諸権利は中国の主権と抵触すとの議論を反駁し「寧ろ反対にこれ等の権利は中国の主権に由来するものなり」となせり。

中国よりロシアに次で日本に許与せられたる権利は、事実中国の主権に由来するものなり。一九〇五年の北京条約に於てポーツマス条約に依りロシアが日本に対してなしたる「一切の譲渡を清国政府は承認せり」。一九一〇年日本が満州に於けるその権利を拡張するため要求を提出したるは中国に対したるものにして、且つ右要求の結果として一九一五年五月二十五日の南満州及び東部内蒙古に関する条約を締結せるは中華民国政府なりき。ワシントン會議に於て一九二二年二月二日日本代表部は、日本が南満州及び東部内蒙古に於ける或優先権を抛棄する旨を声明、且つ「この決定をなすに当り日本は常に中国の主権及び機会均等の原則を顧慮し公正且つ寛容なる精神に依り導かれ来れるものなり」と説明せり。ワシントン會議に於て締結せられたる九国条約は、中国の總ての他の部分に関すると同様に満州にも適用あり。最後に今次の紛争の初期に於て日本は、満州が中国の完全なる一部に非ずと主張したることなし。

二 過去の経験に依れば、満州の支配者は、中国の他の部分少くとも北中国の事に付き大なる勢力を行使し、且つ各種軍略上及び政治上明白に有利なる地位を占む。これ等の諸省を中国の他の部分より分離することは、平和を危殆ならしむるが如き重大なるイリデンティスト問題<sup>i</sup>を惹起せしむること必然なり。

三 総会はこれ等の事実を記述するに当り、満州に存在せる自治の伝統を無視せるには非ず。右伝統は極端なる場合且つ中国中央政府の特に弱かりし時代に於て、例えば張作霖元帥の全権委員をして「中華民国東三省自治政府」の名に於て、ソヴィエト社会主義共和国連邦と東中国鉄道、航行、境界劃定等に関する一九二四年九月二十日の協定を締結することを得しめたり。然れども、同協定の規定に徴するに、東三省自治政府は同政府自体を以て中国より独立せる一国家の政府と思惟したるものに非ずして、東三省に於ける中国の利益に影響を及ぼすべき問題に関し、中央政府に於て数月前右連邦と協定を締結したるも、これ等の問題に付ては同自治政府自らソヴィエト社会主義共和国連邦と交渉し得べしと信じたるものなること明らかなり。

右満州の自治は、最初張作霖元帥、次で張學良元帥が民政及び軍政双方の長官たり、且つ自  
<sup>i</sup> irredentist 自民族居住地を全て自国領土にしようとする運動、一九世紀イタリアで周辺地に紛争の種をまいた。

己の軍隊及び自己の官吏を通して東三省に於て実効的權力を行使したるも、事実に依りても亦之を看取せられ張作霖元帥が数回宣言せる独立は、彼又は満州の人民が中国との分離を希望せることを意味せるものに非ず。彼の軍隊は、中国が恰かも外国なるかの如く之を侵略したるに非ずして、単に内乱の参加者として侵略したるに過ぎず。満州は一切の戦争及び「独立」の期間を通して終始中国の完全なる一部たりしなり。加之、<sup>しかのみならず</sup>一九二八年以降張学良元帥は、中国国民政府の權力を承認せり。

四 一九三一年九月に至る四半世紀の間に於て、満州を中国の他の部分に連結せる政治的及び経済的紐帯は、益々鞏固と為りたるが、同時に日本の満州に於ける利益のため展も止みたるに非ず。<sup>ii</sup> 満州を構成せる「東三省」は、中華民国の治下に他の諸省よりも中国人の移住のために広く開放せられ、これ等の中国人は、土地を所有することに依つて満州をして多くの点に於て長城以北に於ける中国の単純なる延長ならしめたり。約三千万の住民中、中国人又は之に同化せる満州人は、二千八百万なりと見積られ、加之、張作霖元帥及び張学良元帥の治下に於て中国人住民及び中国の利益は、満州の経済的資源の開発及び組織に関し従前に比し遙

i 底本では「独立の機関」となっている。原著では「periods of independence」であり、明らかなミスであろう。  
ii 満州における日本の利害関係は、進展を止めなかった。

かに大なる役を勤めたり。

他方日本は、滿州に於て中国の主權の行使を、全く例外的なる様式及び程度に於て制限するが如き效果ある權利を獲得又は主張せり。日本は事實上完全なる主權に該当する權利を行使し、以て關東州租借地を統治せり。日本は南滿州鐵道會社を介して、數箇都市並びに奉天及び長春の如き人口大なる都市の重要な部分を含む鐵道附屬地の施政に當れり。これ等の地域中に於て日本は警察、徵稅、教育及び公共事業を管理したり。日本は租借地に關東軍を、鐵道附屬地に鐵道守備隊を、又各地方に領事館警察を配する等、滿州の若干部分に武裝部隊を存置し來れり。斯の如き事態にして、統治國双方に依り自由に希望せられ、若くは受諾せられたるものなりとせば、又緊密なる經濟的及び政治的協力に付き十分諒解の上採られたる政策の表現及び具體化なりとせば、紛糾及び不斷の論争を醸すことなく之を持続し得べきも、かかる條件を欠くに於ては、右は相互の誤解及び衝突を惹起するのみなり。双方の權利の交錯せること時としては法律的地位の不明確なること、及び日本側の抱懷する滿州に於けるその「特殊地位」の觀念と中国の國權恢復の要求との間の対立の顯著となれる事は、事變及び紛争を頻発せしむる源泉となれり。

五 一九三一年九月十八日前に在りては、滿州に於て、兩統治國の一方は他方に対して正当なる

苦情を有せり。即ち日本は論議の余地ある権利を利用し、又中国官憲は論議の余地なき権利の行使に対し障礙しょうがいを設けたり。<sup>i</sup> 九月十八日事件の直前に於て、正規の外交交渉及び平和的手段の方法に依り、両統治国間の諸懸案を解決するため各種の努力が試みられたるが、これ等の手段は、未だその総てを尽したるものに非ざりき。然るに、満州に於ける中国人及び日本人間の緊張は増大し、日本に於ける世論の一動向は、必要あらば實力に依り一切の懸案を解決すべきことを唱道せり。

六 中国は、現に過渡期的且つ国家的改造の時代に在るため、中央政府の努力及び既に達成せられたる相当の進歩にも拘らず、過渡期の事態と不可分なる政治的攪乱、社会的混乱及び分裂的傾向を必然的に伴いつつあり。中国は國際的協力政策の採用を必要とす。右政策の一方法は、國際聯盟に於て中国に対し、中国政府がその国民をして同國家の改造及び安定を成就せしむる上に於て必要とすべき諸制度を近代化するため引続き事実上の援助を、供与することに在り。

ワシントン會議に於て端を發せる國際協力政策の原則は、引続き有效なるも、その十分なる実行を、中国に於てしばしば実行せられたる激烈なる排外宣伝のために、主として遷延せら

<sup>i</sup> 互いの苦情、それは、日本は疑問のある権利を使つてで、中国官憲は論議の余地のない権利の行使によつて障害を設けること。——底本にある訳では意味を逆にとる虞がある。

れたり。右排外宣伝は経済的ボイコットの使用及び学校に於ける排外教育の両方面に於て特に強調せられ、遂に現紛争勃発の雰囲気醸成を助成するに至れり。

七 或事件に対する中国人の憤懣を表示し又は或要求を支持するために、一九三二年九月十八日の事件前に中国人がボイコットを行使せしことは、既に緊張せる事態を更に悪化せしむるの外なかりき。

一九三一年九月十八日の事件以後に於ける中国のボイコット行使は、復仇行為の範囲【category】に入るものなり。

八 紛争解決に関する国際聯盟規約の諸規程の目的は、国家間の緊張が国交断絶不可避的ならしむるが如きものとなるを阻止することに在り。調査委員会は、中国及び日本間に存在せる紛争が何れもそれ自体に於て、仲裁裁判に依り解決し得べかりしことを発見せり。これ等の紛争が累積して両国間の緊張を増進したる理由あればこそ、損害を蒙れりと自ら思惟せる国家に於ては、外交交渉が不当に遷延せらるる際、右事態に対し国際聯盟の注意を喚起するは正に該国家の義務なりしなり。

規約第十二条は、紛争の平和的解決に関する厳格なる義務を包含す。

九 総会は、一九三一年九月十八日より十九日にわたる夜、現場に在りたる日本将校は自衛のた

め行動しつゝありたりと自ら信じたるやも知れずとの可能性を排除せざるも、同夜奉天及びその他の満州各地に於て執られたる日本の軍事行動を以て、自衛の措置と認めることを得ず。  
 將又、紛争全期間を通して進展せる日本の軍事的措置も、全体としては自衛の措置と認めることを得ず。はたまた  
しかのみならず加之、自衛の措置の採用は、一国をして規約第十二条の規程に従うことを免れしむるものに非ず。

十一 一九三一年九月十八日以来の日本軍事当局の民政上及び軍事上の活動は、本質的に政治的考慮に依りしことを示し居れり。東三省の漸進的軍事占領は、順次満州に於ける総ての重要都市を中国官憲の手より奪い、而して各占領後には常に民政改組せられたり。日本文官及び武官の一団は、九月十八日の事件後に存したるが如き満州の事態の解決策として満州独立運動を考案し、組織し、且つ遂行しこの目的の下に或中国人の姓名及び行動を利用し、中国政權に対し不平を懷く或少数者及び土着の団体を利用したり。日本參謀本部より迅速に援助及び指導を受けたる右運動は日本軍隊の存在に依りてのみ達成せらるることを得たり。右運動は自発的且つ純真なる独立運動と認めらるることを得ず。

十一 前項に記述せる運動の結果たる「満州国」の「政府」に於ける主要なる政治的及び行政的  
 i 底本では「生命」、原著では“names”。



権力は、現実に行政を指揮し且つ支配し得る日本人官吏及び顧問の手中に在り。既述せる如く満州住民の大多数を成す中国人は、一般に右「政府」を支持せず。之を以て日本側の手先と認める。又調査委員会がその報告書を完結せし後、且つ理事会及び総会が右報告書を考慮するに先立ち、「満州国」が日本に依り承認せられたることは、注意を要す。「満州国」は他の如何なる国に依りても未だ承認せられ居らず。特に聯盟国は斯の如き承認は一九三二年三月十一日の決議の精神と合致せずとの意見を有するを以てなり。

一九三二年九月十八日の事件を誘致せる事態は、若干の特異なる性質を有す。右は日本の軍事行動の進展、「満州国政府」の創建及び日本の同「政府」の承認に依り引続き拡大せられたり。疑いもなく、今次の事件は、一国が国際聯盟規約の提供せる調停の機会を予め利用し尽すことなくして、他の一国に宣戦せる事件に非ず。又一国の国境が隣接国の軍隊に依り侵略せられたるが如き簡單なる事件にも非ず。何となれば、満州に於ては曩に述べたる事情に依り示さるるが如く、世界の他の部分に於て正確なる類例を見ざる幾多の特種事態の存するを以てなり。然れども中国領土の広大なる部分が宣戦なくして実力を以て奪取せられ、且つ日本軍隊に依り占領せられたること、並びに右行動の結果として、該部分が中国の他の部分より分離せられ、且つ独立を宣言せ

られたることは異論を挟む余地なし。

理事会は一九三一年九月三十日の決議に於て、日本政府は日本臣民の生命及び財産の安全の有效に確保せらるるに從い、既に開始せられたるその軍隊の鉄道附属地内への撤収、能う限り速に続行すべき旨、及び成べく迅速右の意嚮を完全に実現せんことを希望する旨の日本代表の声明を了承せり。更に理事会は一九三二年十二月十日の決議を確認して両當時国がこの上事態の悪化するを避くるに必要な一切処置を執るべく、この上戦鬭若くは人命の喪失を惹起することあるべき一切の主動的行爲を差控えるべしとの両當時国約定を了承せり。

これ等の事件に関連して、規約第十条に依り聯盟国は、一切の聯盟国の領土保全及び現在の政治的獨立の尊重を約し居るを指摘することを要す。

最後に規約第十二条に依り、聯盟国は若し国交断絶に至るの虞ある紛争発生するときは、之を仲裁裁判若くは司法的解決又は理事会の審査に付すべきことを約し居れり。

一九三一年九月十八日前に存在したる緊張状態の發生の際に於ては、当事国の双方何れにも若干の責任ありたるが如きも、一九三一年九月十八日以降の諸事件の發展に關しては毫も中国側の責任問題は起り得ざるものなり。

## 第四部

### 勧告の記述

この部は、聯盟總会が、紛争に付き公正且つ適當と認める勧告にして、規約第十五条第四項に規定せらるるものを記述する。

### 第一節

總会の勧告は、本件の極めて特殊なる事情を考慮し、且つ次の原則、条件及び考察を基礎とする。

(甲) 紛争の解決には、國際聯盟規約、パリ条約及びワシントン九国条約の規定を遵守すべし。

聯盟規約第十条は、「聯盟国は、聯盟各国の領土保存及び現在の政治的獨立を尊重し、且つ外部の侵略に対し之を擁護することを約す」と規定する。

パリ条約第二条に依れば、「締約国は、相互間に起こることあるべき一切の紛争又は紛議はその性質又は起因の如何を問わず平和的手段に依るの外、之が処理又は解決を求めざることを、約す」。

ワシントン九国条約第一条に依れば、

「中国以外の締約国は、左の通り約定す。

(一) 中国の主権、独立並びにその領土的及び行政的保全を、尊重すること、

(二) 中国が自ら有力かつ安固なる政府を確立維持するため、最も完全にしてかつ最も障礙なき機会をこれに供与すること、

(三) 中国の領土を通じて、一切の国民の商業及び工業に対する機会均等主義を有効に樹立維持するため、各々尽力すること、

(四) 友好国の臣民又は人民の權利を滅殺すべき特別の權利又は特權を求めるため中国における情勢を利用することを、及び、右友好国の安寧に害ある行動を是認することを、差し控えること。」【原著ではこの既出の条文は省略されている。】

(乙) 紛争の解決には、一九三二年三月十一日の総会決議第一部及び第二部の規定を遵守すべし。本報告書に既に引用せる右決議に於て、総会は規約の規定が今次の紛争に全部適用せらるべきものであり、殊に次の諸点に関し然るものであると思考する、

(一) 条約の嚴重なる尊重の原則、

(二) 一切の聯盟国の領土保全及び現在の政治的獨立を尊重し、且つ外部の侵略に対し之を

擁護するの聯盟国のなしたる約定、

(三) 聯盟国間に発生することあるべき紛争を平和的解決方法に付するの聯盟国の義務。

総会は、当時の理事会議長がその一九三一年十二月十日の宣言中に於て定めたる諸原則を採択した、また、十二理事国が一九三二年二月十六日の日本政府に対するその要請中に再び右諸原則を援用し、第十条を無視して行われたる聯盟国の領土保全の侵害及びその政治的獨立の變革は、聯盟国により有効且つ実効的と認めらるることを得ざる旨を宣言したるの事実を【総会は】想起した。

総会は、聯盟国間の國際關係及び紛争の平和的解決を規律する前記諸規則は、パリ条約と全然調和するものなりとのその意見を、述べたり。総会に付託せられたる紛争の解決のため、総会が終局に於て執ることあるべき措置の執らるる迄は、総会は前記の諸原則及び規定の拘束力あることを宣明し、且つ聯盟国は聯盟規約又はパリ条約に反する手段に依りて齎らさるることあるべき如何なる事態、条約又は協定をも承認せざるは各聯盟国の義務なる旨を宣言せり。

i 原文において、“fact”事実<sup>1</sup>に直接懸かるのは、十二理事国が日本政府に対する要請の中でその原則を援用した事。その時に第十条を無視したものは認めらるべくもないと宣言した、ということである。

最後に、総会は、日中紛争の解決が、当事国の一方の武力的圧迫の下に於て求められ得べきことは、規約の精神に反することを声明し、且つ一九三一年九月三十日及び同年十二月十日当事国の同意を得て理事会に依り採択せられたる決議を想起せり。

(丙) 中国及び日本間に、前記諸国際約定の尊重を基礎とせる永続的諒解が確立せらるるためには、紛争の解決は調査委員会が定めたる、次の諸原則を及び諸条件に適合することを要す。

「一 中国及び日本双方の利益と両立すること。」

両国は聯盟国であり、各自は聯盟より同一の考慮を払わることとを要求するの権利を有す。

両国が利益を獲得せざる解決は平和のために裨益する所なかるべし。

二 ソヴィエト【社会主義共和国】連邦の利益に對する考慮。

隣接国中の二国間に於て、第三国の利益を尊重することなくして平和を講ずることは、公正若くは賢明ならざるべく、將又、平和に資する所以にも非ざるべし。

三 現存多边的条約との合致。

如何なる解決と雖、國際聯盟規約、パリ条約及びワシントン九国条約の規定に合致することを要す。

四 満州に於ける日本の利益の承認。

滿州に於ける日本の權利及び利益は、無視することを得ざる事實なり。之を承認せず且つ滿州との日本の史的関連をも考慮に入れざる如何なる解決も、満足なるものに非ざるべし。

#### 五 中国及び日本間に於ける新條約關係の設定。

滿州に於ける兩國各自の權利、利益及び責任を新條約中に再び声明することは、合意に依る解決の一部たるべきものにして、將來の軋轢を避け相互の信頼及び協力を恢復するために望ましきことなり。

#### 六 將來に於ける紛争の解決に対する有效なる措置。

叙上より来る当然の帰結として、將來發生することあるべき比較的重要ならざる紛争の迅速なる解決を容易ならしめるため措置をなすの要あり。

#### 七 滿州の自治。

滿州に於ける政府は、中国の主權及び行政的保全との一致の下に、東三省の地方的狀況及び特質に應ずる様工夫せられたる広汎なる範圍の自治を確保するが如き方法に依りて改めらるることを要す。新文治制度は善良なる政治の本質的要求を満足する様構成せられ、且つ運用せられざるべからず。

#### 八 内部的秩序及び外部的侵略に対する安全保障。

滿州の内部的秩序は、有効なる司法的憲兵隊に依り確保せらるることを要し、外部的侵略に對する安全保障は憲兵隊以外の一切の武装隊の撤退と利害關係国間に於ける不侵略條約の締結とに依り与えらるることを要す。

#### 九 中国及び日本間に於ける經濟的接近の促進。

本目的のため両国間の新通商條約望まし。かかる條約は両国間の通商關係を衡平なる基礎の上に置き、且つ之を両国間の改善せられたる政治關係と合致せしむることを目的となすことを要す。

#### 十 中国の改造に關する國際協力。

中国に於ける現時の政治的不安定は、日本との友好關係に對する障礙にして、且つ（極東に於ける平和の維持は國際的關心事項たるを以て）租界の他の部分の憂懼なると共に、右に列挙したる條件は、中国に於て鞏固なる一中央政府なくしては実行すること能わざる所なるを以て、満足なる解決に對する窮極の要件は、故に孫逸仙博士が提議せる如く中国の内部的改造に對する一時的の國際協力なりとす。」

### 第二節



本節の諸規定は、規約第十五条第四項に依る總會の勧告を成すものなり。

既に紛争の解決に適用せらるべき原則、条件及び考察を定めたるを以て、總會は次の如く勧告す。

(二) 満州に対する主権は中国に属するを思い、

(甲) 南満州鉄道附属地外に於ける日本軍隊の駐屯及び同附属地外に於ける右軍隊の行動は、紛争の解決を規律すべき法的諸原則と両立せざること、並びに右諸原則と両立する事態を能う限り速に確立するの要ある事を思い、

總會は、右軍隊の撤収を勧告する。事件の特殊なる事情に顧み以下に勧告せらるる交渉の第一の目的は右撤収のために準備し、且つその方法、段階及び期限を決定する事に在るべし。

(乙) 満州に特有の地方的状況、同地に於て日本の有する特殊の権利及び利益並びに第三国の権利及び利益を考慮し、

總會は、中国の主権の下に置かれ、且つ中国の行政的保全と両立する一の機関を、相当の期間内に満州に於て設立せんことを勧告す。右機関は広汎なる範圍の自治を有すべく地方的状況、に調和すべく且つ現存の多边的条約、日本の特殊なる権利及び利益、第三国の権利及び利益並一般的に第一節(丙)に採録せられたる諸原則及び条件を考慮するものな

ることを要す。中国中央政府及びその地方官憲の各自の権能並びに両者間の関係の決定は、国際約定の效力を有する中国政府の宣言書に依り之をなすべし。

(二) (一) (甲) 及び (一) (乙) の二勧告に於て取扱われたる問題以外に、調査委員会報告書が極東の平和の依存する中国及び日本間の良好なる諒解に影響を及ぼす、或は他の問題を前記第一節 (丙) に記述せる紛争の解決に関する諸原則及び条件中に掲げ居ることを思い、総会は、当事国に右諸原則及び条件を基礎としてこれ等の問題を、勧告す。<sup>i</sup>

(三) 前記の勧告を実施するに必要な交渉が、適當なる機関に依り行わるるを要する事を思い、総会は、次に明記せらるる方式に従い、両当事国間に交渉を開始せん事を勧告す。

各当事国は、当事国の他の一方も亦総会の勧告を受諾することの唯一の条件の留保の下に、自国の関する限り右勧告を受諾するや否やを事務総長に通報することを求めらる。

当事国間の交渉は、総会が設置する一委員会の援助を得て次の如く行わるべし。

総会は、ドイツ、ベルギー、英帝国、カナダ、西班牙、フランス、アイルランド自由国、イタリア、オランダ、ポルトガル、チェコスロヴァキア及びトルコ政府に対し事務総長より両当事国が総会の勧告を受諾する旨の通報に接したるとき、直に各一名の委員を任命せんことを茲に請

i "the parties to settle these questions" 「当事国がこれらの問題を解決することを」勧告する。

求す。

事務総長は又アメリカ合衆国及びソヴィエト社会主義共和国連邦の政府に対し右受諾を通報し、右各政府が欲するに於ては、各一名の委員を任命せんことを之に請求すべし。事務総長は、両当事国の受諾の通報の接受後一月以内に交渉の開始に適當なる一切の措置を執るべし。

聯盟国をして各当事国が總會の勧告に従いて行動し居るや否やを交渉の開始後に於て判定する事を得しめんがため、

(イ) 委員会は、その必要と認めたる都度交渉の状況及び殊に前記勧告(一)の(甲)及び(乙)の実行に関する交渉に付き報告すべく(二)(甲)に関しては委員会は如何なる場合に於ても交渉の開始後三月以内に報告すべし。これ等報告は、事務総長に依り聯盟国及び委員会に代表を出せる非聯盟国に通報せらるべし。

(ロ) 委員会は本報告書第四部第二節の解釈に関する一切の問題を總會に付託することを得べし。總會は規約第十五条第十項に従い本報告書の採択せられたると同一の条件に於て右解釈を与うべし。

### 第三節

事件の特殊なる事情に顧み、叙上の勧告は、一九三一年九月前の原状への単なる復帰を定むるものに非ず。右勧告は、又滿州に於ける現制度の維持及び承認は現存國際義務の根本原則と、及び極東に於ける平和の依存する兩國間の良好なる諒解と両立せざるものなるを以て之を排除するものなり。

聯盟国は本報告書を採択することに依り、特に滿州に於ける現制度に関しては、本報告書中の勧告の実行を阻害し又は遲滞せしむることあるべき如何なる行為をも差控えるの意思を有するものなり。聯盟国は法律上に於ても又事實上に於ても引続き右制度を承認せざるべし。聯盟国は滿州に於ける事變に関し何等の単独行動をも差控え、且つその行動に付き聯盟国相互間に於て並び非聯盟国たる利害關係国と協調を継続する意思を有す聯盟国にして、九国条約の署名国たるものに関しては、同条約の規定に従い「その何れかの一国が本条約の規定の適用問題を包含し、且つ右適用問題の討議をなすを望ましと認める事態発生したる時は、何時にても關係締約國間に十分にして且つ隔意なき交渉をなすべきこと」を想起し得べし。

本報告書の勧告に適合する事態を極東に於て確立することを能う限り容易ならしむるため、事務総長は本報告書の謄本をパリ条約又は九国条約の署名国たる非聯盟国に送付し、これ等の諸国が右報告書に表明せられたる見解に同意し、且つ必要の場合にはその行動及び態度を聯盟国と

一致せしめんことの総会の希望を之に通報することを命ぜらる。

附記、附録四規約の訳文は、立作太郎氏編『国際条約集』並びに、外交時報社編「中国及び満州関係条約及び公文集」に依拠せしにより御諒承を乞う。

底本…『中央公論』第五十一年第十一号別冊附録（中央公論社昭和十一年十一月一日発行1936.11）

——以下作成者附録——

## 附録五

1、一九三二年九月十八日滿州事変勃発至急電

1 昭和6年 9月19日

在奉天林（久治郎）総領事より

幣原（喜重郎）外務大臣宛（電報）

奉天 9月19日前発  
本省 9月19日前着

第六一六号（大至急）

十八日午後十時半、滿鉄本線柳条溝（当地北大营付近）付近の鉄道を爆破せるものあり。支那兵の処置なるやにて、我が守備隊の出勤を見、北大营付近に於て日支交戦中なりとの警察報告に接す。取敢ず（午後十一時）在支公使及各領事、在滿州各領事へ転電せり。

9月18日午後十一時十一分発  
9月19日前 一時二十分着

日支兵衝突事件に関する件

第一報（奉天憲兵分隊長発）

十八日午後十時半頃、奉天東北方約六軒に在る北大營北方満鉄線付近に於て、日本鉄道守備隊と支那軍隊と衝突し目下交戦中。

9月19日前一時五五分発  
9月19日前四時三十分着

第二報（関東憲兵隊長発）

一、十八日午後十時半頃、支那軍隊は奉天北方柳樹堡付近満鉄線を破壊せるに基因し、日支軍隊目下交戦中。

二、軍は直に出動準備中なり。

三、当隊は各所より奉天に兵力を集中を命ずると共に本部を軍司令部と共に奉天に出動準備中（了）

（編注）本付記電報は宛先不明であるが、関東軍司令官に宛てられ陸軍本省に転電されたものと見

られる。奉天憲兵分隊長は三谷清少佐、関東憲兵隊長は二宮健市少将である。

~~~~~

奉天 9月19日前発  
本省 9月19日前着

3 昭和6年9月19日

在奉天林領事より

幣原外務大臣宛（電報）

第六一九号（至急）

往電第六一六号に關し

森島を特務機関に派遣したるに板垣参謀は次の如く説明せり。

一、十八日午後十時半、北大營の將校の指揮せる支那軍三四百名北大營西南方鉄道線路を爆破し、柳条溝方面に前進中なるを虎石台分遣所の我が巡察兵発見交戦となりたる為、虎石台の中隊は同北大營の敵兵五六百名と交戦の上、北大營の西北隅を占領し交戦中なるが支那側兵力は漸次増加しつつあり。尙当地守備隊全員を前線に増派し駐屯連隊は目下出勤準備中なり（十一



時半)。

支、南京、北平へ転電せり

~~~~~

12 昭和6年9月19日

在奉天林領事より

幣原外務大臣宛(電報)

今次事件は軍部の計画的行動との判断について

奉天9月19日前発  
本省9月19日前着

第六三〇号(至急極秘)

参謀本部建川部長は、十八日午後一時の列車にて当地に入込みたりとの報あり。軍側にては秘密に付し居るも、右は或は真実なるやに思われ、又満鉄木村理事の内報に依れば、支那側に破壊せられたりと伝えらるる鉄道箇所修理の為、満鉄より保線工夫を派遣せるも、軍は現場に近寄せしめざる趣にて、今次の事件は全く軍部の計画的行動に出でたるものと想像せらる。

~~~~~

13 昭和6年9月19日

在奉天林領事より

幣原外務大臣宛（電報）

日本軍の行動抑制方威遼寧省主席より要請について

奉天9月19日前発

本省9月19日前着

第六三一号

威主席及交渉員より日本軍の行動に対し、中国側は全然無抵抗主義を執り既に商埠地及大西関等の公安分局をその占領に委せ居るに拘らず、日本軍は機関銃及小銃を連発し、無抵抗の軍民に害を加え居ることは事件の善後收拾に困難を加えるべきに付、此辺をも考慮に入れ極力軍側の行動抑制方、刻々引続き電話要請し来れるに対し、当方に於ても極力事件の拡大防止に力め居る旨然るべく応酬し置きたり。

~~~~~

『日本外交文書 満州事変 第一卷第一冊』（日本外交文書デジタルアーカイブ）より

## 2、一九三二年九月三十日理事会決議

一、理事会議長が日華両国に致した緊急通告に対する右両国の回答及び該通告に従い為されむる措置を諒承する。

二、日本が満洲に於て何等領土的目的を有しない旨の日本政府の声明の重要なを認める。

三、日本政府はその臣民の生命の安全及びその財産の保護が有効に確保せられるに従い、日本軍隊を鉄道附属地内に引かしめるため既に開始せられたる軍隊の撤退を出来得る限り速やかに続行すべく、最も短期間内に右の意嚮を実現せんことを希望する旨の日本代表の声明を諒承する。

四、中国政府は日本軍隊撤退の続行並びに中国地方官憲及び警察力恢復の成就に従い、鉄道附属地外に於ける日本臣民の安全及びその財産の保護の責任を負ふべき旨の中国代表の声明を諒承する。

五、両国政府が両国瞬間の平和及び良好なる諒解を擾乱する虞ある一切の行為を避けんことを欲するを信じ、両国政府は各自に事件を拡大し又は事態を悪化せざる為の必要なる一切の措置を執るべしとの保障を日華両国代表より与へられたる事実を諒承する。

六、両当事国に対し其間の日常関係の恢復を促進し且之が為め前記約定の履行を続行且つ速に終了する為め、両国が一切の手段を尽すべきことを求める。

七、両当事国に対し事態の進展に関する完全なる情報を屢々理事会に送らんことを求める。

八、緊急会合を余儀なくするが如き未知の事件発生しない限り、十月十四日（水曜日）その時に於ける事態審査の為に更にジュネーヴに会合する。

九、理事会議長が其同僚特に両当事国代表の意見を求めた後、事態の進展に関し当事国又は他の理事会員より得たる情報により前記理事会招集の必要なに至つたと決定する場合は、右招集を取消すことを議長に許可する。』

『国際連盟理事会並に総会に於ける日支紛争の議事経過詳録』その一、国際聯盟事務局東京支局編（国会図書館デジタル化資料より）

### 3、一九三二年十二月十日理事会決議

一、両当事国が厳粛に遵守する旨宣言し居れる一九三二年九月三十日理事会全会一致可決の決議を再び確認す。依て理事会は右決議の定むる條件により、日本軍の鉄道附属地内撤収が成る

べく速に実行せられんが爲め、日支両国政府に対し右決議実施を確保するに必要な一切の手段を講ぜんことを要請す。

二、十月二十四日の理事会以来事態更に重大化したるに鑑み理事会は両当事国が此の上事態の悪化するを避くるに必要な一切の措置を執り、又此の上戦闘又は生命の喪失を惹起することあるべき一切の主動的行為を差控ふべきを約することを了承す。

三、両等事国に対し情勢の進展に付引続き理事会に通報せんことを求む。

四、その他の理事国に対し、其の關係地域に在る代表者より得たる情報を理事会に提供せんことを求む。

五、上記諸措置の實行とは關係なく、本件の特殊なる事情に顧み、日支両国政府による両国間紛争問題の終局的且根本的解決に寄与せんことを希望し、國際關係に影響を及ぼし日支両国間の平和又は平和の基礎たる良好なる了解を攪乱せんとする虞ある一切の事情に關し實地に就き調査を遂げ、理事会に報告せんが爲め、五名より成る委員會を任命するに決す。日支兩國政府は委員會を助くる爲め、各一名の参与委員を指名するの權利を有し、兩國政府は委員會が其必要とすべき一切の情報を実地に就き入手せんが爲めの各般の便宜を委員會に供与す。兩当事国が何等かの交渉を開始する場合には右交渉は本委員會所定任務の範圍内に属せざる

べく、又何れかの当事国の軍事的施措に苟も干渉することは本委員会の権限に属せざるものと了解す。本委員会の任命及審議は日本軍鐵道附屬地内撤収に關し九月三十日の決議に於て日本政府の与へたる約束に何等影響を及ぼすものに非ず。

六、現在より一九三二年一月二十五日に開かるべき次回通常理事会期迄の間に於て本件は依然理事会に繫属するものにして、議長に於て本件経過を注意し、若し必要あらば新に会合を召集せんことを求む。」

『國際連盟理事会並に總會に於ける日支紛争の議事経過詳録』その一、國際聯盟事務局東京支局編（国会図書館デジタル化資料より）

#### 4、一九三二年二月十六日、十二理事国要請

No. 89 (至急)

理事会議長は、僚友を代表して一月二十九日の要請の中で次のように語った、「協力と相互の尊重だけが國際關係の維持を確保する事が出来る、恒久性をもつ解決は、力——それが軍事的であれ同様に經濟的であれ——の使用に依つて得る事は出来ない、現在の情勢が続く限り、兩國間

の不和はますます拡大し、紛争の解決をより困難にし直接関係する両国だけでなく深刻な被害をもたらす」と。

今日、日支両代表を除く理事会の委員は、今時の紛争において、国際聯盟の重要な一員であり常任理事国である日本に課せられた節度と分別の義務と、特別の責任を認識するために、日本政府に対して緊急の要請を送る義務がある。ここ数ヶ月、極東に発生した事態は、当事者の同意によつて命ぜられた委員会の調査の完全な対象です。しかし、同委員会の組織後、それは起こり、今なお上海及び同周辺域で世論の興奮を増す諸事件が起こりつつあり、多数の国の国民の生命と財産を危うくし、世界に起こりつつある危機の中で例外的困難を追加し、軍縮会議に対し新たな深刻な課題を以て脅かしている。十二理事は、日本が提起した異議を忘れていない、また、国際社会の一員としての義務と責務を常に綿密に見てきた当初からの成員が持つべき全信頼を、数ヶ月間にわたつて与えてきた。しかし、聯盟規約に規定されている穏やかな条規の方法に無条件で従う事が可能だと日本が判断しなかつた事を悔やまざるを得ない、国際紛争の解決は平和的手段によるほかに求められてはならないという旨のパリ条約の厳粛な約束を、もう一度、想起させる。十二理事は、かの領域において拡大しつつあるこの抗争の最初の時から、中国が日本との紛争を聯盟に提議し、聯盟による平和的解決の提案を受け入れると約束していた事に、注意せざるをえ

ない。聯盟理事会の十二ヶ国委員は、聯盟規約第十条に従い、聯盟加入国は他国の領土保全並びに政治的独立の尊重保持に努めて来たことを想起したい。彼等は、友好の証としてこの条項に注意を促す権利がある、その条項は、十条を無視して行われた、領土保全に対する侵害も國際連盟の一員の政治的独立への打撃も、聯盟国により有効的で実効的であるとは認められないとする見解を特に帰結するところのものである。世界世論の前に、日本は中国との関係において正当で穩健であるべき絶大な責任を負っている。中国の主権と独立並びに行政的領土的保全を尊重すると明確に合意し約したところの1922年の9ヶ国条約に署名する事によって、すでもつとも嚴肅な条文中この責任を認めている。名誉の高い感覚に訴え、各国理事は、日本に、特別の地位に課されている義務だけでなく、世界の国々が平和の機構と維持に属するものとして彼に置いた信頼を、認める事を求める。

日本外交文書デジタルアーカイブ『満州事変』第2巻第2冊「四 日支紛争をめぐる米国および各国との交渉ならびに國際連盟における審議状況」から、第59資料に記載されている電文No.89 フランス語文を作成者が訳したものである。同訳は、『國際連盟理事会並に總會に於ける日支紛争の議事経過詳録』その二、國際聯盟事務局東京支局編（国会図書館デジタル化資料）にある。



## 5、一九三二年二月二十三日、十二理事国要請への日本政府の回答

### 理事会十二ヶ国の通牒に対する日本外相の回答

我方に於ては、今次十二国理事の申入れに対し即時慎重なる考慮を加えたるが、十二国理事が現下上海方面の事態の重大性を痛感し、之が救済策を探索するため如何なる労をも吝まざらんとしてつつある心事は多とする所なり。

去り乍ら本申入れは必要なき方面に向て為されたる嫌あり、蓋し現下の武力的抗争を中止する途は一に支那側指導者の手中に在る次第にして、日本は抗争の開始を欲せざりしは固より現在に於ても最も之を嫌忌しつつあり。

なお我方に於ては最近理事会全体の討議に代え、部分的構成を有する委員会の討議を以てせんとする慣行の生れ来れることを遺憾とするものにして、\*慣行は聯盟規約の精神及び文字に反するものなり。我方に於ては今次関係理事の行動がその動機に於て極めて善良なるものあり、又その事業には多大の困難を伴えることを認むるに吝かならざるも、右の如き異例が頻繁に行わるることは聯盟の手續に合致せざるものとして之を承認し難く、一般世上に於ては斯る討議を理事会

i 1字は消えて不明。英文とは細かくは対応していないが、「該慣行」か。

の行動と混同せんことを虞る。

何れにするも我方に於ては十二理事の希望に酬ゆるを礼と認め、別添声明を閣下より転達せられんことを希望するものなるが、是等理事の人道と平和との為にする努力は之を感謝を以て了承すると共に、日本としては現下の抗争終熄を偏えに希望するものなることを断言す。

#### 理事会十二ヶ国通牒に対する日本政府の声明

一、十二国理事が日本に対し申入れをなしたるは、恰も日本が隠忍さえすれば上海の危急なる事態を直に終熄せしめ得べしとなすが如き寓意を含むものにして、帝政府の了解し得ざる所なり。攻撃をなしつつあるは支那側なるを以て、之に対して申入れをなしてこそ有効なるべし。尠くとも日本に対してのみ斯る処置に出づるは謂れなきことなり。日本水兵が攻撃を受け之に抵抗したることを以て非とする趣旨に非ざる限り、何故我方に向つて抵抗を止めよとなすや。

二、十二国理事の申入れにして、例えば上海附近に安全地帯をし設定し日支両軍の離隔を図るとか又は衝突を防ぐに足るの保障を提議するとか、何等積極的提議を含むものならんにはその意のある所を諒解し得べけんも、その事なくして単に日本軍に対し武器を捨つるか或は引揚

げんことを期待するは、必然的に共同租界を支那兵の占領に委せんとするものにして、支那側に於てかかる暴挙に出づることなかるべしと云うものあらんも、過去に於て既に二回迄も支那側は之を敢てしたる事実あり、而も支那政府は上海の奪取を以て無責任なる軍兵の所爲なりとの遁辞を弄するなるべし。

三、申入れ中本邦は終始紛争を平和的に解決するの用意あるに拘らず日本は然らずとなせるは最不当なる点なり。支那は平和的方法以外には訴えずと宣言すべけんも、事實は言葉よりも雄弁なり。支那側の攻撃的措置は平和的声明あるの故を以て之を許し、日本の防禦的措置は戦鬪的なりとて之を排斥するが如きは毫も理由なきことなり。日本が支那軍の攻撃に依り日々生命財産の損失を受けつつある時に当り、支那は平和的方法にて一切の紛争を解決するの用意ありと云うが如きは誠に驚き入るの外なし。十二国理事が日本は国際聯盟規約に規定する平和的解決方法を無条件に採用することを肯ぜざりし云々の一節は帝國政府の了解し得ざる所にして、日本は右の如き紛争解決方法に無条件に参加し来れるに非ずや。此等解決方法は、その間自衛措置を執ることを妨げざるは勿論にして、聯盟の如何なる決議も之を禁ずるものに非ず。日本は平和的解決方法に依るがため単に理事会多数の決定に基き規約条項にも規定し居らざる異例を受諾するの義務なし。平和的解決に関する如何なる条約も、正当なる自衛

の權利を毫も妨ぐるものに非ざることは一般に認められたる公理なり。十二国理事が内実遺憾とする点は日本が無条件に問題の解決を彼等の手中に委ねざりしと云うに在るものの如き處、右は日本に於て拒絶するの法律上並に道義上の權利あり。日本は問題の解決を彼等の手中に委ねることを嘗て約束したることなく、又十二国理事の判断、好意には満腔の信頼を置くものなるが、日本は自国が遠隔の何れの国よりも当然且必然に遙に良く事實を了解し得る地位に在るを信ずるを以てなり。

四、今回の申入れは、聯盟規約第十条を引用し居れる處、日本の措置は嚴に防衛的なるを以て何等同規定に觸るるものに非ず。此の点は五年前列国が上海防備のため強大なる増援軍を派遣したるときに於ても、英米軍が南京を砲撃したるときに於ても、その他幾多類似の場合に於ても何れの国よりも本規約条項に付問題が提起せられたることなきに徴するも明白なり。同条は極めて妥當なる規定なるも国家自衛權を排除するものには非ず、又此の規定あるが為に支那に対し他國を攻撃するの自由を有するも他國はその攻撃を排除し得ずと云うが如き特權を附与するものに非ざること云う迄もなし。

五、各國の対支出兵に於ける如く、日本の出兵に際しても日本は聯盟の一員たる支那の領土保全又は獨立を侵害せむとするものに非ざるは勿論なり。従て十二国申入れ中に於て、規約第十

条に反し為されたる所は之を有効と認むるを得ずと云ひ居れるも、帝国政府はその何を意味するや全然解するを得ず。然れども此の機会に於て再び帝国政府は支那に於て何等領土的又は政治的意図を有せざることを強調せんとするものなり。

六、帝国政府は、支那に対し正義寛容を示す義務が九国条約当然の結果として生ずとの論を容るを得ず、一切の国に対して正義寛容を示すべき義務あることは条約を俟つ迄もなきことにして、日本は欣然此の義務を受諾するも、同時に他国も亦日本に正義寛容を示さるれば欣幸なり。日本は固より九国条約上の一切の義務を遵守する用意あるも、同条約加印国以外の国をも交へて又調印国の或ものを含まずしてその規定に付き論議するは不便且不適当なりと思考す。

七、最後に帝国政府は支那を以て聯盟規約に所謂「組織ある国家」と思考せず、又思考し得ざることを強調せんとするものなり。過去に於て支那は各国の約束に依り恰も組織ある国家なるかの如き取扱を受けられるは事実なり。然し乍ら凡そ擬制は永続するものに非ず、又擬制を認むるがため實際上重大なる危険が醸さるる場合には最早之を許容することを得ず。今や必然的に擬制を棄てて現実と直面すべき時期到来したり。従来一般に支那の幸福繁栄統一を欲するの余り、世界は現実と反して支那を遇するに統一国家を以てしたり。然れどもその人

民は部分的には結合あるも全体として組織せられ居らず、若し日本にして支那に何等利害關係なきものとせば同地方が「組織ある国民」に依り占拠せられ居るものとする擬制を尊重し行くことを得べけんも、日本は同地に巨多の利害關係を有するを以て此の上支那に於ける混沌たる状態を以て秩序ある状態なりとして取扱ふこと不可能なり。支那各地方に存在する権力はその地方々々に於て實際上の力を行使し居るの事実のみにその基礎を有するものにして、該地域を越えて支配を行うの資格なし。此の不正規なる事態は支那問題に対し聯盟規約を適用するに当り最も深く考慮せざる可からず。支那に於ては単一なる統一国家の代りに諸種の粗策なる組織体存す。日本政府は固より此の現実の事態を直観することに依り生ずる各般の推論及び結果を整理調和することの極めて困難なるを認む。右は困難なるも必要事なり。吾人は真実に直面せざるべからず。而して支那に何等統制ある政府なく又全支に対し完全なる支配を主張し得る権力なきことが根本的事実なり。

八、以上帝國政府は十二国理事の人道に基く高潔なる申入れに対し簡単にその所見を述べたる次第にして、之を要約再言すれば、十二国が日本に訴えたるは恰も既に開かれ居る扉を無理にコゾ開けんと努むるに等しく、該申入れは寧ろ攻撃を加えつつある支那軍に対して為さるべきものなること、斯る申入れが真に有益且實際的ならんが為には安全地帯設置と言うが如き

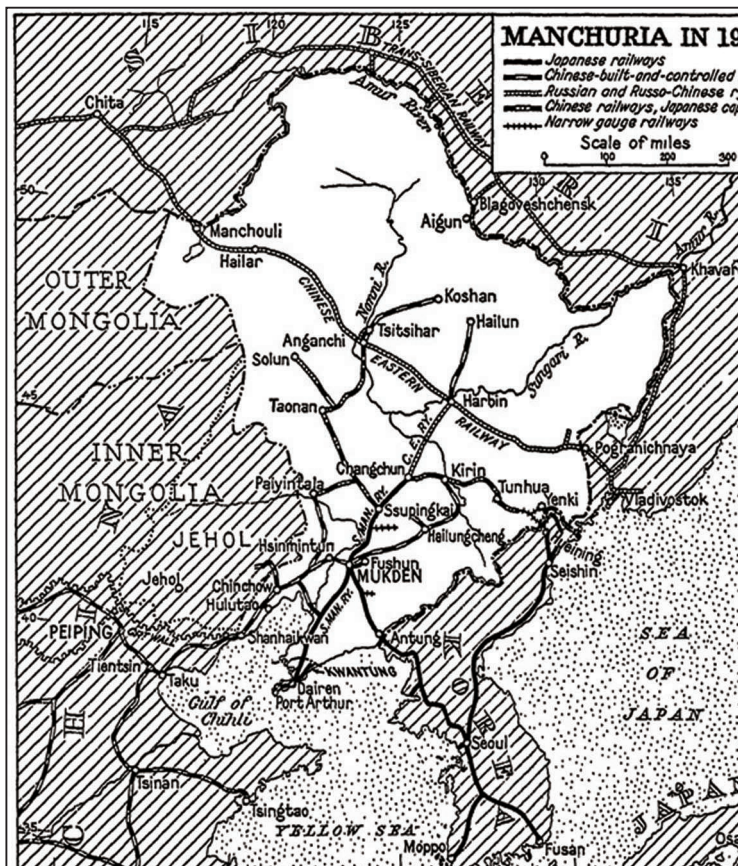
具体的提案を包含せざる可らざること、日本は支那と異なり平和的方法に依り問題解決の意思なしとする点の謬なること、而して最後に支那の問題は事実及び現実の基礎に於てのみ考察せらるべきものなること、而して事実支那は統一ある国家を構成し居らざること等を述べたる心算なり。更に帝国政府は關係国をして此の異常なる措置に出でしめたる崇高なる目的と人道的努力とを深く諒とするものなることを繰返さんとす、帝国政府は此等關係諸国が更に考慮を費すに於ては叙上帝国政府の述べたる所と所見を一にするに至らんことを信ずるものにして、帝国政府は關係諸国に於て支那側をして過去五ヶ月間の戦闘行為を惹起せるが如き挑発的行為を止めしむるためその極度の努力を息めざらんことを深く希望す。

一部世上に於ては日本に対し、暴挙を奨励し且之を希望するものなるかの如き悪評を負わんとするものもあるも、日本は之を強く斥くるものにして、日本国民は戦争及び之に伴う避け難き惨禍を厭うことに於て何国にも劣らざるものなり。若し十二国の努力に依り支那側をして平和的態度を執らしむるに至らば何国よりも先ず最も之を欣ぶは日本国民ならん。

【この回答は、『議事経過詳録』においても、「曾て見ざる激越な語調」と評されているように、諸外国に、日本には何を言っても無駄と思わせるものであったが、ここに収録した日本語文では未だ緩いと見える。例えば、外相の文で、「本申入れは必要なき方面に向て為されたる嫌あり」という部分では、英文では更に、“They are “forcing an open door.” と加えている。】

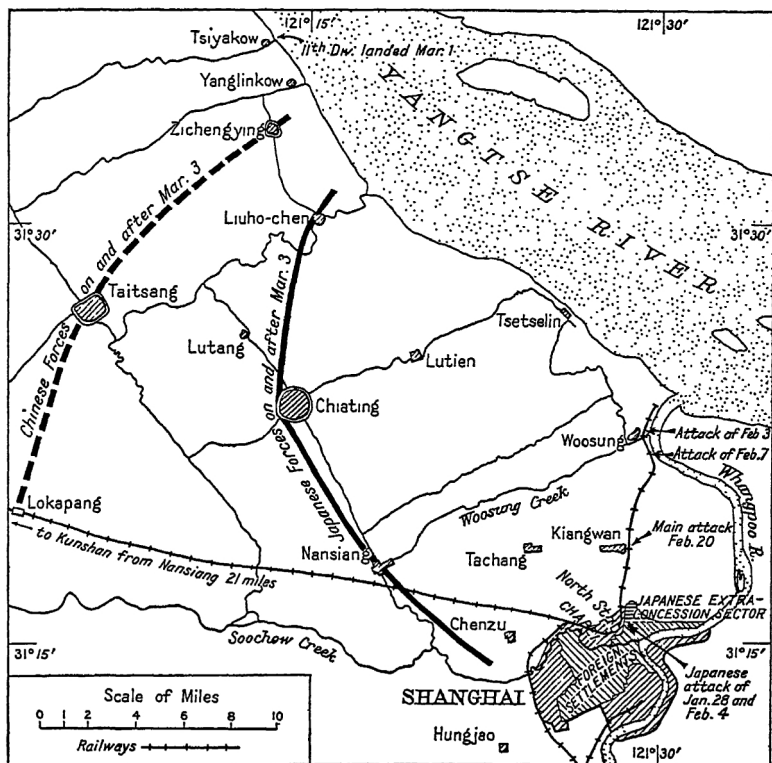






1931 年満州地図

Mukden 奉天、Changchun 長春、TsiTsihar チチハル、Chinchow 錦州、Jehol 熱河省、Anganchi 昂昂溪、Ssuningkai 四平、  
 ほぼ中央部東西に走るのが東中国鉄道（ウラジオ - チタを結ぶ）  
 中央部南北に走る内下半が南満州鉄道（大連 - 長春を結ぶ）



THE SHANGHAI BATTLE AREA

# 上海戦域

Yangtse river 揚子江 (長江)

Whangpoo river 黄浦江 (上海市街から呉淞口で長江へ)

Liuhoching-Chiating-Nansiang 劉河鎮 - 嘉定 - 南翔 3.3 日本軍の停止線

Zichengying-Taitang-Lokapang 茜涇營 - 大場鎮 - 老人橋 3.3 中国軍停止

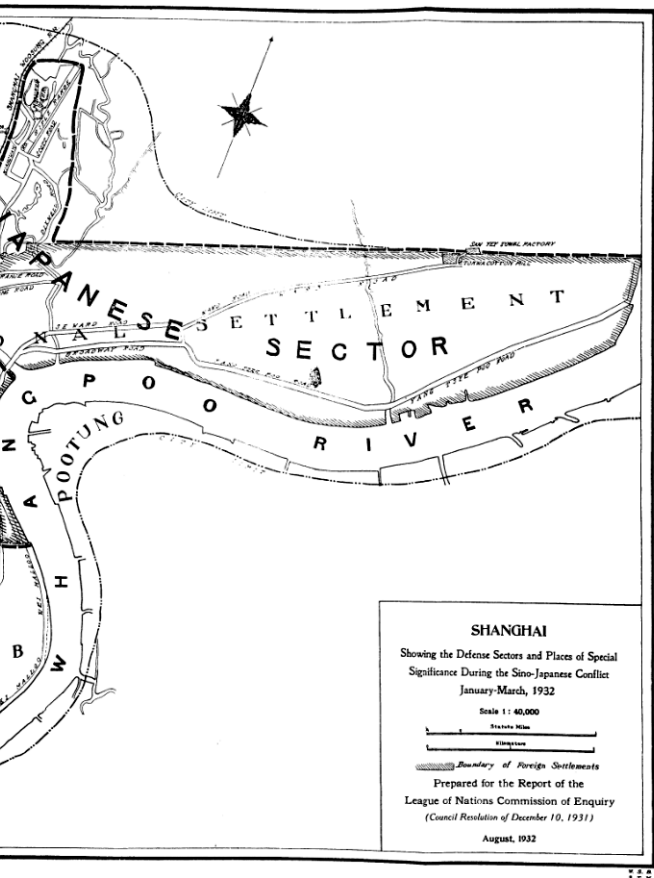
Woosung 呉淞【現・宝山区】2.3、2.7 日本軍の攻撃地点

Kiangwan 江湾鎮 2.20 日本軍の主要攻撃地点

Chapei 閘北 (上海市街地北部) 1.28、2.4 日本軍の攻撃地点

Tsiyakow 七了口 (長江の岸、上図最上部) 3.1 第11師団上陸地点

11.  
s 84 to 88.)



上海市街地図

Chapei : 閘北、Whangpoo river : 黄浦江 (蛇行しつつ北  
に向かい揚子江に流れ込む、川幅 400 m ほど)



年	月日	『極東の危機』関連事項
1922	2.6	ワシントンにおいて九ヶ国条約調印 -- <a href="#">附録二</a>
1927	4.18	田中義一（陸軍大将・男爵）政友会内閣成立
1928	2.20	初の普通選挙（衆議院）
	4.20	山東出兵を声明
	6.4	張作霖爆殺事件
	8.27	パリにおいて不戦条約（ケログ・ブリアン）調印 -- <a href="#">附録三</a>
1929	3.28	スティムソン合衆国國務長官に就任
	7.2	浜口雄幸民政党内閣成立（幣原外相）
	10.24	ニューヨーク株式市場大暴落 -- 世界恐慌の始まり
1930	4.22	ロンドン（海軍軍縮）条約、五ヶ国調印
	4.25	統帥権「干犯」攻撃始まる
	11.14	浜口雄幸総理大臣狙撃事件（翌年死去）
1931	4.14	若槻第二次内閣
	9.18	柳条湖事件 -- 満州事変の始まり
	9.19	関東軍、奉天城占領；奉天総領事は軍部の計画行動であると外務省に打電。-- <a href="#">附録五-1</a>
	9.24	日本政府、不拡大方針を発表 -- 第1次声明
	9.30	聯盟理事会決議 -- <a href="#">附録五-2</a>
	10.8	関東軍、錦州爆撃
	10.26	日本政府、第2次声明 -- 撤兵の条件
	11.18	日本政府閣議、満州へ軍隊増派決定
	12.10	聯盟理事会決議 -- <a href="#">附録五-3</a>
	12.11	若槻内閣総辞職－犬養政友会内閣成立
	12.28	関東軍、錦州攻撃開始
1932	1.3	関東軍、錦州占領
	1.7	<a href="#">スティムソン・ドクトリン</a>
	1.21	衆議院解散
	1.28	上海事変
	2.1	南京砲撃
	2.5	関東軍、ハルビン占領
	2.16	聯盟12理事国要請 -- <a href="#">附録五-4</a>
	2.23	12理事国要請への日本政府回答 -- <a href="#">附録五-5</a>
	2.23	スティムソン「 <a href="#">ボラー氏への書簡</a> 」 --- 発表は2.24
	3.1	「満州国」建国宣言
	3.5	血盟団事件、団琢磨暗殺

年	月日	『極東の危機』関連事項
	4.4	日本政府、満州調査で聯盟脱退もあると各国に通知
	5.15	5.15 事件、犬養首相暗殺
	9.15	日本満州議定書調印 --- 日本の「満州国」承認
	10.1	リットン報告書公表
1933	1.15	アメリカ合衆国、満州国不承認を列国に通告
	1.30	ヒットラー、ドイツ国首相に就任
	2.24	国際聯盟総会で規約第十五条第四項に基づく対日勧告を42対1で採択 --- <a href="#">附録四</a>
	3.4	スティムソン、國務長官を退任
	3.27	内田外相、国際聯盟に脱退を通告
1934	12.29	日本政府、ワシントン条約廃棄を通告
1935	10.3	イタリア、エチオピアに進攻
		上海事変詳細
1932	1.24	日本領事期限付き謝罪要求
	1.28	上海事変 --- 日本海軍陸戦隊が中国第19路軍と交戦
	2.3	停戦へ四ヶ国提案
	2.4	四ヶ国提案に対する日本政府回答
	2.7	日本第二十四混成旅団上陸
	2.16	聯盟12理事国要請
	2.20	日本上海派遣陸軍の攻撃開始
	2.23	日本第11、14師団の派遣決定
	2.23	12理事国要請への日本政府回答
	3.1	日本第11師団の上陸（龍浦近くの七了口に）
	3.3	戦闘の終熄
	3.11	聯盟総会において聯盟規約・パリ条約遵守決議、十九ヶ国委員会の任命
	5.5	停戦協定
	5.31	日本軍の撤収終了

## 作成者後記

ステイムソン著の訳は、同じ時に『改造』十一月号の附録としても出版された。その「訳者の言葉」によると1936年9月17日に発売されたものを最初の船便で入手し、訳出したということだ。鈴木東民訳となっているが、一人で為されたかどうかには触れていない。訳としては直訳調で、一貫している。又原著の脚注は、清沢版同様訳出されている箇所と居ない個所に分かれる。附録は省略されている。又どちらにも写真とか地図などは載録されていない。

参考到底本のオリジナルの目次と『改造』版の目次を掲げる。

## 底本の目次

## 第一編 米国の極東政策の背景

## 第二編 満州事変における和協工作

日中衝突——わが当初の政策の理由——わが政策と聯盟の行動——問題に対する日中両国の解釈——日本の侵略行為の続行——外交目的に及ぼしたる影響——ギルバート氏の理事会出席——北満における軍事行動・日本における国家主義の擡頭——聯盟の十一月総会——第一期の結論

## 第三編 中国は聯盟総会に提訴す

新情勢と問題——最初的手段——一月七日の通牒——上海の攻撃——中国のボイコット——上海の共同租界——事変の原因——自一月二十八日至三月三日の軍事行動——上海に関する問題と政策——予備交渉——ハワイ港の米国連合艦隊——共同租界の防衛——南京の砲撃——日本は居中調停を求め——九ヶ国条約と上院議員ボラー氏への書簡——総会の行動



#### 第四編 責任の裁決

米国に対する裁決の性質と重要性——日本の行動は裁決を無効とす——満州国の建設——満州国に下す採決を阻止する手段——ジュネーブ行——米国欧州へ保証す——リットン報告——報告書の到着と出版——報告書の内容——聯盟の事業の性質——聯盟總會における討論

#### 第五編 結論

### 『改造』版の目次

#### 序言

#### 第一編 アメリカ極東政策の背景

#### 第二編 満州の危機に於ける和解の努力

##### 一 衝突

二 事件初頭に於けるわが政策の根拠

三 聯盟の行動によつて影響されたわれらの政策

四 九月十九日より三十日の紛争初頭に際し日支両国によつて規定された事態並びに繋争問題

五 一九三一年の秋に於ける日本軍の××××の継続

六 これらの行動が外交上の目標に与えた影響

七 聯盟十月会期終了までの我諸政策——ギルバート氏聯盟理事會に列席

八 國際聯盟の十月會議の閉會より十一月十六日の再開までの間の事件、北滿に於ける軍事行動、日本における民族主義的感情の擡頭、アメリカにおける反響

九 國際聯盟十一月會議

一〇 第一期からの結論

### 第三編 支那の国際聯盟への提訴

一 変化せる条件とそれに伴いわれわれの当面せる問題

二 最初の処置を講ず

三 一月七日付の通牒

四 上海に於ける日本軍の行動

五 上海攻撃に関する問題並びに政策

### 第四編 責任の判定

一 責任の判定及びその対米重要性

二 日本政府の処置は判定を困難ならしめその効果を失わしめた

三 予のジュネーヴ行き

四 容喙を避け且つ又アメリカの協力の真実性と持続性に関しヨーロッパを督励するその後の諸努力

五 リットン報告書

六 リットン報告書に対する国際聯盟の処置

### 第五編 結論

本PDF版では、『改造』版と対照する事によって、清沢の『中央公論』版における多数の誤抜け、年月日の間違いが修正出来た。『中央公論』版は殆ど校正無しで出版したようで、一部分だけ記したが、他にも多数の年月日の間違いがあった。しかし『改造』版にも誤記及び疑問点はある。例えば、『改造』版五十二頁「想像を逞しくせずとも、これらの軍事行動は、南満州における日本人及びその財産の保護と関

係していること勿論である。」原文は、"By no flight of imagination could these operations be connected with the protection of Japanese nationals and property in South Manchuria." となっている。全く逆の意味に捉える事になる。ただし、これらのミスが『中央公論』版より多いとは必ずしも言えない。「検閲逃れの曖昧な訳」が『中央公論』版に多いという感想は持つ。公開されている版からテキストのみを取り出し、テキストファイルのRTF版を作成し公開しているので、参考にされたい。

作成者：石井彰文

作成日：2013.4.27